

失われた希望と新たな  
る世界

サン&ムーン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは本来の道を進んだ沢田綱吉の物語ではない

これは全く別の道を歩いていく事になってしまったもう1人の沢田綱吉と妖精達との物語

注意事項 原作綱吉ではなくパラレル綱吉です 性格や戦闘は全然違います こんな綱吉じゃないと思われる方はブラウザバックをお願いします また戦闘等で他作品の描写を真似する時があります

拙い文書ですが楽しんでもらえたら幸いです

# 目次

プロローグ

第1話

妖精の世界へ

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

1

6

13

26

35

45

51

60

73

81

第11話

第12話

大魔闘演舞篇

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

第21話

第22話

94

102

115

122

142

156

172

185

196

220

239

247

第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話 第23話

451 433 416 399 381 361 347 334 312 298 282 272 258

第40話 第39話 第38話 第37話 第36話

557 532 509 488 462



# プロローグ

## 第1話

世界とはもしもの数だけ存在する『平行世界』がある

今その数ある平行世界の内の一つで、ある少年の命が終わりを迎えようとしていた

とある山地

今この山地で青年と少年によるこの世界の未来を決める闘いが繰り広げられていた

地面は抉れ、木々は薙ぎ倒され、山は吹き飛び 激しい闘いだつた

そして闘いの終わりは当人の意思とは関係なく、無情にも刻一刻と近づいてきていた

少年は身体中傷だらけで血を流し、肩で息をしていた

少年「はあ・・・はあ・・・くそお・・・」

相対する青年も傷を負い血を流しているもののまだまだ余裕があり楽しそうに笑みを浮かべていた

青年「アハツ♪」

少年（俺の仲間も家族も皆んなコイツに殺された・・・こんなふざけたヤツに！）  
青年「中々粘るねえ 君もいい加減しつこいなあ ツナヨシくん」

少年の名は沢田綱吉 巨大マフィア組織 ボンゴレファミリーの10代目ボスである

綱吉「俺はお前を絶対に許さない！白蘭!!」

青年の名は白蘭 ボンゴレファミリーをも上回るマフィア組織ジエツソファミリーのボスであり武力による世界征服を為そうとしている

白蘭「かっこいいセリフだけど、僕に1度でも勝てたことがあるかい？ 加減して戦ってる今の僕でさえ君はボロボロじゃないか」

綱吉はグローブの炎を逆噴射して白蘭に攻撃を仕掛ける

綱吉「うおおお!!」

しかし白蘭は避けようともガードしようともせずただ左手の人差し指を前に出し綱吉が来るのを待った



そして綱吉の渾身の一撃とも言える拳を指一本で受け止めたのだ

綱吉「なっ!?!?」

白蘭「君の全力はこの程度かい・・・なら決して僕に届かないよ」

白蘭は右手の人差し指を綱吉の左肩にそつと当て

白蘭「白指」

ドンつと指から圧縮された炎が撃たれ、綱吉の肩を貫いた

綱吉「がっ!?!?あああああああ!!」

激痛が走り肩を抑えるも出血は止まらず、ついに片膝をつく状態にまでなってしまった

綱吉「ぐっ・・・うう・・・くっ・・・」

しかし彼の目は白蘭を睨みつけ、彼の心にはまだ闘志が宿っていた

白蘭「(ふうん あれだけやられたのにまだ勝つ気にいるなんてね さすがはツナヨ

シくんだね だけど・・・)そろそろ終わりにしようか」

白蘭は右手に炎を出し、炎の輝きがどんどん増していく

綱吉「(終わりに・・・する・・・だと ふざけるな)ぐっ・・・ごっげほっ・・・はあ・・・

はあ」

脚はガクガクと震え吐血をする しかし彼は立ち上がる 仲間の仇を討つ為に 倒

さなければならぬ相手不倒す為に

白蘭「そのままじつとしてれば良いのに、態々立ち上がるなんてね いや 立ち上がるからこそ君なんだろうね」

綱吉「うおおお!!」

炎が全身から溢れ出て彼の思いに呼応するように輝きを増し、大きくなっていく

綱吉「白蘭ーっ!!」

綱吉は炎を纏ったまま白蘭に突っ込んでいく

白蘭「ここまで血を流したのは初めてだったからね 結構楽しめたよ ツナヨシくん

さようなら」

綱吉「っ!」

凝縮された炎が放出され、綱吉は回避する間もなく飲み込まれてしまった

綱吉「がっ・・・ああ・・・あ（ちくしよう・・・ちくしよう・・・アイツを倒すことが出来なかった・・・皆の仇を討てなかった・・・皆・・・ごめ・・・ん）」

炎に焼かれ薄れゆく意識の中 綱吉の心は己の無力さと仲間たちに対する申し訳なさでいっぱいだった

炎が消えたあとそこには何も残っておらず、ただ地面が焼け焦げた痕しかなかった

今この世界の運命が決まった

神は悪に微笑み勝利を与えた

善は神に見放され敗北し死んだ・・・いや死ぬはずだった

しかし神は善を見捨てず、善は神の戯れを受け平行世界の枠を超え異世界へと旅立たされた

これはもしもの世界　パラレルワールドのもう1人の沢田綱吉の不思議な妖精の世界の物語

## 妖精の世界へ

## 第2話

X791年　フィオーレ王国

マグノリア

今、2人の男女が買い物から帰るため山道を歩いていた

ミラ「買い物に付き合ってもらってごめんね　エルフマン」

エルフマン「なあに　買い物くらいいくらでも手伝うぜ　姉ちゃん」

2人が雑談しながら歩いていて、茂みの中から小さな光の玉が現れた　その光は淡く弱々しくてまるで蛍の光のようであった　だがどこか惹かれる美しい光でもあった

ミラ「あらっ綺麗ねえ　蛍かしら？」

エルフマン「いや　蛍は夜の虫だぜ　姉ちゃん　つか時期じゃねーし」

ミラ「そう言えばそうね」

2人がそんな話をしていると光は2人の周りを廻り始め、数回廻ってやって来た茂みへと戻っていった

エルフマン「ついて来いって言うってんのか？」

ミラ「なら追いかけてしましょ」

エルフマン「でも姉ちゃん 何かあるか分かんねえし危ないぜ」

ミラ「危なくないから大丈夫よ」

エルフマン「その自身はどこから来るんだ・・・」

ミラ「うゝん 女の感かしら」

エルフマン「いや・・・えゝ」

こうして2人は光を追いかけて行くことにした

光を追いかけて少し経ち、漸く光は一本の木の前に止まり、そして後ろに周りながら ゆっくり下りていった

エルフマン「あの木の下になんかあんのか？」

ミラ「宝物でもあるのかしら？」

2人はワクワクとしながら近づいていった だがその期待は大いに裏切られることとなる

ミラ「えっ・・・」

エルフマン「なっ・・・」

2人が目にしたのは宝物などではない身体中傷だらけで血を流し倒れている少年の姿だった

この少年こそ白蘭に殺されたはずの沢田綱吉。彼は死んではいなかった、白蘭の最後の一撃はそのあまりのエネルギーの大きさに空間を歪ませ、綱吉を絶命させる直前に異世界へと飛ばしてしまったのだ

幸か不幸か彼は死なずに此処魔法世界『アースランド』に飛ばされた。そして意識を失い瀕死にままた倒れて現在にいたる

ミラはそのあまりの痛々しい姿に最悪の状況を想像してしまい身体を震わせていた

ミラ（ま、まさか・・・死ん・・・）

エルフマン「ひでえ 一体誰がこんなことを」

綱吉「・・・あ・・・う・・・」

本当に小さく普通ならば聞き逃してしまうような細かい声 2人は聞き逃さなかった

ミラ・エルフマン「!!」

ミラ（まだ生きてる!」

2人が綱吉の側へ駆け寄ると、光は綱吉の右手に嵌めている指輪の中へと入り消えていった

エルフマン「コイツが教えてくれたのか」

ミラ「この子を助けてもらいたかったのね 安心して必ず助けるから! エルフマン

！」

エルフマン「おう！ 任せろ姉ちゃん！」

エルフマンは綱吉を背負い、2人は病院を目指して全速力で駆け出した

ミラは走りながら綱吉に何度も何度も声を掛け、掛け続けた 声を掛け続けなければこの子が死んでしまうのではないかという不安に駆られたからである

2人はノンストップで走り続け、病院にたどり着いた

ミラ「先生っー！ 先生はいますかっー！」

エルフマン「先生を早く呼んでくれっ！」

2人が受け付けて騒いでいると奥から白衣を着た白髪頭の老人がやって来た この老人こそこの病院の院長でありマグノリアでも指折りの医師 名をアルバス

そして2人が子供時代からよくアルバスの治療を受けてアルバスの腕を知っていた だからこそこの病院に来たのだ この先生なら助けてくれると信じて

アルバス「何事かね騒々しい 此処は病院じゃ静かにしたまえ おやつ？ ミラちゃんにエルフマン君じゃないかどうしたのかね？ そんなに血相を変えて」

ミラ「先生っ この子を助けて下さいっ！」

エルフマン「お願いだ！ 先生！」

2人が綱吉を見せるとアルバスは綱吉の状態を診て驚愕する  
アルバス「こ、これは・・・一体何があったのかね!!?」

ミラ「説明は後でしますっ！ 早くこの子を！」

アルバス「わ、分かった 君、直ぐに手術の準備を」

看護士「はいっ」

綱吉はストレッチャーに移され手術室に移動される 2人も後をついて行くが  
看護士「申し訳ありませんが、お二人はここでお待ち下さい」

そう言われ手術室の扉が閉められランプが点灯する

エルフマン「姉ちゃん・・・俺一度ギルドに戻ってこの事を報告してくるよ」

ミラ「ええ・・・お願いね」

1人になったミラはただひたすらに手術の成功を祈っていた

ミラ（お願い・・・どうか、どうか・・・あの子を）

手術は何時間にも及び時刻はもう夜になっていた そしてランプの灯りが消え扉が  
開けられアルバスが出てきた

ミラ「先生っ！ あの子はっ!!?」

アルバス「落ち着きなさい 手術は成功した、あの子はもう大丈夫じゃ」

ミラ「良かった・・・本当に・・・良かった」



アルバス「あの子は今病室移され眠っておるよ 見ていくかね」

ミラ「はいっ」

ミラは綱吉のいる病室に入り、ベッドで眠っている綱吉を見て改めて安堵する この子は助かったんだと

血だらけで倒れている時はよく見る暇もなかったが今こうしてこの子の顔見てみると可愛い寝顔で穏やかで優しい子なんだというのが想像できる だからこそミラには理解出来なかった 何故この子があんなに死にかけるまで痛めつけられなければならぬのかと

ミラ「貴方に一体何があったの？・・・貴方の事を教えてほしい 私も貴方の事を助きたいから だから目が覚めたら教えてね・・・まずは最初に貴方の名前 教えてほしいな」

ミラは綱吉の頬にそつと触れて微笑み、お願いをした

時は少々遡り、綱吉が『アースランド』に来た頃

綱吉が『アースランド』に来た時、綱吉の命は正に風前の灯火であったしかしそんな

状態の綱吉のことを感知出来た者がいた。同じ異世界から来たからなのか。因縁があるからなのか。理由を尋ねても彼は『さあ。感じたんだから感じたんだよ』と曖昧な答えを言うだろう。しかし彼からは確信があった。沢田綱吉はこの世界に來ていると

？「君もこの世界に來たんだね。綱吉君。ハハッ。会うのが楽しみだよ」

男は不敵に笑みを浮かべ、綱吉との再会を楽しみにしていた。

## 第3話

マグノリア

ギルド フェアリーテイル

ギルドではエルフマンの報告により少年の話で持ちきりだった

グレイ「おい エルフマン ミラちゃんはまた病院に行ってるのか？」

エルフマン「ああ まだ病院に行き続けている」

ウエンディ「その人 そんなになるまで痛めつけられたなんて、可哀想です」

ナツ「その犯人は俺が見つけてぶっ潰してやるよ」

ルーシィ「犯人の手掛かりも無しにどうやって見つけるのよ！」

グレイ「やめとけルーシィ ソイツには考えるって事が分からねえのさ」

ナツ「んだと てめえ！」

グレイ「やんのか こらあ！」

ルーシィ「ちよ、ちよつと二人共っ!?？」

エルザ「やめないか！」

ナツ・グレイ「ぐはっ」

二人はエルザの鉄拳によって沈んだ

エルザ「発見場所には何の手掛かりも無く、犯人を知っているであろう少年の意識も戻っていない 犯人が何処に潜んでいるか分からない以上見廻りを強化するしかあるまい 少年にそこまでやる凶悪犯だ気を引き締めてかかれ！」

エルザ以外のメンバー「二三」おう（はいっ、ええっ）!!「二三」  
ナツ達が犯人逮捕に盛り上がっているころ

病院

綱吉のいる病室

ミラは今日も綱吉のお見舞いに来て花瓶に花を取り替えたり、窓を開けて風を入れたりしていた

綱吉の意識は未だ戻らず眠り続けていた

???

綱吉は何もない真っ暗な空間の中にいた

綱吉「此処は・・・どこだ？ 俺は・・・そうだ白蘭に殺されたんだったな・・・だとすると此処はあの世か（ずいぶんと寂しいところなんだな あの世っていうのは）」

辺りを見渡していると遠くにぼんやりと光つているところがあった。とりあえずそこを指して歩いているとある人達が見えてきた。それは自分が会いたかった人達家族、仲間たちのある

綱吉「リボーンっ！ 皆んな〜！」

綱吉は駆け出した。リボーン達も綱吉に気づきこちらを見たが悲しそうな顔をしてこちらには来ようとせず、何故か向こう側へと歩いていった。

綱吉「何でだよ 皆んな!? 何で離れようとするんだ!? 俺も皆んなと一緒に」

その叫びにリボーンが止まって振り返り

リボーン「お前が来るのは此処じゃねえだろ」

綱吉「えっ」

リボーン「お前が起きるのを待つてる人がいるんだ さっさと安心させてやれ」  
すると辺りが急に眩しくなった

リボーン「ツナ、——」

綱吉「えっ……何言つてんだよ……何でそんな事言うんだよ！ それを言うなら俺の方だろ！」

言葉が続けようとするも眩しくて目を開けていられなくなった。そして

## 病室

綱吉「うつ・・・うつ・・・」

ミラ「あつ　気がついたね！」

綱吉が目を覚ましたことに喜びミラは綱吉の側へと近づく

綱吉「あ、貴方は・・・此処は一体・・・」

ミラ「私はミラジェーン　安心して此処は病院よ」

綱吉「病院・・・」

ふと自分の身体を見てみると治療されているのに気がついたら  
と理解した　自分は助かったのだ

ミラ「ねえ　貴方の名前教えてくれる？」

綱吉「綱吉・・・沢田綱吉つていいます」

ミラ「サワダ　ツナヨシ　ツナヨシ君ね！」

綱吉「ところで白蘭は今何処を攻めてるんですか？」

聞き覚えのない言葉にミラは首を傾げてしまう

ミラ「ビャクラン？」

ミラの態度に苛立ってしまったのか 綱吉は口調が粗くなってしまう

綱吉「白蘭ですよ！ ジェツソフアミリーのボスのつ！ はあ・・はあ・・早く戻らないと・・・」

綱吉はベッドから起き上がろうとするも ミラに止められてしまう

ミラ「まだ動いては駄目よ！ 貴方ボロボロだったのよ！ 完全に治るまで待たなきゃっ！」

綱吉「は、離して下さい！ 俺が行かなきゃ・・誰がアイツを倒すんだ！ もう皆んなはいないんだ だから俺が戦わなきゃいけないんだっ！」

ミラ「ツナヨシ君・・」

綱吉「ごめんなさいっ！！？」

ミラ「えっ きゃっ！！？」

綱吉の必死の懇願にミラは一瞬抑える力を緩めてしまった 綱吉はその隙を見逃さずミラを押してベッドから出て走り出そうとしたが

綱吉「ぐっ！！？くっ！！？」

身体に激痛が走り、その場にうずくまってしまう

ミラ「ツ、ツナヨシ君！！？ ほらまだ駄目よ！ 歩くことさえ出来ないのに」

綱吉「うっ・・うう・・くそお・・」

ミラは綱吉に肩を貸してベッドへと戻っていく

ミラ（この子に一体何があったの？ あんなになるまで戦わなきゃいけないことがあるなんて・・・）

綱吉をベッドに寝かせると丁度そこへアルバスがやってきた

アルバス「目が覚めたようじゃの」

ミラ「先生っ」

綱吉「貴方は？」

アルバス「俺の名はアルバス 医者じゃ 君の手術をした者じゃよ」

綱吉「そうでしたか ありがとうございます」

アルバス「礼を言うのなら彼女にもじゃよ 君を見つけここまで連れて来てくれたのは彼女なんじゃから」

綱吉はミラの方にも向き

綱吉「ありがとう 今 俺がいるのは貴方のお陰だ」

綱吉の真剣な礼の言葉にミラは嬉しくも慌てて

ミラ「い、いいのよ！別にそんなんっ」

アルバス「さて、傷の具合を見ていこうかの」

アルバスは看護師に綱吉の入院着を脱がせ、包帯を外させていく



綱吉の上半身が露わになった時ミラは顔を真つ赤にさせていた

アルバス「ふむ 順調に治っているようじゃの」

ミラはその言葉を聞いて安堵する

綱吉「あの・・・どれくらいで治りますか？」

アルバス「そうさの ひとまず退院までに一カ月といったところかの 退院した後も通院してもらうことにはなるがの」

綱吉「そ、そんなにつ？？？ そんなに待てません！ もつと早く出来ないんですか！」

アルバス「こればかりはしょうがないんじやよ 諦めなさい」

綱吉「くそっ！ こうしている間にも白蘭はどんどん侵攻しているって言うのに！」

ミラ「ねえツナヨシ君 さつきから思ってたんだけど『ビヤ克蘭』って誰？」

綱吉はミラの言葉を聞いて固まってしまった 誰もが知っているであろうあの悪魔白蘭を知らないといったのだ

綱吉「えっ・・・ 何言ってるんですか！ 白蘭ですよ白蘭！ あの世界征服を企ん

でいるアイツを知らないはずないでしょう？？？アイツのせいであの国が壊滅させられたか！ どれだけの人が殺されたか！ 知ってるはずでしょう？？」

綱吉の必死の説明にミラ達は引きつつもただ知らないとしか言えなかった 本当に知らないから

アルバスは少し考えこむと綱吉にある質問をした

アルバス「ツナヨシ君 君は『魔法』を知っているかね」

ミラ「先生 何を」

綱吉「こんな時に何ふざけ・・・」

アルバス「いいから答えなさい」

アルバスの声によって取り乱し掛けていた綱吉は正気戻り渋々答えた

綱吉「つ！ ええ 知ってますよ でも空想のものでしょ それが何だって言うんです！」

アルバス「やはりそうか 君は・・・別の世界の人間のようにだ」

ミラ・綱吉「!?？」

アルバスの言葉に2人は驚きを隠せない

綱吉「別世界？ 何言ってるんですか？ バカバカしい」

アルバス「この世界は魔法世界 魔法があつて当たり前の世界なんじゃよ 子供でも知っておることじゃ」

綱吉「そんなふざけこと言ってるな・・・えっ」

綱吉がアルバスに文句を言うとしたが言えなくなってしまう 何故ならアルバスが手の平から水を出し渦潮のように回転させていたから

アルバス「私は水の魔道士じゃ このくらいは出来る それに君の言う『ビヤ克蘭』も『ジエツソフアミリー』も聞いたことがない この国も隣国もそんな連中に攻められたと聞いたことがない」

綱吉「そ、そんな・・・本当に・・・俺は・・・」

ミラ「ツナヨシ君・・・」

ミラは綱吉の側に行こうとするもアルバスに止められてしまう

アルバス「ミラちゃん 今は1人にしてあげなさい」

ミラ「・・・はい」

アルバスにそう言われ部屋を出て行くミラ、アルバスも出ていく

1人にされた病室に綱吉の嗚咽よく聞こえていた

次の日

ミラは次の日も病院に来た

ミラ「先生、ツナヨシ君は・・・」

アルバス「ああ ショックが大きく昨日から何も口にしておらん こちらがいくら食べるように言っても食べたくないそうじゃ あのままでは体力が落ちて治るものも治らんと言うのに・・・」

ミラ「そうですか・・・」

アルバス「今会うことはお勧めせんが会っていくかね」

ミラ「はい」

### 病室

ミラは病室に入ると綱吉に目を見て固まってしまった 綱吉の目が死んでいたからである

しかしすぐに気持ちを切り替え

ミラ「ねえ ツナヨシ君 何も食べないでいるのはさすがに身体悪いわよ 果物だけ

でも食べない？」

綱吉「食べたくありません」

ミラ「うっ な、なら散歩に行かない？ 今日いい天気だし外に出てみましょう 車

椅子なら私が押してあげるから ねっ」

綱吉「気分じゃありません」

ミラは綱吉を元気づけようと話しかけるがことごとく失敗してしまう

ミラ「で、でもいつまでも部屋の中にいたら気が滅入っちゃうでしょ 少しでも気分転換した方がいいと思うんだけど」

綱吉「もうそんなもの必要ないです・・・俺にはもう生きる意味がありませんから」  
 ミラ「そんなことないわ！ 貴方は助かったの！ 助かったつてことは生きなきゃいけないの！」

綱吉「っ！ 生きなきゃいけない・・・ 貴方に何が分かる！ 仲間も家族も殺された！ 復讐するべき相手もないこの世界でどう生きろとっ!!? 全て忘れて新しく生きろつてそう言うんですか!!?」

ミラの言葉について言葉を荒げてしまう綱吉

ミラ「そ、それは・・・」

綱吉「大体貴方は何で俺を助けたんですか？ 赤の他人の俺を助ける理由なんてなかったはずだ」

ミラ「そんな・・・目の前で苦しんでる人がいたら助けるのは当然でしょう!!?」

綱吉「当然・・・貴方はただいいことをしたかっただけなんじゃないんですか？」

ミラ「えっ」

綱吉「いいことをして誰かに褒められて優越感に浸りたいだけなんじゃないんですか？」

まさかの言葉にミラは戸惑ってしまふ、狼狽えてしまふ まさかこんなこと言われるなんて思っても見なかったから

ミラ「ち、違うわ！私は本当に貴方の事を」

綱吉「仮に 仮にそうだとしても助けるべきじゃなかった 俺は死ぬべきだった、死ねば皆にところに行くことができたんだから」

ミラ「何でそんなこと言うの?!? 皆の為に生きようとして思えないの！皆が貴方の死を望んでいると思ってるの?!?」

綱吉「分かってますよそんなことぐらい！でもただ一人残された俺の気持ちも考えて下さい！ 仲間も家族もない俺は一人ぼっちなんだ！

死んだ方が良かったんだ！ 余所者の俺が死んだって悲しむ人なんていないんだから!!?!」

パアアン!!

当然綱吉に頬が叩かれる

綱吉「な、何すん・・・」

文句を言おうとミラを見ると言えなくなってしまう 彼女が涙を流していたから 辛そうな顔をしていたから 彼女はそのまま部屋を出て行ってしまった 叩かれた頬より胸のあたりが酷く痛かった

綱吉「ちくしょう・・・どうしろって言うんだよ・・・」  
綱吉は彼女の泣き顔を思い出しながら叩かれた頬に手を当てていた

## 第4話

その日の夜

ミラはギルドに戻ってから心配されたが、何でもないと言っただけでなんとかが分かってもらえなかった

家に帰ってからでも綱吉のことを考えてしまい寝付けないでいた

ミラ「なんでこんな事に・・・（本当に助けたかっただけなのに・・・あの子と仲良くなりたかっただけなのに・・・どうして）」

ミラは綱吉から言われた言葉が頭の中で回り続け、自分がしたことは正しかったのかと思い始めていた

落ち込んでいます

??? 「こんばんは」

ミラ「えっ!?!?」

後ろから女の子が声を掛けて来たのだ。その娘はワンピースを着ていて左目の下に花のマーク、そしておしやぶりのネックレスをしていた

どうやって入ってきたのか?と警戒するもすぐに解いた。この娘は敵ではないと何



故かそう思ってしまったから

??? 「こんばんは」

ミラ 「え、ええ こんばんは」

??? 「折角月が綺麗に出ているので、一緒に散歩に行きませんか？」

ミラ (この娘何を言ってるの?)

??? 「沢田さんのことで悩んでいるのでしょうか？」

ミラ 「ツナヨシ君のことを知っているの!?!?」

??? 「はい ですから散歩にいきましょうと誘っているのです」

ミラは綱吉のことを知るためにこの娘と散歩に行くことを決める

ミラ 「分かったわ 行きましょう えつと・・・」

??? 「申し遅れました 私の名前はユニです」

病院

綱吉のいる病室

綱吉もまた昼間ことを思い出し寝付けずにいた ミラのことを思い出してしまい悩んでいた

綱吉 「はあ・・・俺は・・・どうすればいい・・・」

??? 「何しけたツラしてやがんだ 駄目ツナが」

聞いたことのある声に顔を上げ声の方へ顔を向けると、そこには俺の家庭教師がいた  
綱吉「リ、リポーン!?!?」

リポーン「ちやおっス」

声も見た目も喋り方も全て同じ 本物のリポーンだとすぐに分かった

綱吉「リポーンっ なんでお前が此処にいるんだ!?!? お前は・・死んだはずだろ!?!  
?」

リポーン「まあ そんなことはどうでもいいだろ 久しぶりに会ったんだ 積もる話  
も」

綱吉「どうでも良くない!!」

リポーンのおちやらけた態度につい綱吉は怒鳴ってしまった

綱吉「お前が死んで俺がどんな気持ちだったか分かるか!?!? どれだけ辛かったか分  
かるか!?!?」

綱吉の涙ながらの訴えにリポーンは真面目な顔で

リポーン「ああ すまなかつた お前のこと残して死んだ事は今でも悔やんでる  
分かっていると思うがオレは蘇った訳じゃない 霊体の様な存在だ」

分かっていたことだが改めて分かるとやはり辛いものがある

リボーン「死ぬ前にお前のリングに俺とユニの死ぬ気の炎を僅かだが入れておいたんだ。まさかこんな形で役に立つとは思わなかったがな」

綱吉「ユニっ!??ユニもいるのか!??」

リボーン「ああ。だがここにはいない。ユニには別の場所に行ってもらってる」

綱吉「別の?」

リボーン「ああ。後で分かる。だがまずは色々と説明しなきゃならねえ。この世界は『アースランド』と言って魔法が当たり前の世界だ。そこまでは分かるな?」

綱吉「ああ。聞かされたよ。未だに信じられないけどな・・・」

リボーン「だが事実だ。そしてもう一つお前自身に関わることだが・・・」

これ以上何を聞かされるのか。心臓の鼓動がやけに大きく早く聞こえる。唇が渇く。リボーン「どうやらお前の死ぬ気の炎もこの世界に来て変質しちまったようで魔力に変わっちゃったらしい。この世界で言うならばお前は『魔道士』になっちゃったんだ」

綱吉「なっ!??俺が魔道士っ!??」

予想を超える答えに驚きを隠せない。開いた口が塞がらない。

どうやらこの世界に来て俺の身体までもおかしくなっちゃったようだ。

リボーン「だが魔力に変わっちゃっただけでいつもと同じように使えるはずだ」

綱吉「でも変わったことに変わりないだろう。死ぬ気の炎は俺を俺たらしめるもの」

だった」

敵しい修行の果てに扱えるようになった死ぬ気の炎　それが突然変わってしまったのだ　はい　そうですかと納得できる訳がなかった

リボーン「そうか・・・だが俺はこれで良かったと思ってる」

綱吉「っ!!?　リボーンっ!!」

リボーンの言葉に怒りが爆発してしまった　これまでの自分を否定されてしまったようだったから

リボーン「お前の気持ちは分かる・・・だがお前はこれまでずっと戦い続けて来たんだろ?　仲間を失っても一人孤独に戦い続けて来たんだろ?」

綱吉「そうだ!　それが全てだった!　皆の仇をとる　ただその為に戦い続けてきたんだ!!」

リボーン「・・・ツナ　もういい加減自分の幸せを考えていいんじゃないか?」

綱吉「えっ・・・な、何を言ってる・・・」

リボーンの言ってる意味が分からなかった　幸せ　幸せとは何だ?

リボーン「マフィアのボスで復讐の鬼と化した沢田　綱吉はもう死んだ　これからは魔道士の沢田　綱吉として生きてほしい　それが家庭教師の俺からの最後の頼みだ」

綱吉「そ、そんなことできる訳ないだろう!　俺は皆を死なせたんだっ!　ボスであ

る俺が生き残って、幸せな生活を送る!!? 許される訳ないだろう!!」

リボーン「その許さないってのは誰が許さないんだ? もしかして死んだ彼奴らがお前のこと恨んでるって? 勘違いすんじゃないぞ 彼奴らは自分の意思で戦場に出て死んで行つたんだ 誰一人としてお前を恨んじやいない 許してない奴がいるとすれば・・・それはお前だツナ お前のその意地がお前の心を縛り付け苦しめているんだ」

綱吉「つ・・・」

言い返したいのに言い返せなかった それは違う そんなはず無いと言いたいの口に出来なかった

リボーン「今まで辛かつたらう 苦しかつたらう 俺らの為になりがとな ツナ」

綱吉「どうしてだ・・・何でありがどうなんて・・・あの時も『ツナ、ありがとな』なんて言つて 礼を言うのは俺の方だ お前にも皆にも色々なこと教わつて・・・なのに守れなかった 勝てなかった・・・うつ・・・うつ・・・俺は・・・俺は・・・」

リボーンは泣き崩れる綱吉の前に行き、肩に手を置いて

リボーン「たしかにお前は勝てなかった だが最後まで民を守ろうと闘う姿は俺が目指した者とは違うが誇るべき姿だ あんな強え奴に何度も立ち向かつて行つたんだろ

あの弱虫で泣き虫で根性無しのお前が良くここまで強くなつたもんだ 教師として鼻が高えぞ」

綱吉「リボーン……」

リボーン「もうお前は駄目ツナと呼ばれていた頃お前じゃない　でかく　立派な　漢  
になつたな　ツナ」

嬉しかった　最初はなにもかも嫌々だった　でも段々と変わっていった　ただこの  
人に認めてもらいたくて

リボーン「それとな　ツナ　女には優しくしろよ」

綱吉「えっ？」

リボーン「お前　ミラって女泣かせてただろ」

綱吉「うっ……そ、それは」

事実であるが故反論しようがなかった

リボーン「女は泣かせるもんじゃねえ　笑顔にするもんだ　彼女はな　お前の為に

毎日病院に来てくれて、花を替えたり、眠ってるお前に話しかけたりもしてくれてた  
そんな彼女にお前が言った言葉は正しかったか？」

綱吉「……間違ってた……」

リボーン「彼女がなんで叩いたか、涙を流したか　もう分かるな？」

そうだ　間違っていたのは俺の方だ　彼女は俺の為に言ってくれたのに……なのに

俺は・・・彼女を傷つけて・・・

綱吉「ああ・・・だけど許してもらえるかどうか・・・」

あんな酷いことを言ってしまったのだ。許してもらえないはずがない。不安は大きかった。

リボーン「馬鹿かお前。なら許してもらえるまで誠意みせりやあ良いだろうが。大体ボンゴレのボスがんばる事で一々不安になってんじやねえ」

綱吉「そ、そんな事って！ 大事な事なんだぞ！」

リボーン「そうだ。お前にとって彼女はもうそれだけ大きい存在になっているだぞ。ツナ」

リボーンの言っている意味が分からなかった。

綱吉「えっ。どういう事だよ」

リボーン「そいつは自分で気が付かなきや意味がねえ。まあ、いずれ分かる時が来るだろう。それまで己を磨いて、彼女の側を離れねえことだ」

綱吉「よく分からないけど・・・分かった」

リボーン「ふっ。今はそれで良い（ツナ。お前は長く孤独に戦い続け寂しかったんだ。愛情に飢えていたんだ。だが彼女ならきつとお前のことを・・・）・・・どうやらそろそろ時間のようだ」

綱吉「えっ」

リボーンの身体が段々と粒子化していく

綱吉「リボーンっ?!? 身体が!」

リボーン「言つたる今の俺は霊体だって、炎が尽きようとしてるんだろう・・・」

綱吉「リボーン! 待ってくれ 俺にはまだお前が」

リボーン「もう俺から教えることは何も無い」

リボーン「言葉に悲しんでしまうが 直ぐに涙を拭く

最後は笑顔で見送りたいから

リボーン「達者で生きろよ ツナ」

綱吉「・・・ああ」

リボーンの身体は完全に光の粒子となって夜空へと飛んでいった

綱吉「ありがとう リボーン」

夜空を見上げる彼の顔にはもう迷いや不安はなく

彼の目には再び強い意志が宿った



## 第5話

## 公園

綱吉とリボンが病院で話しをしている頃ミラとユニは公園に来ていた。2人はベ  
ンチに座り、ユニは自分の達の世界のこと、綱吉のこと、ミラ達の前に現れた光の玉が  
自分であるなどを話した

ミラ「そんなことがツナヨシ君にあったなんて・・・」

仲間や家族を殺されてたった1人で戦い続ける。どれだけ辛かったことか。苦し  
かったことか

この子もそうだ。ツナヨシ君は生きている。けどこの子は・・・まだこんな小さな子  
が・・・溢れそうになる涙を抑えながら

ミラ「ツナヨシ君のことは分かったわ。だけどどうして私たちの前に現れたの？何か  
理由でもあるのかしら？」

ユニ「はい。もちろん理由があります。他の人ではなくミラさん達でなければ駄目  
でした。私には断片的にですが未来が見えます」

ユニの言葉にシャルルの能力を思い浮かべる

ミラ「未来が・・・」

ユニ「はい その未来では沢田さんとミラさん、そしてギルドの皆さんが一緒に笑っていました とても幸せそうです」

ミラ「ツナヨシ君が私たちと・・・でも無理よ・・・私には・・・」

ユニ「沢田さんを叩いてしまったことを気にしているのですか なら大丈夫です 沢田さんなら貴方の本心を理解してくれていますから」

ミラ「でも・・・」

ユニ「貴方が沢田さんを叩いてしまったのは自分の為ではなく沢田さんに気づいてもらいたかったからなのでしょう 貴方は1人じゃない自分がいると 貴方が流した涙は沢田さんの為の涙 誰かの為に涙を流せる貴方を私は誇りに思います ミラさん貴方のその優しさが 沢田さんを救うため必要なんです」

まさかこんな小さな女の子にここまで言われるなんて思ってたなかった 私の意思是決まった

ミラ「分かったわ ユニちゃん 私はツナヨシ君の心の支えになる だから安心して」

ミラの答えにホッとする

ユニ「はあ 良かったです ありがとうございます

ならお伝えしなければなら

ないことが二つあります 一つは『白蘭』について、白蘭は……この世界にいます」

ユニちゃんの言ったことが理解出来なかった

ミラ「えっ……どういうこと……」

ユニ「白蘭はこの世界に転生しているのです」

ミラ「転生……死んで生まれ変わったってこと？……」

ユニ「はい 白蘭は殺されたのです 沢田さんに」

ますます混乱した ツナヨシ君は白蘭に負けてこの世界に来たのに その白蘭がツ

ナヨシ君に殺されてこの世界に転生したと言うのだ

ユニ「『平行世界』というものをご存知でしょうか？」

ミラ「え、ええ たしか、もしもの世界だったかしら」

ユニ「はい つまり白蘭が世界征服を成した世界もあれば、白蘭を倒した世界もあり

ます」

ミラ「じゃあ……2人は」

ユニ「ええ 全く別世界の人物です 姿、名前は同じでも全く違います」

ミラ「そんなことってあり得るの？」

ユニ「本来ならばあり得ません ですが現実として起きてしまいました そしても

う一つは沢田さんについて」

ミラ「ツナヨシ君について？ ツナヨシ君のことならさつき聞いたわよ」

ユニ「正確にいうと沢田さんの心についてですね 沢田さんの心には『鬼』が潜んでいます」

鬼という言葉を聞いて余りいい意味ではないことは分かった

ユニ「沢田さんはファミリーのボスになりましたが、本来戦いを好む方ではありません むしろ逆で平和を愛する優しい方でした ですが 私たちが殺されて 復讐に駆られ・・・」

ミラ「鬼になったのね・・・」

ユニ「はい 今まで争いごとになっても決して命だけは奪わなかった沢田さんが・・・敵の命を奪うようになって この世界に白蘭と沢田さんがいる以上、戦いは避けられないでしょう そうなった場合沢田さんは鬼となるのも避けられません その時 ミラさん 貴方は目を背けずに沢田さんを見るのが出来ますか？ 彼の側に居続ける覚悟がありますか？」

ユニちゃんの問いは酷く重く感じた 鬼 あの子がそんなことを・・・信じられなかった 恐怖も感じた だけどそれ以上にあの子を助けたいと思った

ミラ「ええ あるわ」

ユニはミラの強い眼差しと言葉から嘘でないこと知り

ユニ「どうやら 本当に覚悟があるようですね その答えが知れて良かったです

ミラさん 沢田さんは仲間や大切な人の為なら平気で大怪我をする方です きつとミラさんにも多く心配をかけてしまうこともあるでしょう その時はちゃんと叱ってあげて下さいね」

仲間のためにボスが 本当にあの子は優しい子なんだ

ミラ「ええ 分かったわ ユニちゃん 任せて！」

するとユニの身体が光り出して粒子化が始まる

ミラ「ユニちゃん!?!? 身体がっ!?!?」

ユニ「どうやら時間が来たようです お別れですね 沢田さんも貴方のような優しい方が側にいてくれれば安心です」

優しい・・・優しいのは貴方でしょう

ミラはユニのことを抱きしめる

ユニ「ミ、ミラさん!?!?」

突然のミラの行動にユニは驚いてしまうが ミラの気持ちを察してユニも抱きしめ返した

どうしてこの子は死ななければならなかったのだろう こんなに優しい子がどうし

て 大人になっていればきつと美人になっていたことだろう 好きな人が出来て結婚していたかもしれない そんなこの子のあり得たであろうはず幸せな未来を想像してしまう 神様とはなんて残酷なんだろう 理不尽な世界に涙が止まらない

ユニ「ミラさん ありがとう 貴方と話せて本当に良かった」

ユニはそう言つてミラの手の中から離れる

ユニ「ミラさん さようなら」

ユニは最後まで笑顔で 笑つて粒子となつて夜空へと飛んでいった

ミラは粒子が見えなくなるまで夜空を見続け そして

ミラ「ユニちゃん 見守つててね」

決意を固めた

上空

夜空の中を粒子となったユニが飛んでいると 向こうから粒子とリボーンがやってきた

ユニ「おじさまっ」

リボーン「おう ユニ」

ユニ「沢田さんはどうでした？」

リポーン「ああ 案の定しよぼくれてやがったがもう大丈夫だろう それに頼りになる連中もいるんだろう？」

フェアリーテイル

ユニ「はい 『妖精の尻尾』その方々が沢田さんの助けとなってくれます それにミラさんもいますから」

リポーン「そうか 彼奴がこれからどういう道を歩むのか 彼奴の成長を見れないのが残念だが しょうがねえな」

ユニ「・・・おじさま」

リポーンは寂しそうな表情を見せるが すぐに気持ち切り替え

リポーン「まっ 彼奴がこつちに来るまで気長に待つとするか」

ユニもそれに笑顔で答える

ユニ「はいっ」

こうして2人は夜空の中に消えていった

次の日

病院 綱吉の病室

綱吉はリポーンに言われたことを考えていた

綱吉「(リボーンの前ではああ言つたけど、これからどうしよう、今まで戦うことが全てだったから、幸せ、か、考えたこともなかった)」

そんなことを考えていると、ドアが開けられ

ミラ「こんにちは、ツナヨシ君」

綱吉「ミラさん、どうして・・・」

ミラ「貴方に逢いたくて・・・来ちゃったの」

ミラさん・・・そうだ、これを言わなきゃ前へ進めない

綱吉「ミラさんっ！」

ミラ「ん？ 何かしら」

綱吉「き、昨日は、すみませんでした、俺、貴方の気持ちを考えず酷いこと言っちゃつて・・・本当すみませんでした」

手を力一杯握りしめ震えている、きつと勇気を出していったのだろう、マフィアのボスと言つてもまだ子どもなんだ

ミラ「大丈夫、気にしてないわ、いきなり異世界に来れば誰だって不安になるもの、それより私こそ貴方のこと叩いちゃって痛かったでしょう」

そう言つてミラは綱吉の頬に優しく触れる

綱吉「ミ、ミラさんっ、大丈夫、大丈夫ですからっ！」



綱吉の慌てぶりにミラは笑みを浮かべる。だが同時に悲しい気持ちにもなってしまう。普通なら幸せな生活を送っていたはずなのに、あつちの世界では戦って戦って、鬼になっても戦い続けて

今この子の年相応の反応を見ていると胸が痛くなってしまふ。この子を守らなくてはいけない。もう二度と命を奪わせてはいけない。

ミラ「・・・ねえ ツナヨシ君 退院した後まだ何も決めてないんだったら 私たちのギルドに入らない？」

彼女の突然の提案に驚いてしまふ

綱吉「えっ？ ギルドに、ですか？」

ミラ「ええ 『FAIRY TAIL』には多くの人がいる 色々な人がいる たしかに家族や仲間を殺された貴方にこんな事言うのは酷なことだつて分かつてるわ 貴方が家族や仲間の人達を思い出してしまふかもしれない だけど貴方のこと放つておけないの だから私たちのギルドに入つてみない？」

彼女の気持ちは凄く嬉しい だけど・・・

綱吉「ミラさん・・・ありがとうございます でも、俺にはもう仲間に入る資格なんて・・・」

ミラ「仲間になるのに資格なんて要らないわ ユニちゃんから全部聞いたの 今まで

ずっと一人で戦ってきたんでしょう 辛い時も苦しい時も心を押し殺して 泣くのも我慢して戦ってきたんでしょう けどもういいの もう我慢しなくていいの 貴方は幸せになっていいの」

ミラはそう言つて綱吉を抱きしめた

綱吉「俺は・・・幸せになって・・・いいんでしょうか・・・」

ミラ「馬鹿ね 当たり前でしょ」

彼女の言葉を聞いていると 彼女に抱きしめられると とても温かい気持ちになつた

綱吉「ミラさん・・・俺・・・頑張り、ますから・・・だから・・・だからよろしく、お願いします・・・」

涙ながらの綱吉の言葉をミラは優しく聞いていた

ミラ「うん、うん」

一度は消えかけていた少年の心に再び火が灯った瞬間だった

## 第6話

病院

ミラが帰ってから綱吉はミラに抱きしめられ泣いてしまったことに顔を赤くしていた

綱吉（俺はなんて事をしてしまったんだ〜！）

綱吉がベッドの上で頭を抱えている頃ギルドでは

ギルド 妖精の尻尾

ミラは綱吉のことをマカロフや皆に話し、彼をギルドに入れて欲しいと頼んでいた

マカロフ「なるほど 復讐に取り憑かれ 鬼になった少年、か」

ミラ「駄目でしょうか？ マスター……」

マカロフ「いいや そんなことは無い たとえ其奴にどんな過去があろうとどんな事情があろうとも受け入れる それが『妖精の尻尾』じゃ」

ミラ「ありがとうございます！ マスター」

ホッと安心するミラにみんなが集まってくる

エルザ「良かったな ミラ」

ミラ「エルザ ええ 本当に良かった」

リサーナ「でも ミラ姉がその子の為にここまで頑張るなんてね」

ミラ「だってほつとけないんだもの あの子すぐ無茶しそうで」

女性陣は食い付いた これはもしかしてと 後にミラは女性陣から色々と問い詰められるのはまた別の話し

ナツ「新しい奴が来るのか 楽しみだなあ なっハッピー」

ハッピー「あい」

ミラ「とても優しい子よ だけど今心に深い傷を負ってるの だから皆んな優しくしてあげてね」

皆んな「「「おう（はいっ、ええ）!!?」「」」

ルーシイ「それにしても平行世界だなんて、まるでエドラスね」

ジュビア「もしもの世界・・・はっ！（つまりジュビアとグレイ様が結婚している世界も!!?）」

グレイ「うっ!!?」

エルザ「ん?どうしたグレイ?」

グレイ「いや・・・何か悪寒が」

エルザ「しかし厄介なのは『白蘭』だな 今どこにいるか全く分からん これでは攻めようがない」

ウエンデイ「世界征服だなんて・・・怖いです」

ウエンデイはミラからの話を聞いて多くの国が壊滅し、人も大勢殺されたことに震えていた エルザはそんなウエンデイの肩に手をおいて安心させ

エルザ「安心しろ 世界征服など我々が許さん そうだな！お前たちっ!!？」  
皆んな 「!!!」

ナツ「俺らの家族に手出して、世界征服だなんていい度胸してるじゃねえか もうツナには手出させねえぞ」

ルーシイ「ちよつと ツナって」

ナツ「ん？ ツナヨシだからツナだっ！」

ルーシイ「なんて安直な・・・」

エルザ「いや いいんじゃないか ツナ 名前の他にそういう呼び名があった方が親しみやすいだろう」

グレイ「だなっ」

ハッピー「あい ツナです」

マカロフは皆の言葉を聞いて安心し

マカロフ「よし、ツナが退院してギルドに来たらド派手に宴を開くぞ!!?」

皆んな「「「おおく!!?」「」」

ギルドは綱吉を迎える為大盛り上がりであった

それからの綱吉は大変だったリハビリに加え、魔法、魔力のコントロール、この世界、この国のことも学ばなければいけなかったからである。しかしここで重大なことに気づく。文字が読めなかったのである。

言葉が分かっても文字が読めない。そこでミラに文字の読み書きを教えてもらうこととなった。しかし綱吉はリボーンのスバルタ教育によつて各国の言語を短期間で覚えさせられた男。今回もなんとか短期間で覚えることができたそう。

ミラが綱吉のことを『ツナ君』と呼んできたときは驚いて固まってしまった。仲間や好きだった子から『ツナ』とそう呼ばれていたから。ミラから心配されたがその名で呼んで欲しいと頼んだ。もう一度その名で呼んでもらいたかったから。

さらにそれから日数が過ぎて、もうすぐ退院となったころ

病院

今綱吉はミラと一緒に病院の庭を散歩していた 綱吉はもう車椅子や松葉杖を使わないで歩けるくらいまで回復していた

ミラ「ツナ君 歩けるようになったって言ってもまだ治った訳じゃないんだからね」

綱吉「大丈夫ですよ もう ミラさんは心配しようだなあ」  
そう言つて歩いていくと

綱吉「あつ!?」

綱吉が躓いて転びそうになってしまう

ミラ「ツナ君つ!?」

ミラは咄嗟に綱吉を支え倒れるの防いだ

綱吉「ふうく危なかつたあ ミラさん ありがとうございま・・つ!?」

綱吉がミラに礼を言おうと顔を向けると目の前にミラの顔があり、後ほんの少しで触れてしまいそうだった

ミラ「つ!?」

ミラも綱吉の顔がすぐ近くに来て慌てていた 2人の顔は真っ赤になって自分の心臓の音がよく聞こえていた

ミラはなんとか表情に出さないように綱吉の手を引き

ミラ「ま、全く すぐち調子に乗っちゃうんだからつ これは病室に戻ったらお説教

ねっ」

綱吉「ええ、そんなあ」

2人の仲は確実に縮まっており、互いを意識し始めていた。ミラの存在は綱吉に大きな影響を与えていた。彼は最初比べ年相応の感情豊かな子になった。まるで黒雲に覆われた空に光が差し込み黒雲は消えていき快晴へと変わっていくかのように。

ただそれが良かったのか、悪かったのか、ただ1人を除いて知る由もなかった。綱吉がそれを知るのはもつと先のことである。

もしそこにその者が居ればこう言うだろう。

『君は鬼だからこそ君なんだよ。鬼から人に戻ってしまった君は君じゃない』

その者と出会う日はまだ先だった。



## 第7話

ついに退院の日がやってきた

綱吉はアルバスに最後の挨拶をしていた

綱吉「先生 お世話になりました」

アルバス「なあに 儂は医者として当たり前のことをしただけじゃよ それに もう大丈夫なようじゃの」

綱吉「はいっ」

アルバス「……しかし本当にいいのかね？」

綱吉「……はい これが俺の出した答えです」

アルバス「ミラちゃんを悲しませることになるぞ それでもいいかね？」

綱吉「はい……覚悟は出来てます」

アルバス「……そうか ならもう行きなさい」

アルバスの言葉に最後にもう一度礼を言つてアルバスの元を離れた

アルバス「出来ることなら彼の身に何も起きず、穏やかに生きて欲しいものじゃ」

ミラ「もう いいの？」

綱吉「はい・・・」

ミラ「どうかした？」

綱吉の反応にミラは疑問を持つ

綱吉「いえ 大丈夫ですっ」

ミラ「そう？ なら行きましょうか」

そう言つて2人は病院の玄関をでた 外に出ると魔導四輪と赤髪で長髪の女性がい  
た

エルザ「君がツナか 君のことはミラからよく聞いているよ 私はエルザ よろしく  
頼む」

綱吉「ツ、ツナヨシ・サワダです よろしくお願いします」

エルザ「そう固くなる必要はない もっと気を楽にしてい それに敬語もさん付け  
も不用だ」

今まで歳上には敬語で対応してきた綱吉は戸惑つてしまう

ミラ「そうよ 貴方はこれから私たちの家族の一員になるんだから」

綱吉「家族・・・ 分かり、分かつたよ エ、エルザ、ミ、ミラ」

まだぎこちないながらも碎けた喋り方をする綱吉に2人は微笑む

エルザ「さて 皆んな君が来るのを楽しみにしている 早速出発しよう 車に乗ってくれ」

三人は車に乗って、エルザがSEプラグを付けた時ミラは思い出してしまった

ミラ「ね、ねえ エルザ やっぱり運転は私が」

エルザ「何を言っている ミラはツナの隣にいてやれ」

ミラ「だけど・・・」

エルザ「私の運転が信用出来んのか？ 安心しろ ちゃんと安全運転で行ってやる」

そう言つてドルンツ ドルンツとエンジンをおかす

この時点で綱吉も疑問に思つてしまった 何故この人はレースみたいにエンジンを

吹かしているんだろう？と

エルザ「さあ 超特急で行くぞっ！」

ブオオン!!

ミラ・綱吉「ううっ ぽっ」

アクセルをおもいつき踏み込んで、車はロケットスタートしていった ロケットスタートした時に2人は後頭部を椅子の背もたれの上の部分にぶつけていた

エルザは運転は荒かった 緩やかなカーブにドリフトをかまし、蛇行運転、猛スピー

ド とにかくヤバかった

綱吉はエルザの運転に耐えながら もうこの人の運転する車には乗らないと誓っていた

ドリフト時に綱吉がミラの方へ倒れかかってしまうのは仕方ないこと そしてその時ミラの胸に顔が触れてしまい、ミラにビンタされるのも仕方ないと言えるだろう

そんな散々な運転も終わり『妖精の尻尾』についた

ギルドに入ると皆が綱吉のことを見ていた そして綱吉の前に1人の老人が出て来る

マカロフ「儂がこのギルドのマスター マカロフじゃ よう来たのお ツナ お前のことはミラから聞いておる 随分辛い道を歩んで来たようじゃの 今日よりここがお前の家であり、儂らは家族じゃ」

綱吉「家・・・家族・・・」

マカロフ「さあ ツナ 皆に挨拶を」

綱吉「はいっ」

綱吉は皆の前に立って

綱吉「ツナヨシ・サワダです！ まだまだ不慣れで皆に迷惑かけると思いますが、よろしく願います！」

綱吉が頭を下げ、少し間が空いてから

「よろしくなっ！」 「よろしくね」 などの歓迎の言葉をもらった  
挨拶が終わると皆綱吉の周りにやって来た

ナツ「俺はナツ！ よろしくなっ！」

ハッピー「おいら ハッピー！」

グレイ「グレイだ よろしく頼む」

ルーシイ「ルーシイよ よろしくね」

ウエンディ「ウエンディです よろしく願います」

シャルル「シャルルよ よろしく」

ジュビア「ジュビアですっ」

レビイ「私レビイ こっちはガジルね」

ガジル「ギヒツ よろしくな」

リリー「パンサーリリーだ よろしく頼む」

エルフマン「エルフマンだ 姉ちゃん泣かせやがったらただじゃおかねえからな」

リサーナ「もうエルフ兄ちゃんったら リサーナだよ よろしくね」

皆自己紹介してくれる　しかしまさか猫が二足歩行で喋るとは・・・

マカロフ「さて　挨拶も済んだことじやし　宴じやく!!」

皆「「「おお〜!!」」」

皆一目散にテーブルの食事に向かっていった

エルザ「全くしようがない奴らだ」

綱吉「宴？」

ミラ「そうよ　今日はツナのために宴をやるの」

綱吉「俺の為に・・・」

エルザ「そうだぞ　ツナ　今日は存分に楽しむ」

レヴィ「エルザく　こっちにエルザの好きなケーキがあるよ」

エルザ「何っ!!？」

まるで忍者のごとく高速でレヴィの方へ向かって行った

綱吉「ははっ・・・」

マカロフ「どうじゃ　ツナ　上手くやれそうか？」

綱吉はマカロフの問いに皆のを見ていた

グレイ「ナツ　テメエそれ俺の肉だぞっ！」

ナツ「うるせー！早いもん勝ちだっ！」

ルーシイ「もうくやめなさいよ」

エルフマン「漢おおく!!」

ルーシイ「あんたはうっさいわね！」

カナ「いやゝ 宴の酒また格別に美味いねゝ」

ウエンデイ「カナさんっ 呑み過ぎですよ！」

レビイ「ちよつとエルザ 一人でワンホールも取るなんてずるいよっ！」

エルザ「デザートなら他にもあるからいいだろうっ」

そんな光景を見て

綱吉「分かりません でもとても賑やかで暖かくて 此処に居たいって思いました」

マカロフ「・・・そうか」

ミラとマカロフは綱吉の答えに笑みを浮かべた

ミラ「ツナ どうして泣いてるの？」

綱吉「えっ あっホントだ」

綱吉は無意識のうちに涙を流していた かつて自分にもいた仲間達 この光景と重なって見えてしまったのだ もう二度と会うことが出来ない仲間達のことを思い出し涙が出て来てしまったのだ

綱吉「ごめんなさい・・・せつかくの宴なのに・・・」

ミラ「いいのよ 我慢する必要なんてないの 泣いていいんだから」  
すると向こうから

ナツ「おくい ツナ お前も来いよっ！」

グレイ「早く来ねえとコイツが全部食っちゃうぞ」

ルーシー「ツナも来なよ」

カナ「酒もあるよ」

ウエンディ「駄目ですよ お酒は！」

エルザ「デザートもあるぞ」

ハッピー「お魚もあるよ」

皆が綱吉のことを呼んでいた

ミラ「あらあら 皆ツナのこと呼んでるわね ツナ？」

綱吉「ああ なら行かなくちゃいけないな」



綱吉は涙を拭いてミラの手をとり皆の元へ向かった

綱吉（リボン、ユニ、皆 俺頑張るよ この新しい家 仲間、家族と一緒に生きていくから だから 見守っててくれ）

大空の少年と妖精の物語は漸く幕を開けたのであった

## 第8話

歓迎会が終わり、更に病院への通院も終わって 綱吉が完全に復活した頃

ギルド 妖精の尻尾

ナツ「なあ ツナ もう完全に治ったんだろっ 俺と勝負してくれ！」

ルーシィ「ちよつと ナツっ ツナは治ったばかりなのよっ」

ミラ「そうよ 戦うのならもう少し待ってちよっだい」

ナツの勝負の申し出にルーシィとミラは待ったをかけていた しかし

綱吉「いや やろう」

ミラ「ツナっ 駄目よ また怪我するかもしれないじゃない」

綱吉「今の自分がどれくらい戦えるか 知りたいんだ」

ミラ「ツナ・・・分かったわ ただし怪我したら駄目だからねっ」

綱吉「ああ 分かったよ ミラ」

そんな2人のやり取りを見ていた男性陣はミラからこんなに心配される綱吉のことを大層羨ましがったそうなの

2人は戦う為外へと場所を変え、皆も見物するためついてくる

ナツ「さあ やろうぜ ツナ」

綱吉「ああ・・・」

綱吉は毛糸の手袋をつけ答えると目を瞑り集中する。そして目を見開くと

ボウツ!!

額に炎が灯り、手袋も金属製のグローブに変わり、瞳の色も炎と同じ橙色に変わっていた。変わったのは見た目だけでなく纏っていた雰囲気も変わり顔つきも変わっていた。

綱吉の変わりように皆驚いていた

ハッピー「ツナが変身しちゃった」

ルーシー「戦いになるとあんな変わるもんなの?」

ウエンディ「とっても綺麗な炎です」

グレイ「しかし炎の使い手とは相手が悪いな」

ミラ「ツナ、頑張ってる」

皆綱吉の見た目に驚いている中ミラだけは平常運転で綱吉のこと応援していた。そんなミラにツナも優しく微笑み小さく手をぶり返していた。普段と違う綱吉の雰囲気にはミラは顔を赤くし恥ずかしがっていた。

そんな2人を見て皆心の中で思った。もうお前ら付き合っちゃえよと

それは置いといてマカロフやエルザなど実力者は気づいた。この少年は強いと、それは綱吉の目の前にいたナツにも分かっていた。

ナツ（面白え、あのツナがこんな闘気を出してくるなんてよお）

エルザ「では私が審判をしよう。2人とも準備はいいな？」

ナツ「ああ！」

綱吉「問題ない」

エルザは右手を高く振り上げ

エルザ「では・・・始めっ！」

勢いよく振り下ろした

まず最初に仕掛けたのはナツであった

ナツ「いくぜ！ 火竜の鉄拳！」

綱吉（ナツも炎を使うのか・・・）

綱吉はナツの攻撃を受け流していく

ナツ「ぬっ、まだまだあ!!」

ナツは綱吉に拳の連打をしていくが、綱吉は焦ることなく冷静に流していく

ルーシィ「ナツの攻撃が1発も当たらないなんて・・・」

ハッピー「ナツ、頑張れ！」

ナツ「くそお 火竜の碎牙! 劍角! 翼撃! 炎肘!」

ナツは次々と攻撃していくが綱吉はそれを最小限の動きで躲していく

ナツ「何でだっ!?? 全然当たらねえ!??」

それもそのはず綱吉には代々ボンゴレの血と共に受け継がれてきた『超直感』がある  
対人戦においてこれほど無敵な能力はないだろう

エルザ（攻めているのはナツ・・・だが流れはツナに傾いている）

綱吉「・・・そろそろこっちからもいくぞ」

綱吉は地面を蹴って一気にナツの間合いに入り、拳打を叩き込む

ナツ「ぐっ! がっ!」

ナツは一旦距離を取ろうと退がるが綱吉は追撃してくる為距離を取れないでいた

ナツ「く、くそっ（一旦距離を取らねえとまずいつ けどツナの奴が攻め立てて来てっ

から離れらんねえし・・・はっ!!?）」

ナツは両手の炎をエンジンのように噴き出して跳んで距離を取ったのだ

綱吉「・・・なるほど やはりそうきたか」

普通なら綱吉も手脚に炎を集中して急加速や飛んだりすることも出来るのだが今回は  
はしなかった いや出来なかつた

まだ魔力のコントロールに慣れておらず、ただ炎を纏つての打撃なら問題ないが、炎を使つての速度調整、ホバリングなど繊細なコントロールがまだ出来なかつたのである

ナツ「これくらい離れりゃあ 火竜の・・・」

綱吉「？」

ナツ「咆哮っ!!？」

綱吉「っ!!？」 これは（炎を噴くとは だが躲せない速度じゃない・・・いや試してみるか）」

綱吉はナツの咆哮に対して避けようともせず、不思議な構えを取つた右手の掌を外側に左手の掌を内側にするという変わった構え

炎は綱吉に直撃した

グレイ「直撃したぞ!!？」

ガジル「さすがに決まったか」

ルーシイ「躲せたはずなのに・・・」

ミラ「ツナ・・・」

皆が綱吉の心配をしていると

グレイ「んっ？ ちょっと待てなんか変だぞ!!？」

炎が小さくなつていたので 正確には綱吉の両手に吸収されていた

これが綱吉の技の一つ『零地点突破・改』である。本来ならば死ぬ気の炎を吸収する技だが、この世界に来て死ぬ気の炎が魔力に変質してしまった事で、炎熱系の魔法しか吸収出来なくなってしまったのだ。そしてもう一つ、魔力が変わったばかりで魔力量も少なく技を上手く使いこなすことが出来ない。故に

綱吉「っ!!？」

綱吉は吸収をやめ炎を回避した

グレイ「なんだ？ 途中で吸収をやめちまったぞ」

許容量を超える量の魔力を吸収してしまうと自壊する恐れがある

綱吉「(あのくらいの炎でもう・・・) まだまだ修行が足りないな 課題がまた出来た」

エルザ(なるほど・・・ 吸収は出来るが吸収出来る量にも限界がある、ということか)

綱吉「さて、こっちはどうか・・・」

そう言つて綱吉は右手を翳し足に踏ん張りをつけ、炎を放出する

綱吉「っ!!？」

すると綱吉の想像を超える炎が放出されてしまった

綱吉「(まずいつ) ナツっ 避けるっ！」

ナツ「避ける？ 勿体ねえだろう そんなことしたら」

炎はナツに直撃した。が炎はどんどん小さくなっていった。ナツは炎を吸い込んで

いたのである

綱吉「なっ!!? (あれは俺と同じ・・・)」

ナツ「ふう〜 食ったら力が湧いてきた! つーかお前の炎めちやくちや美味えな

ツナっ!」

綱吉「炎を食うだなんて・・・」

ナツの能力に綱吉は驚いていた

ナツ「いくぞっ! ツナ! 火竜の鉄拳!!?」

ナツが猛スピードで攻撃を仕掛けてきた

綱吉「ツ! (これは、流せない・・・)」

ナツの拳に綱吉も拳をぶつけて対応する

綱吉「(さっきより威力が上がってる・・・) どうやらお互い炎は通じないようだな」

ナツ「そうみてえだな」

綱吉「どうする? 引き分けという事にして止めるか?」

ナツ「つまんねえこと言ってるんなよ 勝負はこれからだ!」

そう言っつて両者距離を取る

綱吉(仕方ない 使うか)

綱吉はボクシングのファイティング・ポーズをとった



綱吉はファイティング・ポーズをとりながらかつて教わったことを思い出し出した  
——回想——

綱吉がボンゴレ十代目になったばかりの頃

リボン 「何？ 武術を学びたいだど？」

綱吉 「ああ 今まで勝ってこれたのは超直感のおかげだ これから先それだけで勝つていけるなんて思っていない ボンゴレボスである以上仲間は守る その為に武術を学びたいんだ」

リボン 「ふっ いいじゃねえか ボンゴレにはその分野のプロが2人いるからな俺が頼んでおいてやる」

次の日

綱吉とリボンが部屋で待っていると

了平 「おう リボン 急な頼みというから急ぎで来てやったぞ！」

ルツスーリア 「全く態々イタリアから呼び寄せるなんて、長旅はお肌に悪いのよッ！」  
リボン 「そいつは悪い事をしたな だがお前たちにはこれからツナの格闘技の師匠になつてもらおう」

了平 「おお 沢田！ ついにボクシングをやるようになったか！」

ルツスーリア「ふんっ そっちの笹川は暇かもしれないけど私は忙しいのよ そんなこと」

リボーン「そうか なら報酬に用意したこの美容グッズは要らねえんだな ならハルや京子にでも」

その瞬間ルツスーリアはもの凄い勢いでリボーンから美容グッズを奪いとった  
ルツスーリア「誰も要らないなんて言つてないでしょッ！」

リボーンは不敵に笑い

リボーン「ならやってくれるんだな」

ルツスーリアは悔しがりながらも

ルツスーリア「ええ！ いいじゃない やつてやろうじゃないの!!？ 私のムエタイ

を叩き込んでやるわ！」

ルツスーリアは綱吉の方を向いて

ルツスーリア「いいこと！ 私のレッスンは厳しいからしつかりついて来なさいッ  
！」

了平「沢田！ 俺も厳しくいくから覚悟しておけ！」

綱吉「ああ よろしく頼む」

そんな3人のやり取りを見てリボーンは

リボーン「ついでにアイツらも呼ぶか」  
少し経って

風「何の用ですか？リボーン」

コロネロ「何の用だ コラッ」

リボーン「お前らにもアイツを鍛えるの手を貸してもらいたくてな」

こうして綱吉は了平、ルッスーリアからボクシングとムエタイを 風からは躲し方、受け方、流し方などの体運びを コロネロからは戦況を見極める眼と戦術を、リボーンからは炎のコントロールと身体作りをそれぞれから叩き込まれた

後に綱吉は打の極致にたどり着き 破壊の一撃を修得した。そしてその一撃を目の当たりにしたフェアリーテイル の面々は驚愕することになる

本来の道を進んだ沢田綱吉と違い この沢田綱吉には『ニューボンゴレリング』も『ボックス』も『ボンゴレギア』も持っていない、リングもハーフのまま

しかしボンゴレボスになるという覚悟、カリスマ性、力、技、知識、戦術、炎のコントロールとボンゴレボスに相応しい漢になった

そんな綱吉の姿を見て誰もが思った ボンゴレは安泰だと

あの男が現れるまでは……

——回想終了——

綱吉「色々とやるべきことが出来てしまった 早く終わらせるぞ」

ナツ「へっ そう簡単にいくかよっ」

綱吉「一発だ」

ナツ「ん？」

綱吉「一発で終わらせる」

余裕、挑発とも言えるこの発言にナツは怒り

ナツ「やれるもんならやってみるやあ！」

ナツは右拳に炎を纏って殴り掛かってきた

ナツ「うおおおお!!？」

ナツの拳を綱吉は腰の捻りで最小限に躲し、

綱吉「シッ!!？」

そしてその捻りを利用してナツの左顔面の顎に右ストレートを叩き込んだ

ナツ「がっ!!?・・・あ・・・う・・・」

ナツはフラフラと後ろに退がり そして倒れた

エルザ「それまでッ！ 勝者 ツナ！」

綱吉「ふう」

綱吉は息を吐いて死ぬ気モードを解除する

皆 「「「おお〜!!?」」」

「すげえ！ナツに勝ったぞ！」 「ただもんじゃねえなアイツ」

皆が綱吉のことを褒める中

ミラ 「ツナ〜ツ!!?」

ミラが綱吉に駆け寄ってきた

ミラ 「ツナ とてもかっこよかったわよ」

綱吉 「ありがとう ミラ」

エルザは綱吉を見ながら先程の戦いを思い返していた

エルザ（ツナの最後の一撃 あれは計算されたモノだった 最小限で躲し、正確に顎

を打ち抜くあの技量 あの会話までもそうさせるモノだったとしたら 大したものだ）

綱吉はナツに拳打を浴びせた時ナツのタフさに気づいた このままやってもジリ貧

だからこそ顎を狙ったのである 例え一撃で倒せなくても脳が揺さぶられるのは明

白 フラついたところに追撃して倒すと算段はついていて 中々にエグい

この沢田綱吉は自分の考えを読ませず、自分の呼吸を乱さず 如何に相手の考えを読

み、呼吸を乱させ隙を突き、攻め立てて、勝ちをとるかというのを信条としている

グレイ 「なあツナ 次は俺と戦ってくれ！」

ガジル 「ギヒツ 俺だ」

エルフマン「漢としてお前との勝負に興味がある」

ラクサス「俺もお前と一戦やりてえ」

ミラ「ちよ、ちよつと皆、ツナは病み上がりなのよつ　連戦なんてそんなつ」

綱吉「俺なら大丈夫だよ」

ミラ「もう　ツナッ！」

怒るミラをなんとか宥め

綱吉「後一回くらいなら平気だつて」

綱吉の今日最後の相手を決めるのにいい争いをしていると

エルザ「皆、その最後の　一戦私に譲ってくれないか？久々に滾つて来た」

と綱吉に歩み寄つて来た

沢田　綱吉、今日最後の相手は『妖精の尻尾』の中でも屈指の実力者『妖精女王』の  
通り名を持つ　エルザ・スカーレット

## 第9話

小休止を入れて綱吉は再び戦うこととなった

相手はエルザ・スカーレット

綱吉とエルザは互いに向き合う

ナツ「はっ?!? ここはっ?!? 勝負はどうなったんだ っておいつ なんで エ

ルザとツナが戦うんだよ!

気を失っていたナツが目覚めた

ハッピー「ナツ、やっと起きたんだね」

グレイ「んなもん ツナの勝ちに決まってるんだろ クソ炎が」

ナツ「なんだと テメエ!!?」

ナツとグレイが喧嘩しそうになるが

ラクサス「ふんっ!」

ナツ「グハッ!」

ラクサス「お前は一々猪みてえに突っ込み過ぎなんだよ ツナの戦い方見て少しは学

べ」

ナツ「ぬう〜」

ナツは殴られた頭を摩りながら綱吉を見ていた

ミラ「ツナ・・・」

ミラは相手がエルザということでツナのことが心配だった

マカロフ「儂が審判を務めよう　2人共準備は良いな？」

エルザ「ええ」

綱吉「はい」

綱吉は再び集中し死ぬ気モードになった

綱吉「エルザ　俺は女だからって容赦しないからな」

エルザ「当たり前前だ　勝負に手を抜くなど相手に対する最大の侮辱　全力で来い！」

綱吉（ナツは炎・・・さてエルザはどんな魔法を使うのか・・・）

エルザ（厄介なのはあの拳だな　炎魔法も使えるようだがまだ上手く扱えてないよう

だ　つまりツナの戦法は格闘戦のみに絞られる）



マカロフは2人に様子を見て右手を高く上げ

マカロフ「では・・・始めっ！」

勢いよく振り下ろした

先攻はエルザ エルザは両手に剣を持って綱吉に近づく

綱吉（剣かつ！）

エルザの剣の猛攻を綱吉はグローブの甲の部分の水晶に剣の刃を当てて上手く弾いたり、防いだりしている

エルザ（グローブ以外のとこに当たれば斬られるというのに・・・こいつの顔からは微塵も恐怖が伝わってこない!??）

綱吉に超直感があるからというのもあるが綱吉が剣士を相手に戦うに慣れているのが大きいだろう

ボンゴレの二大剣士 山本にスクアードと模擬戦をリボーンにさせられ、ミルフィオーレとの戦いの時には幻覚を使う剣士・幻騎士とも戦った 今さら斬られるかもしれない と恐怖する訳がなかった

エルザは綱吉から距離を取ると

エルザ「天輪の鎧！」

エルザの鎧が変わり 翼が生え周りには剣が浮遊していた

綱吉「鎧が変わった・・・(それに周りに浮いている剣)」

エルザは周りの剣を上空へと移動させ

エルザ「舞え 剣たちよ！」

何十本という剣が降り注いできた しかし綱吉は慌てることなく数秒上空を見ると

すぐにエルザに向かってダツシユした

剣の雨が降る中綱吉は疾走していた 自分の周りを剣が掠めても一切

スピードを緩めず、表情を変えず突き進んでいた しかし

ルーシィ「あつ危ないっ！」

綱吉の右側から剣が身体目掛け降ってきた しかし綱吉は見向きもせずに剣をグ

ローブの甲で弾く

グレイ「アイツ・・・見もせずに弾きやがった・・・」

レビィ「しかも弾くタイミングも、完璧だったよ！」

綱吉「このタイミングで来るのは分かったた そして次は こっちっ!!？」

今度は左側から来る剣をまた見もせず弾いた

周りから見れば一見ただの無謀であり恐怖するこの行為 だが綱吉にとっては計算

し尽くされたものだった。上空を見たあの数秒で降ってくる剣の本数、速度、角度を全て頭に入れ、エルザまでの最短ルートを割り出していた。

綱吉「このルートで来る剣はあの二本だけ後は無視していい」

エルザ「まさかっ。あの一瞬で私までの道を見つけたというのか!?!」

綱吉はもうエルザのすぐ目の前に来て、右腕を振りかぶっていた。

エルザ「ぐっつ！」

エルザは剣の腹で綱吉の拳を受ける。

綱吉はそのまま二撃目を叩き込もうとするが、エルザは躲して

エルザ「飛翔の鎧！」

エルザは飛翔の鎧になって高速移動をする。

綱吉「速くなった・・・」

エルザは綱吉の周りを高速移動し、分身しているかのように見えた。

しかし綱吉は冷静に目と耳を働かせていた。目で移動速度を測り、耳で足音から位置を特定していた。

綱吉はエルザの攻撃を掠めながらも躲し続けた。そしてエルザが綱吉の背後から斬りかかった時エルザは内心驚いていた。何故なら綱吉がもうすでに自分の顔目掛け拳を振るっていたから。エルザは綱吉の攻撃を躲すとまた綱吉の周りを高速移動した。

エルザ（驚いた この短時間でもうこの速さに対応してきている）

綱吉「まだ少し、ズレがあるな」

綱吉の作戦は至極単純 迎え打つことに専念すること

追いかけたところで追いつけないのであれば、そのまま待っていればいい。そして目と耳から得た情報から何秒後に自分のどの部分に切り掛かって来るか予測を立て 拳を打った

ただ普通に打つても当たらない ならどうするか 前もってそこに拳を打つておけばいい

綱吉はこの戦闘で頭の中で数秒後の世界を見て それに合わせて数秒前に行動を起こしていたのだ 常人なら決してまず出来ない、リボーンの地獄の特訓を乗り越えた綱吉だからこそ出来る芸当である

エルザ「（このままやつても互いに決定打に欠けたままか・・・）ならば 雷帝の鎧！」

綱吉「また変わった 今度は槍か・・・（一体いくつの鎧を持っているのか）」

エルザ「いくぞつ!!?」

綱吉「ッ！（速いッ!）」

エルザは綱吉に向かって突っ込み高速の突きをくらわせるも綱吉にギリギリで躲されてしまう

エルザ「まだまだあ！」

高速突きの連撃をやれど、綱吉に掠りはするがそこまでだった

綱吉はエルザの突きのスピードを測っており機を見て

綱吉「はっ！」

槍の棍の部分を左手で捕らえた

エルザ「なっ!!?」（この連続の突きの中正確に棍の部分を捕らえただとっ）

綱吉は槍の棍の部分を左手で掴み、右手を振り上げ 勢いよく振り下ろすと手刀で叩き折った

しかしエルザは折られた瞬間、綱吉の腹に蹴りを入れて距離を取る

綱吉「げほっ げほっ（さすがだな 武器が壊されても動揺せず、攻撃した後の隙を突いてくるとは）」

エルザは槍の折られた部分を見つめていた

エルザ（まさか あの突きの速度に反応出来るとは・・・）

綱吉「さあ どうする そのまま棍として使うか？ それとも別の鎧を出すか」

エルザ（別の鎧にしたとて、ツナならば容易に対処できよう ならば・・・）

エルザは不敵に笑い いつもの鎧の姿に戻った

エルザ「フツ ツナ お前は、私は鎧に頼らなければ何もできない弱い女だとそう

思っていないか？」

綱吉「い、いや そんなことは」

エルザ「私はな 格闘戦も得意なんだよ さあ 存分にやろうじゃないか」

エルザは武器をしまい、拳で決着をつけることにした

妖精女王と大空の少年の第2 ROUND が始まる

## 第10話

エルザが格闘戦をしようとすることに疑問を抱く綱吉

綱吉（態々俺に合わせて戦うとは・・・）

そんなことを考えているとエルザが突っ込んで来た　そして右腕を振り返り強烈な一撃を叩き込んだ

エルザ「はあッ!!」

綱吉は咄嗟に両腕でガードし直撃を阻止する　しかし

綱吉「ぐっ!?」（重っ・・・）

その一撃は綱吉の想像を超える一撃で、両腕が痺れ痛みが走った　綱吉が初めて苦悶の表情を見せる

すかさずエルザは2撃目を綱吉の腹に叩き込む　両腕が痺れていたせいでガードが遅れモロに受けてしまった

綱吉「がはッ!?!」

綱吉はそのまま数メートル飛ばされ、地面に激突してもすぐには立ち上がれず両膝をついて咳き込んでいた

綱吉「ぐつ・・・ゲホッゲホッ・・・(くそつ モロに食らった!) はっ!!?」

綱吉が上を見るとエルザが蹴りの態勢に入っていた

エルザ「休んでる暇は無いぞ ツナッ!」

エルザは右脚を振り上げ、踵落としをやるうとしていた 綱吉は既のところまで転がって回避する 自分がさつきまでいた場所は無残にも砕かれていた

エルザは回避した綱吉を見ているだけで追撃をせずにいる間に綱吉は腹を押さえながら呼吸を整えていた

そんな綱吉の状態を見て皆心配していた

ルーシィ「ツナ 苦しそうだね」

グレイ「エルザの一撃がモロに入ったんだ 寧ろ気を失ってないことに驚くぜ」

皆がそんな話しをしているとき ミラは2人の所に向かおうとしていたが

ラクサス「おい 待てよミラ 何をするつもりだ?」

ミラは止められたことに不機嫌になりながらも

ミラ「決まってるでしょ 戦いをやめさせるのよ 戦いならもう充分でしょ」

ラクサス「何ふざけたこと言ってるやがる そんなことさせる訳ねえだろ」

ミラ「ラクサス、本気で言ってるの・・・」



ラクサス「当たり前だろ 勝敗が着くまでじっとしてろ」

ラクサスは右手に雷を纏った

ミラ「ラクサス……」

ミラとラクサスは互いに睨み合う 張り詰めた雰囲気は辺りに漂う

S級魔道士

の威圧のぶつけ合いに周りの皆も焦り始める

ルーシイ「ちよ、ちよつと2人ともっ!!?」

グレイ「おいおい、なんで2人が戦う感じになつてんだよ」

リサーナ「ミラ姉 何やってるの!!?」

フリード「ラクサス お前もだ!」

皆が2人の間に入り必死に止めようとしていた

ラクサス「ミラ お前の気持ちは分からねえでもねえ だがな あいつは自分の意思  
であそこで立って戦っているんだ お前だつてそれを許してあいつを送ったじゃねえ  
か」

ミラ「それは分かつてるわ! けどもう見てられないのツナが苦しんでる姿を!

勝敗ならエルザの勝ちでいいでしょ!!?」

ラクサスはミラの言葉に怒り

ラクサス「ミラア!」

ラクサスの怒鳴り声に興奮していたミラは落ち着きを取り戻す

ラクサス「ミラ それは言っちゃいけないよ そいつはあいつに對する侮辱だぜ そいつはなああいつの誇りを汚すもんだ 確かにお前が行つてやめさせればツナはこれ以上傷つかねえ だがな覚悟を決めて戦うことを決めたあいつはどうなる？」

ミラ「それは・・・」

ラクサス「あいつはお前に戦いを止められなきやいけないほど頼りねえか？ あいつは格闘のみとはいえナツに勝つた漢だぞ」

ナツ「ぐぬ・・・」

ラクサス「お前の目にはあいつの姿はそんなに頼りなく写つて見えるか？ 信じて送り出したんだ最後まで勝負を見守つてやれ」

ラクサスの言葉にツナの方を見ると ミラの目には苦しそうにしながらも諦めず戦おうとするツナの姿が映っていた

ミラ「ツナ・・・」

エルザ「ツナよ ナツを倒したあの武術を何故使わん 私は全力で来いと言つたはずだ 私にはその武術は使うまでもないということか？ それとも負けた時の言い訳が

欲しいのか？」

エルザの煽りにツナは笑い

綱吉「フツ さすがにそこまで言われちゃあ使わない訳にはいかないな だが俺にこれを使わせる以上後悔するなよ」

綱吉はそう言つてボクシングのポーズをとる

エルザ「後悔？ あり得んな 寧ろ高揚している 本気のお前と戦えるんだからな」  
両者は間合いを詰め、拳が届く距離まで近づく、そして先手を打ったのは

綱吉「シッ！」

綱吉は高速ジャブをエルザの身体の各所に叩き込む

エルザ「ぐっ……（速い……だが一発一発にそれほどの威力はない）」

エルザは更に間合いを詰め綱吉の拳を封じようとするが

綱吉「甘いッ！」

綱吉は右の肘打ちでエルザの顎を下から上に突き上げた 顎に食らったことにより多少フラつくエルザ そんな隙だらけな状態を黙って見てるほど綱吉はお人好しではなく、すかさず左のストレートをエルザの腹にくらわせた

エルザ「がっ……」

エルザは腹にくらいながらも膝をつかず耐えていた

綱吉（凄いな・・・あの当たる直前に身を退いたことで、威力をへらした、しかし鎧が硬すぎるな・・・）

エルザ（身を退いて無かつたら危なかつたな・・・あの武術は打撃、しかも拳のみに限定した武術のようだ　そのみに絞ったからこそあれほどの強力になる訳か・・・）

綱吉（さて　そろそろ決めるか・・・）

綱吉はエルザに近づき　高速ジャブを放つ

エルザはガードしつつ、先程食らったストレートを警戒していた

エルザ（この連打はほとんど重みがない　あくまで速さと手数を追求したもの・・・警戒すべきは先程の正拳）

綱吉（とか思ってるんだらうな）

綱吉は左足でエルザの右足を踏み、退がれないようにする

綱吉「逃がさない」

エルザ「くっ」

綱吉は右腕を振り返りストレートを放とうとする

エルザは顔を両腕でガードする　しかし思いもよらぬことが起きた　エルザが食らったのは右ストレートではなく左のアップパーであった

エルザ「なっ・・・」

綱吉「？」

綱吉はここで違和感を感じる。ガードの下から完全に決めるつもりで放った左のアッパーにも関わらず完全に顎を捉えることが出来なかったのだ。

エルザは回避するのは不可能と判断し、咄嗟に上半身ではなく首だけを動かして顎への直撃を防いだ。それにより顎先に当たるだけで済んだのだ。しかしそれでもダメージは大きかった。

ルーシイ「エルザが押されてる・・・」

グレイ「マジかよ」

ナツ「エルザのやつ手抜いてんじやねえか？」

ラクサス「いや エルザは全力でやってる。ただツナの方が格闘が強すぎるだけだ。単純な魔法勝負ならエルザの勝ちだろうが格闘戦ならツナの方に分がある。恐らくあの武術に相当な修行を積んできたんだらう。だが・・・」

綱吉（あの手順でやれないとは・・・）

綱吉はエルザの動きに正直驚いていた。

綱吉（アレも・・・いやこのまま押し切れる！）

綱吉はエルザに突っ込み右ストレートを放つ

パァン!!?

綱吉「!?」

エルザ「あれだけ何発も食らったんだ いい加減慣れる」

エルザは綱吉のストレートを掴んでいたのだ しかしただ受ければ自分の手が無事では済まない

ならばどうするか 打ち終わりを捕まえればいい

エルザは上半身を退いて、ストレートが放たれて停止した瞬間を捕まえたのだ

エルザ「さて 今度はこっちからいくぞ」

エルザは綱吉を引き寄せ、綱吉の頬に強烈な一撃を叩き込む

綱吉「がっ・・・」

更に拳打を叩き込んでいく

綱吉「がっ・・・ぐっ・・・うっ・・・」

綱吉は一端距離を取り、口元を拭う 唇を切ったのか手の甲には血が付いていた

綱吉（まさか、俺の拳の速さを見切られるとは・・・迂闊だった）

エルザが上手く反撃に転じたように見えたが、実際のところ両者のダメージはほとんど同じであった

綱吉（長引かせるとまずい・・・）

エルザ（限界も近いか・・・）

綱吉・エルザ（次で決めるっ！）

両者は一気に近づき、綱吉は右腕を エルザは左腕を振り返り 相手の頬に叩き込んだ

綱吉「・・・」

エルザ「・・・」

両者はそのまま動かさず沈黙が流れる そして一方がフラつきながら後退し・・・倒れた

綱吉（ち・・・ちく・・・しょ・・・う・・・）

倒れたのは綱吉だった

マカロフ「それまで！ 勝者 エルザ！」

勝敗を分けたのはリーチの差

エルザと綱吉では身長差があった 身長が高いということはそれだけ手脚も長いという事 故にエルザの方が速く綱吉の顎に拳を叩き込むことが出来た

綱吉はエルザの方が速いと察して、顎を引き、歯を噛み締め、脳が揺れるのを最小限にしようとしたが、それでもなおエルザの一撃は重かった

エルザ（ギリギリの勝利だった。もしツナが私と同じ身長ほだったら、いや、最初から魔法を上手く使うことか出来ていたら・・・）

勝負がついたことで皆が2人の下にやってくる

ミラ「ツナ〜！」

真っ先にやって来たのはミラだった。ミラは気を失っている綱吉を抱き起こし声を掛ける

ミラ「ツナツ！ しっかりして！」

綱吉「うう・・・ん・・・」

ミラ「ツナ、良かったあ」

ミラは綱吉が目を覚ましたことに安堵する

グレイ「しかし、エルザにここまで食らいつくとはな」

ルーシイ「そうね、正直ここまでなるとは思ってたわ」

皆が綱吉のことを称賛していた

ウエンディ「エルザさん、治療を」



エルザ「いや まずはツナを先にしてやってくれ」

そう言われウエンディはミラに膝枕されてる綱吉に治癒魔法を掛けていく

綱吉「ありがとう ウエンディ」

ウエンディ「いえ 大丈夫ですっ」

治療を受けながら綱吉はエルザとの戦いを思い出していた まだ慣れていない魔法ならまだ分かる だが自分の得意分野である格闘で負けたのだ ショックは隠せなかつた そんな顔をしているとミラが心配そうに声を掛けて来た

ミラ「ツナ？」

ミラの心配する顔を見て、自分を叱咤して気持ち切り替える

綱吉「大丈夫だよ ミラ・・・エルザ」

エルザ「ん？」

綱吉「次は負けない」

エルザは綱吉の言葉を聞いて笑みを浮かべ

エルザ「ああ 私もお前との勝負楽しみにしているぞ」

そんな2人の様子を見て

ナツ「だあく！ 納得いかねえ もう一回だツナツ！ 俺ともう一回勝負しろっ！」

ミラ「駄目よ ナツ エルザが最後って言ったでしょ」

ナツ「くそお〜」

綱吉「なら明日にで」

ミラ「駄目よ」

ミラは綱吉の言葉を遮り、提案を却下する

綱吉「えっ？」

ミラ「明日は大事をとって休養に専念しなきや」

綱吉「いや、でもこのくらいなら」

ミラ「いいから ねっ」

ミラの心配する顔を見て負けてしまい

綱吉「・・・ああ 分かったよ 明日はゆっくりしてる」

心配してくれる人がいる悪くない気分の綱吉だった

そんな2人を見て皆んなは ごゆっくり〜と言わんばかりにギルドにさっさと戻っていった

数日後、今度は戦えなかった4人と模擬戦をやることになり、綱吉はまたまた魔法に驚いていた 特にグレイの造形魔法には大いに関心を持っていた

模擬戦ではナツとエルザに使わなかった脚技のムエタイを使ったことにより2人が抗議してきて、大変だったそうなの

## 第11話

エルザ達との模擬戦から月日が経ち

綱吉は魔力のコントロールが大分出来るようになっていた。炎を使つてのホバリングや急加速、炎の放出する時の威力調整まで出来るようになっていた。炎を使つてのホバリングや急加速、炎の放出する時の威力調整まで出来るようになっていた。

魔法も使えるようになってからは綱吉は依頼達成に奔走していた。ギルドの借金が無くなったとはいえ財政難に立たされていた。その為綱吉は信頼と財政を回復するために多くの依頼を請けをつっていた。

それも魔物や盗賊の『退治』や『捕縛』だけでなく、要人や積み荷の『護衛』、植物や鉱石の『採取』、荷物の『運搬』、家や庭の『清掃』、子供達の『お世話』や『勉強』あらゆる依頼をこなしていた。

どんな依頼でも嫌な顔せずにやり遂げるその仕事振りにマグノリアの人達からの信頼を早くも取り、老若男女問わず人気が出始めていた。

綱吉は依頼をやる上でただ達成する、速くやるのではなく、どのようにしてやるか『過程』を大切にしていた。また依頼人への気遣いも忘れず、その人柄ゆえか人気が出て特に子供と女性からの人気が高かった。

子供達への対応もただ面倒を見るのではなく、叱るときもただ叱りつけるのではなく、何がいけないのか、何故怒られたのかしつかり説明して優しく叱り、褒めるときも本当に笑顔で褒めて子供達を喜ばせ、そういう対応が良かったらしく子供達からは兄のように慕われた

女性からは普段の綱吉と死ぬ気モードの綱吉とのギャップが良いらしく、また優しく紳士的で見た目と裏腹に力持ちと女性達の目は釘付けだった

前にも期待の新人と聞きつけた週刊ソーサラーのジエイソンに撮影の依頼があった。本来ならそういった撮影などはやんわりと断りたかったのだが、自分に居場所をくれたギルドの為と割り切り引き受けた。無事撮影も終わり、週刊ソーサラーの発売日には多数の女性が列を作っていたその中にはミラもいたという。ちなみにそれを知った綱吉は

綱吉「なんで買ったりなんかしたんだっ!?？」

ミラ「いいじゃないっ 欲しかったんだもの！ それとも何か見られて困るものもあるの？」

綱吉「ないっ 無いけど・・・」

ミラ「けど？」

綱吉「・・・恥ずかしいんだ」

綱吉の答えにミラは微笑み

ミラ「もう ツナったら♪ そんなことで気にしてたの」

綱吉「くっ やっぱりそれ捨てるっ」

押揃われたのが恥ずかしかつたのか顔を赤くし、週ソラを奪おうとするも

ミラ「だから駄目って言うてるでしょッ！」

ミラは週ソラを奪わせまいと右へ左へと動かしていた

そんな2人の言い争いをみてギルドの皆は

皆（やれやれ お熱いことで）

呆れていた

問題児ばかりいる『妖精の尻尾』にとって常識人である綱吉の存在は余りに大きく、救世主のようであった 綱吉のお陰でギルドに信頼は回復傾向にあり信頼数も少しずつ増えて来ていた だが綱吉への指名依頼も出て来るようになってしまった

綱吉はせっかく自分を頼って依頼を頼んできたんですと 断わる理由もなく全て引き受けた 一件の依頼で数日帰って来ない時もあれば複数の依頼を一日で済ませてしまふときもあった ギルドの信頼や財政が回復するほど綱吉への指名依頼も増えていき、綱吉の負担は心身ともに大きくなっていった それでも綱吉は依頼達成為に努力し

た

そんなある日

ギルド 妖精に尻尾

綱吉「ん．．．ただいま」

ミラ「お帰りなさい ツナ」

綱吉は疲労で眠いのか目が半開きになっていた

ミラ「ツナ 最近ちゃんと寝てる？」

綱吉「ん？．．．んく多分．．．」

もうすでに寝ぼけ気味になっていた

ミラ「もう 寝るならちゃんとベッドで寝なきゃ駄目でしょ ほらっ」

綱吉「ん．．．」

ミラは綱吉の手を引いて奥の部屋へと連れて行った

ルーシイ「最近、ツナ忙しそうね」

グレイ「疲れてるのが目に見えて分かるからな」

エルザ「ツナへの指名依頼が増えたのが原因だろう」

ナツ「お陰で全然ツナと戦えなくなっちゃったけどなあ」

ハッピー「あい」

ルーシイ「アンタは戦うことしか頭がないんかいッ！」

エルザ達のテーブルから離れて別のテーブルでは

カナ「しつかしミラも可哀想だねえ 愛しのツナと中々会えなくなっちゃって」

レビイ「しょうがないよ ツナへの依頼が増えて来ちやっただから」

ジユビア「でもあの2人あんなに仲良いのにまだ付き合っていないんですね？」

リサーナ「うん まだどっちからも告白した訳じゃないから」

カナ「ああ、焦りたいねえ」

レビイ「後もう一步なんだけね」

ジユビア「恋ではその一步がとても勇気のいる一步なんですよ レビイさん」

リサーナ「でもミラ姉 ツナがいない時凄く寂しそうにしてるから なんとかならな

いかなあ」

そんな話しをしていたら

エルフマン「おおい またツナへの指名依頼が来たぞ 今度はシエラザード劇団から



だ」

エルザ「おお あの劇団からか 懐かしい」

ルーシイ「あまりいい記憶じゃないけど・・・」

エルフマン「ん？ 今度はツナの他にもう一人と書いてある 男女ペアで来て欲しい  
そうだ」

カナ「ッ！ 貸してッ！」

カナはエルフマンから依頼書を奪いとると皆んなと依頼内容を読んだ

リサーナ「ねえ これって」

レビイ「うん あの2人にびったりの内容だよ」

ジュビア「最高のシチュエーションですね」

カナ「これだあ！」

綱吉はミラにベッドに横にさせられると、直ぐに眠りに入ってしまった 気持ち良さ  
そうに寝る綱吉を見て

ミラ「久しぶりに会えたと思ったら寝る間も惜しんで、依頼をやってるなんて頑張り  
過ぎよ 馬鹿」

そう言つて綱吉の頬を指でツンツンと突つついた

ミラ「皆の為に頑張つて 心配ばかりかけさせて・・・今日はゆつくり休んでね家に帰つたら美味しいもの作つてあげるから」

そう言つて綱吉の頭を撫でてから部屋を出て行つた

ちなみに綱吉は今、ミラ、エルフマン、リサーナの3人の家に居候している 最初はアパートでも借りようと思つたがその時は生憎金がなく、ならばお金が貯まるまでギルドを空き部屋をでもと思つたら、ミラが「なら家に来ればいいじゃない♪」と言つて自分達の家に招待したのだ そして綱吉は屋根裏部屋を借りて生活をしている

いい加減お金も貯まつたからアパートにでも引越そうかと思つてもミラがそれを許さず、綱吉も4人での生活に慣れてしまったのか満更でもない様子

こんな2人にも関わらず未だ付き合っていないのが現状である

ミラが部屋から戻つてくるとカナ達が詰め寄つてきた

ミラ「ちよ、ちよつと皆んな どうしたの？」

リサーナ「ミラ姉 此れ此れ！」

リサーナから渡された依頼書を読むと

ミラ「劇・・・男女ペアで・・・」

レビイ「そうだよミラ！ この依頼ならツナと一緒に出来るんだよ！」

ジュビア「いつも寂しそうにしてたじゃないですか チャンスですよ」

ミラ「でも私、劇なんてやったことないし・・・上手く出来るかどうか・・・」

カナ「なあに弱きになってんのよっ そんなのやる気でどうにかするでしょうが」

最初は戸惑っていたミラだったが皆の応援されやる気を出し

ミラ「分かったわ 皆 やってみるッ」

ミラは綱吉と一緒に依頼をやることを決めたのだった

## 第12話

ミラの返事を聞いてカナ達は喜び

レビイ「やったね！」

リサーナ「うん あとは・・・」

ジユビア「ツナさんですね」

カナ「ああ あいつの背中押してやんなきゃね」

夕方

綱吉はぐつすり眠れて、背伸びをしながら部屋から出て来た

綱吉「ああゝ ゆっくり休めたつ ん？」

するとカナ達がやって来て綱吉のこと取り囲んだ

綱吉「えっ えっ あ、あの 何か御用でしようか？」

突然のことに思わず敬語になる綱吉

カナ「あるに決まってんでしょっ」

カナ達はことの経緯を説明した

綱吉「ええくっ！ミラと一緒にっ!!？」

起きて早々驚かされる綱吉

レビイ「そうだよ ミラと一緒に依頼をするの」

リサーナ「ツナだつてミラ姉と一緒にいられて嬉しいでしょ」

綱吉「そ、それはそうだけど・・・」

ジュビア「ミラさん ツナさんに会えなくて寂しい思いをして来たんですよ」

綱吉「ミラが・・・」

カナ「いいかい ツナ あんたは依頼が終わったらミラに告白するんだよ」

綱吉「ええくっ!!？」

本日二度目の驚き

カナ「いい加減ミラの気持ちも分かってんでしょっ ミラはあんたからの言葉を待つ

てるんだよ」

綱吉「俺の、言葉を・・・」

カナ「そうだよ 分かっいたらちやんと言うんだよ」

綱吉「・・・ああ」

綱吉は皆からの突然の提案に驚き、頭の中はパニックになりながらも帰路についた

ミラ達の家

綱吉は家に着いて少し休んでからミラ達と一緒に食事をしていた

綱吉はカナ達から言われた言葉が頭の中でグルグル回ってミラのことを考えていた

ミラ「ツナ どうかしたの？」

綱吉「えっ？」

ミラ「ぼつくとしてたから」

綱吉「な、何でもないって！ はははっ」

ミラ「そ、そう？ ならいいけど」

綱吉「そ、そう言えばミラ 俺と一緒に依頼してくれるんだって？」

ミラ「ええ ツナの力になりたくて 駄目だったかしら・・・」

ミラの不安そうな顔を見て

綱吉「そんなことないっ 凄く嬉しいよ！」

綱吉の言葉にミラは顔を赤くして

ミラ「もう ツナったら そんな大きな声出さなくても聞こえるわよ」

綱吉「ご、ごめん」

そんな2人のやりとりを見ていたエルフマンとりサーナは

エルフマン（まくた やってるよ）

リサーナ（ホントラブラブだよね　これでまだ付き合っていないっていうのが不思議）  
呆れたり、不思議がっていた

食事を終えた綱吉は部屋へ戻りミラへなんて言うか考えていた

綱吉「なんて言えばいいんだ？　やはりシンプルに『好きだ』か？それとも『愛してる』か？　うーん『一緒になろう』？　ああ告白だなんて〜」

頭を掻きむしりながら悩んでいた　そしてミラはその頃あるもの作っていた

リサーナ「あれっ？ミラ姉まだ起きてたの？」

ミラ「うん　ちよつとね」

リサーナ「何作ってるの？」

ミラ「ツナへの贈り物かしら」

リサーナ「ふくん　ほんとツナは幸せものだよね　ミラ姉にここまで思われてるんだから」

ミラ「リサーナったら　何言ってるのよ」

リサーナ「ふふつ　私もう寝るけどミラ姉もほどほどにね」

ミラ「ええ　分かってるわ」

ミラも眠りについた頃

綱吉「はっ!? プレゼント!? 何かプレゼントしながら告白した方が良いのか?  
花束? ネットクレス? そ、それとも ゆ・・・ああ〜」  
未だ悩んでいたのだった

そしてシエラザード劇団に行く日

ミラ「それじゃあ行きましょうか」

綱吉「ああ」

2人はシエラザード劇団に向けて出発したのだった

2人は時間があったので道中の店々を見ながら劇団に向かっていた その時ある宝  
石店で展示されているネットクレスにミラの目が止まった

綱吉「ん ミラ?」

ミラ「これ ツナと同じ綺麗な炎の色をしてるわ」

綱吉「ああ 此れはオレンジトパーズっていう宝石だね」

ミラ「えっ 自然にこういう色が出るの?」

綱吉「うん そうだよ」

ミラ「へえ〜」



ミラはオレンジトパーズのネックレスに見惚れていた

綱吉（ミラ 欲しそうだな 値段は・・・ツ!?)

綱吉はミラにプレゼントしようかと思つたが値段を見てギョツとした

綱吉（い、いや 買えない値段じゃない ミラ為だ）

ミラは綱吉の様子を察して

ミラ「さあ ツナ いつまでも此処にいる訳にもいかないし、そろそろ行きましょう」

綱吉「えっ でも」

ミラ「いいからいいから♪ さっ 行きましょっ」

そう言つて綱吉の手を引いて歩いて行つた

綱吉（くうく 気を遣われるなんて 情けない）

綱吉達は劇団にたどり着き、団長のラビアンに挨拶をしていた

ラビアン「これはこれは ツナヨシさんだけでなく、ミラさんにまで来ていただけ

とは ありがとうございますっ ありがとうございますっ」

綱吉「ええ こちらこそよろしく願ひします（中々個性的な人だな）

2人のやる劇の内容は悲しく切ない恋の物語

2人はそれぞれ主人公とヒロインをやることになった。ミラも綱吉も初めてやる役者に最初は上手く演技が出来てなかったが、必死に練習したことで何とか本番当日まで形はなった。

最初台本を見た時は驚いた。まさかキスシーンがあるとは・・・

綱吉「えっ キ、キスシーン!!?」

ミラ「そんなッ 恥ずかしいわ」

しかし ラビアンさんになんとかと頼まれやることにした

本番の日 2人はお互いの衣装を見て赤くしていた

ミラ「ツナ とつてもかっこいいわよ」

綱吉「そんな ミラのドレス姿だって綺麗だよ」

2人は本番の日でもいつも通りだった

ツナとミラが劇をやると聞いて劇場には多くの客が来てくれて、満員御礼だった

ツナとミラの演技力は凄まじく観客は見入っていた。2人の語り合うシーン、ダンスするシーン、特に振りだが口付けするシーンは黄色い悲鳴を上げていた。そして最後の主人公が死んでヒロインが涙を流すシーンは凄かった

劇は無事終わり 拍手喝采だった。あまりの反響に劇を延長するほどの人気が出て

しまった

2人は劇を終えて、帰ってる道中

綱吉「ほんと 凄い人気だったな」

ミラ「そうね だけど私は嫌だなあ」

綱吉「えっ？」

ミラ「だって 物語とはいえあの2人は結ばれなかったんでしょ……」

ミラは悲しそうな顔をしながらそう言った

綱吉「ミラ……」

ミラ「やつぱり 皆幸せのハッピーエンドじゃなきや」

彼女の夕陽に照らされた笑顔を見て改めて思った

俺は……彼女のことを 好きなんだ

綱吉「ああ そうだな」

ミラ「ねえ ツナ？」

綱吉「ん？」

ミラ「もし もしね この先凄く悪い人と戦うことになつたとしても命を奪わないで欲しいの」

綱吉「えっ」

ミラ「この世界には貴方を傷つける人はいないの だからもう貴方に人殺しなんてして欲しくないの」

綱吉「ミラ……」

この時ミラは嘘をついた 白蘭のことを言わなかった いや言えなかったのだ 言えれば必ず彼は鬼となり白蘭を探しに行つてしまふ 鬼になつて欲しくなかった 自分の元を去つて欲しくなかつた

愛してるが故にミラは嘘をついたのだ ミラ自身もそんな自分を嫌悪していた

ミラは暗い気持ちで悟られぬよう

ミラ「そうだつ ツナにプレゼントがあるの！」

綱吉「プレゼント？」

ミラから渡された箱を開けると布製の紐で作られたブレスレットが入つていた

ミラ「あんまり 上手に出来てないんだけど……」

綱吉「態々作つてくれたのか？ 俺のために」

ミラ「だってせつかく2人での依頼でしょ それにツナ いつも頑張り過ぎちゃうか

ら・・・御守りよ 私に側に居なくても此れを見て思い出してね」

そう言つてミラは俺の右手にブレスレットを付けてくれた

綱吉「・・・ミラ ありがとう 俺はもう誰の命も奪わない 約束するよ」

ミラ「ツナ ありがとう」

綱吉「それから 俺もミラにプレゼントがあるんだ 受け取つてくれ」

ミラ「えっ？ これつて・・・」

受け取つた箱を開けると中にはあのオレンジトパーズのネックレスが入っていた

綱吉「欲しかったんだろ そのネックレス」

ミラ「え、ええ そうだけど いつの間に？ それに此れ結構高かったじゃない」

綱吉「休憩の間に急いで買つて来たんだ それにお金のことは気にしなくていい こう見えてもそれなりにお金持つてるから」

ミラ「ツナ・・・」

ミラは綱吉からのプレゼントに涙目になっていた

綱吉「ミラ つけさせてもらつてもいいかな？」

ミラ「ええ お願い」

ミラは後ろ向きになり髪をあげ、綱吉はミラにネックレスをつけた

綱吉「もう いいよ」

ミラは綱吉の方に向き直った

ミラ「どうかしら？」

綱吉「うん　とても綺麗だ　プレゼントして本当に良かったよ」

ミラ「ツナ　ありがとう　本当にありがとう　私　これ大切にするね」

綱吉「俺の方こそ　このプレスレット大切するよ」

綱吉は真剣な顔をして

綱吉「ミラ・・・」

ミラ「何？」

綱吉「俺は・・・ミラのことが好きだつ　付き合つて欲しい！」

綱吉の告白に暫しの沈黙が流れ、そしてミラの目から涙が流れる

綱吉「えっ　ミ、ミラ!?!？」

ミラ「ち、違うのっ　此れは　嬉しくてっ　涙が止まらなくて」

そんなミラを綱吉は優しく抱きしめ

俺は彼女のことを　笑顔を守る　例え何があろうとも　どんなことがあろうとも

必ず守ってみせる

そう自身に誓ったのだった

2人は互いに見つめ合い　そして口づけをした

2人が手を繋いで帰るとき　手は恋人繋ぎになっていた

その手を離さぬよう　離れぬように

たしかに今までと大差はあまりないかもしれない　だが2人の中で大きな変化があったのは間違いない

2人は終始笑顔のままギルドに帰っていった

フィオーレ王国のとある街

「おい　知ってるか？　最近『妖精の尻尾』が凄いらしいぞ」

「あの『妖精の尻尾』がか？」

「ああ　主力メンバーが帰って来て、更に凄い新人が入ったらしい」

「へえ　どんな奴なんだ？」

「炎魔法に武術を使うらしくてな 頭も切れるらしい 確か名前は ツナヨシ・サワダ って名前だ」

その名前が出て通り過ぎようとしていた青年の足が止まり、会話をしていた人達の方を振り返り、不敵に笑みを浮かべる

？「へえ 『妖精の尻尾』、ねえ ふくん」

青年は再び歩き始め群衆の中へと消えていった

白い悪魔は確実に大空の少年へと近づいてきていた



## 大魔闘演舞篇

### 第13話

綱吉とミラが付き合うことはギルドの皆に隠すことなく公表した

ほとんどの人が祝福してくれたが、中には両膝をつく者、血涙を流す者もいたと言う  
綱吉とミラが付き合ってから数日後、ミラからある大会のことを聞かされる

綱吉「大魔闘演舞？」

ミラ「そう 魔道士達によるファイオーレーのギルドを決める大会よ」

綱吉「へえ そんな大会があるんだ」

どうやらその大会は単純な戦って勝つという簡単なものではなく様々な競技をやるらしい 更に今では『剣咬の虎』というギルドが最強になっている 7年前までは『妖精の尻尾』が最強だったのだが、主力メンバーが居なくなつたことで一気に弱くなつたようだ よく分からないが7年間眠っていたらしく実力も7年前のままらしい

綱吉「あれで、ストップしてる状態か・・・」

綱吉はナツとの2度目の模擬戦を思い出していた

ナツは綱吉と模擬戦でモード『雷炎竜』になり綱吉の腹に『雷炎竜の撃鉄』を叩き込んでしまった。綱吉は突然の属性の変化に驚き、反応が遅れてしまいモロに食らって気を失ってしまった。

ちなみに目を覚ました綱吉にボロボロになったナツが謝罪してきた。一体何があったのか？と聞いても頑なに教えてくれなかったそう。

ナツ達は再びフィオーレーに返り咲くために大魔闘演舞の開催までの3か月修行するみたいだ。

綱吉「ナツ達は海か　ラクサス達やガジル達もそれぞれ違う場所に　さて俺は何処に行こうか」

ミラ「何言ってるの　ツナも私達と一緒に行くのよ」

綱吉「えっ　いいの？」

ミラ「当たり前でしょ　だって私達・・・もうっ」

そう言つてミラは顔を赤くしながら軽く押ししてくる。

綱吉「ミラ　ありがとう」

エルフマン「・・・あの2人修行でもあんな感じなのか」

リサーナ「・・・そうなんじゃない」

カナ「まあ 諦めるしかないね」

エルフマンとリサーナ、カナは綱吉とミラの雰囲気を見て少々不安になっていた

綱吉「あつそうだ！」

ミラ「どうしたの？」

綱吉「指名依頼して来た人達に3ヶ月いないから仕事出来ないこと伝えておかないと」

そう言って綱吉は通信用ラクリマで1人1人に丁寧に断りの連絡をしてみた

リサーナ「ツナつてダメだね」

カナ「ああいう細かいこと出来る奴ウチには少ないからね ん？」

ふとカナが隣をみると

マカロフ「ホント彼奴が来てくれて助かったわい ウチは問題児ばかりで うっ

うっ ツナのお陰で大助かりじゃあああ うおおおお」

号泣していた

カナ「このジジイは」

綱吉「それでミラ達はどこに修行に行くんだ？」

ミラ「この辺りよ」

そう言つて地図のある場所を指差す

綱吉「山か・・・」

ミラ「ええ 山で修行をするわ」

綱吉「寝泊まりはどうする？」

リサーナ「安心してちゃんとコテージをとつてあるから」

綱吉「なら後は準備するだけだね」

綱吉達は一旦家に戻り、色々準備を整えて再びギルドの前に集まった

綱吉「では マスター 行つてきます」

マカロフ「うむ 安心して行つてくるが良い」

マカロフは綱吉達を見送つていった

綱吉達が修行に出発してから数日後ある青年がギルドに訪れてきた

キナナ「何か ご依頼でしょうか？」

青年「ああ 違うんだ ツナヨシ・サワダつて人に会いに来ただけど、見当たらない 出かけてるのかな？」

キナナ「すみません ツナは今修行に出ています、3か月は戻つて来ないんです」

青年「修行……でも3か月って結構長いようだけど」

キナナ「はい 3か月後に開かれる大魔闘演舞に優勝する為に修行すると」

青年「ふーん 大魔闘演舞ね ならしやうがないか」

キナナ「あの何か ツナに何か伝えておきましょうか？」

青年「うーん そうだなあ なら『君との再会を楽しみにしてる』って伝えておいて」

キナナ「分かりました 態々来てもらったのにすみません」

青年「いや良いよ こっちこそありがとね お姉さん」

そう言つて青年はギルドから出ていった

ラキ「ちよつとキナナっ あんなイケメンと話せるなんて羨ましいじゃないっ」

キナナ「う、うん」

ラキ「どうかしたの？」

キナナ「な、何かね あのひとと話してる時寒気を感じたの……今はもう大丈夫なんだけど」

ラキとキナナは青年が出て行つた扉を見ていた

キナナ「あつ!?」

ラキ「どうしたの!?!?」

キナナ「名前聞くの忘れちゃった……」

ラキ「アンタねえ……」

キナナ「でも大丈夫よっ 長身で白髪、左目の下に3本の剣のマークが入った人って言えばツナだつて分かるよ」

ラキ「まあ そこまで言えば分かるでしょうよ（でも 一体何者だったのかしら）

この人物が後にツナの宿敵である『白蘭』と知るのはまだ先ことである

ミラはギルドの皆にツナのことを説明する時白蘭のことも話したが、白蘭の特徴を話すのを忘れてしまった それによつてギルドに残っていたメンバーは気づかなかつたのだ

白蘭「あくあ せっかく来たのに行き違いになつちやつた でもまあ 強くなつて帰つて来るつて言うし我慢するか」

白蘭は不敵な笑みを浮かべながら

白蘭「でもどうせ修行するならとびきり強くなつて来てね せっかく闘いに来たのにお預けされちゃつたんだからさ」

この時白蘭の殺気が抑えきれず僅かに漏れ、通行人達は皆寒気を感じ、鳥や野良犬、野

良猫はその場から離れて行った

白蘭「あつ いけないいけない」

白蘭はこの場の状況に気づいて殺気を抑える 通行人達も寒気を感じなくなったので普通に歩き出した

白蘭「さてと 大魔闘演舞まで3か月 うくん 各地の美味しいもの巡りでもしようかな」

白蘭は綱吉との再会を楽しみにしながら時間潰しをするのだった

## 第14話

綱吉達はコテージに荷物を置いてから修行場へと向かった

綱吉「俺、最初は炎の修行したいから、川の近くでやるよ」

ミラ「ええ 分かったわ 気をつけてね」

綱吉「分かってるって」

そう言つて綱吉は川の方へと走つていった

ミラ「はあ」

カナ「なあに ため息ついでのよっ」

ミラ「きやつ カ、カナ びっくりするじゃない」

カナ「ツナと一緒に修行出来なくて残念なのは分かるけど、そんなんじや修行に身が入らないよ」

ミラ「もう 分かってるわよっ さっ修行修行」

ミラはそう言つてエルフマンとリサーナの手を引いていった

カナ「やれやれ」



4人が修行を開始した頃 綱吉もまた川辺に着いていた

綱吉「近くに川があつて助かった 流石に森の中で炎を使う訳にはいかないからな」  
川岸は岩や石がある砂利で燃えるような草木は近くになく、更にその場所自体も周り  
と比べると低い場所にある為炎の修行には持つてこいだつた

ふと上流を見ると滝が見えた

綱吉「滝か 滝行もいいかもな さて 始めるか」

綱吉は死ぬ気モードになり両手に炎を灯す

綱吉（集中しろ イメージ・・・イメージ・・・）

綱吉が両手を近く持つていき集中すると、揺らめいていた炎が何かの形に変わつてい  
き鳥の形になつた 炎の鳥は綱吉の周りを飛び始める

綱吉「良しっ（ちゃんと操作も出来てる）」

綱吉は戦闘のバリエーションを増やす為に考えたのが、以前模擬戦をしたグレイの水  
の『造形魔法』だつた 炎の放出の強弱は出来るようになった しかし直線的過ぎて躲  
かれやすい

自分の戦闘のメインは格闘戦、それは分かっている ボクシングにムエタイそれを磨  
くことはもちろんだとして 『何か』いる 相手の動きを抑制する『何か』が 綱吉に  
とつてそれが『造形魔法』だつたのだ

多種多様に变化する『造形魔法』これを扱えるようになれば、自分は大きく成長出来ると思うったのだ

綱吉「良しっ 次は数を増やして」

綱吉は次に鳥を4羽に増やし、それぞれを違う動きで操作して見せた

グレイとの模擬戦以降『造形魔法』に興味を持ち、グレイや『蛇姫の鱗』のリオンに造形魔法について教わり密かに特訓していた

綱吉「良し、いいぞいいぞ 次は」

こうして綱吉は夢中になって特訓していった

ミラ「もう日が暮れるし、今日はここまでにしましょう」

ミラ以外3人共疲れ切っていた

リサーナ「賛成」

エルフマン「ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・」

カナ「アンタ・・・漢なんだからもう少し、続けたら」

エルフマン「いや・・・漢にも・・・休息は・・・必要・・・」

カナ「そう言うところはちやっかりしてんのね」

ミラ「それじゃ私 ツナのこと呼んでくるから 皆は先に戻っててね」

3人は疲労でボロボロな身体を引きずりながらコテージへと歩いていった

リサーナ「初日からこれってハード過ぎるんですけど・・・」

カナ「我慢しな 明日にはきつとツナが来る そうすればミラも少しは甘くなるはず  
さ」

リサーナ「本当？」

カナ「・・・多分」

リサーナ「そこは自身持つて答えてよお」

エルフマン「いや、逆の可能性もある」

カナ・リサーナ「「えっ？」」

エルフマン「ツナがいることによって、張り切つてやりすぎてしまう可能性だ」

カナ・リサーナ「「はっ・・・」」

3人は明日どうなるか不安になりながらコテージにたどり着いた

ミラ「確か川はこの辺に・・・あつ いたいた！ ツナく！ えっ？」

ミラは川岸にいる綱吉を見つけ声をかけて驚いた ミラが見たのは綱吉の周りに炎

の鳥や獣がいたから

綱吉の周りには鳥獣達が数十種類いて、それらは全て異なる動きをしていた 一頭

(一羽)で動いているのもいれば、二頭一組で動いているものもある。また数頭の群れで動いているものもある。鳥獣の種類も鳥は小さな雀から大型の鷺まで、獣も鼠から熊や獅子までいた

ミラはその光景に見惚れていた。美しい炎、リアルな動き、ミラの目には野生の動物達<sup>だ</sup>が本当に綱吉の言うこと聞いているように見えていたのだ

綱吉「ん？ ミラ どうしたんだ？」

ミラ「え、ええ もう夕方だから呼びに来たの」

綱吉「ああ もうそんな時間か なら今日はここまでかな」

綱吉は右手を翳すと炎の鳥獣達は消えていった

ミラ「あつ・・・」

綺麗な炎の鳥獣達が消えたことについて声が出てしまった

綱吉はそんなミラの気持ちを察したのか

綱吉「大丈夫 いつでも見せてあげるから」

ミラ「ツナ 約束よ」

綱吉「うん 約束」

2人はそんな話しをしながらコテージに向かっていた

食事をしてシャワーを浴びて後は寝るだけになったのだが、このコテージは2人一部

屋の様で部屋にベッドが二つ その部屋が3つある

綱吉「部屋分けだけど」

ミラ「ツナは私と一緒にいいわ」

皆「「「えっ？？」」」

ミラ「だって恋人同士でしょう なら一緒に部屋でも問題ないわ」

綱吉「い、いや だけど」

ミラ「ツナは私と一緒にじゃいやなの？」

綱吉はすかさずミラの手を取って

綱吉「そんなことない 一緒に部屋にしよう」

カナ・リサーナ（駄目だこりや）

ミラ「それじゃあ 後は」

カナ「ならあたしはリサーナと一緒に部屋で」

リサーナ「うん よろしくね」

エルフマン「えっ」

トントン拍子に決まってくことに驚いてしまうエルフマン

カナ「良かったじゃないかエルフマン 1人部屋なんて」

エルフマン「い、いや 確かに1人部屋だけだよ・・・」

ミラ「それじゃ明日も早いから、しつかり休んでおくこと　いいわね」

リサーナ「はーい　それじゃおやすみなさーい」

カナ「おやすみー」

ミラ「おやすみ」

綱吉「お、おやすみー」

皆が自室に入って行く中、1人ポツンと残ったエルフマン

エルフマン「・・・もう　寝よう」

彼は考えることをやめた

こうして修行1日目終了した

次の日

綱吉は早朝、皆が目覚めるより早く起きて外に出た

綱吉「丁度いい山があつた　良しッ」

綱吉は走る態勢をとると、一気にダッシュした　目指すのは反対側の麓　コースはま  
ず山の頂上を目指しそこから麓へ降る、そしてまた頂上を目指して帰ってくるという大  
自然のマラソンである

マラソンを終え帰ってくるとミラが起きていた

ミラ「ツナ 一体どこに行つてたの？ 目が覚めたらもう居なかつたし」

綱吉「ああ マラソンに行つてたんだよ」

ミラ「せめて一声かけて言つてね 不安になつちやつたんだから」

綱吉「ごめん せつかく寝てるのに起こすのもなあと思つて 次からはちゃんと紙に書いていくから」

2人がそんな話しをしていると皆が起きてきた 綱吉はシャワーを浴びるため一旦その場から離れた

朝食をとり2日目の修行に取り掛かる

ミラ「今日はツナも私達と一緒にやるの？」

綱吉「ああ 格闘技や試してみたい技もあるし」

ミラ「そう 良かった」

リサーナ「ミラ姉 ツナと一緒にやれるから嬉しそうだね」

カナ「果たしてこれが吉と出るか凶と出るか」

修行場に着くと綱吉は死ぬ気モードになり、近くにあつた大きめの岩の前に立つ

綱吉「これくらいでいいかな」

綱吉は両手を前にして

綱吉『死ぬ気の零地点突破・初代エディション!!』

皆「[[「ツッパ?」]]」

すると岩は一瞬にして氷漬けになってしまった

リサーナ「岩が凍っちゃった」

エルフマン「アイツ 氷魔法まで使えたのかよ」

皆が驚いている中、綱吉はその氷を見てどこか納得していない様子で、右腕を振りかぶりその氷を砕き割った。その砕かれた氷をみて綱吉はがっかりしていた

綱吉「・・・」

ミラ「ツナ どうかしたの?」

綱吉「こんなものじゃない・・・」

ミラ「えっ」

綱吉「初代エディションの凍結の力はもつと凄かった あれくらいの力で砕けるようなものじゃない」

リサーナ「あれで弱いって・・・」

カナ「向こうにいた時どんだけ強かったのよ」

綱吉「やはり魔力が変わってしまった影響なのか・・・それに死ぬ気の炎の特性の『調



和」の力が全く使えなくなってしまう・・・それに大分燃費も悪くなってる 結構魔力、体力を使ったのにこれじゃ割りに合わない 使い所を見極めなければ一気に不利になるな」

綱吉は冷静に今の自分の力を分析していた

綱吉「さて 確認はもう済んだし、修行に入ろうか」

ミラ「そうね」

綱吉「そう言えば、ミラの魔法ってどんなのなんだ？」

綱吉の問いにミラは固まってしまう

ミラ「えっ」

綱吉「ミラの魔法 まだ見たことなかったからさ 見て見たいんだけど」

ミラ（いずれ見せなきゃいけないと分かっていたけど・・・）

ミラの必死に考え込む姿に

綱吉「な、なあ ミラ 何も無理して見せてくれなくても」

ミラ「いいえ！大丈夫よっ！」

ミラは覚悟を決めて、姿を変えていく

綱吉（エルフマンみたいに姿が変わっていく）

ミラ「・・・これが私の魔法 サタンソウルよ」

綱吉「サタン・・・悪魔か」

ミラ「ええ 悪魔の力をテイクオーバーしたの・・・貴方に嫌われたくなくて今まで見せなかったの ごめんなさい・・・この姿、怖いでしょ」

ミラは悲しい顔をしながら綱吉に言う

綱吉「嫌いになる？ 怖い？ そんなことない」

ミラ「えっ」

綱吉「俺がミラを好きになったのは、俺を思ってくれたその優しさなんだ 見た目なんかじゃないっ その優しさのおかげで俺は救われたんだっ！」

綱吉はミラの自虐に怒って、興奮してしまい次から次へと言葉が出てくる 綱吉の言葉にミラも戸惑ってしまい、サタンソウルを解いてしまう

ミラ「ちよ、ちよっと ツナ？」

綱吉「俺にとつてミラは太陽と同じなんだ 俺の真つ暗だった心の闇を暖かな光で照らしてくれたっ そんなミラのことを見た目の有無で嫌いになる？ 怖がる？ あるわけないだろう！」

綱吉の改めての告白にミラは顔を真つ赤にして震えてしまう

ミラ「くくく」

リサーナ（わくく つなったらっ！）

カナ（よくもまあ 声を大にして言えたもんだね）  
エルフマン（ツナ 恥ずかしがらずに 漢だっ！）

綱吉「姿が変わろうとミラはミラだ 悪魔の姿だろうと人の姿だろうと関係ない 俺はミラのが好きなんだ！ 俺は心からミラのことを愛しモガツ」

ミラ「くっもういいからっ！」

ミラは恥ずかしさの余り、綱吉の口を塞いでしまった

ミラ「私が悪かったからっ もう充分ツナの気持ちは伝わったからっ！」

綱吉「そ、そっか」

ミラ「ハア ハア きよ、今日は各自、個人修行にしましよ 私はあっちの方でやってくるからっ」

そう言つてミラは走つて行つてしまった

カナ「（そりゃあ 真剣な顔してあれだけ言われりやあねえ）ならあたしは向こうで」  
リサーナ「じゃあ私はこっちの方」

エルフマン「俺は向こうでやるか」

皆がそれぞれバラバラに移動して、綱吉一人がその場に残つた そして皆の前で言つたことを今更恥ずかしくなつてきただつた

綱吉「俺は皆の前でなんてことをっ）ああっ!!」

恥ずかしさからの叫びは皆にも聞こえて

カナ（漸く自分の言ったことに気づいたか）

リサーナ「お、雄叫び?!?」

エルフマン「雄叫びとは気合いが入ってるなあ 負けてられんっ 漢おっ!!」

綱吉「（落ち着け俺っ もう時間は巻き戻らん！ 切り替えろっ）修行に集中するんだ  
！」

綱吉はファイティング・ポーズをとり、頭の中で敵を思い浮かべ、それを相手にボクシングやムエタイの練習をした

ちなみにミラは綱吉から告白により、恥ずかしさから練習どころではなかった

その日の夜

綱吉とミラは顔を合わせ難くなつて、話しも続かなかつた。そして2人はベッドに入つて寝るだけになつてから

ミラは怒っているのか、恥ずかしいのか反対側を向いて寝ている

綱吉「なあ ミラ 起きてる？」

ミラ「いいえ 寝てるわ」

綱吉「(起きてるじゃん・・・) 昼間のことは悪かったよ・・・」

ミラはこちらに向き直り

ミラ「ホントよっ 凄く恥ずかしかったんだからっ」

綱吉「だから ごめん・・・」

ミラ「許してあげない」

綱吉「うっ どうしたら許してくれる？」

ミラは恥ずかしがりながら

ミラ「・・・これから先も私のことを愛してくれたら 許してあげる」

ミラの言葉に綱吉は上体を起こして笑顔ではつきりと

綱吉「ああ 約束するよっ 俺は生涯ミラしか愛さない！ 必ず幸せにしてみせへ

ブツ」

綱吉の顔に枕が飛んできた

ミラ「だからそう言うところなんだってばっ！」

こうして2日目も色々あったが平和に終わった

その後も時には滝行を

リサーナ「滝に打たれるのってなんの意味があるのかな？」

ミラ「ツナが言うには精神統一にいらしいわよ」

エルフマン「ならば 漢として 俺もやるべきっ！」

しかし

エルフマン「ぬおおおおおおお ゴボゴボゴボ・・・」

エルフマンは水圧に押しされ沈んでいく

綱吉「ヨイシヨット」

隣りでやっていた綱吉によつて滝の外へ引つ張られる

エルフマン「ブハッ!!？」

綱吉「気をつけてね この滝、結構水圧凄いから」

エルフマン「いや 先に言えよっ!!？」

時には座禅を

カナ「あれ寝てるんじゃないの？」

リサーナ「鳥が留まっても全然反応しないし」

ミラ「あれも精神鍛練の一つで、自然と一体となることで声や呼吸が聞こえるだつて」

リサーナ「声？」

ミラ「そつ 木や花、石 川や風までの声とか呼吸が聞こえるだつて」  
 リサーナ「石や川に呼吸なんてあるの？」

ミラ「分からないけど、ツナがそう言つてたから」

エルフマン「ならば試してみれば分かること！」

しかし

エルフマン「ぬぬぬ・・・ああああ！ 全く聞こえんツ!!」

リサーナ（やつぱり・・・）

カナ（アイツにこういうの向かないでしょ）

綱吉は目を閉じたまま、優しい口調で

綱吉「エルフマン そんな荒つぽくしたんじゃ聞こえるもの聞こえないよ 聞こう聞こうと意識をそっちに傾けちゃうから心が乱れちゃうんだ 心を穏やかに静かににしてやってみて 呼吸は聞くものじゃない聞こえてくるもの さあ もう一度やってみて」

エルフマン「お、おう 分かった」

カナ「なんかツナって」

リサーナ「うん 見た目の割に大人だよね」

ミラ「ツナ・・・(いつもと違うツナ かつこいい)」

時には他の4人に体術の指南を

綱吉「じゃあ 受け身からやってみようか」

4人は綱吉にポンポンと投げられたり転ばされたりする

綱吉「遅い！ 倒されてから起き上がるまでかかり過ぎる！」

受け身の練習が終わる頃4人は土だらけだった 他にも相手の技の躲し方、捌き方、受け流し方また動体視力や反射神経を鍛えたりした

リサーナ「ハア・・・ハア・・・ツナもああ見えて・・・結構スパルタ・・・なんだね」

カナ「甘く、みて・・・たね」

エルフマン「ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・」

カナ(もはや喋る元気すらないか・・・)

ミラ「新しい発見があつて面白いわっ！」

3人は疲弊しきつていたが、ミラはまだ元気だった

綱吉「さて次にやるのは」

リサーナ「まだあるのっ!?!?」



綱吉「次で最後だから それにそんな危ないものでもないし さつ 頑張つて」  
3人は何とか立ち上がる

綱吉「さて最後に教えるのは呼吸法だよ」

ミラ「呼吸？」

カナ「呼吸なんていつもやってるじゃないか」

皆、呼吸と聞いて拍子抜けしていた

綱吉「呼吸法を甘くみちやいけないよ 実際俺のいた世界では格闘家だけでなくスポーツ選手や音楽家の人達もやってたからね」

ミラ「呼吸って大切なのね」

綱吉「ああ 呼吸は平常心と集中力を高めてくれるし、高めた集中力は自分の力を最大に引き出してくれる」

皆「「へえ〜」」

綱吉「逆を言えば呼吸のリズムが乱れれば自分の力を発揮出来ない だから戦っている時でも呼吸を大切するんだよ」

リサーナ「戦っている時でもかあ 難しいね」

綱吉「修行期間はまだまだあるし、最初は意識してやるのに疲れるかもしれないけど、慣れてくれば自然と出来るから さつ やってみよ」

4人は足を肩幅に開いて呼吸していく

綱吉「最初は一定の間隔で深呼吸するんだ 徐々にその間隔を狭めていくからね」

3か月の修行はあつという間に過ぎていき

綱吉「そろそろ帰る頃かな 3か月の修行期間、随分実りのあるものだったな（それ

に・・・）」

綱吉はミラを見て微笑む

ミラ「ん？ なぁに ツナ？」

綱吉「いや ミラへの思いを改めて言えて良かったなあつて」

ミラ「もうっ どうしてそんなに堂々とっ 怒るわよっツナ！」

綱吉「ご、ごめんて〜」

ミラ「こらっ 待ちなさい！」

逃げていく綱吉をミラは追いかけていく

リサーナ「ちよつと 2人共〜」

エルフマン「走つて帰るとは漢だつ！ 俺も続くぞ！ うおおおお〜!!」

2人を追つてエルフマンも走り出す

リサーナ「えっ えっ 何この流れっ!?!」

カナ「ほらっ あたしらもいくよ！」

リサーナ「そ、そんな〜 のんびり帰ろうよ〜」

カナとリサーナも走り出した

こうして最後までドタバタした修行期間は終了を迎えた

## 第15話

なんだかんだありつつもギルドにたどり着いた綱吉一行

綱吉「ただ今戻りました」

マカロフ「うむ　よう戻った」

ラクサス「よう　ツナちゃんと強くなってきたんだろな？」

綱吉「ラクサス　もちろんっ　今度は前にみたいにボロボロにやられたりしないさ」

綱吉の自身満々な返事にラクサスは楽しそうに笑う

ラクサス「ふっ　そりゃあ楽しみだ」

フリード「言っておくが、ラクサスはお前より更に強くなっているからなっ」

綱吉「(何故フリードが張り合うんだろっ．．．)ところでナツ達は？」

マカロフ「ナツ達ならば先にお前たちより帰って来ての　もう大魔闘演舞が行われる  
クロツカスへ出発したんじゃない　それと主らには悪いが大魔闘演舞に出場するメンバー  
も決めてしまつての」

エルフマン「なにいつ!?　悪すぎだろっ！　もう少し待つとけよマスター!!」

エルフマンはマカロフに鬼の形相で迫る

マカロフ「しよ、しょうがないじやろう 時間も迫っておったし」

綱吉「まあまあ エルフマン 落ち着いて」

エルフマン「ツナっ お前は悔しくないのかよ！」

綱吉「そりゃあ 悔しいけどさ 決まっちゃったものはしょうがないよ（正直、出てみたかったけどこればかりはなあ・・・）だからさ出れない分ナツ達のこと応援してやる なっ」

エルフマン「あ、ああ・・・分かった」

綱吉に宥められエルフマンは渋々納得した

カナ「つくづくツナって」

リサーナ「大人だよな」

綱吉（メンバーはナツ、グレイ、エルザ、ルーシイ、ウエンデイの5人か・・・5人がどれだけ強くなったか楽しみだな）

ラキ「お帰りなさい」

ミラ「ただいま 私達がない間に何かあった？」

キナナ「特にありませんでしたけど、ツナに会いたい人が来て」

ミラ「へええ でもあらかじめツナは依頼出来ないことを連絡しておいたはずだけ

ど」

キナナ「はい 依頼者じゃなかったんですけど 何か変で」

ミラ「変？」

キナナ「寒気っていうか その人と一緒にいるのが怖くて」

ミラはそれを聞いて考え込み、もしやと思つて

ミラ「・・・その人の名前は？」

キナナ「名前は聞きそびれちゃったんですけど、特徴は覚えてます 長身で白髪、左

目の下に3本の剣のマークがある男性です」

それを聞いた瞬間ミラは冷水でもかけられた感覚に襲われた

ミラ（ユニちゃんの言つてた通りの特徴・・・その人が『白蘭』だ ツナが有名にな

りすぎて場所がバレたんだわ どうしよう・・・はっ！）

ミラはこの会話が綱吉に聞かれてないか 綱吉のいる方を向くと 綱吉は皆と楽し

く談笑していた

ミラ（良かった・・・聞かれてないようね）

ラキ「ミラ どうしたの？」

ミラは2人を自分の側に引き寄せ

ミラ「いい2人とも？ その人のことはツナに、いいえ皆に言つちやダメよっ」

ラキ「えっ でも」

ミラ「いいからっ その人のことは黙っておいて」

ミラの必死の頼みに

ラキ「わ、分かったわ」

キナナ「私も分かりました」

ミラ「ありがとう 2人共 (でもどうすれば ツナを逃がす? でも何処へ? 一

体どうすれば)

キナナ「あ、あのミラさん その人からツナに伝言あつて『再会を楽しみにしてる』と」

ミラは悲しそうな顔をしながら

ミラ「・・・そう」

ミラは綱吉がいる方を向いた 綱吉は笑顔で皆と喋っていた

ミラ(どうして・・・どうして ツナはもう充分苦しんだ 辛い思いをしたなのに

どうして ツナは幸せになつてはいけないの? まだ苦しまなきゃいけないの? 辛

い思いをしなきゃいけないの?)

ミラの視線に気づいたのか綱吉がやって来る

綱吉「どうしたんだ ミラ?」

するとミラは綱吉のことを抱きしめた

綱吉「ツ!?」

皆「「「ツ!?」」」

ミラ（もう鬼になんてならせない 殺し合いなんてさせない 私が 皆が守るから  
だから・・・だから）

リサーナ「ちよ、ミラ姉!」

ジュビア「ミラさん なんて大胆な」

ラクサス「おいおい・・・」

ミラ「大丈夫・・・大丈夫だから」

綱吉（えっ 何? どういうこと? 全く分からないけど）

綱吉はとりあえずミラの気の済むまでと抱きしめられていた

それから数分後 ミラは顔を真っ赤にして綱吉から離れていった

微妙な空気になってしまったが、何とか気を取り直してギルドの皆と応援しに行くこ  
とになった

しかしその後マスターにマスターの部屋に来いと言われた

綱吉（なんか依頼でも来たのかな）



そんなことを考えながら部屋へ入ると、マスターの他にラクサス、ガジル、ジュビア、そしてミラがいた

マカロフ「さて これで全員揃ったの」

マスターの説明によると大魔闘演舞には各ギルドから2チームまで出場できるらしく、この5人でBチームとして出て欲しいとのことだった

ジュビア「ジュビアは出場するよりグレイ様を応援したいです」

ガジル「冗談じゃねえ 誰がそんな見世物に出るかよ」

ラクサス「出るのは構わねえが、Bチームつてのが気に食わねえ」

綱吉（んっ 3人はあまり乗り気じゃないのか さてミラは）

ミラの方を見ると 何故か顔を逸らされてしまった

綱吉（何故？）

マカロフは3人を納得させる為、勝ったチームが負けたチームに言うことを一つ命令出来ると言うことで納得してもらった

フェアリーテイル Bチームが結成され、クロツカスへ向かった

クロツカス

綱吉達がクロツカスに着いて、宿に荷物を置くとジュビアはグレイを探しにガジルも

適当に散策してくると行ってしまった

綱吉「夜12時までには、まだまだ時間あるし俺達も出かけて来るよ」  
そう言つてミラの手を取る

ミラ「あつ・・・」

綱吉（ん？ なんかいいつもと違うな）

ミラの反応がいつもと違うことに戸惑つてしまふが

綱吉「じゃつ 行つてくる」

ラクサス「おう 時間に遅れんなよ」

綱吉「分かつてるつて」

そう言つて綱吉とミラは宿の部屋から出て行つた

綱吉「流石、花の都と言われるだけあつて綺麗な花がいっぱいだな」

ミラ「そ、そうね」

綱吉「（うゝん 何か違うんだよなあ）なあ ミラ 何かあつたのか？」

ミラ「えっ？ どうしてそう思うの？」

綱吉「だつて いつもと様子が変だからさ」

ミラ「そんなことないわ 私はいつも通りよ」

その言葉に綱吉は優しく微笑み

綱吉「そっか なら良かった（ミラは何か隠している・・・俺に言えない何かを・・・だが無理に聞き出してミラを傷つけるつもりはない このままでいい なら俺のすべきことは一つ ミラを元気づけること）」

綱吉「ミラっ 少し此処で待っていてくれ すぐ戻るから」

ミラ「えっ うん」

綱吉はその場から離れて、十数分経って戻って来た

ミラ「ツナ 何処に行ってたの？」

綱吉「ちよつとね 此れを買って来たんだ」

そう言って花冠を見せた

ミラ「それって・・・」

綱吉「ミラへのプレゼントさ」

ミラ「ツナ・・・」

綱吉「さっ ミラ」

ミラ「うん」

ミラは目を瞑り少し屈んで花冠を乗せてもらう 元の態勢に戻って目を開けると

綱吉「よく似合う とても綺麗だよ」

ミラ「ツナ・・・ありがとう」

綱吉「実はもう一つプレゼントがあるんだ」

ミラ「えっ」

そう言つて小さな紙袋から赤い髪紐を出した

ミラ「髪紐？」

綱吉「ああ このブレスレットと一緒に」

綱吉は右手に巻かれたブレスレットを見せる

綱吉「このブレスレットにはミラの思いが込められてる 俺にはミラみたいに手作りなんて出来ないけど思いは込められるから」

ミラ「ツナ・・・」

ミラはいま前髪を縛っている髪紐を解き、綱吉から貰った髪紐で前髪を縛った

ミラは店のショーウィンドウに映った自分を見て、綱吉に向き直り涙を流した

ミラ「ありがとう・・・ツナ・・・私・・・ツナに沢山・・・沢山もらつてばかりで・・・何にも出来なくて」

綱吉「そんなことない 俺だつてミラから沢山のものを貰った それは何も物だけじゃない、ミラと出会つてから今日までの時間も俺にとって大切な宝物なんだ」

綱吉はミラの両肩に手を置く

ミラ「私も・・・ツナと一緒にいた時間は・・・大切な宝物よ」

綱吉「これからも沢山宝物を作って行こうな」

綱吉はそう言つて優しくミラを抱きしめた

ミラ「ええ」

いい雰囲気だが、忘れてはいけない この場所は人が大勢行き交う中心部 つまり

パチパチツ パチパチツ

綱吉「ん？」

ミラ「えっ？」

おめでとうゝ お幸せにゝ 好きな人にあんなプロポーズされるなんて素敵

それを見ていた周りの人達が綱吉達のことを祝福してくれたのだ

2人は顔を真っ赤にして周りの人達にお辞儀して早足にその場を離れていった

ミラ「もうっ また恥ずかしい思いしちゃったじゃない！」

綱吉「ま、まさか こんなことになるとは・・・でも 後悔はしてないよ 俺の思い

に嘘はないから」

ミラ「・・・馬鹿っ」

2人は場所を変えてまた店を見てまわったり、食事をしたりした。そして時間も近くなってきたので

綱吉「そろそろホテルに戻ろうか」

ミラ「ええ」

綱吉「ミラ その花冠なんだけど魔法でコーティングしてあつて枯れないんだつてだから安心していいよ」

ミラ「本当っ！ 良かったあ！」

ミラは花冠を触りながら笑顔になる

綱吉（ミラが元気になって本当に良かった）

2人は手を繋いで宿へ帰って行った

宿に着くともうガジルとジユビアは先に帰っていた

綱吉「ただいま」

ラクサス「おう そう様子じゃ存分に楽しんで来たみたいだな だが旅行に来たんじゃねえことを忘れんなよ」

綱吉「分かってるって」

ジュビア「ミラさん その花冠・・・」

ミラ「ふふっ ツナにプレゼントされちゃって」

ジュビア「ガーンツッ！ ジュビアはグレイ様との食事が失敗したのに・・・ミラさん達が羨ましいです・・・」

ガジル「おい お喋りはそこまでだ そろそろ時間になる」

時刻が12時になると町中に鐘が鳴り響いた

するとクロツカスの町の上空にカボチャの被り物をしたマスコットキャラが立体映像で現れた

『大魔闘演舞に参加される皆さん おはようございます これより参加チームを113から8に絞る為の予選を開始いたします！』

ジュビア「予選なんてあるんですね」

ラクサス「まあ 113もいりやあ当然か」

ミラ「おつきなカボチャねえ」

ガジル「いやっ つつこむとこそそこかよ!?」

綱吉「ミラ あれは立体映像だからね」

クロツカス中の宿から空中に向かって階段が現れた。その階段の集結点に巨大な建造物が現れ、その建造物が迷宮であり、その迷宮を進み早くゴールした8チームが本戦に出場出来るという

ガジル「迷宮なんて面倒なことしやがるっ」

ジュビア「難しい予選ですね」

綱吉「迷宮か 面白そうだ」

ラクサス「おい ツナ 遊園地のアトラクションじゃねえんだぞ」

ミラ「そうよ ツナ 遊ぶじゃないんだから」

綱吉は4人の方を向き

綱吉「分かっているよ ナツ達や他のギルドには悪いけど優勝するのは俺達だ だってこのメンバーで優勝を逃すどころか予選敗退なんて想像できる？ 勝つの剣咬の虎でも蛇姫の鱗でもAチームでもない俺達だっ」

綱吉の堂々とした宣言に4人は驚いていたが、すぐに笑って

ラクサス「ああ 当たり前だ」

ガジル「ギヒツ 当然だな」

ジュビア「目指すは優勝です」



ミラ「ええ 勝つのは私達」

綱吉「(悪いな ナツ 勝つのは俺達だ!) さあ 行こうか!!」  
5人は階段を駆け上がり迷宮へと向かった

大魔闘演舞予選・空中迷宮が今始まった

## 第16話

空中迷宮に入った綱吉達、入るとあちこちに階段や扉、通路があった

綱吉以外のメンバーはどれを選べばいいのか頭を悩ませていたが、綱吉は落ち着いて辺りを見回していた

綱吉（・・・見える範囲での正解はあれかな）

ラクサス「さて、どれを選ぶか、だが」

ガジル「んなもん、ゴールの方角に向かって進めばいいだろうが」

ジュビア「でも、あのカボチャのマスコットが『命を落としても』と言ってましたから、ただ迷宮を進めばいい訳ではないような」

ミラ「そうね、参加者を振るい落とす罠も仕掛けられてるでしょうね」

ガジル「つーか、てめえも話しに参加しろよっ」

いつまでも会話に加わらず周りをキョロキョロと見回している綱吉に苛立ったのか、ガジルが怒って来た

綱吉「ごめんごめん、でも大丈夫だよ、まずはあの階段を行けばいいから」

そう言つて綱吉は上り階段を指さす

ガジル「なんであれが正解って分かんだよ」

綱吉「ん〜 勘って言えばいいのかな」

ガジル「勘かよっ!!?」

ラクサス「おい ツナ・・・」

ジュビア「ツナさん・・・」

ミラ「ふざけてる場合じゃないのよ ツナ」

4人は綱吉に呆れて哀れむような目で見てくる

綱吉「ち、違うんだって！ 俺の勘は一般の人のそれとは違うんだってっ！ ほらっ  
ミラから俺の過去のこと聞いただろう!!?」

綱吉は慌てて自分の代々受け継がれてきた力『超直感』を説明した

ー回想ー

それは綱吉がまだボンゴレ10代目を継承する前のこと

綱吉「えっ 『超直感』を強化する?」

リボン「そうだ 『超直感』は対人においては無類の強さを誇るが、人ではないもの  
に対しては発動しない だからものに対しても発動できるよう特訓するぞ」

綱吉「特訓ってどうやるんだよ」

リボーン「そりゃあ もちろん・・・」

そう言つてリボーンはニヤリと笑つた

綱吉（ああ・・・また危険なことをやらされる訳ね）

次の日

リボーン「さて ツナ特訓中は死ぬ気の炎を使うのは無しだからな」

綱吉「はあっ!!？」

リボーン「お前の地力を上げる 超直感も強化出来て一石二鳥だろ」

綱吉（何が一石二鳥だろ お気楽に言いやがって）

リボーン「何か言つたか？」

綱吉「いや、何も・・・」

リボーン「じゃあ始めるか」

綱吉「ああ・・・」

綱吉は諦めて覚悟を決めた

リボーン「それじゃあ ツナ この三つの道の内の一つ選んで歩いてこい」

綱吉「そんだけ？」

リボーン「ああ そんだけだぞ」

綱吉はとりあえず左の道を選び歩こうとした時



リボーン「押してみろ」  
ポチッ

バリバリバリッ!

綱吉「ぎゃあああ!!?」

電気ショックを受け

またある時はロープ引きで

綱吉「良しっ これだ!」

リボーン「じゃあ 引いてみる」

グイッ

ザザア

綱吉「……………」

天井が開き大量の水が落ちてきた

そしてある時、夜に別の場所へ移動させられ

リボーン「今度はここだ」

綱吉「山?」

リボーン「そうだ 今までの準備運動に過ぎねえ これからやるのが本番だ 山の頂上に旗を刺してある ソイツを持って夜明け前までに此処まで戻って来い」

綱吉（今までの準備運動が・・・）

リボーン「言っておくが、死ぬ気の炎は」

綱吉「使っちゃダメなんだろ」

リボーン「分かってんじやねーか ならさつさと行って来いっ グズグズしてると朝になっちまうぞ」

綱吉「やばっ！」

綱吉は慌てて山の頂上を目指し走り出した

綱吉「ライトも無しに山に入ることになるなんて わっ!!?」

文句を言いながら走っていると何かに引っ掛かり転びそうになってしまった

綱吉「ととつ な、何だ？」

よく見るとロープが張られていた

綱吉「ロープ？ 何でこんなところに・・・があっ!!?」

すると背後から強い衝撃を受け吹き飛ばされてしまう

綱吉「うう・・・丸太？ くそっ リボーンかつ！ とにかく早く行かないとっ」

綱吉が再び走り出そう踏み出した時また何かを踏んだ感覚に襲われ、周囲を警戒する綱吉「ツ!!? 次どこからっ!」

すると上から石や太い枝が降ってきた

綱吉「ぐっ! ううっ! (ま、まずい まだスタート近くのなにつ)」

石や枝の雨から出て走ろうとすると

綱吉「わっ!!? つ痛く 落とし穴まで・・・あちこちに罠が仕掛けられてる

こんなんじや夜明け前までなんてとても・・・」

そして朝日が昇って少し経った頃 漸く綱吉は旗を持ってやって来た その姿はボロボロで服も破れ、あちこち傷だらけであった

綱吉「はあ・・・はあ・・・持って・・・はあ・・・はあ・・・来たぞ」

リボーン「随分時間が掛かったな」

綱吉「はあ・・・はあ・・・山のあちこちに罠があつたからなあ」

リボーン「普通の登山とでも思ったのか? これから毎晩これをやるぞ」

リボーンの言葉に驚きの声を上げてしまう

綱吉「毎晩っ!!?」

リボーン「夜に特訓すれば昼間の勉強に影響は無いだろう」



綱吉（いや・・・身体を休める時間がないんですけど・・・）

リボン「それとも、やめるか？」

綱吉「・・・いや、やめない 俺が途中で何かを投げ出すことを嫌うようになったのは知ってるだろ？」

リボン「フツ だなっ」

綱吉「（そうさせたのはお前なんだけどな）次はもつと早く戻ってきてるさ」

リボン「ほお ソイツは楽しみだな」

常に命の危険がある特訓を続けることにより綱吉の感覚は半ば強制的に鋭敏となり、ついに『超直感』はものに対しても発動できるよう昇華させることに成功した

これ以降、沢田綱吉には全て見抜かれると言われるようになった

ー回想終了ー

それはつまりこの迷宮に対しても有効

綱吉「ーという訳なんだよっ 分かった？」

ラクサス「まあ、な」

ジューリア「戦いの時の先読みとかなら聞いたことありますけど、直感でそこまでやれるものなんですか」

皆未だに疑っているようだった

ミラ「でも いつまでも此処にいる訳にもいかないわ ツナを信じて行きましょう」  
ラクサス「そうだな モタモタしてつと予選落ちしちまう そんなダセエことは  
ねえ」

こうして綱吉の選んだ上り階段を進むことにした

ガジル「ハズレだったら承知しねえからなっ」

綱吉「大丈夫だつて！俺にはどんな嘘も通用しないんだからっ」

ラクサス「カツコつけてねえで、さっさと先頭行け」

そう言つて綱吉の頭を小突く

綱吉「あいてっ あい」

一番後ろにいたミラは綱吉の言葉に反応して足を止めてしまう

ミラ（・・・もし本当に嘘を見抜けるんだとしたら、あの時ツナは気づいていながら  
聞かなかつた？）

ミラは昼間のことを思い出していた

ジュビア「ミラさん どうしました？」

ミラ「ッ！ 何でもないわっ さっ 行きましょ」

ミラ達も綱吉達の後を追いかけた

ガジル「それで次はどれだ？」

綱吉「まだ真つ直ぐだね んっ？（上から何か来る・・・）皆頭上注意ねっ」  
皆が上を向くと上の方にあつた扉が開き他のギルドの人達が出て来た

「他のギルドの連中だっ！ぶっ潰しちまえっ！」

綱吉（喧嘩っ早いな〜）

他のギルドの人達は攻めて来たが、ラクサスとガジルによつて瞬殺された

ラクサス「ふんっ」

ガジル「へっ」

「ん、こんなに強いとは・・・」

綱吉「おっ あつたあつた！ 次はこれだよ」

綱吉が指差したのは壁だった・・・ それを見た4人はまた呆れたような目をしてい  
た

綱吉「本当だつてっ！ この辺りの壁だけ違うんだよ！ きつと何か仕掛けがあるん  
だつて！」

そう言つて綱吉は壁や床を触り始めた

綱吉「ちよつと 皆も見えてないで手伝つ」

カチツ

グルンツ

4人「「「ツ!?」「「「「」」」」

何と壁が180度回転して綱吉が向こう側へ行つてしまつた

ジュビア「回転扉でしたか」

ガジル「凝りすぎだろ」

ラクサス「仕方ねえ 俺らもスイッチを探すぞ」

ラクサス達が壁に近づこうとした時、ミラがサタンソウルになつて壁にダツシユした

ラクサス「つておい!?」

ジュビア「ミラさん まさかつ!?」

ミラ「スイッチを探している暇はないわつ」

ミラは右腕を振りかぶつた

ちなみに向こう側へへ行つた綱吉は

綱吉「くつそく 回転扉か 何処にスイッチがあるんだ? 適当に触つたから分かん

ツ!??」

壁から何かを感じとったのか 離れようとしたが時すでに遅く、壁もろとも吹き飛ばされてしまった

綱吉「ぎやあつ!??」

壁を破壊したミラは綱吉を探した

ミラ「ツナゝ 何処っ 何処にいるの!」

そして瓦礫に埋もれている綱吉を見つけ、引つ張り出した

ミラ「ツナゝ 良かったあ 無事だったのね!」

3人(「いやいやいやいやいや」)

綱吉「お、おう(壁を破壊してくるとは驚いたけどな・・・)」

一行は足を進めていると、綱吉が再び何かを感じとった

綱吉「(・・・壁? いやこの迷宮自体か) 皆っ 右側の壁に身体を寄せて!」

ガジル「ああんっ なんでそんなことすんだよっ」

綱吉「いいからっ」

そう言つてガジルを壁側にやると、迷宮に大きな駆動音が響き渡る

すると迷宮が横回転をし始めた

ラクサス「おおっと こりゃあ」

ジユビア「迷宮が回転している？」

回転が止まるとさつきまで壁だった場所が床になっていた

ガジル「面倒なことしやがるぜ 全く」

ミラ「ツナ 色々変わっちゃたけど大丈夫？」

綱吉「うん 問題ないよ ちゃんと分かるから 次はアレ」

そう言つて通路を指差した

その後も綱吉の超直感により、正解の道を見つけていきどんどん進んでいった

綱吉「これが最後みたいだね」

指差したの見える範囲の中では一番高く遠い向こう側にある通路だった

ミラ「それも直感？」

綱吉「ああ」

ガジル「あれが正解なのは分かったが、どうやってあそこまで行くんだよ」

そうこの通路に行くためには道が無く、飛んで行くしか方法はなかった

ミラ「私とツナなら飛べるけど・・・」

ラクサス「俺も飛べねえことはねえが どうすんだ？」

綱吉「大丈夫 ちゃんと階段はあるから」

ガジル「何処にもそんなもんねえだろうが」

綱吉「見えてないだけでちゃんとおるんだって　あまりにも透明度が高すぎるんだよ」

ラクサス「ソイツも直感か？」

綱吉「ああ　俺の直感は全て見抜く　その人が嘘をついているか　この道は安全か　ここに何か隠してあるかどうか　そういうのが分かるんだよ」

ジュビア「便利ですね　ツナさんの直感って」

ミラ「……」

ミラは綱吉の言葉を聞いて表情を曇らせていた

綱吉「それじゃ　行こっか　この階段細いから俺の後ろにちゃんとついて来てね　でないと落ちるから」

ガジル「さらつと怖いこと言ってるじゃねえよっ」

綱吉を先頭に一例で進んで行く一行

ジュビア「な、なんだか足元が見えないのに歩いてるって怖いですね」

ガジル「へっ　大したことねえよ　んなもん」

階段を上り切り通路を歩いていると、ゴールが見えて先ほど見たカボチャのマスコツトがいた

「おめでとうございませう♪ 2位ですので、予選通過です♪」

ガジル「くそっ 2位かよっ」

ジュビア「スタートするのがちよつと遅かったですからね」

綱吉「皆が最初から俺の直感を信じてれば1位だったのに・・・」

ラクサス「2位でも充分だろっ ぐちぐち言うな 行くぞ」

ラクサスは綱吉の頭をわしやわしやと乱暴に撫でて先に行った ラクサスに続いて歩こうとした時

綱吉「ラクサスめく ん？」

ラクサスのことを追いかけようとした時、ふと左腕が引つ張られる感じになったので振り返るとミラが綱吉の左腕の袖口付近を掴んでいた

綱吉「ミラ？」

ミラ「あつ えつとその」

ミラはあわてふためいてしまい ラクサスは2人を見ると

ラクサス「・・・先に行ってるぞ」

ラクサスはジュビアとガジルを連れて先に行った



綱吉「ああ 分かった ミラ どうしたんだ？」

ミラ「ツナ・・・あのね わ、私・・・」

ミラは不安そうな顔をしながら何かを言おうとしていた 綱吉はミラが何を言おうとしているのか分かり 優しく微笑みながら ただ一言

綱吉「大丈夫だよ ミラ」

ミラ「えっ」

綱吉は何も聞かずになかつた 彼女を悲しませてまで秘密を知るよりも 秘密を知らぬまま今の幸せを守りたいと思つたからだ

綱吉「さっ ラクサス達を待たせてるっ 早く行かないと」

綱吉はミラの手を取り本戦会場に向かつた

ミラは綱吉の優しさが伝わって胸を痛め、小さな声で謝つた

ミラ「・・・ツナ ごめんね」

こうして少し遅れて綱吉とミラもラクサス達と合流した

『妖精の尻尾』 Bチーム 無事本戦出場を決めたのだつた

## 第17話

『妖精の尻尾』 Bチーム控え室

綱吉「俺達が2位だったけど、1位はやっぱり『剣咬の虎』だったのかな？」  
ラクサス「そうなんじゃねえか フィオーレー1なんて言われてるんだからよ」  
ガジル「へっ 何処が最強か分からせてやるぜ」

皆が話しをしていると係員が来て、闘技場へ行く準備をするよう言われた

闘技場へ移動しようとした時

綱吉「あつ 皆ちよつと待って」

ミラ「どうしたの ツナ」

綱吉「せっかくだから 円陣組もうよ」

ジュビア「円陣ですか？」

綱吉「そう 気合い入れるのにさっ」

ミラ「いいわね やりましょ」

ジュビア「ジュビアもいいですよ」

ラクサス「仕方ねえな」

3人は綱吉の側へと行き、残りはガジルだけとなった

ガジル「・・・だあゝっ！ やるよっ やりやあいいんだろっ！」

そしてガジルも来て、円陣を組んだ

綱吉「フェアリーテイルツ ファイツ」

皆「「「「オーツ!!」」」」

綱吉「よし 気合が入ったっ！」

ガジル「全く こいつは」

ミラ「まあいいじゃない たまにはこういうのも」

ジュビア「そうですね ジュビアもやって良かったですっ」

ラクサス「さて 行くぞ」

綱吉達は本戦が行われる闘技場へ向かった

ー闘技場ー

観客達は選手達の入場を今か今かと待っていた

実況席には実況のチャパティ・ローラと解説の元評議員のヤジマにゲストのジエ

ニー・がいた チャパティ達の紹介が終わると

チャパティ「さあ 選手達の入場です！」

「まずは予選8位 過去の栄光を取り戻せるか 名前に反した荒くれ集団 『妖精の尻尾』!!?」

ナツ達が入場すると観客達からブーイングの嵐を受けていた ブーイングを受けルーシイが落ち込んでいたが、エルザや観客席にいた『妖精の尻尾』の仲間達を見て気合を入れて持ち直していた

「さあどんどん行きましょう 7位 地獄の獵犬軍団 『四つ首の獵犬』!!?」

「[[[[ワイルドゥ フォーツ!!?]]]]」

メンバーは叫びながら入場してきた

「6位 女性だけのギルド 大海原の舞姫 『人魚の踵』!!?」

メンバーが入場して来ると男性観客から歓声上がり、マカオとワカバは目がハートになっていた

「5位 漆黒に煌めく蒼き翅 『青い天馬』!!?」

メンバーが入場してポーズを決めると今度は女性観客から歓声が上がっていたが、何

故か一夜だけがキモがられていた

「4位 愛と戦いの女神 聖なる破壊者 『蛇姫の鱗』!!?」

聖十のジユラが参加していることに観客達は驚き、盛り上がっていた

「続いて第3位 おおっとこれは意外・・・初出場のギルドが3位に入ってきた！ 真夜中の遊撃隊 『大鴉の尻尾』!!?」

闇ギルドであったが最近になって正規ギルドになったことをチャパティに伝えられた

「さあ 予選2位のチームの入場です！ おおっとこれは意外！ 落ちた羽のはばたく鍵となるのか!?? まさか！ まさかの・・・『妖精の尻尾』Bチームだあ!!?」

ナツ「何ーーーーっ!??」

エルフマン「姉ちゃん!??」

ナツ「ガジル!!?」

グレイ「ジユビア!!?」

ルーシイ「ラクサスとか反則でしょーっ！」

エルザ「ツナまでいるとは・・・」

同じギルドから二チームが出てきたことによつて騒がれるが

ナツ「冗談じゃねえっ!!？」

例え同じギルドだろうが勝負は全力！ 手加減なし

だ!!？ 別チームとして出たからには負けねーぞ!!？ コノヤロー!!？」

ガジル「望むところだよ 予選8位のチームさん」

ナツとガジルは闘う気満々だった

綱吉「やあ エルザ」

エルザ「ツナか 久しぶりだな」

綱吉「ああ 久しぶり 4人とも随分強くなったね」

エルザ「分かるのか？」

綱吉「もちろん 3ヶ月前に比べると魔力が格段に上がってるから だけどなんでエルフマンが？ ウエンデイはどうしたんだ？」

エルザ「実は・・・」

そこでエルザからウエンデイに何があったか説明された

綱吉「『大鴉の尻尾』に？」

エルザ「ああ 奴ら自身がそう言つてたから間違いない 目的は不明だがな」

綱吉「・・・そうか」

綱吉は『大鴉の尻尾』の連中をただ静かに睨んでいた

ミラ「・・・ツナ？」

綱吉「ん？」

綱吉がミラの方を向くとミラは心配そうに綱吉のことを見ていた

綱吉「いけないいけないっ ミラを心配させるなんて）大丈夫 何もしないよ や

るのならちゃんと試合で決着をつけるさ」

ミラ「約束よっ」

綱吉「ああ約束する 乱闘騒ぎなんてしないから ところでき ミラ」

ミラ「どうしたの？」

綱吉「あの金髪で色白の女の子誰？ あんな娘いたっけ？」

綱吉は『妖精の尻尾』の応援席を指差しながらミラに聞いた

ミラ「ああ あの人はね 『妖精の尻尾』の初代マスターよ」

綱吉「ん？ なんだって？」

ミラ「だから 初代マスターだって」

綱吉「いやいやいや 明らかにおかしいでしょ」

ミラ「実はね」

チャパティ「さあ いよいよ予選突破チームも残すところあと一つ！」

ミラが説明しようとした時、最後のチームが入場しようとしてきた

ミラ「あつ 最後のギルドが来るみたいね 説明は後でしてあげるから」

網吉「ああ いいけど（タイミング悪すぎだろつ めっちゃ気になるんだけど）」

網吉は『妖精の尻尾』の応援席を見ながら首を傾げていた

網吉（幽霊・・・？ いや、あそこまではつきり見える幽霊なんてなあ うーむ）

網吉は直感で出た答えに疑問を持っていたが、気になる気持ちは抑え

網吉（まあ 後でミラが教えてくれるって言うし、今は『剣咬の虎』の方を優先するか）

「予選第1位 最強!!? 天下無敵!!? これぞ絶対王者!!? 『剣咬の虎』だあ!!」

『剣咬の虎』が入場すると闘技場は大歓声に包まれる

網吉（あれが・・・確かに強いな 一筋縄ではいかなそうだ だけど真に警戒すべき

はやはりあの2人か）

網吉は『蛇姫の鱗』のジュラと『人魚の踵』のカグラを見た

網吉（あの2人は別格だな あの2人と闘うことになれば 本気でいかないと勝ちを



取りにいけない（それ程の強者の部類に入るだろう）

そんなことを考えているとチャパティより大魔闘演舞のプログラムが発表された

まず	D	D	D	D	D
	A	A	A	A	A
	Y	Y	Y	Y	Y
1日に競技とバトル	5	4	3	2	1
二つをやるようだ			???	???	隠密
		???	+	+	+
		+	t	b	b
		t	a	a	a
		a	g	t	t
		b	a	t	t
		t	t	t	t
		t	t	t	t

5	4	3	2	1
t	t	r	n	s
h	h	d	d	t
↓	↓	↓	↓	↓
3	4	6	8	10
p	p	p	p	p
t	t	t	t	t

6 t h ↓ 2 p t  
 7 t h ↓ 1 p t  
 8 t h ↓ 0 p t

競技パートには1位から8位まで順位がつき、その順位によつて各チームにポイントが振り分けられる

W i n ↓ 1 0 p t

L o s e ↓ 0 p t

D r a w ↓ 5 p t

バトルパートは各チーム対戦して、勝利チームに10Pt、敗北チームなら0Pt、引き分けの場合は両チームに5Ptずつ振り分けられる 更にバトルパートには30分という制限時間が設けられている

そして競技パートにはチーム内で好きなように選出していいが、バトルパートは主催者側に勝手にバトルカードを組まされるらしい

チャパティ「ではこれより大魔闘演舞オープニングゲーム「隠密」を開始します 各チーム1人選出して下さい」

『四つ首の獵犬』

イエーガー「まずはオラに任せるだーっ！」

『人魚の踵』

ベス「まずは様子見、アチキにやらせて」

カグラ「許可しよう」

『大鴉の尻尾』

アレクセイ「ナルプディング お前が行け」

ナルプディング「了解でサー!!？」

『青い天馬』

イヴ「僕が行くよ」

『劍咬の虎』

ルーファス「私が出よう 今日は小鳥たちの歌声が心地よい」

『蛇姫の鱗』

リオン「始めから飛ばしていく 俺が出る」

『妖精の尻尾』 Aチーム

グレイ「俺が出よう この大会どんなものか見させてもらうぜ」

次々と選手が決まっていく中『妖精の尻尾』 Bチームは

『妖精の尻尾』 Bチーム

綱吉「(隠密……ただ隠れる見つけるって言う感じじゃなさそうだな) よしっ 俺が行く！」

ラクサス「まあ ツナなら大丈夫だろ」

ミラ「ツナにはあの直感があるものね」

ガジル「それに背も低いから隠れやすいしな ギヒッ」

綱吉「おいっ 身長は関係ないだろっ」

ガジルに押揃われつつもフィールド中央に向かおうとすると

ジュビア「待って下さいっ ツナさん！ この競技 ジュビアに出させてもらえませんか！」

綱吉「えっ？　ちなみに理由を聞いても？」

ジュビア「あの、グレイ様が出るのならジュビアも出たくて・・・」

綱吉（え〜）

ジュビア「駄目でしょうか・・・」

綱吉「う〜ん（確実に勝ちに行くんだったら俺なんだけど）ジュビアじゃ厳しいと思うんだけど」

ジュビア「それでもですっ　どうかお願いします！」

綱吉「・・・分かった　この競技はジュビアに譲るよ（理由はどうあれ覚悟は本物みたいだし）」

ジュビア「っ！　ありがとうございます！」

綱吉「ただしっ　グレイがいるからって浮かれないこと」

ジュビア「分かりました！　ジュビア頑張ります！」

ジュビアはフィールド中央へ走っていった

妖精の尻尾　Bチーム観覧席

ラクサス「よかったのか　お前が行かなくて？　競技は“隠密”直感のきくお前が行

けば独壇場だったろうに」

綱吉「まあ そうなただけだし あんな真剣な目で頼まれたらね」

ラクサス「お前も甘いな だがお前の直感じやジユビアだと厳しいんだろ？」

綱吉「そうだね でも確実にそうなるとは限らない 厳しい状況、逆境を打ち破る可能性だつてあり得るし」

ラクサス「なるほどな ジユビアの対応力次第つてことか」

綱吉「冷静に対処できればいいんだけど、グレイがいるからなあ 空回りしなきゃいけないけど 頑張れよ ジユビア（それに『剣咬の虎』はもちろんだが、注意すべきは

『大鴉の尻尾』だな 気をつけろよ グレイ ジユビア）」

綱吉は2人のことを案じながら応援していた

大魔闘演舞 1日目 競技パート“隠密”が今開始されようとしていた

## 第18話

“隠密”に参加する選手が闘技場中央に集まると闘技場に街が出現し、選手たちも街の中にバラバラに配置された

ミラ「街を創るなんて」

綱吉「(・・・) 幻ではない 本物か) 魔法ってこんなことも出来るんだな」

“隠密”のルールは街の中で互いを見つけ、一撃を与えるというもの

与えた側には 1 p t + となり 与えられた側には 1 p t - となる またコピーに攻撃しても 1 p t - となる 制限時間30分でより多くの得点を稼いだ選手が1位となる

チャパテイ「さあ 消えよ!!? 静寂の中に 闇夜に潜む黒猫が如く!!? “隠密”

開始!!」

街の中は選手達のコピーで溢れていた

ジュビア「グ、グレイ様がいっぱい・・・」

ジュビアはグレイのコピーに抱きつくくと電気が走り、別の場所に飛ばされ 1 p t -

となつてしまった

ガジル「あの馬鹿」

ミラ「これはちよつとジユビアには不利かもね」

ラクサス「やつぱ お前が出るべきだったんじやねえか？」

綱吉「まさか こういう競技になるなんて・・・」

その頃グレイは『大鴉の尻尾』のナルプディングと相對していた

グレイ「てめえの方からやつて来るとはな 探す手間が省けたぜ  
アイスメイク

氷鎚!!？」

グレイはナルプディングを攻撃したが

ナルプディング「残念 それはコピーでサア」

グレイはコピーを攻撃したことによつて l p t となつてしまった

綱吉「あつ グレイもー l になつちやつた」

ラクサス「コピーの後ろに隠れて近づいてくるとはな」

綱吉「でも卑怯な手じゃないし、理になつてるよ」



その後もグレイはナルプディングに執拗に狙われた

綱吉「雪？」

ふと街に雪が降ってきていた

ガジル『『青い天馬』のイヴって野郎の魔法だな』

ミラ「寒さでコピーと本物を見分けるのね」

イヴは雪の寒さを利用して連続でポイントをゲットした

綱吉「おお　そういうやり方もあるのか」

ミラ「ねえツナ　ツナには『超直感』があるけど、他にはどんなやり方があるか分

かる？」

綱吉『『超直感』無しでなら・・・敢えて見つけてもらえばいいんじゃない？』

ガジル「何言ってるんだ　お前」

綱吉「だから　見つけるのが難しいなら　建物の屋上なり高い所に行つて態と見つ

かつて、敵が攻撃して来るから返し技をやるんだよ」

ラクサス「カウンター狙いつてことか」

綱吉「そういうこと」

ミラ「高い所・・・それってあの人みたいに？」

綱吉・ラクサス・ガジル「「ん?」「」」

皆に説明しているとミラが一つの画面を指差した。画面には『剣咬の虎』のルーファスが映っており、綱吉が言ったようにルーファスは塔の上に立っていた。

ルーファス「この競技は地味すぎる。私は覚えているのだ。1人1人の鼓動、足音、魔力の質。覚えていて。覚えていてなのだ。記憶造形。星降ル夜二!!?」

ルーファスは七つの魔力弾を発射してナルプディング以外の全員に被弾させた。攻撃を躲したナルプディングはルーファスに反撃したがルーファスの身体をすり抜けてしまった。

ナルプディング「しまった。コピーか!?!?」

ルーファス「安心したまえ。それは私がそこにいた記憶。私にデコイは必要無い」

そしてナルプディングにも魔力弾をぶつけ、一気に首位に立った。ルーファスが首位に立つと会場は大歓声に包まれた。

その後もグレイとジュビアはナルプディングに狙われ続け思うように戦うことが出来ず時間だけが過ぎていった。そして

チャパティ「ここで。終了!!」

第一競技は終了した

競技の結果はこのようになった

- |   |        |       |
|---|--------|-------|
| 1 | 剣咬の虎   | 10 pt |
| 2 | 大鴉の尻尾  | 8 pt  |
| 3 | 蛇姫の鱗   | 6 pt  |
| 4 | 青い天馬   | 4 pt  |
| 5 | 人魚の鱗   | 3 pt  |
| 6 | 四つ首の猟犬 | 2 pt  |
| 7 | 妖精の尻尾B | 1 pt  |
| 8 | 妖精の尻尾A | 0 pt  |

『妖精の尻尾』の順位に観客からは罵声やら笑い声やらが聞こえてきた  
ガジル「ちっ 五月蠅え奴等だなあ おいつ 黙らせるか」  
ラクサス「ほっとけ 言わせとけば良い」

ミラ「グレイにジュビア 大丈夫かしら・・・」

綱吉「あの2人なら大丈夫 このくらいで折れるほど弱くないよ（『剣咬の虎』のルー  
ファス ただ勝つんじゃない観客を魅了して勝つとは 正に王者らしい戦い方だな）」

4人が話しているとジユビアが観覧席に戻ってきた、その目には涙を浮かべ酷く落ち込んでいた

ジユビア「……す、すみません あれだけ自身たつぷりで行って、こんな結果になってしまつて……うつ づみませんでしたあ」

綱吉「大丈夫だよ ジユビア まだ負けてない」

ジユビア「……えっ？」

綱吉「まだバトルパートがあるだろ そつちで勝てばいいんだよ そうすればジユビアは負けてない 俺達はチームなんだ そうだろうジユビア？」

ジユビア「……ツナさん はいっ」

ガジル「いや ポイント制になつてんだからどのみち上位には届かグヘッ!?」

ラクサス「空気読め馬鹿っ」

ミラ「空気読みなさいよっ」

ポイント制だということをつつ込もうとしたが、ラクサスとミラによつて強制的に黙らされた

そうこうしているうちにバトルパートへとなり 第一試合の『妖精の尻尾』ルーシイと『大鴉の尻尾』のフレアの試合が始まつた

綱吉「よりもよつて『大鴉の尻尾』か……」

ミラ「ルーシィ〜 頑張つて〜」

綱吉（……何かやな予感がする）

試合は両者の力は拮抗して中盤でルーシィが一方的にやられ始めたが、突如反撃を再開した

ミラ「やられ始めたと思つたら突然攻撃を どうしたのかしら？ルーシィ」

ラクサス「何かやりやがったな」

綱吉（……毒 薬？ いや違う ……ナツが応援席に行つてから反撃を再開したのを見るに仲間の誰かを人質にとつてたのか……下劣な真似を）

ルーシィはジェミニを召喚し、自分に変身させた しかしジェミニの変身したルーシィの姿はバスタオル姿だった

綱吉「んなつ!!?」

ミラ「ツナは見ちやダメっ！」

ビシッ

綱吉「ぎゃあああ!!?」

ミラは綱吉に目潰しをした

ラクサス・ガジル（こ、怖ええ）

ジュビア「ミ、ミラさん 流石にやり過ぎでは」

ミラ「大丈夫 ちゃんと加減はしたわ」

ラクサス・ガジル・ジュビア（いや、そういう問題じゃ）

ルーシイはジェミニと共に大技を繰り出そうとしていたが

ミラ「何でっ!?」

ジュビア「一体何が・・・」

そこに漸く見えるようになってきた綱吉が来て

綱吉「ああ痛かった ん？ どうしたの？」

ミラ「それがルーシイの魔法が突然消えちゃったの」

綱吉はルーシイとフレアを見ると

綱吉「（魔力を打ち消したのか あの人じゃない もしそうならもつと早く使ってた）  
外野から援護をもらったのか・・・」

ラクサス「クソが 卑怯な手使いやがって」

綱吉「正々堂々戦ってやる必要は無いってことか・・・」

ルーシイの魔法が不発に終わり敗北したことで、会場からは再び笑い声が聞こえる

ミラ「ルーシィ……」

綱吉「大丈夫 あつちにはナツ達がいる きつとこの悔しさを次の戦いで発揮してくれるさ(『大鴉の尻尾』 随分とやってくれたな 俺とぶつかったらただじゃおかない 覚悟しておけ……)」

続いて第二試合 『青い天馬』 レンと 『人魚の鱗』 アラーニヤの試合が始まった

レンは『蛇姫の鱗』のシェリーと婚約していることがバラされ、動揺していたが

レン「お前の見てる前で格好悪い姿は見せらんねえな エアリアルフォーゼ!!？」  
アラーニヤ「うあああああ」

ツンデレを見せながら風魔法でレンが勝利を収めた

第三試合 『剣咬の虎』のオルガと『四つ首の猟犬』のウオークライの戦いはウオークライの涙魔法を使う前にオルガが黒い雷で一撃倒してしまった

綱吉「黒い雷か 何かかっこいいな」

ラクサス「何かかっこいいって？」

綱吉「だから 黒い雷が……」

綱吉が後ろを向くとラクサスがこちらを睨んでいた

ラクサス「敵を誉めてんじやねえ」

ラクサスはそう言つて綱吉にアイアンクローをした

綱吉「あだだだだっ!!? ギブツギブツ!」

ミラ「ツナっ　ちよつとラクサスっ!」

ミラの介入でラクサスは手を離れた

ラクサス「ふんっ」

ミラ「ツナ　大丈夫?」

綱吉「ううゝ　くそお　ラクサスめ」

チャパテイ「さあ　1日目最後の試合!　まずは『蛇姫の鱗』　ジユラ・ネエキス!」  
ジユラの名が呼ばれると会場から大歓声が出た

綱吉(凄いな　名が呼ばれただけでこの歓声とは)

ラクサス「いきなりジユラが相手とはな」

ミラ「こつちから出るのは誰かしら?」

綱吉「・・・俺だな」

ミラ「えっ」

チャパテイ「続いて『妖精の尻尾』　B　ツナヨシ・サワダ!」



綱吉の名が上がったが会場からは歓声は上がらず、同情や笑いの声が聞こえてきた  
ミラ「ツナを笑うなんて・・・」

ラクサス「ツナはマグノリアじゃ有名だが、それ以外の所じやまだあまり知れ渡つて  
ねえからな」

ジュビア「それに相手が『聖十』ならなおさらですな」

綱吉「（ふーん）会場にいる観客は俺に何も期待してない訳ね・・・なるほど）さてと  
ちよつと会場の雰囲気変えて来ようかつ」

綱吉は左手の拳と右手の手の平を打ち合わせ気合いを入れる

ジュビア「ツナさん 頑張つて下さい！」

ラクサス「存分に暴れて来いっ」

ガジル「会場いる連中をビビらせて来い」

ミラ「ツナ・・・頑張つてね！」

綱吉「ああ！ 『聖十』のジュラ！ 相手のとつて不足なしっ!!？」

綱吉は4人からの声援を受けて闘技場中央へ向かった

## 第19話

『妖精の尻尾』A 観覧席

ナツ「おおつ 次はツナが出るのかっ！」

エルザ「しかし相手はあのジユラだ いくらツナでも厳しい戦いになるだろう」

エルフマン「ツナは修行でめちやくちや強くなっただ！ 相手が『聖十』でも負けやしねえよ！」

ナツ「そうだぞっ エルザ！ ツナは強えんだ！ ツナく頑張れよっ！」

エルフマン「ツナっ 漢を見せてやれっ!!？」

エルザ「この3ヶ月でどれほど腕を上げたか見せてもらおうぞ ツナ」

『剣咬の虎』観覧席

オルガ「1日目からジユラが出てくるとはな」

ステイング「あのチビも可哀想に 相手があのジユラじやなあ」

ルーファス「しかしギルド復興に大きく貢献したルーキーと聖十の戦い 実に興味深い 記憶しておこう」

ローグ「そのルーキーがどれだけ凄かろうが、ジユラには勝てまい。聖十の壁はそれだけ高いんだ。易々と越えられるものではない」

『青い天馬』観覧席

一夜「・・・君たち、この試合をよく見ておくといい」

イヴ・レン・ヒビキ「二はいっ、分かりました！」

ヒビキ「やはり、ジユラが出るからですか？」

一夜「いや、注目すべきなのはジユラさんではない、彼の方だ」

イヴ「彼ってツナヨシ・サワダのことですか？ そんなに強そうには見えませんでしただけだ」

一夜「いや彼からは只者ではない、香り」がした。この試合どうなるかわからんぞ」

ヒビキ「一夜さんがそこまで言うなんて」

レン「クソっ、そう簡単に負けんじゃねーぞっ」

一夜「そう簡単にいくまいよ、何故なら」

『人魚の鱗』観覧席

カグラ「あの少年とジユラが戦うか、闘技場で見かけた時あの少年からとてつもな

い「覇氣」を感じた 見た目と裏腹に強い覇氣 本物かそれとも私の勘違いか この一戦ではつきりする)・・・ミリアーナ この試合よく見ておけ」

ミリアーナ「どうして カグラちゃん？」

カグラ「強者同士の戦いなるかもしれないからだ」

ミリアーナ「強者？ ジュラさんなら分かるけど あのツナヨシって子も？ 全然そ

うには見えないけど」

カグラ「人を見た目で判断するものではない」

『蛇姫の鱗』観覧席

シエリア「あつ あの人ってリオンに造形魔法教わりに来た人だよね？」

リオン「ああ 彼奴は覚え早くて教えがいがあった だがツナには悪いが勝つのは

ジュラさんだ」

ジュラ「・・・リオン この試合そう簡単にいかんかもしれんぞ」

リオン・シエリア「「えっ?」」

ジュラ(あの者 見た目の割に相当くぐっておる 心していかねばならんな)

リオン「いや たしかに彼奴は強い奴でしたけど、ジュラさんが苦戦するほどで

は・・・」

ジユラ「見た目で判断するようではまだまだ修行が足らんなあ」

一夜・カグラ・ジユラ「二〔彼（あの少年・あの者）は強いぞ二〕  
実力者達は綱吉の強さに気づいていた

そして当然この男も会場に来ていた

白蘭「初日から綱吉君の闘いが見れるなんてね　しかも相手の人も強いみたいだし  
綱吉君　修行の成果とやらを見せてもらおうよ」

『妖精の尻尾』 応援席

メイビス「6代目　彼は島で見かけませんでした、新しく入った方ですか？」

マカロフ「ええ　数ヶ月前に入りました、まだ若いですが　魔法に加え武術を身につけており我がギルドの中でも屈指の実力者です　今回のメンバーに選ばれました」

メイビス「そうですか　それは頼もしい方ですね（ですが何故でしょう　『大鴉の尻尾』とはまた違った黒いモノを彼から感じます・・・）」

レビイ「どうしよう まさか『聖十』が相手になるなんて」  
リサーナ「大丈夫っ ツナはすつごく強いんだからっ」

カナ「そうだよ ツナならきつとジユラに勝てるっ さあつ ツナを応援するよ！」  
皆「一二ツナっ！ 頑張れっ!!」

綱吉が闘技場中央に着くと仲間たちの声援が聞こえてきて、綱吉は笑顔になった

綱吉（皆・・・ありがとう）

すると向こうからジユラが歩いてきて中央で歩みを止めた 両者は試合開始の合図を待った

綱吉（改めて見ると凄い圧だ これ程の人を相手を30分で・・・やれるか？ いやっやるんだ！）

ジユラ（間近で見ると恐ろしく強い闘気を放っておる それだけでもこの者が強いと分かる）個人的には『妖精の尻尾』に頑張つて欲しいが、ウチのオババがうるさくてのお・・・悪いが加減はせぬぞ」

綱吉「当たり前です 貴方に負けられない理由があるように 俺にも負けられない理由があります 加減なんてせず全力できてください！ 俺も全力で貴方に勝ちにいかせてもらいます!!」

ジユラ「フツ そうか ならば参ろうか」

綱吉「はいっ」

綱吉は額に炎を灯し、手袋をグローブに変えた 両者は顔を引き締め、いつでも仕掛けられるよう準備する

チャパテイ「本日最後の試合 『蛇姫の鱗』ジユラ・ネエキスVS 『妖精の尻尾』Bツナヨシ・サワダ 試合開始っ!!」

先に動いたのはジユラだった ジユラは地面から巨大な岩の腕を出して綱吉にぶつけたが、綱吉は難なく回避する

綱吉（岩・・・足場の地面を操られると厄介だな）

ジユラは追撃するため岩の柱を複数本出して綱吉に向けるも、綱吉は『超直感』で次々と躲していく

綱吉「（この岩の柱、曲げたりも出来るのか）そろそろこっちからもやるか フレアメイク」

『妖精の尻尾』A観覧席

エルザ「造形魔法っ!?!?」

ナツ「彼奴 いつの間にな」

綱吉「群狼っ!!？」

綱吉は八頭の炎の狼を出した

『剣咬の虎』 観覧席

ルーファス「ほう 彼も造形魔法を使うのか しかもあれほどの美しい炎 記憶にな  
いね」

『蛇姫の鱗』 観覧席

リオン「彼奴め もうあそこまで造形スキルを上げているとは・・・」

綱吉は八頭の炎狼達をジュラに向かってバラバラに突っ込ませた

ジュラ「ほう 岩鉄尖!!？」

ジュラは地面から尖った岩の柱を隆起させ炎狼達を貫き消滅させた

綱吉「なら次は・・・」

綱吉は右手に炎を集中して振りかぶり



綱吉「フレア・カノン!!？」

一気に放出した

ジユラ「むっ 岩鉄壁！」

ジユラは自身の前に岩の壁を5枚隆起させて炎を防いだ。炎は一枚目、2枚目と破壊していくが最後の5枚目を破壊して炎は消えてしまった。煙が晴れるとジユラの衣服が少し燃えた痕があった。

綱吉「結構強めに撃つたのにはほとんどダメージなしか・・・やはりあの岩の壁がある限り炎でのダメージは期待出来ないか。しかしまだ初日。俺の手札全てを見せる訳にもいかない・・・よしっ フレア・メイク 群狼！+鷹!!？」

綱吉は再び造形魔法で炎の狼と鷹を出し、ジユラに突っ込ませた。

ジユラ「(ここまで複数のを自由自在に操れるとは)しかし 先程と同じでは意味はないぞ！ 岩鉄尖！」

ジユラは岩鉄尖で狼達を攻撃していく

綱吉「同じ？ さてそれはどうでしょう」

狼達は次々と消滅させられていくが、鷹は素早く、小回りが利くため中々当たらず、ついに鷹はジユラに間近まで接近した。ジユラは左腕に魔力を込め打ち払おうとしたが、触れた瞬間鷹は光って

ジュラ「っ!?？」

爆発をした

綱吉「狼が消滅したからと油断しましたね 狼は囿で本命は鷹です そして鷹には魔力を多めに込めて作りましたから触れた瞬間爆発を引き起こしますよ」  
煙が晴れるとジュラの左上半身服は燃えて左腕も火傷を負っていた

チャパテイ「あゝつと！ ルーキー ツナヨシが先にジュラにダメージを与えたあ！  
こんな展開誰が予想出来たでしょう!?？」

『蛇姫の鱗』観覧席

シエリア「ジュラさんっ」

リオン「大丈夫だ シエリア あのくらいでジュラさんは負けん」

『妖精の尻尾』B観覧席

ラクサス「まずは最初にダメージを与えたな」

ガジル「観客の連中も驚いてるぜ ギヒッ」

ジュビア「でも まさか爆発するなんて驚きました」

ミラ「ツナは一つの闘い方に拘らないで色々な戦法を使うから」

“聖十”のジユラが傷を負ったことに観客はどよめいていた

ジユラ「いやはや 爆発するとはお主には驚かされたわ」

綱吉「まだまだこれからですよ フレアメイク 群狼！＋獅子王!!」

綱吉は造形魔法で群狼と巨大な獅子を出した 群狼の数も四十頭近くいた

ジユラ「なんと巨大な それにこの数・・・（もしあれも爆発するのであれば）」

綱吉は群狼と獅子王をジユラに突っ込ませた

ジユラ「ぬうう・・・（近づけさせる訳には行かん 全てを破壊するしかない） 岩鉄尖!!」

地面から突き出てくる岩鉄尖に次々と狼達は消されたり、爆発させられたりした。そして獅子王もジユラまであと少しというところで腹を複数貫かれて消滅した

ジユラ（あの獅子は見せかけだったか むっ ツナヨシがおらんっ どこにつっ ?）

ジユラが気配に気づいて左後方を向くと綱吉が左腕を振りかぶって殴る態勢をとっていた

綱吉は群狼達を突撃させると同時に自身もジユラに向かってダツシユをしていたしかもただ直進するのではなく、右に大きく弧を描くように走った。ジユラの意識は群狼達に向いており、更に爆炎によって自身は隠される。よって綱吉はジユラに接近し、奇襲が成功した。かに見えた

綱吉「もらったっ！」

綱吉はジユラの左脇腹に向かって拳を叩き込もうとしたが

ガシツ

綱吉「ツ!!?」

綱吉の拳はジユラに左手首を掴まれ阻止されていた

ジユラ「ふむ 全て目眩しで本命はお主自身か 中々良い だが甘いわっ!!」

ジユラはそのまま背負い投げの様に綱吉を背中から地面に叩き付けた。しかし

綱吉「あがつ!!?」

ジユラ「ぐっ・・・」

ジユラがよろめき左こめかみ付近から出血をしていた

チャパティ「おおっと どうしたことか!!? 攻撃した側のジユラがよろめいたっ!!

? これは一体?」

『人魚の踵』観覧席

カグラ（ほう 器用な奴だ あの一瞬で反撃するとは）

『妖精の尻尾』A観覧席

エルザ（ただではやられない 流石ツナだな）

『妖精の尻尾』B観覧席

ラクサス「ツナの作戦も見事だが、それを防いだジユラも凄えな」

ジユビア「ミラさん・・・」

ジユビアはミラのことを心配そうに見るが

ミラ「大丈夫よ ジユビア 大丈夫 ツナは勝つわ」

綱吉はジユラがよろめいてる隙に起き上がり、距離をとる

ジユラ「まさかあの態勢から蹴りを打ち込んでくるとは 器用な男よ」

綱吉「俺もあの拳を止められるとは思いませんでした」

綱吉は地面に叩き付けられる直前にジユラの側頭部に蹴りを放ったのだ

僅かな沈黙の後 両者は再び動いた

綱吉は後方へと移動して

綱吉「フレアメイク 床弩!!？」

綱吉は大型のボウガンを作り出し 炎の矢を放った

ジユラ「ツ！（速いつ！）巖山!!」

ジユラは岩の仏像を作り出し矢を防いだ 矢は外装を破壊出来たが中にいるジユラは無傷だった

綱吉「防がれた・・・」だが まだまだ」

綱吉は第二射を撃とうとした

ジユラ「（あれほどの威力を連発出来るのか・・・）悪いがさせんっ!!？」  
すると綱吉の足場がせり上がり、バランスを崩してしまう

綱吉「うおっ じ、地面がっ!!？」

ジユラ「むんっ!!」

更にジユラは岩の腕を複数出して、前後左上から拳を叩き込もうとした  
綱吉（・・・回避は・・・無理だな）

五つの拳が綱吉に襲いかかった

五つの腕が綱吉を捉えて、しばしの沈黙の後綱吉が居るであろう中心部が光り爆発が起きた

そこには両腕を広げ爆炎を起こした綱吉がいた

綱吉「ハア・・・ハア・・・」

しかしダメージが全く無い訳ではなかった

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ラクサス「まずいな ツナに疲労が見え始めた このままやり合えばツナは」

ミラ「大丈夫よっ ツナは負けないわ ツナは・・・ツナは強いんだから・・・」

ラクサス「ミラ・・・」

ジュビア「ミラさん・・・」

綱吉「ハア・・・ハア・・・(まずいな 結構魔力使っちゃった 残り時間も少なくなってきたのにつ)

ジュラ「悪いが休ませるつもりはないぞ」

ジュラはサッカーボールサイズの岩を次々と綱吉に向けて飛ばした

綱吉「くっ・・・」

綱吉は炎を放出して焼き尽くそうとするが一方方向を燃やしても別の方向から岩が飛んでくる為きりがなかった

綱吉「くそっ きりがないっ！」

他方向から次々とくる岩に綱吉は回避に専念するしかなかった。そして岩の一つが綱吉の足に当たりバランスを崩してしまふ

綱吉「あつ!!?」

すると岩は綱吉の身体に次々とくっ付き初めていく

綱吉「な、何だこの岩!!? 拘束する技か!!? くっこのっ」

岩を外そうとしても中々取れず、どんどんくっついていく

綱吉「くっ!! らあっ!!」

綱吉は全身から炎を放出して岩を焼き払った。だが

綱吉「がっ・・・」

ジュラ「隙あり」

炎を出した直後の隙をジュラは見逃さなかった。綱吉は首に岩を打たれたことで意識を失いかけていた

綱吉（ま、まずい・・・い、意識が）

棒立ち状態となった綱吉に容赦なく岩が襲いかかり、綱吉は閉じ込められてしまった。そしてジュラは両手を合わせ合掌し

ジュラ「霸王岩砕!!」



綱吉「ぐああああ」

岩は破碎され閉じ込められていた綱吉に大きな深傷を負わせた

綱吉は全身ボロボロになり、前のめりに倒れそうになる

綱吉（ここまで、か・・・）

目を閉じて意識を失いかけそうなる

『ツナ・・・頑張つてね』

綱吉「ッ！」

ダアンツ!!

綱吉は失いかけていた意識を取り戻し、左脚で強く踏ん張り倒れるのを防いだ

綱吉「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

『妖精の尻尾』B 観覧席

ラクサス「何とか持ち堪えたか（だがもう限界はず）」

ラクサスはミラの方見ると、ミラは涙を浮かべ口元を両手で押さえていた

ミラ（ツナ・・・ツナア・・・頑張つてえ・・・）

助けたい 止めたい やめさせたい もう戦わないで もう傷つかないで 帰って

来て そんな感情がミラの心で渦巻いていた しかしそんなことは出来ない ミラは

必死に自身のこと抑え、ツナの勝利を信じて応援していた

全身ボロボロになって尚闘い続ける綱吉の姿に最早誰も罵声や笑いを飛ばす者はいなかった。そして ついに

「が、頑張れ〜！」 「頑張れっ ツナヨシ〜！」 「勝てるっ 勝てるぞ〜！」

観客達から声援が開始めただ

『妖精の尻尾』 応援席

マカロフ「こ、これは・・・」

レヴィ「皆がツナのことを応援してる」

リサーナ「ツナの闘いが観客の人達の心に届いたんだよ！」

カナ「さあ 観客に負けてらんないよっ 私たちも応援するよ!!」

皆「「ツナーツ！ 頑張れーツ!!」」

綱吉は意識が朦朧としながらもジュラののを見ていた。そして一瞬時計を見る

綱吉（・・・残りは、五分か・・・これで決められなきや終わりだな）

綱吉はボクシングのファイティング・ポーズの構えをとる

綱吉「（勝っ 勝っ 勝っんだ 俺は勝っ〜） 勝っんだあ！」

快く見送ってくれたマグノリアの人達の為 仲間達のため そして最愛の恋人の為  
綱吉は駆け出した

ジユラ「最後の勝負に来たか）はっ!!」

ジユラは岩を綱吉に向けて岩を飛ばしていく しかし綱吉は躲すか、両腕でガードしながら前進して行く

ジユラ（今までより明らかに速くなっておる）

そしてジユラまであと僅かと迫った

ジユラ「岩錐!!？」

綱吉は前方の地面から突き出てくる岩の円柱をスピードを緩めず左回転をして躲す

ジユラ「何っ!!？」

そして回転を停止させると同時に一気に地面を蹴ってジユラの懐に入り、左のボディ  
ブローを食らわせる

ジユラ「ぐっ・・・」

ジユラが苦悶の表情を見せた

綱吉はすかさず左脇腹にミドルキックを打ち、バランスを崩しかけたところにジユラ  
の顔面に右ストレートを叩き込んだ

『妖精の尻尾』B 観覧席

ラクサス「止めるなっ 攻め続ける！」

ガジル「やっちまえっ！」

ジュビア「ツナさんっ ファイトです！」

ミラ「ツナ・・・頑張れーっ!!」

綱吉「ハア・・・ハア・・・あああああっ！」

綱吉は怒涛のラツシユをジュラの顔や胸に叩き込んだ

ジュラ「ぬうう・・・ はあっ!!」

ジュラは殴られながら隙を見つけ、右の掌底で綱吉の顎を打ち上げる

綱吉「がっ・・・だあっ！」

綱吉は打ち上げられながら右脚でジュラの側頭部を蹴る。しかしジュラに右脚を掴

まれてしまう。そして振り上げ

ジュラ「ぜええええい!!」

一気に振り下ろした

綱吉「うあああああ!!？」

勢いよく地面に叩き付けられた綱吉はそのまま地面の中に消えてしまった

ジユラ「ハア・・・ハア・・・」

『妖精の尻尾』 応援席

レビイ「ね、ねえ ツナ どうなっちゃったの」  
リサーナ「まさか やられちゃったんじゃない？」

ギルドの皆が心配していると地鳴りが起き始めた

ジユラ「これは・・・むっ!?？」

すると地中から巨大な炎が放たれて来た ジユラはその炎に驚きつつも回避する  
ジユラ「まだこれほどの余力があるうとは」

ジユラは右手で合掌し集中する

綱吉「ハア・・・ハア・・・外し・・・たか くそ」

綱吉は地中から地上に向けて、先にやったフレア・カノンの更に上の両手で放つフレア・バーストを撃った

綱吉「っ!?？」 何だ 辺りに魔力が集まつ」

その瞬間綱吉は閃光に包まれた

ジユラ「鳴動富嶽!!」

地中から大爆発が起きた

『妖精の尻尾』B 観覧席

ミラ「ツナアアア!!?」

ミラは身を乗り出して闘技場へ行こうするもジユビア達に止められる

ガジル「おいっ 何考えてんだっ」

ジユビア「ミラさんっ 落ち着いてください!」

ミラ「落ち着ける訳ないでしょっ! 早く助けに行かないとっ ツナが ツナがっ

!

するとラクサスがミラの近くにいき

バシンツ

頬を叩いた

叩かれたミラも止めに入っていた2人も驚いて固まってしまっ

ミラ「ラクサス・・・」

ラクサス「いいから落ち着けって言っただろうが 馬鹿野郎 今お前が乱入すれば

ツナは失格扱いなる そうなればこの闘いは無意味になる お前はそれで満足か？」

ミラ「・・・そ、それは・・・」

ラクサス「彼奴はまだ負けてもねえし 諦めてもねえ」

ミラ「えっ」

ラクサス「ジユラを見てみる」

ジユラは地面を睨み、警戒を解いていなかった ツナヨシはまだ何か仕掛けてくるぞ  
ういう確信があつたからだ

ラクサス「彼奴の恋人なら、最後まで彼奴のこと信じろ」

ミラ「・・・」

すると再び闘技場に地鳴りが起き始めた

ミラ「これは・・・」

ジユビア「ツナさんですよっ！」

ガジル「彼奴しかいねえな ギヒッ」

ラクサス「これが仕掛ける最後のチャンスだ」

残り時間は1分を切っていた

会場は静かになり、観客も魔導士もこの最後の攻防に注目した

ジュラ「やはり 来るか（だが地上へ出て来た瞬間が主のおわりよっ）」

ジュラの数メートル右側から何かが出て来た

ジュラ「そこかっ！」

ジュラは攻撃しようとするも

ジュラ「っ!?? 違う!!」

出て来たのは火球弾だった そして今度は左側から何か飛び出て来た

ジュラ「そっちかっ! また違うっ!!」

今度も出て来たのは火球弾だった

ジュラ「ツナヨシは何を」

するとジュラの足下から血だらけでボロボロになった綱吉が地面を突き破って出て

来た

綱吉「もらったあああ!!」

ジュラ「なんとっ!??」



綱吉は右腕を振りかぶり魔力を込める

ジユラは迎撃しようするも

ジユラ（間に合わんっ）

ゴッド・フイスト

綱吉「くらえっ 『神の拳』!!」

綱吉は拳をジユラの胸に叩き込もうとした

ビーーーーッ!!?

しかしここで試合終了のブザーが鳴り響く

ビタアッ

拳はあと数センチというところで止まった

綱吉最強の一撃はあと数秒決めるのに遅かった・・・

## 第20話

綱吉の攻撃が決まる前に試合が終了したことに『妖精の尻尾』の面々は悔しがって  
いた

『妖精の尻尾』A 観覧席

エルフマン「おいつ おかしいだろ！ あのタイミングで時間切れなんてよお！」

ナツ「そうだそうだ！ 巻き戻せっ」

エルザ「よさんかっ!!？」

ゴッ！

エルフマン・ナツ「グハッ」

エルザは2人を拳骨で沈めた

エルザ「時間は正確だったんだ 変な言いがかりを言うのはよせ」

エルザは闘技場にいる綱吉を見る

エルザ（たらればになつてしまうが、もし最後の一撃 決まっていればツナはあの  
ジユラに勝っていたかもしれんな）

『妖精の尻尾』 応援席

レビィ「そんなぁ 時間切れだなんて」

リサーナ「あと少しだったのに……」

ロメオ「ツナ兄……」

マカロフ（ツナよ ようやった ようやったぞ その小さな身体でよく聖十とここま  
で戦った お主は儂等の誇りじゃ）

『人魚の踵』 観覧席

カグラ（結果的に引き分けになったが、あの最後の一撃が決まっていればツナヨシの  
勝ちだったな…… 明日以降ぶつかるとは私にも本気を出さねばならん）

『青い天馬』 観覧席

ヒビキ「あのジュラをあそこまで追い詰めるなんて……」

イヴ「ホントに一夜さんの言う通りになった」

レン「アイツ ヤバすぎだろっ」

一夜「（ジュラさんを相手にここまでの闘いをみせるとは それに単純な力だけでな  
く技、知略、判断力 どれも素晴らしい このまま成長すれば聖十に…… いやそれ以

上になれるだろう) まったく素晴らしい「香り」だね!

ヒビキ「いや 一夜さん これは我々にとつてヤバいのは・・・」

一夜「何 心配する必要はない 君達には私がついているのだからね 何も恐れず私について来たまえ」

ヒビキ・レン・イヴ「はいっ」

### 『剣咬の虎』観覧席

オルガ「まったく こんな展開になるなんてなあ」

ステイング「けっ 俺だって本気だせばあれくらいできるっ」

ルーファス「ルーキーの身でありながらここまで闘いを見せてくれるとは・・・しかと記憶させてもらったよ」

闘技場では綱吉が歯を噛み締め悔しそうにしていた

綱吉(俺の作戦ミスだっ 出し惜しみせず最初から格闘もボクシングとムエタイでやっていれば・・・)

己の浅はかさに涙が出て来た

そしてジュラの方にリオンとシエリアが来て、綱吉の方にラクサスとミラがやって来た

シエリア「ジュラさくん！」

ジュラ「おお リオン シエリア」

リオン「お怪我は？」

ジュラ「うむ 大丈夫だ」

ミラ達が綱吉に駆け寄ると綱吉は涙を流していた

綱吉「うつ．．．うつ．．．ごめんっ．．．勝てなかつたっ．．．」

ミラ「ツナ．．．」

ラクサス「何言つてやがるっ あのジュラ相手に引き分けたんだぞ もっと自分を誇れ」

綱吉「ラクサス．．．」

ラクサス「それになあ お前は得点以上に凄いことをしたんだぞ この会場を見てみる 試合が始まる前まで『妖精の尻尾』を馬鹿にした観客がお前のことを応援したんだぞっ それをさせたのは他でもないお前なんだぜツナ」

ミラ「そうよ ツナ 貴方は凄いことをしたの！ 謝ることなんて何一つ無いのよ」

綱吉「ミラ・・・ラクサス・・・ううう」

ラクサス「だあく いい加減泣き止めっ」

綱吉は乱暴に頭をワシヤワシヤと撫でられる

ミラ「さっ 戻りましょ」

綱吉はミラに支えられながら観覧席へ戻って行く

リオン「ジユラさん 俺達も」

ジユラ「うむ だが少し待て ツナヨシっ!!」

ジユラに呼ばれたことで綱吉達は歩みを止める

ジユラ「俺はこの決着に満足しておらんっ！ また闘う機会があればその時しかと勝敗をつけようぞ！」

綱吉「・・・はいっ」

綱吉は涙ながらもはつきりと答え 歩いていった

ジユラ「さて 俺等も行くか」

リオン（ジユラさんにここまで言わせるとは）

シエリア「ジユラさん 何か嬉しそうですね」

ジユラ「ん？ そうだな 若い芽が育っていることが嬉しくてな お前達もうかうかしてると大きく差を開かれるぞ」

リオン「だ、大丈夫ですよ！ 彼奴にはまけません！」

シエリア「私も私も！」

ジユラ「フツ そうか それは頼もしい限りだ」

会場は2人の闘いに拍手が起きていた

しかしこの闘いに満足してない男が1人

白蘭（んゝ ボクシングにムエタイだよなあ 最後のアレ 確かあの世界の綱吉君も使ってたって言ってたよな だとしたら彼は“鬼”の綱吉君か 彼は強かったなあ でも彼は最後まで“鬼”だったんだけどな）

白蘭は綱吉の側にいるラクサスとミラを見る

白蘭（ああ また新しく守るべきものが出来て、人の心を取り戻しちやったのか また、彼と闘いたいなあ どうしよっかなあ）

白蘭の目はミラを捉える その目は獲物に狙い定めた肉食獣のようであった

白蘭（そうだつ 壊せばいいんだ 彼の大切な人を壊しちやえばきつと“鬼”に戻つ

てくれる 待つてね綱吉君 あの頃の君に戻してあげるから）  
 白い悪魔は少年を修羅に落とすため企みを考えていた

こうして大魔闘演舞1日目が終了し、このような結果になった

一位 『剣咬の虎』 20 pt

二位 『大鴉の尻尾』 18 pt

三位 『青い天馬』 14 pt

四位 『蛇姫の鱗』 11 pt

五位 『妖精の尻尾』 B 6 pt

六位 『人魚の踵』 3 pt

七位 『四つ首の猟犬』 2 pt

八位 『妖精の尻尾』 A 0 pt

ミラは綱吉を治療させるため医務室に連れて行こうとした時

綱吉 「っ!?!」

ミラ 「ツナ? どうしたの?」

綱吉 「な、なんでもない・・・ちよつと顔洗ってくるからっ」

ミラ 「あつ ツナ!」



ミラが呼びかけるも綱吉は早足でトイレへと行った

綱吉は急ぎ洗面所の前に立つと

綱吉「・・・っ・・・うっ・・・ブハツガハツ!!?」

口から血を吐き出した 胸を押さえ、呼吸も苦しそうだつた

綱吉「ハア・・・ハア・・・ゲホツ・・・ゲホツ・・・無理、し過ぎた・・・かな」

綱吉は口元についた血を拭いながら苦笑いして言った

トイレから戻つた後ミラに心配されたがなんとか誤魔化し、医務室へと向かつた

その後綱吉は医務室で治療を受けて、Aチームやギルドの皆と合流しBAR SUN

で飲み会をしていた

皆酒を飲んだり、飯を食つたりと騒いでる中

ミラ「ツナ あくん」

綱吉「なあ ミラ 俺別に腕が使えない訳じゃ」

ミラ「あくん」

綱吉「ねえ 聞いてる? しかもこんな大勢いる前でちよつと」

ミラ「・・・食べてくれないの?」

綱吉「食べるっ 食べるからっ」

ミラ「はいっ あくん」

綱吉「・・・あゝん」

身体のいたるところに包帯を巻かれたり、ガーゼを貼られたりしてゐる綱吉はミラに食事をさせられていた

綱吉（嬉しい、嬉しいけどさあ　せめて家でやって欲しかったなあ）

心配症なミラにあゝんをさせられ、嬉しいやら恥ずかしいやら綱吉の思考はごっちゃになつていた

エルザ「ツナ　今日は大活躍だったな」

綱吉「エルザ　活躍と言うほど活躍はしてないさ　試合は引き分けだしね」

エルザ「その引き分けた相手がジユラならば充分凄いだろう　それにお前のお陰で『妖精の尻尾』を馬鹿にする者はいなくなつた」

レヴィ「そうそう　ツナのお陰だよ！」

マックス「この闘いでツナの名は一気に知れ渡つちまつたなつ」

カナ「ツナも下手したら『聖十』に入つちまうじやないの？」

綱吉「俺が？　無理無理　俺には荷が重すぎるよ」

ギルドは綱吉のことで持ちきりで

ナツ「ぬぬぬ・・・」

ハッピー「ナツ　どうしたの？」

「ナツ『妖精の尻尾』で強えのはツナだけじゃねえ！ 明日の競技は俺が出るぞ！ そんなで一位になってやるっ！」

ナツは綱吉を指差して

ナツ「お前には負けねえぞっ ツナ!!」

突然のナツの言葉に驚いてしまうが、

綱吉「ああ 望むところだ ナツ だけど勝つのは俺達Bチームだ」

ナツ「何を〜!!」

グレイ「おうおう 盛り上がってるね〜」

ルーシイ「此処ギルドじゃないんだから喧嘩はやめてよね」

そこにグレイとルーシイがやって来た

綱吉「グレイ、ルーシイ もう大丈夫なのか」

グレイ「ああ」

ルーシイ「色々吹っ切れたって感じね」

綱吉「そっか なら良かった」

グレイ「そーいやツナ 試合で造形魔法使ったんだって？」

ルーシイ「えっ ツナって造形魔法使えたの!?!?」

綱吉「ああ 修行して使えるようになったんだ 実戦で使うのは今日が初めてだったんだけどね」

グレイ「試合で使ったんだ ちゃんと造形は出来てたんだろな？」

綱吉「もちろんっ ほらっ！」

そう言つて両手に炎を灯し右手に鷹を作り出し、左手に一輪の薔薇を作り出す

皆「「「「おおく」」」」

皆感嘆の声をあげていた

グレイ「確かに出来てるみたいだなっ」

ルーシィ「わあゝ 綺麗ねゝ」

エルザ「こうして間近で見ると見事な造形だ」

ミラ「触れないのが残念よね」

綱吉「俺のはグレイの『氷』と違って『炎』だからね 触ったら火傷しちゃうし（ホ

ントは飾れたり触れるのがいいんだけど『炎』だからなあ）」

ミラは綱吉の炎の造形魔法に触れないことにとても残念がつており、綱吉もミラの気持ちを分かつてはいたがどうしようもないことに残念がつていた

綱吉「さていつまでも出しとくと危ないし、そろそろ戻すよ」

ミラ「えっ もう消しちゃうの？」

綱吉「い、いや そんな目で見られても……いつまでも出しとくわけには  
ミラの目に困っていた時

バクンツ

ルーシイ・グレイ・ミラ「二あつ 二」

綱吉「ん？」

皆の声と視線から左手を見ると

ナツ「おうっ やっぱツナの火は美味えなあ」

ナツが炎の薔薇を食べていた

綱吉「あらら……」

ルーシイ「アンタ 何食べてんのよっ」

ナツ「しょうがねえだろ そこに美味そうな火があつたんだから」

グレイ「コイツには芸術つてもんが分からねえのか いやアホ炎に分かるはずもねえ  
か」

ナツ「んだとパンツマンがっ!!」

グレイ「んなつ 誰がパンツマンだっ！」

2人はまたいつものように喧嘩を始めた

ルーシイ「まったくもお」

エルザ「やれやれ よさないかお前たち」

そしてまたいつものようにエルザが仲裁に入っていった

綱吉「ははっ 何処に居ても変わらないなあ」

綱吉はそう言つて炎の鷹を消した

ミラ「あくあ 消えちやつた」

綱吉「いやだつて、さつきから消すつて言つてるじや」

ミラ「・・・」

ミラのしよんぼりした顔を見て

綱吉「・・・分かつたよ 後で宿に着いたら最後にもう一回見せてあげるから」

ミラ「本当？」

綱吉「ホント」

ミラ「やつたあ」

綱吉「やれやれ」

ミラは笑顔になり、綱吉も苦笑いをしていた

ガジル「明日 火竜の野郎が出るなら俺も出るぜっ いいよな？」

ラクサス「俺は構わねえぞ」

ジュビア「ジュビアは今日出ましたしね」

ミラ「私もいいわよ」

綱吉「俺は」

ミラ「ツナは明日見てるだけって言ったでしょっ」

綱吉「・・・はい そうでした」

ガジル「なら決まりだなっ ギヒッ」

皆で話しているとマカロフがカウンターに立ち

マカロフ「今日の結果は明日への勝利の糧!!? 上ってやろうじゃねえか! ワシら

に諦めるという言葉はない! 目指せフィオーレ 1!!」

皆「!!!オオッ!!!」

また飲んだり食べたり騒いでると、カウンターの方で何かあったようだ

綱吉「ん? 前の方で何かあったのか?」

よく見るとカナが酔っ払って倒れていて、その隣りに見知らぬ男がいた

綱吉（まさかカナが飲み比べで負けたのか?）

そんな疑問を思っている

? 「ういゝヒック そんなじやく これは戦利品として貰ってくぜ」  
男はカナのブラを取っていった

綱吉 「なっ!?」

マカオとワカバが返すように突つかかると倒されてしまった

綱吉 (今の動きは・・・酔拳か この世界にもあるのか)

エルザ 「奴はバツカスだ」

綱吉 「エルザの知り合い?」

エルザ 『四つ首の獵犬』のS級にあたる男で、酔いの鷹 酔・劈掛掌のバツカス  
説明によるとエルザと昔同等の実力者だったらしい

バツカスが帰ろうとしていると綱吉が前に立ち

バツカス 「あ? なんだ坊主?」

綱吉 「ソレ置いてもらえません? 仲間の服なんで」

バツカス 「コレは俺が勝負して手に入れたモンなんだぜ 返す訳にはいかねえな」

綱吉 「そこを何とか」

綱吉はカナのブラを返すように言うがバツカスは中々聞き入れない そして互いに

見合って暫く立ち



バツカス「(コイツ)・・・ほらよっ」

綱吉「ありがとうございます」

綱吉は投げられたブラを取ろうとしたが横からミラに取られてしまう

ミラ「ツナツ コレは女の子の物なんだから触っちゃ駄目ですよっ」

綱吉「・・・はい すみません」

バツカス(なんだか締まらねー野郎だなあ おい)

ミラに怒られて反省している綱吉を見てバツカスは呆れていた

バツカス「んじゃあ 大魔闘演舞でぶつかつたらよろしくな 坊主っ」

バツカスは綱吉の頭をポンポンと軽く叩いてBARから出て行った

バツカス「あのガキ 涼しい顔して鬨気ぶつけてきやがって お陰で酔いが覚めち

まったぜ しかしジュラと引き分けたつてのはホントみてえだなあ へへっ いいね

え 魂が震えてくらあ」

バツカスは綱吉と鬨める日が来るのを楽しみにしながら自分の宿に帰って行った

それから『妖精の尻尾』も宿に帰って行った 宿に着いてミラが綱吉と同じ部屋を希望した時一部の男性陣が騒いでいたが

エルザ「明日も早いんだ! さっさと寝ろっ!!」

強制的に黙らせられた

綱吉とミラは結局同じ部屋になった

ミラ「さっ ツナ 早く早くっ」

綱吉「分かったって それじゃあ明かりを消して」

ミラ「部屋を暗くするの？」

綱吉「うん 今から見せるのは暗い方が綺麗だと思うから」

ミラは綱吉の言う通り部屋の明かりを消した 部屋は暗くなり窓から入ってくる月明かりで見える程度となった

綱吉「それじゃあ フレアメイク 蛍」

ミラ「・・・綺麗」

綱吉の作り出した10数匹の蛍は淡い炎で部屋の中を飛び始めた

ミラは炎の蛍の美しさに見惚れており、綱吉もミラのそんな表情を見て微笑んでいた  
それから数分後、蛍を消して寝ようかと思ったらミラが綱吉のベッドにやって来て腰掛けた

綱吉「どうしたんだ ミラ？」

ミラ「ツナの隣りに来たくってっ」

綱吉「そっか」

しかしさつきまでの明るい笑顔が不安そうな表情に変わっていく

ミラ「ねえ ツナ？」

綱吉「何だ？」

ミラ「ツナは、ツナは私を1人にしないよね」

綱吉「何言ってるんだ急に？」

ミラ「時々思っちゃう時があるのっ ツナが突然私の手の届かない所に行きそうで不安になるの！ 怖いの！」

綱吉「ミラ・・ 大丈夫 俺はミラを1人にしないよ それに何処かに行っても必ずミラの所に帰ってくるから だからそんな悲しい顔をしないでくれ なっ」

ミラ「ホント？ ホントに約束できる？」

綱吉「ああ 約束するっ」

綱吉はミラが両肩にそれぞれ手を置きミラは目を見る

綱吉「俺は必ずミラとの約束を守る だから笑顔を見せてくれ」

ミラ「うん」

2人は月明かりの光に照らせれながら、約束の口づけをした

こうして大魔闘演舞 1日目が終わった

綱吉はこの時未だ何も知らなかった、白い悪魔によって恋人の身に危険が迫っていることなど

## 第21話

大魔闘演舞 2日目

闘技場

2日目の競技名は『戦車』、そしてゲストには週刊ソーサラーのジェイソンが来ていた  
綱吉「『戦車』か」

ジュビア「レースですかね？」

綱吉「いやでもそれって魔法関係なくない？」

ミラ「ツナの直感だとどんな感じなの？」

綱吉「ん〜(車 戦う、か)車の上で戦う感じかな でもさつきジュビアの言ったレースって言うのも引つかかるんだよね」

ミラ「じゃあ 疾走してる車の集団の中で車の上に飛び移りながらゴールを目指すのね」

綱吉「怖い怖い怖いッ ミラ それは怖いからっ」

ガジル「まあ バトルになろうがレースになろうが、ぶっちぎりで一位になってやる

よ ギヒツ」

ガジルは自信満々にフィールド中央へと向かっていった

綱吉（でもなんでだろう ガジルだと駄目なような気がするのは）

今回出る選手は

『剣咬の虎』からステイング

『蛇姫の鱗』からユウカ

『青い天馬』から一夜

『四つ首の獵犬』からバツカス

『人魚の踵』からリズリー

『大鴉の尻尾』からクロヘビ

『妖精の尻尾』A からナツ

『妖精の尻尾』B からガジル となった

綱吉「あつ バツカスさんも出るんだね」

ジュビア「エルザさんはああ言っちゃいましたが、本当に強いんでしょうか？ あの

酔っ払っていた姿を思い出すとジュビア強いとは思えません」

綱吉「強いよ バツカスさんは」

ジュービアの疑問に綱吉は直ぐに答えた

ラクサス「ほお なんて分かる 直感か？」

綱吉「まあ それもあるけど マカオとワカバを倒したあの動きは拳法の動きだった  
かなり強いと思うよ」

ラクサス「フツ そうか ならバトルでぶつかった時が楽しみな」

皆で話していると参加者達が移動を始める

ミラ「あら？ 闘技場から出て行くわよ」

綱吉「別な場所がスタート地点で此処がゴールなんじゃない」

たしかに綱吉の言った通り、別の場所からスタートしゴールである此処を目指すとい  
うものだった

実況席

チャパティ「この競技は連結された戦車の上を落ちないようにゴールを目指すもので  
す 戦車は動いているので注意が必要です クロツカスの観光名所を周り、ゴールであ

る此処ドムス・フラウまで1番早くたどり着くチームは一体どこだ!?？」

会場にいる人達はラクリマビジョンでレースの様子を見ることが出来るのだが・・・

『妖精の尻尾』A のナツ、『妖精の尻尾』Bのガジル、『剣咬の虎』のステイングの3人が戦車の遙か後方でグロッキー状態だった

戦車後方

ナツ「お…おお…おおぶ」

ガジル「な…何故俺が……」

ステイング「お…お…お」

3人は何とか走って、いや歩いていた

『妖精の尻尾』A 観覧席

グレイ「なんでナツを出したあ!?!？」

ルーシイ『戦車』って競技名で分かるよね フツー」

エルザ「どうしても出るときかないモンでな」

『妖精の尻尾』B 観覧席



綱吉「ナツが乗り物に駄目なのは知ってたけど、ガジルもだつたっけ？」

ジユビア「いえ、ガジル君は平気のはずでしたけど」

綱吉「ナツもガジルもあのステイングって人もドラゴンスレイヤー、ドラゴンスレイヤーは乗り物に弱いのか？」

ミラ「でもウエンデイは平気よ」

綱吉（たしかに：何故ウエンデイは平気なんだ？ 年齢か？ ある歳を過ぎると乗り

物に弱くなってしまうのか：）

ミラ「あれっ てことはラクサスも？」

ラクサス「他の奴等には黙っとけよ」

ジユビア「もうバレバレだと思っけど」

その頃トップグループは一位がクロヘビ、その後ろにユウカ、リズリー、一夜 やや後方にバツカスがいた

ユウカは波動を使って魔法を使えなくして引き離しかかるが、リズリーは重力魔法で車両の側面を 一夜は俊足の香りをを使って何とかついていく

そしてバツカスは相撲の四股のように右足を上げて、降ろすと戦車が倒壊し、その衝撃で一夜達も止まってしまう

綱吉（技だけじゃなくパワーも相当あるな…）

バツカスはそのまま一夜達を追い抜き、更に先頭を走っていたクロヘビをも抜いて一位でゴールした。続いてクロヘビ、リズリー、ユウカ、一夜と次々とゴールしていく。残すはあの3人だけとなった。

ナツ「おぼぼ…おぼ」

ガジル「ぼ、馬鹿な…俺は乗り物など…うぶ 平気だった」

ステイング「じゃあ なれたんだな 本物のドラゴンスレイヤーにおめでどう 新入り」

ガジル「テメエ!!？」

ステイングの煽りにガジルは体当たりをするが更に酔いが回るだけだった

ナツ「お…おぶ」

ステイング「う…うぶ」

ガジル「ち、力が入らねえ…」

フラフラとした足取りで何とか前へ進んで行くナツとガジル、それに対してステイングは歩を止めた

ステイング「カツコ悪い 力も出せねえのにマジになっちゃってさ いいよ…くれて

やるよこの勝負 俺たちはこの後も勝ち続ける たかが一点二点要らねーっての」  
ガジル「その一点に泣くなよ ボウズ」

「ステイングはどんどん自分との距離を離して行くナツとガジルに問いをかけた 何故 大会に参加したのか？」と それに對しナツは

ナツ「仲間の為だ 7年も…ずっと…俺たちを待っていた…どんなに苦しくても悲しくても馬鹿にされても耐えて耐えて…ギルドを守ってきた」

ナツの言葉に応援席にいる仲間達は涙目になり、ナツ、ガジルもキツくなつて来たのか四つん這いになって進んでいた

ナツ「仲間の為に俺たちは見せてやるんだ 『妖精の尻尾』の歩き続けた証を!!？」 だから前に進むんだ!!？」

2人は何とかゴールすることが出来た

ナツとガジルの執念でのゴールに仲間達は涙を流していた 会場からも拍手が送られていた

### 観客席

白蘭（下らない…とんだ茶番劇だね 仲間の為とか弱者の考え方だよ そう言う考え

方が君を人に戻しちやっただね)

白蘭は綱吉の隣りにいるミラを見る

白蘭(さて…どう壊してあげようかなあ)

## 第22話

『戦車』で酔いが酷いのかナツは医務室に運ばれていた

『妖精の尻尾』B 観覧席

綱吉「さっ ナツとガジルが頑張ってくれたんだっ バトルパートも頑張ろう！」  
ミラ「そうね 2人が頑張ってくれたんだもの私たちも頑張らないとねっ」

バトルパート第一試合

『蛇姫の鱗』トビー・オルオルタ VS 『大鴉の尻尾』クロヘビ  
トビーは爪で攻撃するがクロヘビは躲して翻弄し砂の中から攻撃する

ジュビア「消えたっ!?!?」

ミラ「いいえ 擬態魔法よ」

綱吉「擬態魔法?」

ミラ「擬態した属性の魔法が使えるの」

綱吉「(擬態した属性 水辺なら水、森なら植物か) そんな魔法もあるんだな」

トビーとクロヘビは負けた方が秘密を話すと言う賭けをやり、トビーは負けてしまった。トビーの秘密は靴下が片方見つからないというもの。クロヘビは靴下の場所を覚えて握手するかと思いきや、その靴下を破り捨てた。

ミラ「ひどい…」

ラクサス「気に入らねえな」

綱吉「あそこまでやる必要はないはず…」

クロヘビのやったことに会場は静まり返っていた。

チャパティ「さあ 気を取り直して 第二試合 『四つ首の獵犬』 バツカス!! VS

『妖精の尻尾』 A…」

綱吉「バツカスさん、連続か」

ミラ「たしかエルザと互角の人よね」

ジュビア「向こうからは誰が選ばれるんでしょう?」

チャパティ「…エルフマン!!」

綱吉「エルフマンか…」

ミラ「そんな…」

綱吉「大丈夫 エルフマンだってあの三カ月の修行で強くなったんだ きつと勝てる」

ミラ「ツナ うんっ そうよね！」

バツカスはすでにフィールドにいてエルフマンのことを寝つ転がって待っていた  
そこにエルフマンがやって来る

バツカス「なあ 俺らもさっきの連中みてーに賭けをしねーか？」

エルフマン「ム」

バツカス「お前の姉ちゃんと妹美人だよなあ 俺たちが勝ったら一晩貸してくれや  
両方一緒に」

『妖精の尻尾』 B 観覧席

綱吉「は？」

ミラ・ジュビア・ラクサス「「っ!?」?」

その瞬間観覧席にももの凄い圧がかかった

ミラ「ツ、ツナ？」

ミラが恐る恐る綱吉の方を見ると

綱吉「…大丈夫…落ち着いてるから…」

何とか必死になって冷静になろうと頑張っているのが分かった。3人は不安になりつつ試合を見守る事にした

試合が始まりエルフマンはビーストソウルで獣人となってバツカスに攻め掛かるが、バツカスは躲していき「劈掛掌」で反撃していく

綱吉（劈掛掌…武術の本に載ってたな こっちの世界にもあるとは）

ミラ「強い…」

綱吉「ただバツカスが強いだけじゃない あの『劈掛掌』の独特の構えから繰り出される掌打、上から下に切り下ろす攻撃と下から上に打ち上げる攻撃の二種にエルフマンの動きが狂わされているんだ」

ミラ・ジユビア・ラクサス（もうバツカスって呼び捨てになってるし）

綱吉「何よりエルフマン自身の呼吸が乱れてる あれじゃあ本来の力の半分も発揮出来ない」

ミラ「そんな…」



綱吉（どうしたエルフマン　呼吸が乱れてるぞ　落ち着くんた　修行を思い出せつ）

エルフマン「はあ…はあ…ビーストソウル・ワータイガー!!」

エルフマンは豹のような獣人になりバツカスへ襲いかかるもバツカスに軽くあしらわれてしまう

ミラ「スピード系のテイクオーバーでも駄目だなんて…」

綱吉（ただ速くしたところでバツカスには通用しない　呼吸を整えろエルフマン

エルフマンは片膝をつき息をしていた

エルフマン「はあ…はあ…（くそつ　コイツめちやくちや強え　どうするっ!!?どうすればっ!!?　このままじゃ姉ちゃんとりサーナが）

バツカス「漢なんだろう　約束守れよな　へへっ　美人姉妹と夢の夜　いいねえ」

エルフマン「くっ…」

『集中が足りないっ!!　呼吸を乱すな!』

エルフマン「っ!!」

その時エルフマンの頭に綱吉の言葉が響いた

エルフマン「フツ…（そうだよな　こんなんじやまたお前に怒られちゃうな）  
バツカス「あ？　何笑ってんだ　お前？」

エルフマン「そーいやまだ決めてなかつたな　獵犬」

バツカス「何が？」

エルフマン「俺が勝った時の賭けだよ…」

バツカス「ああ　なんでも言ってみ　どうせ無理なんだから」

エルフマン「俺が勝ったらお前らのギルド名大会中『四つ首の仔犬』な」

バツカス「ぷっ　いいいいいよお　んじやあ　そろそろ決着つけようかね」

バツカスはエルフマンの賭けに笑いながら了承し酒を飲んでいく

綱吉（酒を飲んで…通り名通り酒を飲んで強くなるということか）

エルフマン「スウー　ハアー　スウー　ハアー（集中しろ…呼吸を整えろ…修行を思い出せ）」

バツカス（何かするかと思つたらただ目瞑つて突っ立てるだけ　諦めたか？　まあ何をしようがお前は終わりだ）

バツカスはゆっくりと構える

バツカス（じゃあなっ!!）

バツカスはエルフマンに突っ込んで掌打を食らわせようとした。エルフマンはバツカスが突っ込んで来ても尚何もせず立ったままだった。そしてバツカスの掌打がエルフマンを捉えようとした。その時

ドガアン!!

バツカスの視界が激しく揺れ、足がぐらついた

バツカス「?!?」（な、なん、だっ 何が、起きた）」

綱吉「・・・この勝負 エルフマンの勝ちだ」

ミラ「えっ」

綱吉「バツカスはもう戦うことは出来ない」

ジユビア「どういうことですか? ツナさん」

綱吉「エルフマンはバツカスの攻撃を喰らう直前、右の昇拳でバツカスの顎を打ち上げた。全く予想して無かったまさかの攻撃。しかも顎に喰らったんだ。しばらくはまともに動けない。戦闘中においてそれは致命的なことだ」

たしかに綱吉の言う通りバツカスは視界が定まらず、足もガクガクと揺れ平衡感覚を失っていた、そこへエルフマンがバツカスの右肩を掴んで自分の方へと引き寄せる

エルフマン「本当なら今の一撃で決めたかったんだがなあ　ツナのように上手くいかなくてよ　修行不足なんだわ　だから、次で決めてやるよ」

エルフマンは右腕をブーストソウルして獣人の腕にし、大きく振り返る

バツカスはエルフマンの威圧感に冷や汗をかいていた

バツカス「(ま、まずい　こ、こいつはヤベえ・・・)ま、待てっ」

エルフマン「ツナのあの一撃には遠く及ばねえが　これが俺の最強の一撃！　喰らえっ　『獣王の鉄鎚』!!」

エルフマンはバツカスの顔面に拳を喰らわせ、地面に叩き伏せた

バツカス「がっ・・・」

バツカスはエルフマンの一撃を喰らい、失神して倒れた

エルフマン「おおおおおっ!!」

チャパティ「き、決まった〜！　エルフマンっ　まさかの大逆転勝利〜!!　この雄叫

びが『妖精の尻尾』復活の狼煙か〜っ!!」

エルフマンの勝利に会場は歓声が上がっていた

『妖精の尻尾』B観覧席

ミラ「エルフマン やったわツナツ」

ミラは嬉しさのあまり涙目のなっていた

綱吉「ああ 強敵相手によく勝ったよ」

ジュビア「だけどうしてタイミングばっちりで顎を打つことが出来たんでしょう？」

綱吉「そりやあもちろん 呼吸を感じとることが出来たからだよ」

ラクサス・ジュビア「呼吸？」

ラクサスもジュビアも首を傾げてしまう

綱吉「ああ 物には呼吸がある それさえ感じることが出来ればたとえ目を瞑っていても反応することは出来るさ」

ラクサス「ほお そんなもんがあるのか」

ジュビア「呼吸・・・ジュビアも驚きました」

ラクサスもジュビアも呼吸に興味深々だった

ミラ「だけどツナ、エルフマンの最後の一撃って」

綱吉「ああ どうやら俺のを真似たみたいだな 彼奴め（全身テイクオーバー分の魔力を右腕のみに集中する そりやあとんでもない威力になるな）」

綱吉はエルフマンの最後の一撃を分析していた。そして倒れているバツカスを見て

綱吉「(アンタの敗因は己れの過信、軽率にある。エルフマンが集中状態に入った時、もつと警戒すべきだった。攻め込む時も馬鹿正直に真つ正面から行かずスピードに緩急をつけたり、フェイントを入れたりとやればよかつたな。己れの力に自信があるからこそ真つ正面から行ったんだろがそれが敗北に繋がるとはな)もつと冷静になるべきだったな・・・」

ミラ「ん？ ツナ何か言つた？」

綱吉「いや 何でもない」

綱吉は皆の方に向き

綱吉「さつ Aチームが勝つたんだ 俺達も負けてられないよ！」

ミラ「ええ！」

ジュビア「はいっ」

ラクサス「ああ」

綱吉「1人まだ帰ってきてないけど まあしょうがないか」

その頃ガジルはまだ別な場所で休んでいた

「ガジル「うぷっ・・・よ、よし 大分マシになってきたぜ」

エルフマンの勝利により綱吉達のやる気を出していた

## 第23話

エルフマンは試合の後バツカスから受けたダメージが大きく、『妖精の尻尾』の医務室で治療を受け、回復したウエンデイと交代することとなった

エルフマン「悔しいがこの怪我じゃ試合にでれねえ 後は任せたぞ！ウエンデイ！」  
ウエンデイ「はいっ 任せて下さい！」

『大鴉の尻尾』の襲撃に備えて雷神衆が護衛につき、フリードが術式で部外者の出入りを出来なくした

『妖精の尻尾』B観覧席

ガジル「よお 戻ったぜ」

綱吉「ガジル お帰り〜 遅かったね」

ガジル「まあな ちよつくら散歩してたんだよ」

ラクサス・ジュビア・ミラ（酔いを覚ましてたんだな（ですね・のね））

綱吉「ああ 酔いを覚ましてたのか」

ガジル「はあっ!? 酔ってねえし！」



綱吉「いや 酔ってたじゃん 普通に冷や汗かいて戻しそうになってたし」

ガジル「酔ってねえよっ！」

ズガンツ

ガジルは綱吉の額に頭突きをした

綱吉「あうっ!?」

綱吉は額を抑えて痛がっていた

綱吉（石頭め〜 いや鉄頭か 超痛てえ〜）

皆で騒いでいると

チャパティ「続きまして 第3試合！ 『妖精の尻尾』B ミラジエーン・ストラウ

ス！ VS 『青い天馬』 ジェニー・リアライト！」

綱吉「おっ 次はミラか」

ジュビア「ミラさんっ 頑張ってください」

ガジル「俺様の頑張りを無駄にすんじゃないぞ」

綱吉「七位だけどね」

ガジル「うるせえよっ！ ポイントとってんだから勝ちだろうが！」

ジュビア「まあまあ ガジル君 落ち着いて」

ミラはそんなやり取りを見て

ミラ「フフツ それじゃ行ってくるわね」

ミラは闘技場へと向かおうとした時

綱吉「ミラっ！」

綱吉の呼び掛けにミラは振り返り

綱吉「頑張れよ！」

ミラ「ええ！」

恋人の綱吉の応援をもらいミラはやる気充分で再び歩いていった

闘技場にはジェニーがすでに待っており、ミラが着くと何やら2人で話し合いをしてバトルが開始されたのだが

ミラ「こんな感じ？」

ジェニー「こう？」

何故か水着を着てポーズをとっていた 水着姿のミラとジェニーを見て男性客は目をハートにして興奮していた

綱吉「・・・何これ」

ジュビア「・・・グラビア対決みたいですね」

チャパテイ「元グラビアモデル同士！　そして共に変身系の魔法を使うからこそ実現した夢のバトル!!」

綱吉「おい　いいのか　それで」

チャパテイの言葉に綱吉はツツコミを入れた

ミラ「こつち？」

ジエニー「はくい♡」

2人がポーズをとるたびに男性客は大興奮して

『妖精の尻尾』 B 観覧席

綱吉「ミ、ミラが水着であんなポーズを・・・」

綱吉はミラのグラビアのポーズに顔を真っ赤にさせていた

ラクサス「おい　何か暑くねえか？」

ガジル「そう言えば」

ジュビア「たしかに」

ラクサス達は突然暑くなったことに疑問を感じていた

ラクサス「おいツナ お前も暑いよな っておい！」

ジュビア「きやああ ツナさん!!？」

ガジル「顔どころか身体全体赤くなってんぞ！」

会話に入ってこない綱吉のことを見てみると3人は驚いた なんと綱吉の身体が赤くなっており、身体から熱気が放出されていたのだ

綱吉はミラのグラビアを見て感情が高ぶってしまった、無意識に熱を放出してしまっていたのだ

ガジル「おいジュビア! 水だ!水！」

ジュビア「はいっ」

ラクサス「おいっ 待て！」

ラクサスが止めるも時すでに遅く、ジュビアが綱吉に水をかけて大量の水蒸気が出てしまった

ガジル「うおっ なんだ!!？」

ラクサス「馬鹿野郎 あんな高熱なのに水なんてかけたら水蒸気が出るの当たり前だ

ろうがっ」

ジュビア「そ、そうでした（水蒸気爆発しなくて良かった・・・）」  
ラクサス達が大量の水蒸気にパニックになっていた頃

### 闘技場

何やらBチームの観覧席が騒がしいのでミラがそちらに目を向けると、  
ミラ（煙？ 水蒸気かしら ツナ達は何をしているの？）

### 『妖精の尻尾』 B観覧席

水蒸気ははれて漸く見えるようになると綱吉の赤みは少し消えていた  
ジュビア「まだほんのり赤いですね」

ガジル「熱気もまだ出てやがる」

ラクサス「ツナにはグラビアは刺激が強すぎたみてえだな」

ジュビア「でもどうします？ まだグラビア対決続きますよ？」

ラクサス・ガジル「・・・」

3人は悩んだ末に

ジュビア「大丈夫でしょうか？」

ラクサス「今のツナは意識が朦朧としてる 大丈夫だ」

3人がやったのは目隠しをすること 綱吉の視界を遮れば大丈夫と判断したのだ

その後もミラとジェニーは『スク水』『眼鏡っ娘』『ネコミミ』『ボンテージ』など様々なお題をやった

チャパティ「このままではラチがあかないので、次を最後の一回とさせていただきます」

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ジュビア「目隠しのお陰かあまり暑くないですね」

ガジル「まるでサウナみてえだったからな」

ラクサス「ツナには悪いがこのまま目隠ししてもらおうか」

たしかに目隠しのお陰で綱吉は熱気をそこまで放出することはなかった

闘技場

ジェニー「ミラっ 次で最後よ！」

ミラ「うんっ 負けないわよ！」

ジェニー「今まで試合の流れにそって私達も賭けをしない？」

ミラ「いいわね 何を賭けるの？」

ジェニー「負けた方が週刊ソーサリーでヌード掲載っていうのはどうかしら？」

### 『妖精の尻尾』 B 観覧席

綱吉「ヌ、ヌード？・・・」

ラクサス・ガジル・ジュビア「「ッ!?」」

ヌードという言葉に反応した綱吉に3人は恐る恐る綱吉の方を見る

ガジル「だあああつ!!? こいつまた赤くなつてやがる! つーかめっちゃ暑い!」

ジュビア「ツナさんっ 落ち着いてください! 冷静に 冷静になつて!」

ラクサス「くそつ あのバカ女め 余計なこと言いやがつて おいツナッ! 無心に

なれ!無心に!」

ラクサス達の声かけも虚しく、綱吉には届かず

綱吉(ヌード? 裸? ミラが裸に?)

ガジル「おいっ 何か発光してねえか!?!?」

ジュビア「何かヤバイ予感が」

ミラの裸を想像してしまい更に赤くなり赤く発光し始めてしまった それに何か危

機感を覚えた3人は一旦離れようと思ったその時

### 闘技場

ミラ「いいわよ♪」

なんとミラはジェニーの提案にのつたのだった

チャパテイ「な……ななんととんでもない賭けが成立してしまったーっ!!」

### 『妖精の尻尾』 B 観覧席

ラクサス・ガジル・ジュビア「「なっ!?!?」「」」

ガジル「何承諾してんだっ彼奴!?!? はっ!?!?」

ミラの言葉が止めの一撃となり綱吉の思考は限界をこえ、

ボカアアン!

爆発した

3人は爆発に巻き込まれながら、耳栓もしておけば良かったとそう思った

チャパテイ「最後のお題は戦闘形態です!!?」



ジェニー「これが私の戦闘形態よ！」

ジェニーは機械のアーマのようなものを全身につけていた

ミラ「じゃあ私もいくわね 今までの流れにそって賭けが成立したんだから 今までの流れに沿って最後は力のぶつかり合いってことでいいかしら」

ミラは最強のサタンソウル ミラジェーン・シュトリに変身する

ジェニー「は？」

ミラ「私は賭けに承諾した 今度は貴方が“力”を承諾してほしいかな」

ジェニー（そんなーっ!!）

そしてジェニーはミラに一撃で倒されてしまうのだった

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ガジル「ゲホツゲホツ 全くえらい目にあったぜ！」

ジュビア「ツナさんは・・・のびてますね」

ラクサス「その内目を覚ますだろ」

そこへミラが戻って来た

ミラ「ただいま　　つてどうしたの皆っ!!?」

ミラは観覧席や3人の姿を見て驚いた

ジユビア「ミラさん　お帰りなさい　・・・まあ色々ありました」

ミラは顔を赤くして床にのびてる綱吉を見て駆け寄る

ミラ「ツナツ　こんなに顔を赤くして何があつたの!!?」

ジユビア（いや、貴方が原因なんですよ　ミラさん）

ラクサス「お前のグラビアがこいつには刺激が強すぎてな　だからぶっ倒れてるんだ

よ」

ミラ「えっ?」

ミラは予想外の答えに固まってしまった

ガジル「ヌードなんて承諾しやがって　お陰でこいつ興奮して爆発したんだからな」

ミラ「ええっ!!?」

ラクサス「いくら強いと言ってもガキなんだ　お前が思ってる以上に純粹なんだろ

う」

ミラ（ツナ・・・）

綱吉「・・・ううん」

皆が話していると綱吉が目を覚ました

目を覚ますとミラが心配そうに自分を見ていた

綱吉「ミラ？」

ミラ「ツナ ごめんね 私がグラビア対決なんてやったばかりに・・・」

綱吉「ミラのせいじゃないよ 俺が未熟だった それだけだよ」

ミラ「・・・ツナ」

綱吉「でも・・・」

ミラ「でも？」

綱吉「これからはグラビアとか やめてほしいかな・・・恋人にそういうのやってほしくないんだ いや、別にグラビアを否定してる訳じゃないんだっ ただミラをやらしい目で見られたくないというか なんとというか・・・」

綱吉は恥ずかしがりながらもミラに伝えた

ミラ「ツナ ありがとう 分かったわ」

ミラは優しく微笑みそれに答えた

ミラ「ところでツナ ツナはどの水着が良かった？」

綱吉「えっ？ うゝん あんまり覚えてないんだ ごめん」

ミラ「ええっ せつかくあんなに頑張ったのに」

ミラはさつきと変わって拗ねてしまう

綱吉「ご、ごめん！ だからそのお詫びと言ってはなんだけどきデートしよう！  
丸  
一日2人で出かけよう ねっ！」

ミラ「・・・本当？」

綱吉「ああっ 本当だ！ 約束する！」

ミラ「なら 指切りして」

ミラはそう言つて右手を出し小指を立てる

綱吉「分かった 約束だもんな」

綱吉も右手を出し、ミラの小指と自分の小指を絡め

ミラ「指切りげんまん♪ 嘘ついたら♪ 針千本♪ のくますっ 指切った！」

歌が終わると2人は絡めていた指を離れた

ミラ「約束よ 破つたら許さないんだから」

綱吉「分かつてる ちゃんと約束は守るよ」

ミラ「本当は旅行が良かったんだけど 旅行は結婚してからにしましょ」

綱吉「け、結婚!?!」

ミラの言葉に綱吉は驚いてしまう

ミラ「あら？ ツナは私をお嫁さんに貰つてくれないの？」

綱吉「もちろん結婚するさ 俺の妻はミラしかない！」

ミラ「ツナ もうっ」

ミラは顔を赤くして綱吉に抱きついた

綱吉「わわっ」

そんな2人を見ていた3人は

ジュビア「なんだかいつも通りになりましたね」

ラクサス「ああ・・・」

ジュビア「ジュビア凄い疲れたんですけど」

ラクサス「俺もだ」

ガジル「俺も」

3人は綱吉とミラを見て

ラクサス・ジュビア・ガジル「「はあく」」

盛大にため息をついた

トラブルがあつたBチームだが無事第三試合に勝利した

## 第24話

第三試合も終わり残すはあと一試合となった

『妖精の尻尾』 B 観覧席

綱吉「残りは『剣咬の虎』と『人魚の踵』だね」

ジュビア「出来れば『剣咬の虎』には負けて欲しいんですけど」

ラクサス「そう簡単にはいかねえだろ 相手はファイオーレ 1なんだ」

綱吉（たしかに だけどあの人が出るんだっただら分らないな）

綱吉は『人魚の踵』のカグラを思い浮かべていた

チャパティ「さあ本日も残すはあと一試合！ 本日の最終試合 『人魚の踵』カグラ・ミカツチ VS 『剣咬の虎』ユキノ・アグリア！ これはまたしても美女対決となったーっ!!」

『剣咬の虎』観覧席

ステイング「おい お前がこのチームにいる意味・・・分かるよな」

ユキノ 『剣咬の虎』の名に恥じぬ戦いをし、勝利することです  
 』

『人魚の踵』観覧席

ミリアーナ 「カグラちゃん 頑張つてね」

リズリー 「でも相手は『剣咬の虎』だしねえ」

カグラ 「案ずることはない 道は視えた 我が剣の先に」

チャパティに名を呼ばれ両者は闘技場へと出てきた

綱吉（やっぱり出て来たか だけどあの人・・・上手く内に隠してるけど凄いい憎しみだ それにあの刀、何か凶々しい 妖刀の類いか？）

綱吉がカグラに疑念を抱いていると両者は闘技場の中央に来て向かい合った

チャパティ 『人魚の踵』最強の魔道士であり、現在週ソライチオシの女性魔道士 “カグラ” !!? 対するは今回初参戦ですが、最強ギルド 『剣咬の虎』に所属しているといっただけでその強さに期待がかかる “ユキノ” !!? 果たしてどんな戦いを見せてくれるのか! 試合開始イ!!」

チャパテイの合図と共に銅鑼が鳴らされる

ユキノ「よろしくお願ひします」

ユキノは戦う前に頭を下げた

カグラ「・・・こちらこそ」

カグラも驚いたが頭を下げた

ユキノ「あの：始める前に私たちも「賭け」というものをいたしませぬか」

カグラ「申し訳ないが、興味がない」

ユキノ「敗北が恐ろしいからですか？」

カグラ「そのような感情は持ち合わせていない　しかし賭けとは成立した以上必ず行使する主義である故　軽はずみな余興は遠慮したいのだ」

ユキノ「では重くいたしましたよう　命を・・・賭けましょう」

ユキノの発言に会場はざわつく

『妖精の尻尾』B 観覧席

ミラ「あの人、何を言つて・・・」

ラクサス「よほど自信があるみてえだな」



綱吉「(スリルを求めぬ戦闘狂でもなければ 命をなんとも思つてない訳でもないラクサスの言つたようにあくまで自分の力に自信があるということか)……」

綱吉の様子を見てミラが声を掛けてきた

ミラ「ツナ？」

綱吉「ん？ ああ あのユキノつて人のことで……軽々しく“命”を賭けの対象するべきじゃない 命とは尊く重いんだ 命をかけるなんてそれこそ戦争の時だよ 愛する者を守るために命をかけて戦う こんな、軽いものじゃないんだ 命つて……」

綱吉は悲しい表情を浮かべそう言つた

ミラ「ツナ……(自分が戦争を経験したからこそ 彼女の言葉が許せないのね)」

綱吉「……俺はその尊く重い命を敵とは言え何人奪つただろう……俺に誰かを愛する資格はあるのか？ 幸せになる資格はあるのか？」

綱吉はそう思いながらミラを見る

綱吉(俺は……俺は本当にこのままでいいのだろうか)

ミラは綱吉の不安そうな顔を見て手を握り

ミラ「ツナ 大丈夫よ 私は貴方の側から離れない だから不安にならないで」

そう言つて優しく微笑んだ

綱吉「ミラ ありがとう」

ミラの言葉に綱吉の気持ちは落ち着いていった

ラクサス（ツナは時々不安そうにみせる時があるな　平和を知り、幸せを感じれば

感じるほどツナにとって、苦しめちまうかもしれないねえな

### 闘技場

カグラ「その覚悟が誠ものなれば受けて立つのが礼というもの　よかろう　参られよ」

カグラも承諾し賭けは成立する　会場がざわめく中ユキノは黄金の鍵を出して

ユキノ「開け　双魚宮の扉…ピスケス!!？」

二体の巨大な魚が召喚され、カグラに襲いかかるが上手く躲されてしまう　そこでユ

キノは2本目の鍵を出して

ユキノ「開け　天秤宮の扉…ライブラ!!？」

両手に天秤の皿を持った女性をする

ユキノ「ライブラ　標的の重力を変化」

ライブラ「了解」

ライブラはカグラの重力を操り、カグラの重力を重くして地面にめり込ませた

カグラ「くっ」

ユキノ「ピスケス」

それを狙ってピスケスが上空より襲い掛かるが、カグラはまたも躲してしまっ

『妖精の尻尾』B観覧席

綱吉（自分に掛かっていた重い重力に軽い重力を掛けて相殺のか 状況判断能力が極めて早い）

闘技場

ユキノ「私に開かせますか 十三番目の門を」

ユキノは黒い鍵を出して

ユキノ「開け 蛇遣い座の扉：オフィウクス!!」

巨大な蛇を召喚した しかしカグラはオフィウクスを見ても恐れることなく向かっていき

カグラ「怨刀 不倶戴天 抜かぬ太刀の型」

納刀したままオフィウクスを切り裂いた そしてそのままユキノの懐に入り

ユキノ「うそ・・・？」

カグラ「安い賭けをしたな 人魚は時に虎を喰う」

ユキノを斬り伏せた 倒れたユキノは驚き固まっていた

チャパテイ「し：しし：試合：終了：勝ったのは『人魚の踵』カグラ・ミカツチ!!」  
あまりの出来事に司会のチャパテイや観客も驚いていた

### 『妖精の尻尾』B観覧席

ミラ「こんな強い人がいたなんて」

ラクサス「納刀したままあの蛇を斬るなんてそうとうやるぞ あの女」

綱吉（決してユキノって人が弱かった訳じゃない カグラって人が強すぎたんだ それにあの剣技 エルザと同等か上をいってる 抜刀した更にヤバいだろうな）

各ギルドの者たちはカグラの強さを認識し警戒した

こうして大魔闘演舞 2日目終了した

2日目までの結果はこのようになった

一位 『大鴉の尻尾』 36 p t

二位 『剣咬の虎』 20 p t

三位 『人魚の踵』 19 p t

四位 『青い天馬』 17 pt

四位 『妖精の尻尾』 B 17 pt

五位 『蛇姫の鱗』 15 pt

六位 『四つ首の仔犬』 12 pt

六位 『妖精の尻尾』 A 12 pt

綱吉（一位は『大鴉の尻尾』が独走中か 残りは僅差で混戦中 まあまだ2日目焦ることはない 逆転のチャンスはやってくる）

その後Aチーム、Bチーム共『妖精の尻尾』の面々はまたBARに行つて宴会して騒ぎ、その後は自由行動となった

そのまま宿に行く者、まだ飲み食いする者、散歩する者、様々いた

綱吉はミラと共に宿に帰り、部屋に来たが

ミラ「あら？ ツナ何処に行くの？」

綱吉「ああ 少しその辺を走つてこようかと思つて」

ミラ「そう なら気をつけてね」

綱吉「分かつてるよ そんなに時間かけず戻ってくるから」

そう言つて綱吉は走り込みに行つた

綱吉が走っているとある店の前で足を止めた。それはショーウィンドウに展示されているウエディングドレスだった。

綱吉はウエディングドレスを見て昼間のことを思い出していた。

綱吉（結婚か。あつちの世界じゃ考えたこともなかつたな。全てを失つた俺がまた仲間を持ち、恋人が出来るなんて。全部ミラのおかげだな）

綱吉はウエディングドレスを着たミラを想像して赤くなつた。

綱吉（いつかミラにコレを着て貰うんだよな。凄いい、綺麗だろうな）とつ　いつまでも見てる訳には行かないな。そろそろ戻るか」

宿に戻ろうと走ろうと思つた時、ナツとユキノが目に入った。

綱吉「あれはナツと『剣咬の虎』のユキノさんか？　何をしてるんだ？」

綱吉はナツとユキノの元に行くことにした。

その頃宿にいるミラは

宿

ミラは部屋で本を読んで、綱吉を待っていた。その時ドアがノックされた。

ミラ「はあい（誰かしら？）」

ミラは気になりつつドアを開けた

ミラ「どちら様で・・・」

ミラの言葉は続かなかった 何故ならそこにいたのは

白蘭「やあ こんにちは♪」

白い悪魔がいて笑顔でこちらを見つめていたから

## 第25話

綱吉が2人の方へ行くとユキノが泣いていた

綱吉「ナツ 女の人を泣かせちゃ駄目だろう」

ナツ「なっ ち、違うって！」

ハッピー「あい！」

綱吉に怒られてナツとハッピーは慌てて否定する

ユキノ「そうですツナヨシ様 ナツ様とハッピー様は悪くありません」

綱吉「(・・・様付け)ならなんで泣いていたんですか」

ユキノ「それは・・・」

ユキノは全て話してくれた 大勢の人の前で裸にされたこと 紋章を消さねばなら

なかったこと 帰る場所を無くしたこと

ユキノは泣きながら説明してくれた

綱吉「たった一度の敗北でそこまでやるか・・・(腐れ外道がつ)」

ナツ「他のギルドだけど『同じ魔道士』としてなら分かるぞ 辱められて紋章消され

て悔しいよな 仲間を泣かせるギルドなんてそんなのギルドじゃねえ」



ナツは怒りから握り拳を作っていた

綱吉はへたり込んでいるユキノの側に行き片膝をついて同じ目線になる

綱吉「ユキノさん……」

するとナツは何処かへ行くこうとする 綱吉はナツの方を見ないまま

綱吉「……行くのか？」

ナツ「ああ」

綱吉「俺も行くのか？」

ナツ「要らねえよ 俺一人でもいい」

綱吉「そうか なら……無茶だけはするなよ」

ナツ「ああっ 分かってる」

ハッピー「ナツ 待ってよお！」

そう言つてナツは走つて、ハッピーは翼でナツを追いかけて行つた

ユキノ「あの、ナツ様とハッピー様はどちらへ？」

綱吉「ああ 2人は 正確にはナツですけど、用事があつて」

綱吉はユキノの手をとり立たせる

ユキノ「あ、ありがとうございます」

綱吉「いえ それより落ち着きましたか」

ユキノ「はい」

そう言ったがユキノの表情はまだ暗いままだった

綱吉「なら少し話してもしませんか？」

ユキノ「えっ」

綱吉「もちろん貴方がよければなんですけど」

ユキノ「はい 私は大丈夫ですけど」

綱吉「なら公園に行きましょう さっき来る途中公園を見かけました」  
そう言って綱吉とユキノは公園に向かった

宿

その頃宿では白蘭がミラの前に現れていた

ミラは白蘭を見るのは初めてだがすぐに分かった

ミラ（この人だっ この人が、白蘭っ）

白蘭「とりあえず部屋に入れてもらえる？」

ミラはすぐに臨戦態勢に入ったが

白蘭「ん？ どうしたのかな？」

ミラ「ッ!?？」

白蘭のたった一睨みでミラの戦意は粉々に打ち砕かれてしまった。全身は震え、死のイメージがしつかりと伝わってきた。

ミラ「(ふ、震えが、止まらな、い…せ、せめて皆んなに、このことを) あ…う…み、みん」

ガシツ

ミラ「むぐつ!!?」

ミラがなんとか声を出して仲間たちに伝えようとしたが、白蘭の左手で口を塞がれしまった。

ミラ「くっ」

白蘭「駄目だよ。声を出しちや」

白蘭は右手の人差し指を口元に持つていき静かにするよう伝える。

白蘭「それに僕の強さは分かるよね? 僕がその気になれば君なんて一瞬で殺せるし、この宿にいる君の仲間も一瞬で殺せる。仲間を呼ぶつてことはそう言うことではないのかな?」

ミラは涙目になりながら必死に首を横に振った。

白蘭「そう、いい娘だね。それじゃあ部屋に入ろうか」

白蘭はミラの口元を塞いだまま部屋の中へと入っていった。

部屋に入った白蘭はミラを押しえていた手を放す

ミラ「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

白蘭「さて自己紹介しておこうか 僕の名前は白蘭 君は確か：ミラって呼ばれてたね それじゃあミラちゃん 聞きたいことあるんだけどさ 君、綱吉君と随分仲良さそうに見えたけどひよつとして恋人？」

ミラ「え、ええ そうよ ツナと私は付き合ってるわ」

白蘭「そつかり 綱吉君があんな墮落しちゃったのは、やつぱり君のせいか」

顔は笑っていたが目は笑っておらずミラを睨みつけ、言葉にも怒りが込められていた  
ミラ「っ!?? な、何がしたいの？」

白蘭「綱吉君はね 鬼になっていてこそ綱吉君なんだよ 人の心を取り戻した綱吉君はね、綱吉君じゃないんだ 彼とまた戦うためにはまた鬼になつてもらわないといけないんだ」

ミラ「っ! なんでそんなにツナに執着するの!?? なんでそんなにツナのことを付け狙うの!?? ツナが貴方に一体何をしたって言うの!??」

ミラは白蘭の言葉に取り乱しながらも白蘭に問い掛けた そして返ってきた言葉は

白蘭「楽しいんだよ」

ミラ「えっ」

白蘭「彼はね 僕に楽しさ、喜びを教えてくれたんだ 僕はね 退屈だったんだ だ  
から戦争仕掛けたんだ だけど全然張り合いが無くてさ次々制圧しちゃったり、降伏し  
てきたりでつまらなかつたんだよねえ そんな時現れたのが彼だったんだよ 鬼と  
なった彼との勝負は本当に楽しかった」

ミラ「(た、楽しいから・・・？ それに退屈だったから戦争をしたですって・・・)  
ま、まさかそんな理由で？」

ミラは白蘭の理由を聞いて怒りが込み上げてきた

白蘭「『そんな』なんて酷いなあ 僕にとつては大事なことなんだよ」

ミラ「貴方は命をなんだと思ってるの!?!」

白蘭「別に何も 僕にとつてただのゲームの駒と一緒にだから だから誰が死んだつて  
別にいいの あつ でもユニちゃんは別かな」

ミラ「・・・どういうこと」

白蘭「僕はある一つのパラレルワールドを除いて全てを支配した だけどそれは僕の  
望んだものとは少し違った」

そう言つて白蘭は右手を上げて中指にはめてるリングを見せる

白蘭「綱吉君のボンゴリング、ユニちゃんのおしゃぶり、そして僕のマーレリング  
この三種を全て揃えると特別な力が宿ると言われてたんだ だけど三種揃えても全

然力が解放されなくてね」

ミラ「(全て揃えて? ツナのリングとユニちゃんのおしやぶりを…)待つて 全て揃えたつて言つたけど、ツナとユニちゃんは・・・」

白蘭「うん もちろん殺したよ♪」

ミラ「ツ!!?」

白蘭「だけどユニちゃんには驚いちやつた まさか民間人を守るために盾になるなんてね 呆れちやつたよ 見ず知らずの他人を守るなんて馬鹿だよね」

ミラ「・・・」

ミラは歯を食いしばつて聞いていた

白蘭「ユニちゃんにはさ その三種の力を解放出来る能力があつてね それが分かつたのはユニちゃんを殺した後でさ 凄く後悔したよ もし分かつていれば生かしたのに」

パアン!

ミラは我慢出来ず白蘭の頬を叩いた

たとえ短い間でも「友達」と言うべきユニを 民間人を守ろうとした誇りを侮辱されたのが許せず、白蘭の恐怖を受けながらも勇気を出して叩いたのだ

ミラ「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

白蘭は最初ポカンとしていたが、すぐに笑みを浮かべ

白蘭「へえ 僕にこんなことする女性は君が初めてだよ」

白蘭はミラの首を掴み壁に押しつけ、手を放す

ミラ「うぐっ・・・ゲホッ・・・ゲホッ・・・」

白蘭はミラの顎を指で軽く持ち上げ、ミラの顔を見つめた

ミラ「うつ・・・」

白蘭「ふくん 綱吉君やユニちゃんとはまた違った強い眼をしてるね だから綱吉君は人の心を取り戻しちゃったのかな なら恋人の君が死んじゃったら綱吉君はどうなっちゃうんだろうね？」

ミラ「っ!?」

ミラは再び恐怖を感じた ニコニコと笑みを浮かべながら楽しそうに話すも命のことなど全くなんとも思わない白蘭に

ミラ（ツ、ツナ・・・）

会わせてはいけない2人 そう分かっているてもミラは無意識に綱吉の名を心の中で呼ばざるえなかつた

綱吉はユキノと共に公園に来ていた。2人はベンチに座って話しをしていた。

綱吉「実は俺も一度居場所を無くしているんです」

ユキノ「えっ」

綱吉『妖精の尻尾』に入る前俺は、組織のボスでした。毎日が平和で楽しかった。だけど突然敵がやってきて戦争になり仲間たちは・・・全員死にました」

ユキノ「そ、そんな・・・な、ならどうして笑っていられるんですか。仲間が死んだのに」

綱吉「始めは死んでもいいと思いました。でも、そんな考えを間違ってるって教えてくれる人が現れて。俺に居場所をくれたんです。今俺がこうしていられるのもその人のおかげなんです。でもだからといって死んだ仲間たちを忘れたことは一度もありません。仲間たちのことは今でも思っています」

綱吉は自分の胸に手を当てる

綱吉「こんな俺が再び仲間を持てたんです。貴方にだってまた仲間ができますよ」

ユキノ「そんな無理ですよ。私には・・・」

綱吉「貴方はもつと自分に自信を持つべきだ。いずれ貴方の前に仲間として向かい入る人達が来るはず」

ユキノ「なんでそんなこと分かるんですか？」



綱吉「俺の勘は良く当たるんですよっ」

ユキノ「プフツ か、勘ですか フフツ」

綱吉の自信満々な答えにユキノは笑ってしまう

綱吉「やつと笑ってくれましたね」

ユキノ「えっ あっ」

ユキノは自分が笑っていたことに気がつく

綱吉「でも勘のことは嘘じゃないですからねっ」

ユキノ「分かりました フフツ」

2人が笑っていると綱吉の頭の中に

『ツナ』

綱吉「ツナ!? (ミラ?)」

ミラの声が聞こえてきた

綱吉は立ち上がりある方向を見る それは宿のある方角だった

ユキノ「ツ、ツナヨシ様?」

ユキノは綱吉が突然立ち上がったことに驚いてしまう

綱吉「すみません ユキノさん! 急ぎ戻らなくてはならなくなりました」

ユキノ「い、いえ 私のためにありがとうございました」

綱吉は走り出そうとしたが止まって、振り返り

綱吉「最後に、貴方は新しい仲間と本当の絆を結べます だからそれまで待つててくださいいっ」

綱吉はそう言つて地を蹴り炎で飛んでいった

ユキノ「ツナヨシ様 ありがとうございました」

ユキノはどンドン小さくなって見えなくなつていく綱吉に感謝の言葉を述べた

綱吉（突然ミラのことを頭によぎつた ミラの身に何かあつたのか!?? クソツ!）

綱吉は猛スピードで宿を目指した

宿

白蘭「君の死んだ姿を見たら綱吉君はどんな顔をするだろうね・・・それとも僕のものになつてみる?」

ミラ「えっ?」

そう言つて白蘭はミラの顎を指で持ち上げたまま、顔を近づけ口づけしようとしてきた

ミラ「っ・・・やめてっ!」

ミラは両手で白蘭の身体を押し、数歩下がらせる

白蘭「あらら 嫌われちゃった♪ まあ別にいいけどね ホントはね 今日ミラちゃんを殺すか陵辱して綱吉君を鬼にしようかと思つてたんだけど、僕を叩いた勇氣に免じてそれは無しにしてあげる 代わり提案があるんだけど」

殺す、陵辱という言葉にミラは身を震え上がらせた

ミラ「提案つて……」

白蘭「綱吉君と別れてギルドから追い出してくれないかな？」

ミラ「な、何を言つてるの!?! そんなこと出来る訳無いでしょっ!」

白蘭「これは君のためであるんだよ? 君だつて綱吉君の鬼になつた姿なんて見たくないだろう」

ミラ「ツナは鬼にならないし、私がならせないわ!」

白蘭「あっそう せっかく提案してあげたのに、それじゃあミラちゃんは覚悟はあつてことね」

白蘭はミラの両手首を右手で掴み、持ち上げる

ミラ「ぐっ……」

白蘭は左手にコインを一枚持つ

白蘭「表が出たら殺す 裏が出たら……分かるよね」

ミラ（裏が出たら・・・私は・・・）

ミラは殺されるのも恐ろしかったが、裏の方が死よりも恐ろしかった

白蘭はコイントスをしてコインは空中へ高く飛び、そして床に落ちてきた

白蘭「さて、どっちが出るかな？」

コインは床に落ちて回転して、そして止まった。コインは裏面が上にきていた

白蘭「裏が出ちゃったね、それじゃあ・・・陵辱ね」

白蘭はミラの服の襟元を掴み、引き裂く

ミラ「きゃあああっ！」

服を裂かれミラの色白の肌が露わになる

白蘭「そんなに悲鳴なんて上げないでよ、覚悟してたんでしょ」

ミラ「うっ・・・ううっ・・・」

ミラは恐怖から泣き出してしまった

白蘭「泣いたってやめないよ、僕の提案をのまなかった君が悪いんだ」

白蘭はミラに口づけしてこようとしたが、途中で止める

白蘭（綱吉君か、もの凄いスピードでこっちに來ている）

白蘭は掴んでいた手を放すとミラは膝から崩れた

白蘭「君は運がいいね、もうすぐ愛しの王子様が來てくれるよ、まあ今回は特別にこ

こまでにしといてあげるよ だけどね」

白蘭はミラの顎を指で持ち上げ、泣き顔を見る

白蘭「君の存在は綱吉君にとって良くも悪くも大き過ぎるんだよ いずれ君は綱吉君を鬼にする時が来る 断言してもいい 嫌な思いをしたくなかつたらとつとと別れることだね」

白蘭はそう言つて扉から出ていった

ミラ「ぐっ……ううっ……うっ……」

部屋にはミラの泣き声だけが聞こえた

ミラの中には悔しさ、恐怖など様々な感情が渦巻いていた

それから数分後、綱吉は宿に到着し急いで部屋を指した

綱吉は部屋の扉を乱暴に開けた

綱吉「ミラッ！ 遅れてすまない！」

しかしミラの返事はない

綱吉「ミラ？」

綱吉が部屋の方へ行くと、ミラがへたり込んで泣いていた それを見た綱吉は急いで

駆け寄った

綱吉「ミラッ!? どうしたんだ!? 何があつた!」

ミラ「ううっ・・・ツナ・・・うああああ! ああああああああ!」

綱吉がミラの側に行き声を掛けるとミラは綱吉に抱き着き、声をあげて泣いた

綱吉「ミラッ ごめんな! ごめんな! もつと早く帰っていれぼつ」

綱吉がもつとも驚いたのはミラが泣いていたことでも震えていたことでもなく、服を引き裂かれていたこと それはつまり恋人であるミラが・・・

綱吉はミラを抱きしめ返し涙を流した

綱吉「怖かつたらう 助けてやれずごめんなあ」

綱吉はミラの身に起きたことを察して、安易にロードワークに行かず一緒に居れば良かったと後悔と自分と犯人に怒りを抱いていた

綱吉（何処のどいつだ ふざけやがって 必ず見つけ出してぶちのめしてやるつ）

綱吉の心に赤黒い炎が燃え上がった

白蘭は建物の屋上から綱吉の怒りの波動を感じとつていた

白蘭「そう そうだよ綱吉君 それでいいんだ もつと怒って鬼になるんだ そう

でなきや君じゃないんだから」

白蘭は背中から光の翼を出して闇夜に飛んでいった

## 第26話

声をあげて泣いていたミラだったが、綱吉に抱きしめられ声を掛けられたことよつて落ちついてきた

綱吉「少し、落ち着いたか」

ミラ「・・・うん」

ミラは涙声で答えた

綱吉「それじゃあ マスターや皆にこのことを伝えて来るから」

綱吉はミラに背を向けて歩き出そうとするとミラは綱吉の手を掴んだ

綱吉「ミラ？」

ミラ「・・・皆には言わないで」

綱吉「何を言ってるんだ!?!? これはもう俺やミラだけで解決できる問題じゃないんだぞ! 皆の力が必要なんだ!」

ミラ「分かっている、分かっているわ・・・でも、お願い」

綱吉「・・・ミラ・・・分かった、皆には話さない だけど一体何があったんだ?」

ミラ「・・・」



ミラは俯いたままで喋らない

綱吉「・・・喋れないか・・・」

ミラ「ごめんなさい・・・」

ミラは再び涙を流した

綱吉「分かった もうこのことは聞かない だから涙を拭いて」

綱吉はハンカチでミラの涙を拭いた

ミラ「ツナ・・・ありがとう」

綱吉「あ、あと その・・・」

ミラ「? どうしたの?」

綱吉「服、なんだけど・・・」

綱吉に言われミラは自身の状態を思い出す 自分の服は白蘭に裂かれて下着が露わになっている ミラは慌てて裂かれた部分を持って隠し

ミラ「きやつ!?? ごめんなさい! すぐ着替えてくるわ!」

脱衣所へ向かった

残った綱吉は部屋を見渡す

綱吉(争った形跡はほぼない つまりミラは抵抗出来ないまま暴行されたということ)

か ミラは決して弱くはないむしろ強い方の部類に入る にも関わらずミラは抵抗出来なかった おそらく闘気や殺気をぶつけられたんだろう 達人クラスの闘気をぶつけられると何もできなくなるというからな 相手は余裕でミラ以上の実力者、か・・・）  
綱吉は部屋の状態から分析をしていた

綱吉（ミラが喋れないというのは暴行されショックだったというのもあるだろうが、何か別にあるような気もする 別の何か 一体なんなのか・・・）

綱吉が考えているとミラが着替えて戻ってきた

ミラ「ツナ ごめんね」

綱吉「いや いいんだ 今日はもう寝よう」

綱吉とミラはシャワーを浴びて、パジャマに着替えた

綱吉がベッドに入ろうとしたが、ミラがベッドに入ろうしないで立ったままできるとに気づく

綱吉「ミラ どうしたんだ？ どこか痛むのか？」

ミラ「い、いいえっ そうじゃないの！ ただ、その・・・」

ミラは口籠もってしまう

綱吉「どうした？ 言ってみてくれ 俺にやれることならなんだってやるっ」

ミラ「じゃ、じゃあ・・・ツナと一緒にベッドで寝ていい？」

綱吉「えっ?」

ミラ「ツナと一緒に寝たいの……でも信じて! やましいことなんて何にも考えてないわ! ただあんなことがあって……凄く不安で、怖くて……でもツナと一緒にいれば安心出来ると思って」

ミラは言葉の最後の方になると俯いてしまった

綱吉「いいよ 寝よう」

綱吉は優しく微笑んで答えた

ミラ「いいの?」

綱吉「もちろん それでミラの不安が取り除けるなら それにやましい気持ちはないんでしょ?」

ミラ「うん」

綱吉「なら構わないよ 俺もやましい気持ちなんて持たないから 何よりそういうことをするのはもっと大人になってからだしねっ」

ミラ「ふふっ ええ そうね」

綱吉の答えにミラは笑顔を見せた ミラは自分のベッドから枕を持って来て綱吉のベッドに入る

ミラ「それじゃあ 失礼します」

綱吉「ああ どうぞ」

ミラがベッドに入つて来て、掛け布団を掛け直すと

ミラ「ツナ ごめんね 狭くなっちゃて」

綱吉「そんなことないさ それに、安心できるんだろ？」

ミラ「ええ ツナがすぐ近くにいます」

ミラは笑顔を見せていたが、頭の中に白蘭から言われた言葉が響いた

『君はいずれ綱吉君を鬼にする』

『嫌な思いをしたくないならとつとと別れることだね』

ミラ（私がツナを、鬼に…… でもツナと別れるなんて）

綱吉はミラの様子を見て自分の胸に引き寄せた

ミラ「ツ、ツナ!?」

綱吉「大丈夫 俺が守るから もう傷つけさせないから だから、安心して」

ミラ「ツナ ありがとう」

ミラは抱きしめられ綱吉の優しさから涙を流した

ミラは改めて綱吉を愛していると実感した。ミラにとって綱吉は大切な存在。もはや別れられるはずがなかったのだ。そしてそれは逆も然り。綱吉にとってもミラは何よりも大切な存在となっていた。

2人が別れるなどあり得ないほど互いを愛していた。

だが人は愛を覚えると憎しみを覚える。愛が大きければ大きいほどに憎しみもまた大きくなる。ミラが白蘭に言われたことの意味を知るのはまだ先である。

ミラ「もう大丈夫よ ツナ」

綱吉「うん 分かった」

綱吉は手を離し、ミラは元の位置に戻った。

綱吉「なんだかあの時とは逆になっちゃったな」

ミラ「あの時？」

綱吉「入院してる時、俺を抱きしめてくれたろ」

ミラ「そうだったわね あの時のツナは少し捻くれてたかしら フフツ」

綱吉「あの時はしようがなかったんだって でもミラのお陰で今の俺がいる ミラに出会えて本当に良かった」

ミラ「私も ツナに出会えて良かったわ」

綱吉はミラの頬に手を当てる

綱吉「ミラのことは何があっても守るから」

ミラ「ありがとう・・・」

綱吉「それじゃあ おやすみ」

ミラ「ええ おやすみなさい」

2人は眠りについた

そして朝になり、ミラが目を覚ますと

ミラ「ツッ!?（ええええええええええっ!）」

寝相で綱吉がミラの目の前まで来て寝ていた

ミラ「（ち、近づい! ツナの寝顔が目の前に・・・ってそうじゃないわっ とにかく起きないと）えっ?」

ミラは起きようと思ったが起きれないことに気づいた

ミラ「そ、そんな ツナ手を離して・・・」

綱吉はミラのパジャマの腕部分を掴んでいたのだ

綱吉「スウー スウー」

ミラ「何気持ち良さそうに寝てるのっ 早く起きなさいっ」

しかし中々起きない それに綱吉の無防備な姿を見てミラはある意味理性の限界を  
超えそうになっていた

ミラ「落ち着くのよ 落ち着くの ツナっ いい加減しないと怒るわよっ って  
ちよっ」

綱吉は服を引つ張つてミラの顔を近づけさせた

ミラ「ちよ、ちよ、ちよっとツナっ 駄目よ 朝からそんな!?」

しかしどンドン近づいてくる綱吉の顔

ミラ「っツ!? 駄目ーッ!」

綱吉「ぐはっ」

ミラは両手で綱吉のことを突き飛ばした 突き飛ばされた綱吉はそのままベッドか  
ら転げ落ちた

ミラ「はあ・・・はあ・・・」

ミラは胸を押さえ呼吸を整えていた 心臓の鼓動が早くなっていると感じた そう  
していると綱吉がベッドに手を掛け起き上がってきた

綱吉「ああゝ 何か凄い痛いし、何故かベッドから落ちてるんだけど」

ミラ「寝相が悪いんでしょっ!」

綱吉「・・・何か怒ってない？」

ミラ「別になつ 普通よ！」

綱吉（いや、怒ってんじゃないやん 起きたらベッドから落ちてるし、ミラは機嫌悪いしわけわからん）

あくまで寝ていた時のことなので、分からないのはしょうがないことなのだが

綱吉「なあ ミラ」

ミラ「・・・何？」

綱吉「顔赤いけど熱でもあるんじゃないか？」

ミラ「うっ このあんぼんたんっ!!」

綱吉「ふがっ」

ミラは綱吉に枕を投げつけた 綱吉は枕をぶつけられながら、ああ 前にもこんなことあつたなあと思つたとかなんとか

ミラ「もう 馬鹿っ」

ミラは着替えのため脱衣所へ向かつた ミラは着替えながら綱吉の寝顔を思い出し

ミラ（ツナの寝顔を可愛いかつたなあ ふふっ）

怒っていたが満更でもない様子だった

綱吉（まあ元気になつたから良しとみるべきか？ 犯人のことは、ミラがああ言つて



いる以上皆には言えない 見つけるにしても手掛かり無いし、魔力の残留は少な過ぎて感知出来ないし、何よりミラから離れるわけにはいかない) 八方塞がりだな全くはあ」

その後綱吉も着替えて、朝食を済ませて皆と一緒に会場に向かった

大魔闘演舞 3日目

『妖精の尻尾』B観覧席

綱吉「さつ3日目! 今日も頑張つて行こう!」

ミラ「ええ そうね」

綱吉とミラは皆に悟られぬよういつも通りやった

ガジル「相変わらず元気な野郎だ」

ジュビア「まあ ツナさんの元気は必要ですからね」

ラクサス「・・・」

チャパティ「3日目の競技は『伏魔殿』! 参加人数は各ギルド一名です」

『妖精の尻尾』A観覧席

エルザ「私が行こう」

ルーシイ「頑張ってね エルザ」

ウエンデイ「フアイトです！」

『人魚の踵』観覧席

ミリアーナ「エルちゃんが出るなら私に行かせてカグラちゃん」  
カグラ「許可しよう」

『大鴉の尻尾』観覧席

アレクセイ「評議員の前だ 余計なことはするなよ オーブラ」

『四つ首の仔犬』

バツカス「よし ノバリー行ってこいっ」

ノバリー「オスツ」

『青い天馬』観覧席

ヒビキ「天馬からは僕が行こう」

『劍咬の虎』観覧席

オルガ「俺が行く 全員まとめて黒雷のチリにしてやる」  
ミネルバ「どのような競技か分からぬというのにか？」  
ルーファス「フフツ」

『蛇姫の鱗』観覧席

シエリア「ジュラさんが出るの？」  
リオン「オババの命令じゃ仕方ない」  
ジュラ「うむ 任せておけ」

『妖精の尻尾』B 観覧席

綱吉「(伏魔殿・・・城、いや神殿だつたしか となると神殿の中で戦う感じになるのかな？ 神殿内部がどういいう状況にもよるけど) 今回俺行きたいんだけどいい？ ラクサスとミラまだ競技パート出てないけど」

ミラ「大丈夫よ」

ラクサス「気にせず行ってこい」

綱吉「良しっ それじゃあ行って来る！ (ミラ、元気になったと言ってもまだ心の傷

は深い 少しでも元気付けなきゃな)」

綱吉はやる気十分で闘技場へ向かおうとしたがラクサスが近づいて小声で話し掛け  
てきた

ラクサス「待て ツナ」

綱吉「どうした？ ラクサス」

ラクサス「お前とミラ 何かあつたのか？」

綱吉「・・・」

綱吉は陽気な表情から曇らせてしまふ

ラクサス「・・・あつたんだな それを言えねえってことは何か理由があるんだろ  
なら聞かねえが あんま気負い過ぎんなよ」

綱吉「分かっているよっ その時が来たら頼らせてもらおうからっ」

綱吉は笑つて返したが、ラクサスには綱吉の笑顔が心配掛けまいと無理して笑つてい  
るようで、見てて辛かった

ラクサス「・・・ああ 任せろ」

綱吉「わっ ちよっ なんだよお」

ラクサスは綱吉の頭をクシヤクシヤと乱暴に撫でた

ラクサス「っし 行つてこい！」  
バシンっ！

ラクサスは綱吉の背中を叩いた

綱吉「く痛っ！ まったく力入れすぎだよっ」

綱吉は文句を言いながら、闘技場へ向かった

ラクサスが綱吉を見送つて戻つてくると

ラクサス「どうした？」

ジユビア「なんだかラクサスさんとツナさんつて仲良いですね」

ラクサス「ああ ほつとけ無くてな 世話の焼ける奴だよ 彼奴は」

ミラ「そうね いつも無茶をして頑張つて心配掛けさせて それがツナなただけ  
ど・・・」

ガジル「それで倒れても仕方ねえぜ 全く」

ジユビア「もつと私たちのこと頼つていいんですけど」

4人の目に映る綱吉の後ろ姿はどこか危なげに映つてみえた

## 第27話

闘技場に着くと既に綱吉以外揃っていた

綱吉「おつ エルザ！ それにジユラさんも！」

エルザ「お前が来たか ツナ」

ジユラ「おお ツナヨシ またお主と戦えるとはのお」

綱吉「今度は負けませんよっ」

エルザ「2人には悪いが勝つのは私だ」

ジユラ「いやいや 儂も負けるつもりはないぞ」

3人が話していると、オルガが割り込んで来て

オルガ「盛り上がっているとこ悪いが、勝つのはこの俺だ お前らは2位争いでもしてな」

カチンッ

綱吉「（・・・流石に流せないな）オルガさん 今のはどういう意味でしょう？」

オルガ「あ？ なんだ分からなかったか？ お前らは敵じゃねえってそう言ったんだよっ」

エルザ「っ きさまっ」

エルザがオルガに詰め寄ろうとするが綱吉が手で制す

綱吉「なるほど では俺からも言わせてもらいますが、過信が過ぎると足元を掬われますよ」

オルガ「ほう 言うじゃねえかクソガキ なら俺より上になれんだろうなあ？」

綱吉「もちろん なれますよ」

綱吉は堂々と答えた

オルガ「はっ 言うねえ それじゃあ楽しみにしてるぜっ」

オルガはそう言っつて離れていった

綱吉「俺、あの人嫌い」

エルザ「安心しろ 私も嫌いになった」

ジユラ「これこれ そう言うことを言うものでないぞ まあ儂も思うところはあつたが」

皆で話していると、カボチャのマスコットのマトー君がやってきて競技の説明をするため巨大な伏魔殿が出現した

この競技は、神殿の中にいるモンスターと戦うようだ モンスターの数は全部で10

0体 モンスターにはS・A・B・C・Dの五段階の戦闘力が設定されている クラスが上がるごとに戦闘力が倍々に上がっていく

モンスターのクラスに関係なく撃破したモンスターの数でポイントがはいる 参加者は順番に戦うモンスターの数を選択する モンスターのクラスは選択した数に関係なくランダムに出て来る

モンスターの数を選択し戦う、此れを繰り返しモンスターの数が0 又は参加者全員の魔力が0になった時点で競技終了

順番を決めるためクジを引くこととなった

綱吉（この競技1番がもつとも有利、のはずなんだけど なんてだろ別に1番じゃなくてもいいと思ってる うーん なんでだ？）

綱吉は1番の位置は分かっていたが、勘によって1番でなくてもいいという思い疑問を持っていった

綱吉（まあ 悩んでもしょうがないか 1番じゃなくてもいいなら別に最後に引いたって変わらないし）

綱吉は最後にクジを引くことにした

綱吉（残ったのは・・・8番か まっ別にいいんだけど）



順番はこのようになった

一番手 エルザ

二番手 ミリアーナ

三番手 ノバリー

四番手 ヒビキ

五番手 オーブラ

六番手 オルガ

七番手 ジュラ

八番手 ツナヨシ

エルザ「一番か・・・この競技くじ運で全て勝敗が決まるかと思っていたが・・・」  
マトー君「くじ運で？ い、いやどうでしょう？ 戦う順番よりペース配分と状況判断の方が大切なゲームですよ」

エルザ「いや・・・もはやゲームにならない」

マトー君「えっ？」

エルザ「100体全て私が相手をする」

エルザの宣言に参加者だけでなく、他のギルドの魔道士や観客も驚いた。ナツとグレイはエルザならば納得と笑っていた。

綱吉（まあ・・・らしいといえはエルザらしいか・・・）

マトー君「ム、無茶ですよ!! 1人で全滅出来るよう設定されてません!」

エルザ「構わん」

エルザはマトー君の警告を無視して神殿に入つて行く

綱吉（確かにエルザでも厳しい戦いになる ても・・・）

レヴィ『大魔闘演舞 3日目 伏魔殿 この日の事は私は私はずっと忘れないと思う

キズだらけながら 地に堕ちたはずの妖精が舞う “妖精女王” ここにあり』

エルザはボロボロになりながらも最後の一体、Sクラスモンスターを倒した

そして右手に持った刀を高々と上げた

レヴィ『それはまるで・・・凛と咲き誇る緋色の花』

チャパティ「し・・・しし・・・信じられません!! なんとたった1人で100体にモンスターを全滅させてしまったーっ!!! これが7年前最強と言われていたギルドの真の力なのかっ!!? 『妖精の尻尾』Aエルザ・スカーレット 圧勝!! 文句なしの大

勝利!!」

エルザの偉業に会場は大歓声に包まれた

エルザが闘技場に戻ってくると、ナツ達がやって来た

ナツ「エルザーっ!」

ウエンデイ「エルザさん」

ナツ達はエルザの側に駆け寄る

グレイ「やっぱすげーよ」

ナツ「あとで俺と勝負しろ」

ルーシイ「あたし感動しちゃった」

ウエンデイ「私・・・もう胸がいつぱいで」

エルザ「オイオイ まだ優勝したわけじゃないぞ」

それは当然『妖精の尻尾』応援席でも大盛り上がりであった

『剣咬の虎』観覧席

ミネルバ「面白い・・・口先だけではないという事か『妖精の尻尾』」

ミネルバは歯応えのある敵が現れたことに不敵な笑みを浮かべた

『人魚の踵』観覧席

カグラ「エルザ・スカーレット ジェラールをよく知る者」

カグラは静かにエルザのことを見つめていた

―闘技場

ミリアーナ「エルちゃん やっぱり最強だねー」

ジユラ「見事」

オルガ「気に入らねえな」

オーブラ「・・・」

綱吉「流石としか言いようがないね（でも一位獲られちゃった）」

その後残りのチームにも順位をつけなければならなかったため、MPFという物が用意された

マトー君「魔力測定器『MPF』 この装置に魔力をぶつけることで魔力が数値として表示されます その数値が高い順に順位をつけようと思います」

ヒビキ「これはちよつと分が悪いかな」

オルガ「力比べか 分かり易くていいぜっ！」

綱吉「なるほど (なら．．．)」

綱吉は説明を聞いて少し離れる

ジユラ「む ツナヨシ どうした？」

綱吉「出番が来るまでウォーミングアップを」

そう言つて綱吉はシャドーを始めた

### 『妖精の尻尾』 B 観覧席

ミラ「あら ツナつたらシャドーを始めたわよう？」

ラクサス「彼奴は魔道士であり格闘家でもあるからな いきなりギアをトップにはもつていけない だからウォーミングアップをやってるんだろう」

やる順番はクジを引いた順にやることとなつた

ミリアーナ「じゃあ私からだね 行つくよー キトウンブラスト!!」

ピピツ『3 6 5』

チャパティ「比べる基準がないとこの数値が高いかどうか分かりませんね」

数値が表示されたがこの数値が高いのか低いのか観客は分からずざわめいていた  
しかしゲストで来ていた評議員のラハールの説明によるとこの数値は部隊長を任せ  
られるレベルだという

チャパティ「続いて『四つ首の仔犬』ノバリー」

ピピツ『1 2 4』

ノバリー「フオ〜」

チャパティ「数値は124ちよつと低いか」

ヒビキ「僕の番だね」

ピピツ『9 5』

ヒビキ「ああ・・・なんてことだ」

ヒビキはシヨツクのあまり両膝をついて泣いていた

チャパティ「続いては『大鴉の尻尾』オーブラ」

しかしオーブラは自身で攻撃せず、肩にいる使い魔に攻撃させた

ピピツ『4』

チャパティ「うーん これは残念！」

ここでシャドーをしていた綱吉の動きに変化が訪れる

「なあ 彼奴の動き早くなってるないか？」

「ああ さっきまでは普通のスピードだったのに」

「どんどん早くなってる!!？」

綱吉（良しっ 大分身体が温ってきた）

綱吉の身体は少しずつギアを上げていつていた

4人終わった時点でミリアーナが一位だった

ミリアーナ「やったー！ 私が1番だ！みゃー」

オルガ「さて そいつはどうかかな」

ミリアーナが喜んでいるとオルガが力強く歩いて来てMPFの前に立った

オルガ「120mm黒雷砲!!??!!？」

ピピッ『3 8 2 5』

チャパティ「さ・・・3825」

ミリアーナ「ええーっ！私の10倍ー!!？」

『妖精の尻尾』A 観覧席

ナツ「な、ーっ!!？」

グレイ「なんじゃそりゃーっ！」

三千越えという数値にナツもグレイも驚きを隠せなかった

『妖精の尻尾』B 観覧席

ラクサス「フッ（面白え そう来なくちやな）

ラクサスは同じ雷魔法を使う者として面白いと不敵に笑った

オルガ「どうだっ！ ツナヨシ！ 俺様の黒雷はよお」

綱吉「えっ？ ごめんなさい 見てませんでした」

オルガは綱吉に威張り散らしたかったが、綱吉はシャドーに集中していたため見ていなかった

オルガ「あああん！ 見とけよ teme エ!!」

綱吉「だつてウオーミングアップしてましたし・・・」

オルガ「teme エええ!!」



2人が言い争いをしてる中、ジユラはMPFへと向かっていく

チャパテイ「聖十のジユラはこの数値を越せるかどうか注目されます」

ジユラ「本気でやってもよいのかな」

マトー君「もちろんカボ」

ジユラはMPFの前に立つ

ジユラ「鳴動富嶽!!!」

ピピツ『8 5 4 4』

『妖精の尻尾』A観覧席

ナツ「何ーっ!?」

グレイ「オツサン おかしいだろそれーっ!?」

エルザ「流石・・・の一言だな」

オルガ「は？」

綱吉「すげ〜（あれが俺に喰らわせた技か・・・）」

2人もジユラの数値に言い争いをやめ、オルガは驚き冷や汗をかいて

綱吉も素直に

驚いていた

チャパティ「こ……これはMPF 最高記録更新!!? やはり聖十の称号は伊達じゃなーい!!?」

ジユラの出した数値に観客は沸き立っていた

チャパティ「さあ 最後の挑戦者は『妖精の尻尾』B ツナヨシ・サワダ 一日目にはジユラと引き分けた彼ですが、果たして今回はどうなるのか」

綱吉「良しっ 出番だ!」

綱吉はMPFに近づいて行く

綱吉「近づいて攻撃してもいいんですよね?」

マトー君「はい 構いませんよ」

綱吉「あつ あともう一つ もしアレ壊しちゃっても失格にはなりませんよね?」  
マトー君「こ、壊す? い、いえそのような事はありませんが……というより今まで壊した者など見たことがありますよ」

綱吉「そうですね それは良かったです」

綱吉はそれを聞いて笑みを浮かべ 額に炎を灯し手袋をグローブに変化させMPF

の真前に立ち構えをとった

綱吉「スウー ハアー スウー ハアー」

綱吉は構えを取りつつ呼吸を整えて、昔のことを思い出していた

――回想――

綱吉「必殺技？」

リボーン「そうだ 大分ボクシングもムエタイも形になってきたからな ここらで相手を一撃で倒せる必殺技を覚える ツナ ある程度やつてみて “拳” と “蹴” どっちがしつくりきた？」

綱吉「そうだな やっぱり “拳” かな」

綱吉はそう言つて空中にパンチをする

リボーン「そうか ならこれからお前は最強ストリートを会得してもらう もちろん今まで通りの特訓はそのままに必殺技の特訓をするからな」

綱吉「分かつてるよ それで何をすればいい？」

リボーン「ついて来い」

リボーンに案内されて行くと、そこは河原で一本の荒縄が巻かれた鉄柱が立っていた  
リボーン「お前にはコイツを殴ってもらう」

綱吉「これ・・・鉄柱だぞ」

リボーン「ああ 知ってる まさか優しい特訓とでも思ったか？ 必殺技を会得するんだぞ これくらいは当然だ」

綱吉「ふっ・・・だな」

リボーン「特訓には」

綱吉「死ぬ気の炎は使わない だろっ」

リボーン「ああ だが代わりにコイツを巻いていいぞ」

リボーンはバンテージを投げ渡す

綱吉「良しっ」

綱吉のバンテージを巻いていく 準備ができた綱吉は構えを取り

綱吉「だあっ！」

ガツウン！

鈍い音が響く

綱吉「っっ い・・・ってっ!?」

綱吉は右手を押さえる

リボーン「・・・どうする？ やめるか？」

綱吉「やめる？ 俺は負けるのも逃げるのも大嫌いになったんだよ!!」

そう言つてまた鉄柱に拳を叩き込んだ

それから月日が経ち

リボーン「今日は場所を変えるぞ」

そう言われリボーンについて行くと巨大な岩があつた

リボーン「コイツは鉄鉱石だ　そう簡単には砕けない　お前にはコイツを砕いてもらう」

綱吉「・・・本気かよ」

綱吉は冷や汗をかいた

リボーン「流石に素手でコイツはキツイからな　死ぬ気の炎を使つていいぞ」

綱吉は額に炎を灯し、グローブを着ける　そして大岩の前に立つ

綱吉「スウーハアースウーハアー（落ち着け　呼吸を整えろ　意識を一点に集中　構えを崩すな）

綱吉は右腕を振り上げ打ち込んだ

綱吉（打つ!!!）

ドゴオオオオオン!!

あまりの衝撃に大岩は崩れ落ちていく　綱吉は崩れた岩と右腕を見て未だに信じら

れなかった

リボーンはそれを見て笑みを浮かべる

リボーン「やれば出来るじゃねーか」

綱吉「なんとかな」

綱吉もそれに応えるように笑みを浮かべる

綱吉の最強の拳が誕生した瞬間である

――回想終了――

今綱吉は観客の歓声など耳に入っていないかった その研ぎ澄まされた集中力で打ち込むべき一点を見ていた

右腕を振りかぶり

綱吉（神の・・・）

打ち込んだ

綱吉（拳!!!）

ズドオオオン!!

綱吉は打ち込んだ態勢のまま静止している MPF がショットし始める

バチバチツ バチバチツ ジジツ 『9 9 9 9』  
するとMPFに亀裂が走り

ピシツ・・・ピシツ・・・パキパキツ・・・

そして

ガシャアアアン!!

MPFは音を立てて崩れていった

チャパテイ「きゅ、9 9 9 ……な……なな、何とMPFを殴り壊したーっ

!?」

観客 「「「ええーっ!?」」」

『妖精の尻尾』A観覧席

ナツ・グレイ「何ーっ!!」

ルーシイ「う、嘘でしょっ!?」 殴り壊すって・・・」

ウエンディ「ツ、ツナさんってあんなに凄かったんですか・・・」

エルザ「ふっ ツナの実力なら出来るだろうな」

エルザ以外の4人は綱吉の強さに驚いていた

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ガジル「装置をぶっ壊すなんてイカれてるぜ」

ジュビア「まさか壊しちゃうなんて・・・」

ラクサス「あれがツナの本気の一撃か・・・」

ミラ「ツナ・・・かっこいいわ」

ガジル・ラクサス（おいっ）

3人が綱吉の一撃の凄さに驚いているのに対しミラだけは綱吉の拳を打ち込んだ時のかっこよさに目を奪われていた

『妖精の尻尾』 応援席

マカロフ「まさか 彼奴の力がこれほどとは」

メイビス「彼の今後の成長が楽しみですね」

レヴィ「装置壊すなんて」

リサーナ「修行の時見せてくれたけど、あれでも手加減してたんだね」

カナ「ヤバすぎでしょ」

ロメオ「ツナ兄かっけえー！」



『剣咬の虎』観覧席

ステイング「な、何者だよアイツ・・・」

ルーファス「装置を壊す、ましてや殴り壊すなど記憶にないね」  
ミネルバ「あのような少年にこれほどの力があるうとは・・・」

『人魚の踵』観覧席

カグラ（拳で、しかも一撃で壊すとは・・・正に当たれば一撃必殺だな）

『青い天馬』観覧席

一夜「素晴らしい〃香り〃だ!!」

『四つ首の仔犬』観覧席

バツカス「いいねいいねゝ 早く戦いてえぜ 魂が震えてくらあ」

『蛇姫の鱗』観覧席

トビー「アイツ ヤバすぎだろっ!!」

ユウカ「切れんなよ いや気持ち分かるけどよ」

リオン「くそつ まさかアイツがここまで成長しているとは」

シエリア「ジユラさんが負けるなんて・・・」

各ギルドの魔道士の反応は早く戦いたがる者、警戒する者、称賛する者、悔しがる者様々だった

### 闘技場

オルガ「マジかよ おい」

ジユラ「なんと これほどとは」

ミリアーナ「みゃー あの子凄すぎ」

ヒビキ「こればかりは凄いとしか言いようがないね」

ノバーリ「ワ、ワイルドく・・・」

オーブラ「・・・」

参加者達も皆驚いていた

チャパテイ「競技パート1・2ファイニッシュ!! もう誰も『妖精の尻尾』を止められ

ないのかー」

綱吉は崩れたMPFを背に右腕を高々と上げて

綱吉「止まらないさ！ 妖精の進撃はここから始まる!!」

綱吉の宣言とともに会場は大歓声に包まれた

大魔闘演舞 3日目 競技パート 『妖精の尻尾』は圧巻の勝利を見せた

ちなみに綱吉が宣言をした時、Bチームの観覧席では

『妖精の尻尾』B観覧席

ミラ「カ、カメラっ カメラ持つてない!? ツナのあの姿を撮っておかなくちや！」

ジュビア・ガジル・ラクサス「二・・・二」

綱吉のかっこいいポーズにミラがカメラを求め、少々パニックになっていた

## 第28話

Bチームの観覧席に戻ってきた綱吉

綱吉「ただいま」

ジュビア「ツナさん お帰りなさい」

ラクサス「エルザに次ぐ活躍だったな」

ガジル「派手にやりやがったな おい」

皆が綱吉を出迎える中

ミラ「・・・ツナ お帰りなさい」

ミラは残念そうに綱吉のことを迎えた

綱吉「えっ えっ ミラどうしたの!?!? 俺何かした!?!?」

ジュビア「いえ ツナさんは何もしてないんです ただミラさんがツナさんの写真を撮ろうとしたんですけど、肝心のカメラを持って来てないことに気づいて」

綱吉「なんだ そんなことか」

ミラ「そんなこと・・・そんなことですって! せっかく写真に撮って飾ろうと思ってたのに!!」

綱吉の何気ない一言がミラを怒らせてしまった

綱吉「いい いい そんなことしなくていいから!? 恥ずかしい!」

ミラ「何よ ツナのかっこいいところ写真にしたかったのに!」

ミラは綱吉のことをポカポカと叩いてきた 綱吉は苦笑して困りつつも内心は喜んでいた

綱吉「ははっ (空元氣じゃない 元氣になって良かった)

ミラ「もう何笑ってるの!」

綱吉「ごめんごめんっ」

ラクサス「しかし装置をぶっ壊すとは驚いたぜ」

綱吉「今回は邪魔無く集中出来たし、溜めも出来たからね なによりスピードよりパワーを優先したから」

ラクサス「なるほどな だから壊せた訳か」

綱吉「そういうこと だけど戦闘中だところ上手くはいかないけどね」

話しをしているとバトルパートが始まった

第一試合 『人魚の踵』 ミリアーナVS 『四つ首の仔犬』 セムス

ミリアーナ「元氣最強?」

セムス「ワ・・・ワイルド・・・」

セムスはミリアーナのチューブに雁字搦めに拘束されて敗北した

第二試合 『剣咬の虎』 ルーフアスVS 『青い天馬』 イヴ

イヴ 「白い牙！」

ルーフアス 「その魔法は記憶しているよ」

イヴは雪魔法で攻撃するがルーフアスは簡単に躲していく

ルーフアス 「記憶造形 燃ユル・・・」

地面から炎が出てきたが、その炎は橙色の美しい炎だった

『妖精の尻尾』の面々 「!?」

ルーフアス 「大地ノ業  
!!!!」

イヴ 「うわああああ」

その炎はイヴへと襲い掛かり、イヴは敗北した

チャパティ 「イヴ ルーフアス相手に健闘しましたが、やはりルーフアス強し!!」

ルーファスは『妖精の尻尾』Bチームの観覧席を見る 正確には綱吉を見ていた  
ルーファス「君の炎は美しいからね 記憶させてもらったよ」

『妖精の尻尾』B観覧席

ミラ「ツナの炎を・・・」

綱吉「見ただけで相手の魔法を使えるなんて・・・なんて便利な魔法なんだ」

ミラ「そうじゃないでしょっ！ あの炎はツナが使つてこそいいんだから！ 勝手に使うなんて許せないわ！」

ガジル「じゃあ 許可貰いに来たらしいのかよ？」

ミラ「駄目に決まってるでしょっ！」

ガジル（駄目なのかよ・・・）

綱吉「まあまあ 落ち着いて コピーされちゃったのはしょうがないよ それにミラがそこまで怒ってくれて、俺嬉しいよ」

ミラ「えっ え、ええ!? ま、まったくすぐそう言うこと言うんだから！」

ミラは綱吉の綺麗な炎が使われたことに怒っていたが、綱吉のお陰で何とか機嫌を直していた

綱吉（記憶造形、か・・・一つの魔法であらゆる属性の魔法を使えるなんてな 色ん

な魔法があるだな)

チャパテイ「続いて第三試合 『妖精の尻尾』 B ラクサス・ドレアーVS 『大鴉の尻尾』アレクセイ」

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ラクサス「俺か」

ミラ「頑張ってね ラクサス」

ガジル「何の心配もいらねーだろ」

ジュービア「ラクサスさんですしね」

綱吉「・・・」

皆が声を掛ける中、綱吉だけが声を掛けずラクサスのことをじっと見ていた

ラクサス「どうした？」

綱吉「何かある、けどそこまで脅威に感じない つまりラクサスなら乗り切れるということか・・・」いや、ラクサスは勝つよ

ラクサス「(勝てよじゃなくて勝つよ、か) そうか ありがとよ」

ラクサスは綱吉の頭をポンポンと叩いて闘技場へ向かった



応援席にいる皆も『大鴉の尻尾』に対して準備する。ビスカはライフルのスコープでマスターのイワンを監視して、雷神衆とリサーナは『大鴉の尻尾』のメンバーを監視した。

アレクセイとラクサスが中央で向かい合った

チャパテイ「試合開始い!!」

先に仕掛けたのはアレクセイだった。ラクサスに次々と攻撃して一方的に試合となっていく

そんなラクサスの姿を見て『妖精の尻尾』の面々は信じられないといった表情をしていた

応援席

マカロフ「何故ラクサスがこうも一方的に……」

ビスカ「イワンは動いてない。何もしていない」

フリード「ありえん!ラクサス!そろそろ本気を出してくれ!!」

ビッグスロー「ちくしょオオ」

『妖精の尻尾』A観覧席

ルーシイ「ラクサスが・・・」

ウエンデイ「ど・・・どうなってるんですか・・・」

グレイ「あの仮面野郎何者だ」

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ミラ「そんな・・・」

ガジル「冗談だろ」

ジュビア「やられてるんですか」

皆がラクサスがやられていることに驚いている中綱吉だけが平然とそしてつまらな

そうに試合を見ていた

綱吉「つまらないことするね 鴉の人達」

ミラ「ツナ どういうこと」

綱吉「アレ幻覚だよ ただの幻」

ミラ「えっ!?!」

綱吉の言葉に3人共驚かざるをえなかつた

ジュビア「げ、幻覚なんですか!」

ガジル「っーか何で幻覚って分かんだよ!」

綱吉「忘れちゃったの？俺の」

綱吉のそこまでいい掛けた言葉で思い出した

ミラ・ガジル・ジュビア「「あっ……」」

綱吉の「超直感」全てを見透かす力 綱吉には嘘はつけない

綱吉「まあ「超直感」でも見破れない幻覚師はアツチにはいたけどね 幻覚には痛い目に遭わされたから だから」

綱吉の瞳の色が茶色から橙色に変わる

綱吉「こうやって見破ってたんだけど」

綱吉は元の世界にいた時幻覚対策として瞳に死ぬ気の炎を集中して幻覚を見破る特訓をしていた 瞳に死ぬ気の炎を凝縮し維持するのはとてつもない集中力と体力がいた 今でこそ平気にやっているが最初の頃は1分も保たなかった アースランドに来てからは魔力を瞳に集中させている

綱吉「なるほどね」

ミラ「ツナ 一体どういう状況なの？」

綱吉「うんとね マスターのイワンがいて、あと残りの4人がいるかな」

ジュビア「それって5対1ってことじゃないですか？？」

ガジル「イワンまでいるのかよ」

ミラ「早く試合を止めないと！」

綱吉によって状況を知らされた3人は試合を止めようとしたが

綱吉「大丈夫 必要無いよ」

綱吉はそれを否定した

綱吉「例えば5対1だろうとラクサスは負けないよ だってラクサスは強いから」

淡々と言っていく綱吉の言葉 だが何処か信頼してしまうものがあつた 3人は綱

吉の言葉を信じることにした

### ―闘技場

『大鴉の尻尾』のメンバーがラクサスの前に立っていた そして何かを聞き出そうと  
していた

イワン「マカロフは死んでも口を割らん 教えて貰うぞ ルーメン・イストワールの  
在処を」

ラクサス「ソイツが目的か・・・」

イワン「素直に吐けば勝ちを譲つてやる 条件が飲めねえってんなら どうなるか分  
かるよなあ」

ラクサス「まどろっこしいことしやがって まとめてかかって来いよ マスターの敵

は俺の敵だからよ」

ラクサスはジャケットを脱ぎ捨て雷を纏う

イワン「どうやら教えてやる必要があるみてえだな 対『妖精の尻尾』特化型ギルド

『大鴉の尻尾』の力を」

イワンの言葉にラクサスはマカロフは『大鴉の尻尾』の全てを知っていることを告げる

ラクサス「ジジイはそこまでつかんでいながら動かなかつた アンタのことを信じてたんだろうな 親子だから」

イワン「黙れえええ!!」

ラクサスの言葉にイワンは激昂して、大量の人の形をした紙をラクサスに向けて放つた

イワン「俺はこの日の為に日陰で暮らして来たんだよオ！全てはルーメン・イストワールを手に入れる為になア!! 言えええええ！ラクサス!! 俺の息子だろうがアアアア!!」

イワンの大量の紙の嵐がラクサスを襲う

イワン「オーブラ！やれ！魔力を消せ!!?」

ラクサス「コイツがウエンデイとシャルルをやった奴か」

ラクサスは雷を纏うと高速でオーブラの前に移動して蹴り飛ばしたナルプテイング「ニードルブラスト！」

フレア「赤髪！」

ナルプテイングは両腕からトゲを生やし、フレアは髪を伸ばしてラクサスに襲い掛かった。しかしラクサスは冷静に見極め

ラクサス「これはグレイの分」

ナルプテイング「ぐおおおお！」

ナルプテイングを殴り倒し、

ラクサス「こいつはルーシイの分」

フレア「きやああああ！」

フレアを咆哮で倒し

ラクサス「お前・・・よく分らん」

クロヘビ「ぬああああ！」

砂に擬態して背後から襲い掛かろうとしたクロヘビも、手刀で倒し

イワン「ば・・・馬鹿な・・・」

イワンはメンバーが全滅したことに狼狽え、ついに命乞いをしてしまう

イワン「ま・・・待て！俺はお前の父親だぞっ!! 家族だ！父を殴るといふのかっ!!」

ラクサス「俺の家族は『妖精の尻尾』だ！ 家族の敵は俺が潰す!!」

ラクサスは雷を纏った拳でイワンを殴り飛ばした。殴り飛ばされたイワンが壁に激突すると幻のラクサスとイワンが消えて、ラクサスと倒された『大鴉の尻尾』のメンバーが現れた。

突然のことに観客は驚いていたがラクサスが5対1で勝ったことを知ると歓声に変わった。

イワン「今回は俺の負けだ。だが……これだけは覚えておけ。ルーメン・イストワールは『妖精の尻尾』の闇。いずれ知る時が来る……『妖精の尻尾』の正体を……」

イワンはそうラクサスに言って王国兵に連行されて行った。他の『大鴉の尻尾』メンバーも連行されたがオーブラの肩にいた使い魔が上手く逃げ出した。

使い魔「また会おうキキ 『妖精の尻尾』キキ」

協議の結果『大鴉の尻尾』は失格となり大会出場権を3年間剥奪となった。

逃げ出した使い魔の存在は誰も気がついていなかった。いや、人は気づいていたがそこまで気にしていなかった。

綱吉（あれっ。あのオーブラって人の使い魔が見当たらない。何処に行った？）

綱吉は辺り見渡したが見当たらなかった。

綱吉（まあ あれくらいの奴ならそこまで脅威にはならないだろう 気にしなくていいかな）

綱吉もそこまで気にしなかった だがこの使い魔がある人物と深い繋がりがあること誰も知らなかった



## 第29話

『妖精の尻尾』 B 観覧席

綱吉（しかし『大鴉の尻尾』は何の目的でラクサスを・・・）

綱吉が考え事をしてしているとラクサスが戻ってきた

ミラ「お疲れ様　ラクサス」

ラクサス「ああ」

ジュービア「5対1で勝つなんて凄いです！」

ガジル「まっ　あんたならこれくらい余裕だと思ってたぜ」

綱吉「ラクサス　ナイス　フアイト」

綱吉は右手を上げる

ラクサス「おう」

ラクサスは綱吉とハイタッチをした

綱吉「ところで『大鴉の尻尾』の目的は何だったの？　態々マスターまで出て来たん

だからよっぽどのことなんでしょ」

ラクサス「それなんだが、ルーメン・イストワールつてのが狙いだったみてえなんだ」

綱吉「ルーメン・イストワール？ 何それ？」

ラクサス「さあな 後でジジイにでも聞いてみるさ」

何が目的だったのかラクサスに聞いてみたが結局分からずじまいだった そんな話しをしているとアナウンスが流れ

チャパティ「本日最後の試合 『妖精の尻尾』 A ウエンディ・マーベル VS 『蛇姫の鱗』 シエリア・ブレンディ」

綱吉「次はウエンディか」

ミラ「ウエンディは強いから大丈夫よ」

ジユビア「そうですよ ウエンディだって修行を頑張つて来たみたいですから」

ガジル「しかし相手の奴もガキじゃねえか」

綱吉「同じ年くらいかな？」

ラクサス「ガキだからって油断できねえぞ 弱いんだつたらメンバーに選ばれる訳が

ねえからな そうだろ ツナ？」

綱吉「うん そうだね あのシエリアって子は強いよ だけどウエンディも劣らず強

い 良い勝負になると思うよ」

綱吉は超直感で2人の力量を感じ取っていた

シエリアは闘技場に出て来ると転んでしまった、ウエンデイも助けようと駆け寄ろうとしたが転んでしまう そんな2人を見て場内は笑いに包まれた

ラクサス「何故何もないところで転ぶ」

ガジル「全くだ」

綱吉「ドジっ子ってヤツか」

ミラ「コラ そんなこと言っちゃ駄目でしょっ」

ジュビア「そうですね、しっかり応援しないと」

何も無いところで転ぶ2人に呆れつつも、ウエンデイの事を応援することにした

### Ⅰ 闘技場

チャパティ「これはなんとも可愛らしい対決となったぞー！オジサンどっちも応援しちゃうピヨーン！」

ヤジマ「アンタキヤラ変わつとるよ」

実況のチャパティのキヤラの変わりようが凄い・・・

試合開始の銅鑼が鳴った

ウエンデイ「(せっかく修行したんだ！頑張らなきゃ！) いきます！」

シエリア「うん」

アームズ

バーニア

エンチャン

ト

ウエンデイ「攻撃力強化 速度上昇 付加」

シエリア「お」

ウエンデイは自身に能力上昇の魔法を掛ける

ウエンデイ「天竜の翼撃!!」

強力な風がシエリアを襲うがシエリアは難無く躲して反撃をする

ボレアス

シエリア「天神の北風!!」

ウエンデイ「うわっ」

ウエンデイはシエリアの黒い風を何とか躲すが、その隙にシエリアはウエンデイとの

距離を詰めて来る

シエリア「天神の舞!!」

ウエンデイ「うあああああ！」

シエリアはウエンデイを上空へと吹き飛ばす。さらに追撃をしようとジャンプしてウエンデイに近づくが、ウエンデイは空中で風を操り静止する。

ウエンデイ「天竜の鉤爪！」

シエリア「うっ」

逆さになった状態でシエリアを蹴り飛ばす。2人は着地すると大きく息を吸う。

ウエンデイ「天竜の・・・」

シエリア「天神の・・・」

ウエンデイ「咆哮!!」

シエリア「怒号!!」

2人のブレスのぶつかり合いによって、爆風は観客席にまで届いた。しかしダメージを受けているのはウエンデイで、シエリアは無傷だった。

『蛇姫の鱗』観覧席

リオン「天空の滅神魔法・・・シエリアは天空の滅神魔道士だ」

『妖精の尻尾』B観覧席

綱吉「滅神魔法・・・オルガさん以外にもいたんだ」

ミラ「同じスレイヤー同士の対決になるわね」

ラクサス「だが地力では僅かにあのシエリアって奴の方が上だな 現にウエンデイはダメージを受けているがアイツは無傷だ」

綱吉「大丈夫 まだウエンデイは諦めてないよ あの目はまだ勝負を諦めてない」

### ―闘技場

ウエンデイ「驚きました」

シエリア「リオンから聞いてたんだ 『妖精の尻尾』にアタシと同じ魔法を使う子がいるって ちょっとやりすぎだったかな? ごめんね痛くなかった?」

ウエンデイ「平気です・・・戦いですから」

シエリア「せっかくだからもっと楽しもつ ね!」

ウエンデイ「私 戦いを楽しむってよく分からないですけど・・・ギルドの為に頑張ります」

シエリア「うん!それでいいと思うよ! アタシも愛とギルドの為に頑張る!」

フラつくウエンデイに、シエリアは攻撃をする

ウエンデイ「あああ!」

ウエンデイは攻撃を避けられず喰らってしまう

ウエンデイ「皆んながここまで繋いできたんだ 私に戦いが好きじゃないけど・・・ギルドの為に戦わなきゃいけない時は・・・私だつて本気でやります!」

ウエンデイは大きく息を吸い、空気を食べ始める

シエリア「あ! やっぱり空気を食べるんだね じゃあアタシも・・・いただきまふう」  
シエリアも息を吸い、空気を食べ始めた

チャパティ「こ・・・これはウエンデイさんとシエリアたん何をしているのでしょうか」  
気のせいか酸素が薄くなった気がします」

2人が空気を食べた為会場の空気が薄くなった それにしてもチャパティがどんどんはつちやけてる

ウエンデイ「滅竜奥義!」

ウエンデイは自身とシエリアの周りを竜巻で囲う

ウエンデイ「照破・・・」

シエリア「風の結界?!? 閉じ込められた?!?」

ウエンデイ「天空穿!!!」

暴風の一撃がシエリアに直撃した。流石のシエリアも躲せず吹き飛ばされ倒れてしまった。これを見てウエンディは勝利したと思った。

倒れたシエリアを見てマトーくんがウエンディの勝利宣言を言おうとした時、シエリア「ごめんね！ちよつと待って。まだまだこれからだからっ」

シエリアは立ち上がって来た。しかも無傷で。

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ガジル「どうなってやがる」

ジユビア「攻撃は当たったはずなのに」

綱吉「たしかに・・・攻撃は当たっていた、ダメージもあった。なのに平然と立っている）・・・回復したんだ」

ミラ「そんなこと出来るの!?!?」

綱吉「現にウエンディの大技を喰らって立ってるだろ。傷も消えて」  
ガジル「回復なんてそんなんありかよっ」

『蛇姫の鱗』 観覧席

リオン「天空の滅神魔法は自己回復が出来る。悪いが勝ち目はないと思え」



## 闘技場

シエリア「アタシ戦うのは嫌いじゃないけど 勝敗の見えてる一方的な暴力は愛がないと思うの 降参してもいいよ ねっ」

ウエンデイ「できません 私がここに立っているということは、私にもギルドの為に戦う覚悟があるということですよ 情けはいりません 私が倒れて動けなくなるまで全力で来てください！ お願います!!」

シエリアはウエンデイに降参するよう促すが、ウエンデイは戦うことを選んだ その証拠にウエンデイの目にはまだ闘志が宿っていた

シエリア「うん！ それが礼儀だよね！ じゃあ今度はアタシが大技出すよ!!？ この一撃で楽にしてあげるからね!!？」

シエリアは両手に魔力を集中する

## 『蛇姫の鱗』観覧席

リオン「よせ！ シエリア！」

ジユラ「それはいかん！」

オーバ「バカタレが！ 相手を殺すつもりかい!!」

シエリアのこれから出す技を察したりオンやマスターオーバは止めるよう叫ぶが

### 1 闘技場

シエリア「全力の気持ちには全力で応える！それが愛！！ 滅神奥義！！」

両手に集まった魔力が黒い羽根へと変わっていく

シエリア「天ノ叢雲！！」

黒い羽根は渦を巻きながらウエンディへと向かっていく。しかし天ノ叢雲はウエンディに当たらず外れた。そのことに1番驚いていたのは技を出したシエリアだった

『妖精の尻尾』B 観覧席

ガジル「なんだっ 外れたのか！！？」

綱吉「いや 外させたんだ シエリアが技を撃つ瞬間に体力を回復させて、技に勢いをつけさせて外させたんだよ」

ミラ「そっか ウエンディは相手の体力を回復出来るから」

綱吉「そう それを利用したんだ だけどシエリアが勢いのついたあの技を制御出来ていたら終わりだった ある意味賭けに近い戦法だったね」

ラクサス「だが 賭けに勝ったと（相変わらずよく見てやがるな）」

綱吉「うん だけど勝負はまだ分からないよ」

―闘技場

シエリア「凄い！なんて戦法!!」

シエリアは自分の奥義をあんな風に躲すとは思ってなかったので驚きを隠せなかった

ウエンデイ「天竜の碎牙！」

シエリア「うああ！」

ウエンデイは手に風を纏ってシエリアの腕を斬り裂くが、シエリアは瞬時に回復する  
その後2人は接近戦で戦っていた 2人の拳は小さかったがギルドを想う気持ちは  
何よりも大きかった

そして・・・

チャパテイ「ここで時間切れ！ 試合終了！ この勝負引き分けです!!」

2人の戦いは30分戦っても決着はつかず、引き分けとなった

―闘技場

綱吉「引き分けになったけど、良く戦ったよウエンデイ」

ミラ「そうね ウエンディもシエリアもいい試合だったわ」

闘技場を見るとシエリアがウエンディの怪我を治癒魔法で治しており、2人共笑って握手をしていた

綱吉「しかしウエンディにしろシエリアにしろ 俺より歳下なのにあんなに強いなんて、こりや追いつかれる日も近いかもね」

ラクサス「何言ってやがる お前だつてまだまだこれから伸びるだろうが」

ミラ「そうよ そんな弱気になるなんてツナらしくないわ」

綱吉「そつか そうだな なら頑張つて強くないとな」

ウエンディとシエリアの戦いを見て追いつかれる日が近いと寂しさを覚えたが、ラクサスとミラに励まされやる気を取り戻していた

綱吉「明日が楽しみだ・・・ケホツケホツ」

綱吉は口元に手をやり咳き込んだ 手の平を見ると僅かに血がついていた

綱吉「・・・」

ミラ「ツナ？」

ジュビア「どうしましたか？」

綱吉「んっ 大丈夫っ ちよつと疲れて咳き込んだだけだつて！心配し過ぎだよ」

ミラ「そう？」

綱吉「そうそう 寝て休めば治るって！」

ミラ「ならいいけど……」

ラクサス「……」

咳き込んだ後綱吉の表情が一瞬固まったの見たミラは心配になったが流されてしまった

綱吉（予想より早いな……これは皆にバレるのも時間の問題か……）

綱吉が観覧席を出て行きミラも後を追おうとした時

ラクサス「おい ミラ」

ミラ「なに ラクサス？」

ラクサス「この大会が終わったら、ツナを病院へ連れてけ」

ミラ「え？」

ガジル「病院って大袈裟な」

ラクサス「いや ツナのあの表情は何かある」

ジュビア「たしかに咳き込んだ後、固まってきましたね」

ラクサス「何も無いならそれで良い だがそのままほつといて取り返しのつかない事になったらどうする そうなる前にちゃんと調べてもらえ」

ミラ「……ええ 分かっちゃわ」

ラクサスの真面目な表情にミラは真剣に捉えた

会場の雰囲気とは裏腹にBチームは不安が拭い切れないまま3日目が終わった

3日目までの結果はこのようになった

一位 『妖精の尻尾』 B 35 pt

二位 『剣咬の虎』 34 pt

三位 『人魚の踵』 32 pt

四位 『妖精の尻尾』 A 27 pt

五位 『蛇姫の鱗』 26 pt

六位 『青い天馬』 18 pt

七位 『四つ首の仔犬』 14 pt

?? 『大鴉の尻尾』 失格

ついに『妖精の尻尾』が一位をなったのだった

## 第30話

時刻は夜になりギルドの皆はBAR SUNへ行き、ラクサスとマカロフは公園に来ていた

ー公園

ラクサス「じじい ルーメン・イストワールってのは何だ？」

マカロフ「・・・イワンがそう言ったのか？」

ラクサス「ああ 欲しがってるようだったな」

マカロフ「そうか・・・まったくあのガキは・・・」

ラクサス『『妖精の尻尾』の闇とか言ってるやがったぞ』

ラクサスの言葉にマカロフは答えられず黙っていると メイビスが現れる

メイビス「闇ではありません ルーメン・イストワールは我がギルドの“光”なので  
す」

マカロフ「初代!? いけませんぞ」

メイビス「分かっています これはマスターとなった者にしか知る権限の与えられな

いもの ラクサス 分かっていただけですか？」

ラクサス「変なモンじゃなけりや詮索はしねーよ」

マスターになった者しか知ることが出来ないのなら とラクサスも素直に引き下がった

ラクサス「そうだ jijii もう一つ言っとくことがあつてよ ツナのことなんだが」

マカロフ「ツナがどうかしたのか？」

ラクサス「実はよ・・・」

ラクサスは綱吉のことを話した

マカロフ「むう そんなことが」

メイビス「すみません ツナとはあの少年のことですか？」

マカロフ「ええ そうです ツナは・・・」

マカロフは綱吉が異世界から来たこと、戦争を経験して来たこと、心の中に鬼が潜んでいることを説明した

メイビス「そうですか・・・彼もまたあの歳で戦争を経験したのですね 世界は違えど争いは絶えぬものなのですね・・・」



メイビスは悲しそうな表情を浮かべた。自分も戦争を経験したからこそ分かる辛さであつた。

メイビス「恐らく彼が情緒不安定になるのは自責の念に駆られているからでしょう。彼は『生きるか死ぬか』『殺すか殺されるか』の世界で生きて来ました。そんな彼にとつてこの世界は『平和』過ぎた。仲間を失い、家族を失い、ただ敵を殺す鬼になつた彼にとつてこの世界は眩し過ぎた。平和を幸せを知れば知るほど彼は自分の醜さを知り苦しめてしまうでしょう……」

ラクサス「アイツ……馬鹿野郎が」

メイビス「そして咳き込んだのは、吐血でしょう」

マカロフ「なっ……血を吐いたのですか!?」

メイビス「恐らくですが……話しを聞いただけでも彼は天賦の才能を持つ者だと思ひます。更にその才能に溺れることなく努力を怠らない正に人の上に立てる者

しかし彼に本当の成長を促したのは不幸にも家族や仲間の死だった……憎しみに駆られ急激な力を得ましたが、その代償は……」

メイビスは辛そうに話した

ラクサス「その代償にツナの身体が犠牲になったと」

メイビス「彼の身体は、いえ精神も既にボロボロになっているでしょう」

ラクサス「今までそんな素振り見せなかつたぞ」

メイビス「必死に耐えてきたのでしよう 苦しくても決して仲間の前では見せぬよう  
ギルドマスターや他のトップの方々にも言えることですが、ボスという者は弱みを見  
せてはいけないという傾向があります」

マカロフ「・・・まあ たしかに」

メイビスの言葉にマカロフはうなづく

メイビス「彼もその内の一人に該当します 若くしてボスになった彼は他の組織に舐  
められぬよう強くあり続けた それは世界が変わっても同じだった 仲間、ましてや恋  
人の前で弱い部分を見せたくなかつたのでしよう」

マカロフ「彼奴がそこまで苦しんでおつたとは・・・」

ラクサス「じじい どうすんだ」

マカロフ「儂は・・・」

I B A R S U N

『妖精の尻尾』のメンバーはいつものように宴を開いていた

「「「かんばーい!!?!!?」」」

ナツ「いやあ 今日には気持ち良かったな〜」

ハッピー「あい！」

ルーシイ「此処ギルドじゃないんだから壊しちゃ駄目よ」

ナツとハッピーははしやいでテーブルの上で騒いでいた

エルザ「しかし今日のツナは凄かったな」

綱吉「凄いのはエルザだって同じだろ 百体全部倒したんだし」

マカオ「でもMPFぶっ壊した時は驚いたぜ！」

ワカバ「あんなもんチートじゃねえかつ!!」

綱吉「ははっ 伊達に必殺技にしてないからね」

マカオとワカバは綱吉の技を褒めていた

ウエンデイ「せっかくエルザさんが快勝したのに・・・私勝てなかったなあ」

シャルル「何言ってるの よくやったわよ」

綱吉「そうだよ ウエンディ」

ウエンディ「ツナさん」

バトルパートで勝てなかったことに落ち込んでいるウエンディに綱吉が声を掛ける

綱吉「その歳であれだけの戦いが出来たんだ それはとても凄いことなんだよ 俺達も 他のギルドの人達も 観客の人達もその目にウエンディが凄さが映ったはずだよ

そう落ち込んじゃいけない」

綱吉はそう言つてウエンディの頭を撫でた

ウエンディ「！」

綱吉「あつ ごめんね！ ついつ」

ウエンディ「あつ・・・」

綱吉はウエンディの頭から手を離したが、ウエンディは残念そうにしていた

シャルル「駄目よウエンディ ツナはミラの恋人なんだから」

ウエンディ「わ、分かつてるよ」

ミラ「でも珍しいわね ツナがそういうことするなんて」

ウエンディ「ミ、ミラさん!?!？」

ミラがやって来てウエンディは驚いてしまう

綱吉「うーん 向こうにいた時、俺の家に居候で歳の離れた子達がいたから そのせ

いかな 俺にとって弟であり妹だったから」

綱吉はフウ太、ランボ、イーピンのことを思い出していた 血の繋がりに無くても3人は家族であり、弟、妹だった

綱吉「だから何か出来たりするところやって褒めてたんだ」  
ウエンディ「はわわっ」

綱吉はまたウエンディの頭を撫でた しかしその目は先ほどと違って少し寂しそうだった

ミラ「・・・そっか じゃあ妹のウエンディが頑張ったからしつかり褒めてあげないとねっ」

ウエンディ「え、ええっ!?」

ミラ「だって私たちは仲間で家族でしょう」

綱吉「そうだね 良くやったよ ウエンディ」

ウエンディ「は、はい・・・」

ウエンディは恥ずかしさからか顔を赤くしていた すると

ロメオ「なら俺はツナ兄の弟だな！」

話しを聞いていたロメオが混ざってきた

ロメオ「俺も早くツナ兄みたいに強くなってみせるぜ！」

綱吉「そうだね　ロメオも弟だ　でも焦ることはないよゆつくり成長すれば良いんだから　それにね、ただ“力”を振るうのを俺は“強さ”だとは思わない」

ロメオ「えっ？」

綱吉「“強さ”というのはここに宿るものだ俺は思うんだ　誰かを思う『心』それが自身を強くしてくれるんじゃないかと思うんだ・・・（そういう点で言えば俺は道を間違えてしまったんだよな・・・）

綱吉は自分の胸に手を当てて言った

自分は復讐心に取り憑かれ暴力者になってしまったからこそ、尊敬の眼差しで見てるロメオの目が痛かった

綱吉「ロメオが　ウエンデイが　いつか俺のことを追い抜いてくれる日が来るのを楽しみにしてるよ」

ロメオ「お、おう！　楽しみ待っててくれよ！」

ウエンデイ「わ、私も頑張ります！」

優しく微笑みながら自分の成長に期待してくれる綱吉にウエンデイもロメオも嬉しさ恥ずかしさが出たが元気に答えた

リサーナ「あれ？　ツナはミラ姉の恋人なんだから、将来私のお義兄ちゃん？　でもツ

ナって歳下だから弟？ ん？どっち？」

綱吉「どっちでもいいよ 兄でも弟でも それに大事なのはここだよ」

綱吉は胸の中央を指差した

綱吉「ここが繋がってれば、家族であり兄弟なんだから それにこれはリサーナだけじゃなく皆んなにも言えることだね」

エルザ「うむ そうだな 我々は仲間であり家族でもある」

ルーシイ「でもよく恥ずかしい台詞言えるわね」

リサーナ「確かに聞いているこつちも恥ずかしかったよ」

綱吉の言葉に皆、嬉し恥ずかしがっていた

綱吉「俺はただ素直な気持ちを言っただけだよ」

ルーシイ「それをさらっと言えちやうのが凄いわね」

ミラ「でもそれがツナの良いところよね」

リサーナ「そういうところにミラ姉は惹かれて、ツナのこと好きになったもんね」

ミラ「もう リサーナっ」

綱吉「ははっ ありがとう ミラ 俺もミラの優しさに惹かれて好きになったんだ 大好きだよミラ」

ミラ「くっ 馬鹿っ 皆んなの前で言うことないでしょっ！」

ミラは恥ずかしさから綱吉のことをポカポカと叩いていた

綱吉「ごめんごめん」

カナ「相変わらずラブラブだねー」

そんな話しをしていると、ラクサスが戻ってきた 綱吉は一旦ミラたちの元を離れて

ラクサスの元へ行った

綱吉「ラクサス マスターとはあの話しをして来たんだろ？」

ラクサス「ああ まあな だがアレはマスター以外に知っちゃいけねえもんなんだ

と」

綱吉「そうなんだ ならしょうがないね」

ラクサス「それと後でじじいと初代が話しがあるよ」

綱吉「話し？ 分かった（何の話だろう）」

宴会は最後まで騒ぎ、解散となった

綱吉はマカロフとメイビスと公園で話しをすることとなった

―公園



綱吉「それじゃあ、ここで少し待っててくれ」

ミラ「ええ、分かったわ」

ミラは入り口近くのベンチに座り、綱吉は2人がいる中央にある噴水に向かった

綱吉は最初ミラを帰らせようと思ったが前回のことを考え、ついてきてもらった流石と一緒に話しはまずいので待っててもらうが、ミラからは綱吉たちが見え、綱吉からはミラが見える。何か起きてもこれならすぐに対応できると判断したので

マカロフ「すまんのう、ツナ」

綱吉「いえ、構いません。それで話しと言うのは一体？」

マカロフ「それは・・・」

メイビス「単刀直入にいいいます。貴方は体の何処かを患っていますね」  
言いづらそうにしていたマカロフの代わりにメイビスが聞いてきた

綱吉「・・・何故そのようなことを？」

メイビス「ラクサスが貴方の異変を教えてくださいました」

綱吉「ただ咳き込んだだけで、患っている？」

メイビス「では何故ただ咳き込んだだけで表情が固まったのですか？」

綱吉「それは・・・」

メイビスの問いに綱吉は答えられなかった

メイビス「それに向こうの世界で相当無茶な戦いをしてきたのでしょ？　身体の上は無事と見せることは身体の内部はどうですか？」

綱吉「・・・ふっ　流石にマスターには嘘はつけませんね」

綱吉は諦めたように微笑した

マカロフ「で、では」

綱吉「ええ　病気とは少し違いますが、心臓や肺、俺の内臓はもうすでにポロポロです」

マカロフ「ならすぐに病院に行き治療を受けんといかんじやろう!？」

綱吉「俺は治療を受ける気はありません」

マカロフ「何故じゃ!?　何故治療せん!」

綱吉「これは罰なんです」

綱吉の治療を受けないという答えにマカロフは取り乱しかけるが、綱吉は冷静に落ちて着いていた

メイビス「罰、ですか」

綱吉「はい　俺は元の世界で多くの人の命を奪って来ました　例えどんな理由があろうと殺しが正当化されちゃいけません　だからこれは俺の罪であり、罰でもあるんです」

マカロフ「ミラには・・・言ったのか？」

綱吉「いえ、まだです。ですが大会が終わったら言うつもりです」

マカロフ「ミラを悲しませることになるぞ」

綱吉「・・・覚悟の上です」

綱吉は目を瞑り一瞬悲しむような表情を見せた

綱吉「恋人であるミラを悲しませることになったとしても、俺にはこつちの方が大事なんです。どれだけ苦しくても痛くても受けなきやいけないんです。罰を軽くするなんて許されませんよ・・・」

メイビス「罪を償う方法は一つではありませんよ」

しかし綱吉は首を横に振る

綱吉「俺は今まで自分勝手に生きて来ました。今さら己れの身可愛さに生き長らえるつもりはありません」

綱吉はマカロフたちに背を向けてミラのいる方へ歩き始めた。しかし数歩歩いたところで足を止めて

綱吉「10年・・・5年・・・或いは1年かもしれない。あとどれくらい生きられるかわかりませんが、俺は奪った命以上に誰かを助けたいんです。この限りある命、誰かの助けとなり役に立ちたいんです」

メイビス・マカロフ「……………」

綱吉は今度こそミラの方へ歩いていった

綱吉「ただいま」

ミラ「お帰りなさい 話しは終わったの？」

綱吉「ああ 宿に帰ろうか」

綱吉とミラは公園を出て行った 2人を見ていたマカロフとメイビスは

マカロフ「儂は、ツナのことを止められんかった……」

メイビス「それは私も同じです 彼の覚悟も目も本物だと分かりました ですが彼が背負う十字架はあまりにも大きく重い その重圧に潰されなければいいのですが……」

宿に向かって歩いている2人、すると綱吉の耳に

『いーいー身分だな』

綱吉「!」

突然声が聞こえてきた 周りには誰もいない 綱吉にしか聞こえない亡霊の声であつた

『何故、お前は生きている 俺たちを殺したくせに』

『恋人と仲良く幸せを謳歌しやがって』

『なんでお前は笑っていられる』

『お前も死ねよ!!』

『罪の意識があるのなら今すぐ自害しろ!』

『『『さあ 死ね! 死ね! 死ね! 死ね! 死ね!!』』』

次々と聞こえてくる亡霊の声

綱吉「………」

ミラ「ツナ?」

隣りを歩いていた綱吉がいつ間にか後ろにいて、ミラが声を掛けると綱吉は小刻みに震えており、怯えた顔をしていた

ミラは綱吉のそばに駆け寄り、手を握った

綱吉「ミラ……?」

ミラ「大丈夫 大丈夫よ 私がいるから」

ミラの声により綱吉は亡霊の声が聞こえなくなつていき震えも止まった

綱吉「ありがとう ミラ」

ミラ「どういたしまして」

ミラの笑顔を見ると 手を握られると 暖かい気持ちになれた

綱吉とミラは手を繋いだまま宿へと帰っていった

―宿 綱吉とミラの部屋

綱吉とミラは部屋に着くと少し休み、今ミラはシャワー浴びていた。その間綱吉はベッドに腰掛け思い詰めていた。

綱吉（俺は、あの声の言った通り、罪を償うと言いながら幸せを謳歌してるだけなんじゃないのか？ 死ぬのが嫌で逃げてるだけなんじゃないのか？）

綱吉が思い詰めていると、ミラがシャワー室から上がってきた。

ミラ「ツナ、次いいわよ」

しかし綱吉からの返事は聞こえず、ベッドで何か考えごとをしているようだった。ミラは綱吉に近づいてももう一度声を掛けようとした。

綱吉「俺は……俺は、どうすれば……」  
「ゲホッ！」

綱吉はまた咳き込み、手の平に血がついていた。綱吉はタオルで血を拭こうとした時、

綱吉「初日に、無理し過ぎたな。あと2日あるのに……」  
ミラ「もうツナ、さつきから呼んでるで……しょ……」

ミラは綱吉を見て固まってしまった。口元から血が垂れ、手の平に血がついているの

が見えてしまったから

綱吉「ミラ!?」（しまった! ミラに見られるなんて!）

ミラ「ね、ねえ そ、それ血よね・・・どうして? どういうこと・・・?」

ミラの声は震えていた

綱吉「こ、これは そのあの 口に中切っちゃってっ それで血が出ちゃってさ!」

ミラ「嘘・・・嘘つかないで! 口の中切ってそんなに血が出るわけないでしょ!」

綱吉は咄嗟に嘘をついたがミラに見破られてしまった

ミラ「ねえ 貴方に何が起きてるの!? 早く病院に行きましょう!」

ミラは取り乱しながら綱吉に縋りついてきた

綱吉「ミラ 落ち着いて 大丈夫だから」

ミラ「大丈夫じゃないわ! 早くっ 早くしないとっ」

綱吉「ミラ」

綱吉はミラの両頬を両手で押さえて

綱吉「ミラ 俺の目を見て そうそのまま そして深呼吸して」

ミラを落ち着かせた

綱吉「少しは落ち着いた?」

ミラ「・・・ええ 取り乱しちやっごめんなさい・・・ でも貴方に何があつたの

「？」

綱吉「・・・ごめん まだ言えないんだ 大会が終わったら必ず言うから・・・」

ミラ「そう 分かったわ・・・」

言ってもらえない事はショックだったが、自分もツナに対して隠していることあるため強く言えなかった

ミラ「なら病院に」

綱吉「悪いけど病院に行く気もないし、大会は最後まで出るつもりだよ」

ミラ「ど、どうして?!? 早く治さなきゃ!」

綱吉「俺は、治すつもりはない」

ミラ「そんな?!?」

綱吉「これはね 罰なんだよ 決して許されることはない罪を犯した罰 だから治療は受けない」

治す気もない、大会には出続けるといふ綱吉にミラは動揺した

ミラ「罪?・・・罰?・・・何それ? ツナ死んじやうかもしれないじゃない!?!」

綱吉「それは・・・」

ミラ「ツナ いなくならないうって約束したじゃない! ねえ 死なないわよね?」

ねえ? そう言って! そう言ってよ!」



綱吉「……………」

涙ながらに縋りついて言葉をぶつけてくるミラに綱吉は答えることが出来なかった。なんと言うのが正解なのか分からなかった。大丈夫だと嘘をつくのが正解なのか。自分の寿命は短いと真実を言うべきなのか。どちらが正しいのか俺には分からなかった……

ミラ「お願いだから……そう言つてよ……」

綱吉「…………ごめん」

ミラ「!?？」

唯一絞り出せた言葉は謝ること。だがその言葉はミラの望んでいた言葉ではなかった。

ミラ「馬鹿っ!!」

ミラは自分のベッドへと入り込んでいった。

綱吉（ミラ いや、よそう……）

綱吉はミラに声を掛けようとしたがやめた。今の自分にその資格はないと思ったか

ら

明かりの消えた部屋の中、ミラの泣き声がよく聞こえた

ミラ「うっ・・・うっ・・・グスツ」

綱吉（すまない ミラ）

綱吉はミラの方を向いて心の中で謝った

綱吉（できることならもうこれ以上何事も無く終わってほしい）

綱吉は大会が無事に終わることを願って目を瞑った

しかし大魔闘演舞4日目、綱吉の傷だらけの心に追い討ちをかけ、歪みを与えてしま  
う出来事が起きる

## 第31話

ミラは夢を見てうなされていた

ミラ「此処は・・・？」

そこは廃墟と化した街だった。ミラはとりあえず歩き始め散策を始めた。すると前方から爆発が起きた。

ミラ「な、なにっ!?? 向こうで何が!??」

ミラが爆発の起きた場所へ近づくと2人の男が戦っているのが見えた。その2人はミラの知る人物だった。1人はミラに恐怖を与えた「白蘭」。もう1人はミラの恋人の「綱吉」。

ミラ「ツ、ツナ・・・」

2人の戦闘は激しく、いつもの優しい表情をした綱吉はどこにも無く、その戦いぶりには正に「鬼」と呼ぶにふさわしかった。ミラは初めて恋人である綱吉に恐れを抱いた。

しかしいかに綱吉といえど地力の差で徐々に確実に傷を負わされていく。そして綱吉「がはっ!??」

地面に叩きつけられ倒れられてしまう　息も絶え絶えな状態の綱吉を白蘭は左手で喉を掴み、持ちあげる

綱吉「あ……が……」

綱吉にはもはや抵抗する力はなく、されるがままとなっていた　白蘭は右手に炎を集  
中する

ミラ「やめて！　もうやめて!!」

これから何がされるのか察したミラは走り、止めに入った　だが

ミラ「!?」

綱吉を助けようと白蘭の身体に触れようとした時、ミラは白蘭の身体をすり抜けた  
この夢の中ではミラは幽霊の様なもの触れることも語りかけることも出来ない　ただ  
見ることしか出来ないのだ

ミラ「そんな……」

ミラは絶望した　恋人がこれから殺されるのに何も出来ず見ていることしか出来な  
いのだから

ミラ「やめて……やめてよ……お願いだから……」

ミラは涙ながらに言った　聞こえていなくても言わずにはいられなかった

ミラの声など元から聞こえていない白蘭は、締め付けるちからを更に強くする　綱吉

は苦悶の表情を浮かべる。そして白蘭は右手を手刀のようにして綱吉の胸を・・

ミラ「やめて・・・やめてーっ!!!」

ドシユツ

貫いた。貫かれた場所からドクドクと血が流れ落ちる

綱吉「ガハツ」

ズボツ

右手を引き抜くと鮮血が舞った。綱吉の血が白蘭の髪や顔、服を赤く染めていく。血を浴びて笑顔を見せるその姿は悪魔と呼ぶにふさわしかった

絶命した綱吉は無造作に放り捨てられる。傷口から止めどなく血が流れ出て血溜まりが出来る

ミラ「あ・・・ああ・・・」

ミラは綱吉の側に駆け寄ったが、シヨックから両膝をついてしまう。傷口から血が流れ、その瞳にはもう光は宿しておらず、その口はもう何も語らない

ミラ「ツ・・・ナ・・・ツナ・・・ツナ・・・」

涙を流し恋人の名を呼ぶ　しかし返事は返ってこない　ミラは綱吉の身体に触れようとしたがすり抜けてしまう

ミラ「うっ・・・ううっ・・・いや・・・嫌ああああ!!」

ミラは頭を抱え泣き叫んだ

綱吉「ミラっ　ミラっ」

ミラ「うう・・・ぐっ・・・うう」

綱吉「ミラってば！」

ミラ「っ！」

綱吉「はあ　やつと起きてくれた　うなされてたから心配したんだよ」

ミラは先程までうなされており綱吉が声を掛け、必死に起こそうとしていたのだ

ミラ「ツ、ナ?（さつき、までのほ、夢・・・?)」

ミラの目に映るのは自分を心配してくれている恋人の顔だった　ミラは何も言わず綱吉の胸に飛びついた

綱吉「うおっ!!?」

突然のことにバランスを崩しかけるが持ち堪える

綱吉「おい　ミラどうし・・・」

綱吉はどうしたのか？と聞こうと思ったがやめた　ミラが自分の胸に顔を埋めて泣いていたから

綱吉「ふう　怖い夢でもみたのか？」

ミラ「うん・・・とつても怖い夢だったわ・・・」

綱吉「そつか　怖い夢は誰だつて嫌だもんな　でもこうしてると安心するのか？」

ミラ「うん　安心する」

顔を埋めた時に聞こえてくる心臓の鼓動も　優しく語りかけてくる声も　肌から感じる温かな体温も　全てが心地良かった　愛する人が生きていると実感出来た　アレは夢だと悪い夢だとそう信じた

綱吉「そつか　なら好きなかだけこうしてていいから」

そう言つてミラの背中を撫でた

それから数分後ミラは落ち着き、綱吉から離れた

ミラ「ごめんなさい」

綱吉「良いつて　怖い夢を見たんだろ　ならしょうがないさ　ちなみにどんな夢だったんだ？」

ミラ「・・・貴方が死んじゃう、夢だったわ・・・」

綱吉の問いにミラは少し答えを変えた　白蘭の存在を知られる訳にはいかなかった

から

綱吉「そつか・・・それは怖い夢だったな そんな夢見たら誰だつて不安になる てもそれは夢だ悪い夢、俺はこうして此処にいるそうだろう？」

ミラの言葉を聞いて綱吉の表情は固くなるが、すぐにミラを安心させるため笑顔にする

ミラ「ええ・・・ねえ ツナ」

綱吉「ん 何だ」

ミラ「昨日は、ごめんなさい 貴方を傷つけてしまつて・・・」

綱吉「ミラ 違う 俺の方がミラを傷つけたんだ 悪いのは全部俺なんだ」

ミラ「そんなに自分を責めないで 貴方1人が悪い訳じゃないでしょう 私だつて悪いの」

綱吉「ミラ・・・でも」

ミラ「でもじゃないわ 2人が悪い それに謝るのはもうやめましょう キリがないわ」

ミラは綱吉の頬に手を当て、綱吉を安心させる

綱吉「ああ 分かつた・・・」

ミラ「ツナは、最後まで大会に出るんでしょ？」



綱吉「ああ そのつもりだ」

ミラ「ならそのことについてはもう何も言わないわ ただ二つだけ約束して 一つは貴方の身体に何が起きてるか全部話すこと もう一つは大会中、無茶をしないこと」

綱吉「話すのは元々大会が終わったら話そうと思ってたからいいけど、無茶をするなっていうのは・・・強い人達がいっぱいいるのに」

ムギユ

ミラの無茶をしないという約束に渋っていた綱吉の両頬をミラが両手で押さえる

ミラ「こういうときは “分かった” って安心させるものよ」

綱吉「いや、でも」

ミラ「分かった？」

煮え切らない綱吉にミラはジト目で言う

綱吉「・・・分かりました」

ミラ「フフ よろしい」

根負けした綱吉を見て笑顔になるミラ

ミラ「さっ 朝ご飯にしましょっ」

綱吉「ああ」

2人は朝食を済ませ、ラクサス達メンバーと共に会場に向かった。向かつてる途中でジユビア「ツナさん、体調の方は大丈夫なんですか？」

綱吉「えっ？」

ガジル「昨日咳き込んだからな、あんま無茶すんなよ」

ジユビアとガジルに心配された。綱吉はミラを見たがミラは違うと首を横に振った。ラクサス「俺が憶測で話したんだ、アレを見たら怪しく思うのは当然だろ」

綱吉「ラクサス・・・」

ラクサス「お前が此処にいるってことは出るってことでいいんだな？」

綱吉「当たり前だ、途中で投げ出すなんてあり得ないよ」

ラクサス「そうか、なら優勝を目指す以上、ぶっ倒れてくれるなよ」

綱吉「分かってるよっ」

綱吉はぶつきらぼうに答えた

ガジル「安心しろよ、このチームにはこの俺がいるんだからよ！、そいつばかり活躍させねえぜ！、ギヒツ」

ジユビア「ガジル君、後半本音が漏れてますよ」

ミラ「でも皆んなで勝利するっていうのは本当ね、ツナに負担をかけさせるつもりは

ないわ」

ラクサス「そういうことだ 分かったか？」

そう言つて綱吉の頭をポンポンと叩く

綱吉「分かった・・・」

こうして一同は会場へと着いた

大魔闘演舞 4日目 競技パート 『海戦』

ー 『妖精の尻尾』 B観覧席

綱吉「『海戦』だつて」

ラクサス「ならもう決まりじゃねえか」

ミラ「水系の競技ならジュビアね」

ガジル「ギヒッ 行つて来いっ」

ジュビア「はいっ 初日の名誉挽回で頑張りますっ！」

『海戦』

ルールは簡単 球状の水中闘技場から外に出てしまつたら敗北 最後まで残つ

ていた者が勝ち

ただし最後の2人になった時に特殊ルールが発動される “五分間ルール” 最後の2人になってから、5分の間に場外に出てしまった方は最下位になる

『海戦』にはそれぞれのギルドからはこの魔道士が出た

『妖精の尻尾』 B ジュビア

『妖精の尻尾』 A ルーシイ

『蛇姫の鱗』 シェリア

『青い天馬』 ジェニー

『人魚の踵』 リズリー

『四つ首の猟犬』 ロツカー

『剣咬の虎』 ミネルバ

観客はミネルバの登場に歓声が上がった

参加者が次々と水中闘技場へ入っていく

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ミラ「頑張つてね〜 ジュビア〜！」

綱吉「Aチームからはルーシイか」

ラクサス「まっ妥当だろう」

ガジル「ああ アイツがいるからな」

綱吉「それにしてもあのミネルバって人が登場しただけでこの歓声 相当な魔道士なんだね」

ラクサス「あの女がユキノって奴の前のメンバーだったんだろ なら強えに決まってる」

綱吉「う〜ん（なんだ？ 強いのはわかる でもやな予感がする 何が起きるんだ？）  
綱吉は自身の直感から何か起きると予感し、不安を覚えながら試合を見守ることにした

チャパテイ「『海戦』開始イ！」

チャパテイの合図とともに銅鑼が鳴らされた

―闘技場

ルーシイ「早速だけど、ゴメンねみんな！ 開け！宝瓶宮の扉！ アクエリアス!!」

ルーシイは精霊魔法でアクエリアスを出した　アクエリアスは持っている水瓶に魔力を集中させる

ジュビア「させないっ 『水中台風』!!」

アクエリアスが渦を出したと同時にジュビアも両手から渦を出す　両者の渦はぶつかり合う

アクエリアス「互角!?」

自分と同等の力を出したジュビアにアクエリアスは驚いていた　皆が気を取られている隙にジェニーがロツカーに蹴り込み場外へ出した

アクエリアスとジュビアの力は拮抗していたが、アクエリアスがデートの時間と言って精霊界に帰ってしまった

ルーシイ「ちよつとオッッッ!!」

すかさずジュビアはルーシイを場外へ吹き飛ばそうとする

ジュビア「隙ありっ!」

ルーシイ「ひええええっ!」

ルーシイは吹き飛ばされながらも、バルゴとアリエスを召喚しなんとか場外に出ないように耐える

水中で激戦が繰り広げられる中、ジュビアが動いた

ジュビア「全員まとめて倒します！ 水中でジュビアに勝てる者などいない！ 届

け!! 愛の翼!! グレイ様ラブ!!!」

ジュビアの新技は渦にハートがあり今までとは威力が桁違いだった Aチームの観覧席からグレイが止めるーつと叫んでいた

ー『妖精の尻尾』B観覧席

ミラ「凄い技ねえ」

ガジル「たしかに凄いけどよ」

ラクサス「グレイに同情するぜ」

綱吉「技名が・・・」

ミラ以外はジュビアの技名に引いていた

ー闘技場

ジュビアの技によりリズリー、ジェニー、シエリアは場外へと出され、ルーシイはバ  
ルゴとアリエスに手を掴まれ場外に出ないようにして、ミネルバは両手に魔力を集め衝  
撃を相殺させていた

チャパティ「なんと！ジュビアがまとめて3人も倒してしまったーっ！ 水中戦では無敵の強さだジュビアーっ!!」

ジュビア（ジュビアを見て萌えてくれましたか グレイ様）

ジュビアは自分の技を見てどんな反応しているかグレイを見たが

ジュビア（引いてる!?）

グレイが引いてるの見てジュビアは驚いていた すると

ジュビア「えっ？」

何故かジュビアは場外に出てしまった

ー『妖精の尻尾』B 観覧席

ガジル「あのバカっ」

ミラ「なんで？」

ラクサス「どういうことだ？」

綱吉（ジュビアは自分から移動した訳じゃない 突然瞬間移動したかのように場外にいた あのミネルバって人の魔法か）空間魔法だよ おそらく」

ミラ「空間魔法？」

綱吉「ああ あのミネルバって人が空間魔法でジュビアを場外に出したんだよ」



ガジル「なら最初に使えば一瞬だったろうが」

綱吉「それはそうなんだけど 何か目的があったのかも」

ラクサス「だとしたら碌でもねえこと考えてやがるんだろうぜ 態々一人残したんだ」

綱吉（ルーシイ・・・）

綱吉は不安が拭い切れぬまま試合を見続けた

### ―闘技場

チャパテイ「さあ 残るはミネルバとルーシイのみ 勝つのはどちらか！ ここで五分間ルールの適用です 今から五分以内に場外となった方は最下位となります」

ミネルバ「妾の魔法なら一瞬で場外に出せるが、それでは興が削がれるというもの耐えてみせよ 妖精の尻尾」

ミネルバは空間魔法でルーシイの側を爆発させ、次に頭上から鉛のように重くした空間をぶつけた

『妖精の尻尾』 B 観覧席

ガジル「なんなんだアイツの魔法!!?」

ミラ「アレも空間魔法なの?」

綱吉(自身や対象を瞬間的に移動させるだけじゃない 操作している空間の“性質”も変えられるんだ だから爆発したり重くしたりも出来るんだ)

皆ミネルバの空間魔法に驚いていた

### ―闘技場

ルーシイ「やられてばかりじゃいられない あれ!!? 鍵が無い!!?」

ルーシイは精霊魔法で反撃しようとするが、鍵が無くなっていた

ミネルバ「探し物はこれか? ふふ」

ミネルバは見せ付けるかのように手に鍵を持っていた

ルーシイ「いつ間に!!? きゃああああ!!?」

ルーシイはミネルバの魔法で吹き飛ばされてしまいがなんとか場外手前で静止させる

ルーシイに反抗する手段はなく、ただ耐えるしかなかった しかし攻撃出来ずともその目は諦めていなかった

ルーシイ「こんなところで負けたら・・・ここまで繋いでくれたみんなに合わせる顔

がない……だから絶対諦めないんだ」

ここで五分が経過し、後は順位をつけるだけとなった

ルーシイが言葉が癪に触ったのかミネルバは猛攻してきた

ミネルバ「頭が高いぞ！ 妖精の尻尾！ 我々をなんと心得るかっ？！？」  
我らこそ天  
下一のギルド！ 剣咬の虎ぞ！！」

ルーシイ「きゃあああああっ！」

ルーシイは吹き飛ばされ場外に落ちるかと思われたが、突然消えてミネルバの前に姿を現した ミネルバはさらに追撃をしていく

ルーシイ「いあああああ」

ー『妖精の尻尾』 B 観覧席

ガジル「痛めつける為か……」

ラクサス「もう勝負はついてんだろ……」

綱吉「……」

綱吉は握り拳を作り、綱吉の中でドス黒い何かが目覚めようとしていた

ー『妖精の尻尾』 A 観覧席

ナツ・グレイ・エルザ「「セイバートゥースウウウ!!!」」

ナツ達は『剣咬の虎』を睨みつけたが、『剣咬の虎』のメンバーは笑って流していた。これ以上は命に関わると判断されたのか、レフリーストップが掛かり、競技は終了した。

## 第32話

## ―闘技場

闘技場ではナツ達が闘技場へ降りて、ルーシイへ駆け寄った

ナツ「ルーシイ！」

グレイ「大丈夫か?!? しっかりしろ！」

ウエンデイ「まず私が応急処置を」

シエリア「手伝うよ ウエンデイ」

エルザ「・・・」

エルザはルーシイをこんな目に合わせたミネルバを睨みつけていた

ミネルバ「その目は何か? 妾はルールにのっとり、競技を行ったまですよ」

エルザ「相手を痛めつけることがルールだとしても?」

ミネルバ「それは己の力量も分ならず競技に出てきたルーシイとやらのせいであろう  
妾を責めるのは大きな間違い それに感謝して欲しいものだな 二位にしてやっ

たのだぞ そんな使えぬ娘を」

ナツ「なんだとっ!!」

ミネルバの言葉にナツは怒りミネルバに殴りかかろうとするが、ミネルバの前にスティング達『剣咬の虎』のメンバーが間にはいり、エルザもナツに止めるよう手で制す。エルザ「最強だかフィオーレーだか知らんが 一つだけ言っておく お前たちは一番怒らせてはいけないギルドを敵に回した」

一触即発の雰囲気だったがなんとかこの場は収まった

### Ⅰ医務室

医務室ではAチームのメンバーにポーリユシカ、ハッピーにシャルルが眠っている。ルーシイを囲んでいた。そこへBチームの面々がやってきた

ジユビア「ルーシイは無事ですか」

ミラ「ルーシイ」

エルザ「お前たち」

ラクサス「チームは違っても同じギルドだ 構わねえだろ」

ルーシイの怪我もウエンディとシエリアのお陰で命に別状はなく、傷も残らないようだった

ルーシイ「うっ・・・」

ハッピー「ルーシイ！」

ルーシイ「みんな・・・ごめんね・・・」

グレイ「何言ってるんだ 二位だぞ」

エルザ「ああ よくやった」

ルーシイは落ち込んでいたが、グレイやエルザに健闘したと励まされていた

ルーシイ「か・・・鍵・・・」

ハッピー「はい ここにあるよ」

ルーシイ「よかった・・・ありがとう」

ハッピーから鍵を受け取ったルーシイは安心したのか眠ってしまった

ナツ「あいつら・・・」

グレイ「『剣咬の虎』・・・」

ガジル「気に入らねえな」

ナツ、グレイ、ガジルが怒りを露わにしていると、マカロフがやって来た

マカロフ「AチームBチーム全員揃って・・・む？ツナがおらんの？」

エルザ「たしかに・・・」

ナツ「ツナはどこだ？」

ミラ「実は……」  
時は少々遡る

A チームと『剣咬の虎』が睨み合っていた時

―『妖精の尻尾』 B 観覧席

綱吉はある感情に支配されていた

綱吉「(何故お前は……お前たちは 人を傷つけて痛めつけて笑っていられるんだっ  
ルーシイやユキノさんが傷つけられて お前たちが笑うなんて間違ってる)……許せ  
ない」

綱吉の額に炎が灯り瞳の色が変わった 綱吉は闘技場へ降りようと手摺りに手をか  
けようとした

綱吉(ーーやる)

ラクサス「おいっ 待てツナ 何をするつもりだ?」

ただならぬ雰囲気を出している綱吉を行かせてはならない そう思ったラクサスは  
綱吉の肩に手をおき引き止める

綱吉「なんだよ」

ラクサス・ミラ・ガジル「……?」



振り返った綱吉を見て3人は硬直した。綱吉の額の炎はいつもの綺麗な橙色ではなく赤黒い色をしており、瞳の色も赤くなっていた。何より冷たい目をしていた。

ラクサス「止めるんだ。お前らしくもないっ。冷静になれ」

ミラ「ツナツ。お願いやめて」

ラクサスは綱吉がこれから何をしようとしているのか察したのか、なんとか止めようとする。ミラも綱吉の腕に手を添えて声を掛ける。

ミラの思いが通じたのか、額の炎が徐々に小さくなり消え、瞳の色も元に戻った。

綱吉「……っ」

我に返った綱吉は自分が何をしようとしていたのか思い出す。

綱吉「……ごめん。頭冷やしてくるよ……」

綱吉は辛そうな表情をしてフラフラとした足取りで観覧席から出て行こうとする。ラクサス「そこまで気にすんなよ。お前は何もしなかったんだ」

綱吉「……ああ。ありがとう……」

ミラ「ツナ……」

ミラは綱吉に歩いて行こうとしたが

綱吉「ごめん。ミラ……今は、1人にしてくれ」

綱吉はそう言っ出て行った。

説明を受けたAチームやマカロフの表情は重かった　ルーシィに加え一瞬とはいえ綱吉が鬼になったのだ

マカロフ「そうか・・・まさかそんなことになっていようとは・・・」

エルザ「鬼になったのか・・・」

グレイ「クソツ　折角心の傷が癒えてきたつてのに　あいつらのせいで」

ラクサス「で　じじい　俺らに何のようがあつて来たんだ？」

ラクサスは場の雰囲気を変えるため態と話しを変えた

マカロフ「ん　ああ　実は運営側からA　B両チーム統合するようお願い渡されての」

ナツ「何っ!?？」

ミラ「どういう事ですか？　マスター」

マカロフが言うには『大鴉の尻尾』が失格となり参加チーム数が奇数になって困ること　なので両チームを統合して新規5人でチームを再編成しろと　しかもポイントが低い方になるらしい

エルザ「しかし運営側からの指示なら仕方ないか」

グレイ「でも今更新規メンバーに変えたって残すのはこれからやるタッグバトルなん

だろ」

ポーリュシカ「いや最終日は5人全員参加の戦いのはず、慎重に選んだほうがいいよ」  
グレイの疑問にポーリュシカが答えた

ナツ「俺は絶対ルーシイの仇をとる！ 仲間を笑われた！ 俺は奴等を許さねえ！」  
エルザ「マスター メンバーはどうしますか？」

マカロフ「うむ そうじゃな・・・」

その頃綱吉は1人廊下を歩いてた

綱吉（俺は・・・あの人を殺そうとした）

綱吉は命を奪おうとしたことにショックを受けていた

『なんで殺さなかったんだ？』

綱吉「っ？？」

綱吉の耳に再び亡霊の声が聞こえてきた

『殺せば良かったじゃないかあ ええっ？殺したかったんだろ？』

『俺たちみたいに殺せばいい 簡単だろう』

綱吉「ち、違う・・・俺は・・・」

『違わないさ 所詮お前もどれだけ綺麗事を言おうと俺たちと同じ』

綱吉「ハツ・・・ハツ・・・ハツ・・・」

亡霊の言葉に綱吉は呼吸が荒くなる

『善行を為せば報われるとでも？ 笑わせるなっ』

この亡霊たちは己の心の弱さが生み出した幻、それは分かっていた。心を強く保てば亡霊も消える。だが今の綱吉にはそれが出来なかった。この場にミラが居ればまた違つただろうが、不幸にも一人になりたいと言つたが故にこの場にはいなかった。

綱吉は壁に両手をつけると頭を振りかぶり、思いつきり額を壁に打ちつけた。何度も何度も。何度も。壁にヒビが入り額から血を流してもやめなかった。

綱吉のとつた行動は決して狂つたものではなかった。痛みによつて幻を消すというもの。痛みが自責の念を上回れば幻は消えると考えたのだ。そしてその考えは当たり前は消え始めた。

綱吉「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

『（一）までか まあいい』

『最後に言つといてやる お前は必ず鬼なる 己の意思でな クククツ その日が来るのが楽しみだ』

そう言つて亡霊たちは消えていった。綱吉はしばらく亡霊たちのいた場所を見た後、

自分の両手を見た 両手は血で濡れていた いや両手だけでなく身体中が血で濡れて、足元には血溜まりが出来ていた もちろんこれも現実の血ではなく綱吉の目そういうふうに見えているだけ

綱吉は震えながら両手を見る この血は敵の血 自分が殺して来た敵の血

綱吉は両膝から崩れて両手を地につけ涙する

綱吉「ぐっ……うっ……うっ……」

綱吉は壁に背を向けて顔を伏せて座り込んだ すると足音が聞こえてきた

綱吉「ラクサスカ……」

綱吉は顔を伏せたまま言った

ラクサス「……よく分かったな」

綱吉「感知くらい出来るよ」

ラクサスは血が付いてヒビの入った壁を見て綱吉が自傷したのを知る 顔を伏せているため表情は分からないが酷い顔をしているというのは容易に想像出来る

綱吉「ルーシイは？」

ラクサス「命に別状はねえ 傷も残らねえそうだ」

綱吉「そう 良かった」

ラクサス「実は運営からA B両チーム統合するよう言われてな」

ラクサスは運営からの指示を綱吉に説明した

綱吉「で メンバーはどうなったの？」

ラクサス「・・・ああ」

ラクサスは医務室で決まったメンバーを説明した

### ー医務室

マカロフ「そうじゃの まずはラクサスにエルザは決定じゃ」

エルザ「ミラはどうする？」

ミラ「そうね 私は辞退しようかしら 私よりも出たがってる人がいるみたいだし」

ミラはナツ、グレイ、ガジルを見る

ジュビア「ならジュビアも応援に回ります」

ウエンデイ「私も」

ジュビア、ウエンデイも続いて辞退する

マカロフ「うむ 本来なら実力的にツナも入れるべきなんじゃが」

ラクサス「無理だ 今アイツの精神は不安定で、落ち着かせてる最中だ とても戦う

ことなんて出来るわけがねえ」

ミラ「マスター どうかつナのことはそつとしておいてください」

マカロフの提案にラクサスとミラは現状無理だと言う

マカロフ「・・・そうか ならば残りのメンバーはナツ、グレイ、ガジルとする！」

こうして新規メンバーが決まった

エルザ「ツナにもこの事を伝えておかないといけないな」

ミラ「なら私が伝えて」

ラクサス「俺が伝えておく」

ミラが言ってる途中でラクサスが言った

ミラ「ラクサス・・・」

ラクサス「少しアイツに聞きたいこともあるしな」

そう言つて医務室から出ていった

ラクサス「すまなかつたな 勝手に決めちまつて」

綱吉「いいさ どのみち出たつて力発揮出来なかつたし そのメンバーなら大丈夫だ

よ」

廊下にすすり泣く声が聞こえてくる

綱吉「ごめんね・・・弱くて 肝心な時に役立たずで・・・」

ラクサス「弱くなんてねえし、役立たずでもねえよ お前はよくやってるよ その身体”で ツナお前の”身体”いつからそうなっちゃったんだ？」

綱吉「・・・元の世界にいた時から・・・仲間殺されて無茶な戦いしてて 病院とか医療施設壊されちゃって調べることも出来なくて、この世界に来てようやく自分の身体”の状態知ること出来たし」

ラクサス「そうか なんて黙ってたんだ？」

綱吉「・・・皆んなに 余計な心配かけさせたくなくて」

ラクサス「馬鹿野郎 そんなの気にしてんじやねえ 俺たちは家族だろうが」

ラクサスの言葉に綱吉は言葉を返さなかったが、僅かに体が反応する

ラクサス「お前もいつまでも落ち込んでんじやねえぞ ミラも心配してんだからよ」

綱吉「・・・ああ」

綱吉は小さな声で返事をした 返事を聞いたラクサスは背を向けて歩き出した

綱吉「ラクサス」

ラクサス「ん？」

綱吉に呼び止められ足を止めるラクサス



綱吉「頑張れよ 皆んなにもそう言っといてくれ」

ラクサス「ああ 分かった」

ラクサスは再び歩いていった

綱吉（・・・ちくしょう・・・なんで なんで俺は こんなに、弱いんだ・・・）

ラクサス（こればかりは俺やミラが引つ張り立たせても意味はねえ 自分から立ち直らねえと、また同じようなことになっちまう）

しばらく歩いていると前方にミラが見えた

ミラ「ラクサス ツナは？」

ラクサス「ああ まだ無理だ もう少し時間がある」

ミラ「そう・・・」

ラクサスの答えにミラの表情は暗くなる

ラクサス「お前まで落ち込んでどうすんだよ」

ミラ「ごめんなさい でも・・・」

ラクサス「アイツは必ず立ち直って戻ってくる お前はその時笑顔を見せりればいいんだよ」

ミラ「・・・ええ 分かったわ(ツナ・・・待ってるからね)」

2人はそれぞれミラは応援席へ、ラクサスはメンバーのところへ向かって行った

綱吉は伏せていた顔を上げると両目の瞳が炎の揺めきのように何度も変化していた  
右目の瞳は茶色から赤色に 左目の瞳は茶色から橙色に  
綱吉の心は今、橙色の炎と赤黒い炎が混ざり合っていた

ー『妖精の尻尾』待合室

エルザ「ラクサス ツナはどうだった？」

ラクサス「ダメだ まだ時間がある」

エルザ「そうか・・・」

ツナの状態を聞いたメンバーは表情が暗くなる

ラクサス「ツナから伝言があつてな 頑張れつてよ」

グレイ「あいつめ」

エルザ「なら頑張らんといかんな」

ラクサス「タッグバトルはお前等が出るんだ しっかりやれよ」

ガジル「任せろっ ギヒ」  
ナツ「おう アイツの分まで戦って来るぜ！」

―闘技場

チャパティ『『妖精の尻尾』のチーム再編成も終了し いよいよ四日目のバトルパートに突入します 今回は既に対戦カードも公表されています』

『青い天馬』VS 『四つ首の仔犬』

『人魚の踵』VS 『蛇姫の鱗』

『剣咬の虎』VS 『妖精の尻尾』

チャパティ「さあ・・・その新・『妖精の尻尾』が姿を現したぞーっ!!」

―『妖精の尻尾』応援席

マカロフ「我等ギルドの想いは一つなった この想い主等に託すぞ」  
メイビス「今こそ見せる時です 私たちの絆の力を」

―闘技場

チャパティ「会場が震えるーっ！　今ここに『妖精の尻尾』参上!!」

『妖精の尻尾』が入場して来ると会場から大歓声が上がった

『蛇姫の鱗』

ジュラ「む？　ツナヨシがおらん　ツナヨシならば必ず入つと思つとつたが」

『人魚の踵』

カグラ「ツナヨシ・サワダがいない　あの少年の実力なら新規メンバーにも入つていてもおかしくないはずだが」

『青い天馬』

一夜「ツナヨシ君が外されるとは　彼に何かあつたと見るべきか」

『四つ首の仔犬』

バツカス「おいおい　ツナヨシがいねえじゃねえかよ　震えねえな　おいっ」

『剣咬の虎』

ミネルバ「ツナヨシ・サワダはメンバーに選ばれなかったか（それはそれでこちらにとつては好都合 炎魔法に加えあの体術は厄介だからな）」

各ギルドの実力者たちは綱吉がいない事に疑問をもっていたが、すぐに切り替え、これが自分たちにとつて利があると考えた

『妖精の尻尾』メンバーは『剣咬の虎』を向き、睨んで  
ナツ「燃えてきたぞ」

今日目のバトルパートが始まる！

## 第33話

## ―闘技場

大魔闘演舞 四日目 バトルパート タッグバトルが始まろうとしていた

## 第一試合

『青い天馬』一夜&ウサギ vs 『四つ首の仔犬』バツカス&ロツカー

ロツカー「バツカスさん 派手にやっちゃいましょう このままじゃ俺ら最下位つすよ」

バツカス「分かっている分かってる（しっかしあれだなあ ツナヨシがいねえんじやどうも震えてこねえ まあとりあえず この試合は勝たせてもらうが どうしたもんかね〜・・・）」

ロツカーは最下位脱出のためやる気を出していたが、バツカスはこの大会で一番に戦いたかった綱吉がメンバー入りして無いことに不満がありやる気がなかった

バツカスはこの四日目のタッグバトルは仕方ないにしても最終日の全員参加のバトルに期待していたのだ しかし『妖精の尻尾』の新メンバーをいざ見れば綱吉は居らず、意気消沈していた

バツカスがジユラやカグラ、エルザ、ラクサスに目もくれずここまで綱吉との戦いにこだわるのは同じ武道家だからなのかもしれない。ボクシングにムエタイを体得した綱吉。壁掛掌を体得しているバツカス。武道家としての本能が勝負を求めたのだろう。残念がつてるバツカスだが自分の望みが叶うことをまだこの時は知らなかった。

一夜「さて・・・ついに君を解放する時が来たよ」

一夜は自信満々に相棒であるウサギに語りかける。ウサギも応えるように頷く。

一夜「見せてやるがいい。そのイケメンフェイスを」

一夜に言われウサギは被り物に手を掛ける。皆がその正体に注目する中ついに被り物が取れる。被り物が取れて出てきたのは一夜と同じ顔をしたエクシードのニチャだった。

『妖精の尻尾』観覧席

ナツ「あいつは・・・」

グレイ「エクスタリアの・・・」

『妖精の尻尾』応援席

リリー「ニチャ!?？」

ハッピー「なんで『青い天馬』に!?？」

ニチャを知っている『妖精の尻尾』のメンバーは驚きを隠せなかった。そして観客もニチャの登場に口をポカんとさせ、啞然としている。

一夜「ダブルイケメンアタック」

ニチャ「危険な〃香り〃だぜ」

2人はポーズを決めながらセリフを言う。濃い顔が2人になったことで会場には観客の悲鳴が飛び交う。

『妖精の尻尾』観覧席

エルザ「一夜が2人とか・・・」

ガジル「しっかりしねえか」

エルザは苦手な一夜が2人に増えたことでフラついてしまい、ガジルに支えられていた。

一夜「私と私の出会い。それはまさに運命だった」



ニチャ「うむ あれはある晴れた昼下がり……」

一夜とニチャが出会いを語ろうとした時……

バツカス「だつはアーっ!!」

ニチャ「メエーン!?」

バツカスが隙ありとばかりにニチャに掌底を喰らわせた

不意打ちとはいえニチャはこの一撃で戦闘不能になつてしまふ 自分と同じ顔して  
るから同じ実力と思ひ込んでいた一夜は驚いた

バツカス「ふざけやがつて」

ロツカー「俺らにはもう後がねえからよ 勝たせてもらうぜ! ワイルドに! ドリ

ルンロツクフオーユー!!」

一夜「どぺっ」

バツカス「酔・壁掛掌 〃月下〃!!!」

一夜「メエーン!?」

ロツカーは回転しながら一夜に近づきそのまま蹴りつけ、バツカスは壁掛掌で上から  
掌打を喰らわせる

一夜はさらに追撃を喰らい続け、ダウンしてしまふ

チャパティ「一夜ダウン！ い、いや!!? 一夜なんと立ち上がった！」  
倒れた一夜だったがなんとか立ち上がってきた 一夜はニチャを見ながら

一夜「君の思いは無駄にはしない・・・君に捧げよう 勝利と言う名の“香り”を!!」  
一夜は“力の香り”で肉体強化して、筋肉ムキムキになり服が破けパンツ一丁になる

バツカス「な、なんでえ!!? 急にワイルドに」

ロツカー「こいつア 力の香りだ！」

一夜の突然の見た目の変わりように驚く2人だが

バツカス「けっ 今さら遅えよ！ これで終わりだアー!!?」

ロツカー「喰らいやがれええっ！」

2人は一夜に突っ込んでいった

一夜「喰らうがいい これが私のビューティフルドリーマー!! 微笑み・・・」  
バツカス・ロツカー「えっ・・・」

バツカス、ロツカーは一夜の微笑みを見て固まってしまふ そして固まった2人に一  
夜が

一夜「スマーッツシュ!!!!」

強烈な一撃を喰らわせる

バツカス・ロツカー「どわああああ!!?」

吹き飛ばされた2人はそのまま壁に激突して気を失う

チャパティ「ダウン!! 『四つ首の仔犬』ダウン!! 勝者『青い天馬』!!!」

『妖精の尻尾』観覧席

エルザ「あのバツカスを」

ガジル「2対1で勝つか・・・」

グレイ「ただの馬鹿じゃねえようだな」

ナツ「やっぱスゲエ!!」

『妖精の尻尾』のメンバーは一夜の実力に改めて驚いていた

―闘技場

一夜「大丈夫かね ニチャ」

ニチャ「メエーンぼくない・・・」

一夜はニチャを抱え声を掛けていた

続いて第二試合

『蛇姫の鱗』リオン&ユウカvs『人魚の踵』カグラ&ミリアーナ

カグラ「ミリアーナ この試合始めはは一人で戦ってみろ」

ミリアーナ「えっ なんで!？」

カグラ「経験を積む為だ 試合とはいえこれは真剣勝負 自分一人でどこまでやれるかやってみるが良い」

ミリアーナ「よおし やってやる！」

カグラは後方へと歩いていき、ミリアーナもカグラの言葉を受けやる気を出す

ユウカ「相手は女性2人 だが全力を出さねば勝てない相手だぞ」

リオン「相手はあのカグラだからな しかし・・・」

リオンは『妖精の尻尾』の応援席にいるジユビアを見て

リオン「ここで活躍すれば俺の評価も上がる!!」

ユウカ「お、おう・・・」

リオンもまた別の意味でやる気を出していた

試合が始まると最初に仕掛けたのはミリアーナだった。ミリアーナは手からチューブを出して攻撃していく。

ユウカ「カグラは見てるだけか？」

リオン「ならば引きずり出すまで！」

リオンとユウカはミリアーナだけで挑んで来ることになめられていると思いが入る。

ミリアーナは無数のチューブで翻弄していく。

『蛇姫の鱗』観覧席

シエリー「一人でなんてなめられたものですわね」

シエリア「よっぽど自信があるんだね」

オババ「おんのれく『人魚の踵』 リオン！ユウカ！ さっさと本気出しな！ 出ないと回すよ!!」

―闘技場

ユウカ「たしかにオババの言う通り このままじゃ30分時間切れ 引き分けだ」

リオン「カグラにとっておきたかったが仕方ない アイスメイク スノータイガー

！

リオンは氷の虎を出してミリアーナを追いかけさせる、慌てて逃げるミリアーナは前方を見ておらず壁に激突してダウンしてしまう　そこへ・・・

カグラ「やはり　私が出ていかねばならんか」

リオン「ようやく出てきたか　カグラ！」

カグラが出てきたことよって気を引き締めるリオンとユウカ

ユウカ「まずは俺からいく！　波動！」

ユウカの放った波動をカグラは最小限の動きで躲す

ユウカ「!?？」

カグラ「魔法を無力化する、だったか？　ならば魔力を持たない物で攻撃すればいいだけのこと」

カグラはユウカの攻撃を躲しながら背後に周り一刀一撃でユウカを倒した

リオン「アイスメイク　ドラゴンフライ！」

リオンは氷のトンボの群れをカグラにぶつけるが、カグラは高速で躲していく

リオン「くっ　アイスメイク　イーグぐはっ」

リオンは次の攻撃をしようとしたが、造形中に攻撃されてしまった

カグラの攻撃でダウンしてしまったその時

『妖精の尻尾』観覧席

グレイ「何やってるリオン!! それでもウルの弟子か! さっさと本気出しやがれ!!」

### 闘技場

リオン「グレイ……」

カグラ「その通りだ そろそろ本気を出すといい リオン・バスティア」

カグラは刀を両手で持ち構える

リオン「ああ 時間もないことだしな アイスメイク スノータイガー! スノーエ

イプ! スノードラゴン!」

リオンは三体のの虎、猿、龍を作り出した

カグラ「!」

リオン「さすがのお前もこれなら回避出来ないだろう」

リオンの合図でまず虎と猿がカグラに攻め掛かる カグラは上空へ跳んで避けるが

そこへ龍が突進してくる カグラは回避出来ずぶつかり飛ばされるが難なく着地する

カグラ「二度にこれだけの数を出せるのか……しかし」

カグラは刀を横にして両手で持ち魔力を込める。すると上空に魔法陣が浮かび上がる。カグラの重力魔法でリオンと氷獣達の重力を操作し浮遊させる。

リオン「な、なんて力だ・・・っ！」

カグラは刀に魔力を込め跳び上がり、一瞬で三体の氷獣達を粉々に砕く。そして一旦上空で静止して再びリオンに斬りかかってくる。

カグラ「これで終わりだ！」

リオン「うっ」

カグラの刀がリオンの身体に触れる直前

チャパティ「タイムアップ！ この勝負引き分けです！」

ユウカ「やっぱ強えなカグラは」

リオン「ああ まだ本気を出しているとも思えん（時間切れになっただけじゃ俺はあのまま斬られ負けていた・・・クソッ）」

ユウカ「毎年そうさ カグラが本気になったとこなんて誰も見たことねーんだ」

リオン（本気になったカグラに勝てると思えば、やはりジユラさんか・・・あとは『大



鴉の尻尾』を1人で倒したラクサス、『伏魔殿』で百体抜きをしたエルザ この3人か……  
あいつも出ていればあいつにも可能性はあったろうが)

リオンの頭にジュラと互角の戦いをし、MPFを破壊した少年の後ろ姿が思い浮かば  
された

### ―廊下

綱吉は廊下の壁に背を預け、片膝を立てて座っていた 目を瞑り呼吸を整えている

綱吉の精神は今、暗い暗い闇の中にいた 何も見えない闇の中に1人立っていた

綱吉(何も見えない……どこまで暗い……ふっ これが俺の精神世界か)

綱吉は自嘲するように微笑する

綱吉「ん？」

何か感じとったのか上を向くと、光球が降りてきた 光球の光が闇を払っていく  
すと青空が見え始め、闇はどんどん逃げるように消えていった 闇が消えたことによっ  
て精神世界が露わになる

綱吉「なんて……澄んだ青空なんだ……」

綱吉は露わになった青空に唾然としていた 空は美しい青空で地面は草原で 綱吉  
は小高い丘の上に立っていた 心地よい風も吹いて綱吉の髪が靡く

綱吉は地表近くまで降りて光球に近づき手を翳す

綱吉（暖かい・・・この感じは・・・）

綱吉が光球の正体が分かった時

瞑っていた目を開けてゆっくりと顔を上げる　瞳の色は元の茶色に戻り、穏やかな表情を浮かべていた

綱吉は右手につけていたブレスレットを見て優しく撫でる

綱吉「ミラには助けられてばかりだな」

綱吉は深呼吸を数回して

綱吉「・・・行く、か」

そう言つて立ち上がり、応援席へと向かつていった

― 応援席

綱吉は『妖精の尻尾』の応援席に着くとミラが駆け寄つて来た

ミラ「ツナ！　大丈夫なの？」

綱吉「ああ 心配かけてすまなかつた けどもう大丈夫だ」

綱吉の言葉と微笑みを見てミラは安心する

綱吉「ミラのおかげで 助かったんだ」

ミラ「私？」

綱吉の言葉の意味が分からないのかミラは首を傾げてしまう

そして綱吉はマカロフ元へ行く

綱吉「マスター ご心配とご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

綱吉は頭を下げた

マカロフ「よいよい そんな頭を下げんでも」

綱吉「しかし」

マカロフ「主の状態を見れば仕方のないことじゃ しかし大丈夫なのか？」

綱吉「ええ とりあえずは 体の方はいつ発作がくるかは分かりませんが」

マカロフ「・・・そうか 分かった なら良い」

マカロフは難しい顔しながら答えた

マカロフ「お前はなんでも1人で抱え込もうとする お前はもう1人ではない 儂等

が居る お前が苦しみ傷つけば儂等も悲しい お前が笑い幸せを感じれば儂等も嬉し

い そのこと忘れるな」

綱吉「はいっ」

マカロフ「さっ 次は『妖精の尻尾』と『剣咬の虎』の戦いじや お前もすっかり応援せい」

綱吉「はい！」

綱吉は元気よく答え、ミラの元へ戻っていった ミラの元へ戻ると他のメンバー達が声を掛けてきた

リサーナ「ツナ 大丈夫なの？」

ジュビア「具合が悪くなったと聞きましたが」

綱吉「ああ もう大丈夫だ」

綱吉は元気よく答え皆を安心させた

ロメオ「でも残念だよなあ ツナ兄が出れないなんて」

カナ「たしかにね あんただってメンバーに選ばれておかしくなかったのに」

綱吉「しょうがないよ その時の状態が悪かったんだから」

綱吉は苦笑いしながら答えた

綱吉「でもその分しっかり応援するよ！」

### 闘技場

チャパテイ「興奮冷めやらぬ会場ですが、次のバトルも目が離せないぞー!!? 7年

前最強と言われていたギルドと現最強ギルドの因縁の対決!!? 『妖精の尻尾』 ナツ

&ガジル vs 『剣咬の虎』 スティング&ローグ!!!」

4人が入場すると会場からは更に歓声が上がった

スティング「待つてたぜ この瞬間を」

スティングは嬉しいそうにナツに言うが、ナツは言葉は出さずにただ睨んでいるだけだった

チャパテイ「ついに激突の時ー!!? 勝つのは妖精か虎か!?!? 戦場に四頭の竜が解き放たれたア!!」

ー???

何処か分からぬ場所 辺り一面溶岩が溢れ、火山は噴火をしている そんな灼熱の場所に悠然と立っている竜が1頭

「バイスロギア スキアドラム 貴様等の作り上げた滅竜魔道士が如何なるものか 見せてもらおうぞ」

その竜はこれから始まる戦いを見ようとしていた

「人は竜を超えたのか それは儚き夢なのか 我等が動く時は近い 竜王祭はまもなく訪れる」

竜の名は『炎竜王』イグニール ナツに滅竜魔法を教えた育ての親である  
竜王祭・・・イグニールは預言するかのようには呟いた

## 第34話

### 闘技場

ステイング（この時をずっと待ってたんだよ ナツさん）

ステイングは高揚していた 憧れであるナツと戦える そして勝つことが出来ることに

そして試合開始の銅鑼が鳴った

ステイング「行くぜえっ!!？」

ローグ「ああ」

開始と同時に仕掛けようとしたのはステイングとローグだった しかし2人が動こうとした時2人の目の前にはナツとガジルがいた

ナツはステイングに肘打ちを ガジルはローグを殴り飛ばした 2人の攻撃は止まらずナツは炎を纏った脚でステイングを蹴り飛ばす ガジルも殴りつけてから蹴り飛ばした

ステイングは攻撃を喰らいながらも嬉々と笑みを浮かべていた  
ステイング「白竜の…咆哮!!」

ナツ「レーザー!?!?」

ステイングは咆哮を放つがナツはそれを身体を逸らして躲す

ステイング「やつハアツ!!?!?」

態勢を変えることで咆哮の軌道が変わりガジルに襲いかかる　しかしガジルも上手く躲した

ローグ「影竜の斬撃!!」

躲した直後の隙を狙ってローグが攻めてくるが

ガジル「鉄竜剣!」

ローグ「!!?!?」

ガジル「ギヒツ」

ガジルは左腕を剣にして防ぐ

ガジル「おらあ!」

ガジルは腕を思いっきり振って、ローグをふっ飛ばす

ステイング「ローグ!」

ローグの方を見るステイングだったが、ステイングの目にはローグの顔を掴みなが



ら、自分に向かって走ってくるナツの姿があった

ステイング「何!!?」

ナツ「火竜の翼撃!!」

ナツは両腕に纏った炎で2人を吹き飛ばした

チャパティ「こ……これはどういうことでしょうか!!? あのステイングとローグが!」  
ファイオーレ最強ギルドの双竜が押されているーツ!!?」  
実況のチャパティは驚きの声を上げる

ステイング「やっぱ強えな こうじゃなきや……」

ローグ「ガジル……」

ナツ「お前らその程度の力で本当にドラゴンを倒したのか?」

ステイング「倒したんじゃない 殺したんだ この手で」

ステイングは笑いながらナツの問いに答えた

ナツ「自分の親じゃなかったのか?」

ステイング「アンタには関係ねえことだ 今からその竜殺しの力を見せてやるよ」

ステイング「ホワイトドライブ」

ローグ「シャドードライブ」

ステイングとローグの魔力が高まり、それぞれの身体に光と影の魔力を纏ったような姿になった

2人の姿を見て『剣咬の虎』のマスターのジエンマは勝利を確信した

ステイング「行くぜエ 聖なる白き裁きをくらいなア!!!」

ナツ「ぐっ」

ステイングは一瞬でナツに近づきナツに拳を叩き込む ナツは一撃目は防いだが二撃目を防げず攻撃を喰らってしまう

ガジル「サラマンダー! ぐおっ」

ガジルはナツがステイングの攻撃を喰らったのを見て、そつちに気がいつてしまい、その隙をローグが狙い蹴りを喰らわせる

ローグ「影は捕らえることは出来ない」

ガジル「コイツ・・・」

ガジルは手刀で攻撃するも、影のようになったローグには当てられず逆に攻撃を喰らってしまう

ステイングとローグの攻撃にナツ達は防戦一方となる

ー『妖精の尻尾』応援席

リリー「急にパワーアップしやがった!?？」

ハッピー「ナツー！頑張れー！」

メイビス「・・・魔力増幅の術」

ステイング達がパワーアップしたことにリリーは驚き、ハッピーは必死に応援して  
た

メイビスは冷静に分析していた

綱吉（魔力増幅・・・だからいきなりパワーとスピードが上がったのか）

ミラ「ナツ達を押されてる」

レヴィ「ガジル・・・」

綱吉「大丈夫だよ レヴィ あのくらいでナツもガジルもやられたりしないよ」

綱吉は心配そうになってるレヴィに安心させるよう声を掛けた

ー闘技場

ステイング「俺はずっとアンタに憧れてた！ そしてアンタを超えることを目標にし

てきた！今がその時！！」

ステイングが左手から魔力弾をナツの腹に撃ち込む。打ち込まれた腹を見ると紋章のようなものが浮かび上がる。

ステイング「白き竜の爪の一撃は聖なる一撃。聖痕を刻まれた体は自由を奪われる」

ナツは動こうするも聖痕のせいでは動けないでいた。

ステイング「これで俺は・・・アンタを超える！」

ステイングは右手に魔力を集中する。

ガジルもローグに攻撃するも躲されて背後に回られる。

ローグ「影なる竜はその姿を見せず」

ガジルは声の聞こえた方を振り向くがまた背後に回られる。

ローグ「確実に獲物を刈る」

ローグは背後から拳を叩き込もうとしたが、ガジルはローグの方を見ずに拳を受け止めた。

ガジル「確実に獲物を・・・何だって」

ガジルはローグの方を見ずに拳を掴んだ。

ナツの方も ステイングが近づいて来るがナツの口元が笑っているのに気づくが、関係無いと無視して拳を振るう。しかし動けないはずのナツが拳を躲し、逆にステイングの顔面に拳を叩き込んだ。

ステイング「な・・何故動ける!?!」

ナツの腹を見ると煙が上がって聖痕が消えていた

ステイング「聖痕が焼き消されて・・」

ナツ「なかなかやるじゃねーか だけどまだまだだな」

そう言うとなツは左手に炎を纏った

ガジル「あんまり調子乗んなよ コゾー共 『妖精の尻尾』をなめんなっ!!」

ローグ「ごはあっ!?!」

ガジルはローグの右拳を掴んだまま顎を肘で打ち上げた。ナツも炎を纏った拳でステイングを殴り飛ばした。

しかしそれでもステイングは笑っていた

ステイング「やつぱり最高だぜ アンタら こっちも全力の全力でやらなきゃな」

ステイングは構えをとり右拳に魔力を集中させる

ステイング「白き竜の拳は炎さえも灰塵へ還す 滅竜奥義 ホーリーノヴァ!!!」

ステイングの奥義がナツに放たれると眩い光と砂煙が視界を遮った。光と砂煙が晴れるとそこには……ステイングの拳を片手で受け止めたナツがいた。自分の奥義を片手で受け止められるなど思っていなかったステイングは動揺を隠せずにいた。

―『剣咬の虎』観覧席

オルガ「嘘だろ？」

ルーファス「この技が防がれた記憶などないね」

オルガとルーファスもまたステイング同様驚いていた

―闘技場

ここから流れは変わっていき、ナツ達が押していく。ステイング達も反撃するがやられてしまう。ステイングとローグは地面に仰向けに倒れてしまう。

チャパテイ「こ……こんな展開……！誰が予想出来たでしょうか！あの『剣咬の虎』の双竜が『妖精の尻尾』に手も足も出さず……このまま試合は終わってしまうのか……！！」

ローグ「終われるものか・・・」

ステイング「ああ・・・簡単に超えられる壁じゃねえってことはわかってた」

2人はそう言いながら何とか立ち上がり、ステイングの身体に白い竜の鱗のようなものが浮かび上がり、ローグにも身体に黒い竜の鱗のようなものが浮かび上がった。鱗のようなものが浮かび上がると先程の魔力増幅の術よりさらに魔力が上がった

―『妖精の尻尾』観覧席

エルザ「あれはナツが楽園の塔で見せた姿と同じなのか？」

グレイ「何だエルザ、あれが何なのか知ってんのか？」

エルザ「ああ、あれはドラゴンフォースだ」

グレイ「ドラゴンフォース？」

エルザ「滅竜魔法の最終形態でその力はドラゴンに匹敵するともいわれている。だがナツはエーテリオンの魔力を喰ってドラゴンフォースになった・・・」

グレイ「何？？」 待てよ！ アイツら何も使わずにそのドラゴンフォースってのになってるぞ？？」

ラクサス「どうやらアイツらは自分の意思でドラゴンフォースを発動出来るようだな」

グレイ「マジかよ……」

ー『妖精の尻尾』応援席

メイビス「ドラゴンフォース?!?!」

綱吉「ん? 初代 知ってるんですか?」

メイビス「ええ 滅竜魔法の最終形態です その力を解放した者はドラゴンと同等の力を持つと言われています」

綱吉「ドラゴンと同等……(たしかにさつきとは比べると遥かに強くなっている……だけであれでドラゴンと同等なのか? まだナツ達の方が……)」

ー『剣咬の虎』

ミネルバ「自らの意思でドラゴンの力を解放出来る それが第3世代の滅竜魔導士」  
オルガ「これでアイツらも終わりだな」

ルーファス「大魔闘演舞でこれを披露することなど記憶にないがね」

ミネルバ「第3世代の真の力に慄くがよい」



## 闘技場

ステイング「ローグ 手を出すな 俺1人で十分だ」

ステイングが1対2宣言したことにより会場がざわめいた

ガジル「なめやがって」

ナツ「だけどこ感じ・・・強えぞ」

ナツもガジルもステイングの行動に苛ついていたが、明らかにさつきまでとは違うことを感じとっていた

ステイング「はあっ!!」

ステイングは地を蹴って一気に間合いを詰め、ナツに攻撃する ナツもガードするが、そのまま吹き飛ばされてしまう しかしナツを吹き飛ばした隙を狙ってガジルが蹴りを喰らわせようとするが、ステイングはしゃがんで回避する

ガジル「ぐあっ」

ガジルはステイングの魔法弾を喰らい吹き飛ばされてしまう ナツは態勢を立て直しステイングに殴り掛かるが受け止められてしまい逆に膝蹴りを喰らってしまう

ナツ「うぶっ」

ナツはそのままステイングにガジルの方へと殴り飛ばされ、ガジルとぶつかってしまった ステイングはその隙に高く跳び上がり

ステイング「白竜の……ホーリーブレス!!」  
ステイングは上空から強烈な咆哮を放った。ステイングの咆哮は闘技場の床を崩壊させた。

―『妖精の尻尾』応援席

マカロフ「闘技場の床を……」

綱吉「凄い威力……（1対2宣言するだけあるね……）」

ロメオ「ナツ兄！」

レビィ「ガジル！」

―『妖精の尻尾』観覧席

エルザ「崩壊だ?!」

グレイ「これが第3世代の滅竜魔導士の力なのかっ?!」

―闘技場

試合はそのまま続行され、魔水晶映像で映されることになった。

ナツは崩れ落ちる瓦礫を足場にして炎を纏ってステイングに突っ込んで行く  
ナツ「火竜の剣角!!」

ナツの体当たりを喰らったステイングは吹き飛び、さらにステイングの背後に回った  
ガジルが追撃する

ガジル「鉄竜の・・咆哮!!」

至近距離から強烈な咆哮を喰らったステイングは吹き飛ばされ瓦礫に埋もれるがす  
ぐに起き上がる。そして両の手の平を合わせ、魔力を集中させる

ステイング「白き竜の輝きは万物を浄化せし。ホーリーレイ!!!」

ガジル「ぐああああああ!!」

ナツ「ああああああ!!」

無数の光の矢が2人に襲いかかった。ナツは転がりながら着地して、前を向くとス  
テイングが拳を振り返っていた。ナツは咄嗟に両腕でガードしたが

ステイング「飛べよ」

ステイングの宣言通りナツは飛ばされて壁に激突する。その後もナツとガジルの攻  
撃は捌かれて、逆に攻撃を受けてしまう

そしてナツとガジルは倒れ立っているのはステイングだった。ステイングは左腕を

天に高々と上げていた。そこへローグも降りてくる。

ローグ「時代は移りゆく。7年の月日がオレたちを真の滅竜魔導士へと成長させた。旧時代の時代は終わったんだ」

ステイング「・・・ああ。でも。やっぱり強かったよ。ナツさん。ガジルさん」  
そう言うのとステイングとローグはドラゴンフォースを解除する。

「『妖精の尻尾』 応援席

ハッピー「ナツ・・・」

ロメオ「ナツ兄く！立ってくれよ！」

皆ナツとガジルの姿を見て不安になっていた。

綱吉「大丈夫だよ。ロメオ」

ロメオ「ツナ兄」

綱吉がロメオの右肩に手を置く。

綱吉「あの2人があのくらいやられる訳がないだろう。それに俺よりもロメオやハッピー、皆んなの方がナツとガジルの凄さ、強さを知ってるんじゃないのか？」

ロメオ「あ、ああ！ ナツ兄は凄く強いんだぜ！」

ハッピー「あい！ナツは強いんです！」

レビイ「ガジルだって凄いんだから！」

綱吉「なら2人を信じるんだ。これまでだって多くの苦難や逆境を超えてきたんだろ  
う。なら今回だって超えられるさ」

綱吉の言葉によって皆の顔から不安は消えていった

メイビス（下がっていた土気が持ち直しましたか。マフィアとはいえさすがはボス  
をやっていただけではありませんね）

綱吉「しかし皆んなを不安にさせるのは感心しないな。遊び癖でもあるのか。はたま  
た相手が本気で来るのを待ってたのか」

綱吉の言葉に皆疑問を持ってしまふ

ロメオ「ツナ兄。それって一体……」

ミラ「それだとまるでナツ達はまだ本気じゃないって言ってるみたいだけど」

綱吉「ああ。2人はまだ本気じゃない」

### ―闘技場

チャパティ「両者ダウンかーっ!!？」

ナツ「ちよーつと待てっつて」

チャパティが『剣咬の虎』の勝利宣言をしようとした時、ナツとガジルが起き上がっ

てくる

ステイング・ローク「!!」

ステイングもロークもまさか起き上がってくるとは思っておらず、驚きを隠せない  
ナツ「いつてえー」

ガジル「思ったよりやるな」

チャパティ「な・・なんか意外と平気そうだ!?」

ナツとガジルは傷は負っていたが、ダメージというダメージではなさそうだった

ー『妖精の尻尾』観覧席

グレイ「たくつ 驚かせさせやがって」

ラクサス「まっ これくらいは当然だろう」

エルザ「あいつらにとつての本番はこれからといったところか」

ナツとガジルが立ったことで会場は再び盛り上がった

ー闘技場

ナツ「けどお前の癖は全部見えた」

ステイング「何!？」

ナツ「攻撃のタイミング 防御の体勢 呼吸のリズムもな」

ステイング「バカな!? こっちはドラゴンフォース使ってたぞ!!」

ナツ「おう! たいした力だ 体中いてえよチクシヨウ」

体中痛いと言いながらもナツは元気に答えた

ナツ「例えば攻撃の時軸足が11時の方を向く」

ガジル「いや 10時だな」

ナツ「11時だよ」

ガジル「半歩譲って10時30分! 11時じゃねえ」

ナツ「11時だ! 23時でもいいっ!」

ガジル「それ一回転してんじゃねーか」

軸足が10時から11時かで言い争いをしてしまう だが言い争いが出来るほど元気が有り余っているという見方も出来る

ナツ「ごちゃごちゃうるさいっ」

ガジル「おわっ」

するとナツがガジルのことを両手で押すと後ろにあつたトロツコの上に乗つかつてしまひ、ナツは迷う事なくレバーを引くとトロツコは発進していった

ガジル「オイ・・・てめ・・うぶ　うおー！ーっ!？」

線路は下り坂になっており、酔つていたガジルが脱出出来る訳もなくそのままトロツコと一緒に降りていった

ナツの行動を黙つて見ていたステイングとローグだが、意味が分からなかつた  
ステイング「な・・・なんのマネだ」

ローグ「ガジル・・」

ナツ「なめられた分はきっちり返さねえとな」

そう言つてナツは左手の指先から炎で『C O M E　O N』という文字を作り2人を挑発する

ナツ「俺一人で十分だ!!　まとめてかかつてこい!!」

不敵な笑みを浮かべ、先程のステイングのように1対2宣言をした



## 第35話

―闘技場地下

ナツの1対2に宣言にステイングとローグは怒りを露わにする

ステイング「1人で十分だと・・・ふざけやがつて・・・」

ローグ「お前に用はない ガジルとやらせろ」

ナツ「だったら俺を倒していくんだな」

ナツの言葉を聞いてステイングとローグは再びドラゴンフォースになる

ステイング「ドラゴンフォースは竜と同じ力！ この世にこれ以上の力なんてあるは

ずねえんだ!!」

ナツ「完全じゃなかったんじゃねーのか」

ステイング「ああああああ!!」

ステイングは叫びながら殴りかかるがナツは左腕でガードする

ステイング「俺の力は完全だ！ 俺はこの力でバイスロギアを殺したんだーっ!!」

ナツ「そうかよ なら俺は笑われた仲間のために戦う」

ナツは7年間必死に耐えてきた仲間たちと傷つけられたルーシイのことを想い、炎を纏わせた拳でステイングを殴り飛ばす。しかしその隙を狙ってローグが背後に回り攻撃してくる。

ローグ「影竜の咆哮!!」

ナツ「火竜の咆哮!!」

ローグの咆哮に対してナツも咆哮をぶつける。ナツの咆哮の炎はローグの咆哮を呑み込みそのままローグも吹き飛ばした。

ステイング「ハア・ハア・ハア・ハア・まだまだあ!」

ローグ「フロツシュ・俺はまだやれる!」

片膝をついていた2人だが、まだまだ闘志は失われていなかった。

ナツ「来いよ」

ナツは笑みを浮かべながら、挑発するように左手の指先を上に向けてちよいちよいと手招きするようなことをした。

ステイング・ローグ「うおおおお!!」

ナツのその行動が感に触ったのか、2人は叫びながら突っ込んでいった。しかしいくらか攻めようとナツに返り討ちに遭ってしまう。戦況は一気に変わった。

―『妖精の尻尾』観覧席

グレイ「全くあの野郎 嬉しそうな面しやがって」

エルザ「決して2人が弱い訳ではない だが相手が強ければ強いほど実力以上の力を発揮する それがナツだ」

―『蛇姫の鱗』観覧席

ジュラ「凄まじいな」

リオン「忘れていた アイツは馬鹿だが戦いに関しては頭の切れるヤツだと」  
ジュラ「いやはや やはり『妖精の尻尾』は強者揃いだのう はっはっはっ」

―『青い天馬』観覧席

一夜「素晴らしい『香り』だね！ナツ君！」

レン「くそっ どんだけ強いんだよっ アイツ！」

―『四つ首の仔犬』観覧席

バツカス「アイツも中々熱い野郎だなあ ワイルドじゃねえか」

―『蛇姫の鱗』観覧席

カグラ（ラクサス・ドレアー、エルザ・スカレット、そしてナツ・ドラグニル……これほどの者たちがいようとは）

観覧席でナツを見ていた者たちは皆、ナツの戦いぶりに感嘆していた

―『剣咬の虎』

オルガ「おいおい マジかよ」

ルーファス「記憶に無いね ドラゴンフォースの力がこうも押されるなんて」

ミネルバ「力、か……」

ルーファス、オルガは双竜の2人が圧倒されていることに驚愕し、ミネルバは何か思うことがあったのか一言つぶやいた

―『妖精の尻尾』応援席

ハッピー「ナツ〜！頑張れーッ！」

リサーナ「やっっちゃえーッ！」

ロメオ「ナツ兄！ いけ〜！」

リリー「しかし凄いな ナツは」

ハッピー「そりゃ ナツだもん」

戦況がナツに傾いたことによって『妖精の尻尾』の応援席は大盛り上がりになっていった

レビイ「ところでガジルはどこいつちやつたの？」

綱吉「戻ってきたらまた喧嘩しそうだなあ」

ガジルがどこかに行ってしまったことにレビイが心配していたが、試合後のことを予感した綱吉は苦笑いをしていた

マカロフ「しかし敵もさる者、諦めん」

メイビス「どちらも対したものです」

マカロフとメイビスはステイングとローグの諦めず戦う精神に関心していた

綱吉（たしかにあんた達は強い、だがナツの方が何倍も強い それはただ単純に“力の差だけでなく 背負っているものの重さも関係してくる 時にその背負っている

ものが“力”を与えてくれる あんた達とナツとの決定的な違いはそれだ それが分

からない限りナツに勝てる道理はない)

―闘技場地下

ステイングとローグは立っているがボロボロで息も絶え絶えになっていた

ローグ「ハア・ハア・ハア・ステイング!!」

ステイング「おうっ!!」

2人は隣り合わせに立って、ステイングは左腕を、ローグは右腕をそれぞれ後ろに突き出すように構えて、互いの掌から魔力を融合させる

―『妖精の尻尾』

マカロフ「あれは! 合体魔法(ユニゾンレイド)!?」

綱吉「(合体魔法・・・その名の通り合わせ技か)あの2人も決めにきたね」

ステイングとローグが合体魔法をしたことにマカロフは驚き、綱吉は勝負を決めにきたことを悟る。綱吉の言葉に皆、固唾を呑んだ

メイビス(力だけでは決して破れない力があります。しかしそれを打ち破る力がある)とすれば、それは想いの力)

―闘技場地下

ステイング・ローグ 「聖影竜閃牙!!!」

2人が拳を前に突き出すと白と黒が混ざった魔導波がナツに撃たれた ナツは両手に炎を纏って構えをとる

ナツ 「滅竜奥義!! 紅蓮爆炎刃!!」

ナツの放った炎は螺旋状に回転しながら2人の技を破り、2人を飲み込み大爆発が起きた その爆発の影響で土煙が起きラクリマビジョンが映らなくなる

ラクリマビジョンが回復して煙が晴れるとそこには、地に倒れたステイングとローグ、そして両手を掲げているナツの姿があった

ローグ (ナツ・ドラグニル…底が…知れ…ない)

ステイング (レクター…強すぎるよ ナツさん)

チャパティ 「こ…こここれは… 『妖精の尻尾』だーッ!!! 双竜敗れたりーッ!!!」

ナツの立っている姿に会場に大歓声が起き、『妖精の尻尾』の応援席も大興奮だった

ー 『妖精の尻尾』 応援席

綱吉 (『雷炎竜』にもならず圧倒か 本当に強くなったな… ナツとまた戦ってみた

かったなあ・・・)

綱吉はナツが勝ったことの嬉しさと合同チームになってしまったことで戦えなくなつてしまったことの寂しさに複雑な心境だった

チャパティ「さあ 残すは1日休んでの最終戦のみ！ 最終戦は全員参加のサバイバル戦です！ はたしてどのギルドが優勝するのか!? 皆さんお楽しみにーッ!!」  
各ギルドの魔道士は、打倒！『妖精の尻尾』!!”を掲げて最終戦に望む

ー『剣咬の虎』観覧席

オルガ「まさかあの2人が負けちまうとはねえ」

ルーファス「中々面白い試合だった しかと記憶したよ」

オルガ「へへッ しばらくこれをネタにたかれるじゃねえか」

ミネルバ「その”しばらく”があればいいがな フフッ」

『剣咬の虎』のメンバーは負けたステイングとローグを心配するどころか嘲笑つていた 彼らに仲間意識などというものはなかったのだ そしてそれはギルドマスターのジエンマも然り、惨敗した双竜を鬼の形相で睨んでいた



## 大魔闘演舞 4日目

- |    |          |       |
|----|----------|-------|
| 1位 | 『妖精の尻尾』  | 45 pt |
| 2位 | 『剣咬の虎』   | 44 pt |
| 3位 | 『人魚の踵』   | 40 pt |
| 4位 | 『蛇姫の鱗』   | 35 pt |
| 5位 | 『青い天馬』   | 30 pt |
| 6位 | 『四つ首の仔犬』 | 15 pt |

ナツはステイングとローグにまた戦おうと満面の笑みで言うと言つて行つた。ステイングは2日目に言つた言葉を思い出していた。

「ーいいよ、くれてやるよこの勝負。俺たちはこの後も勝ち続ける。たかが一点や二点くれてやるつての。」

その一点に負けた2人は自分達がいかに自惚れていたか思い知るのだった。

その頃ナツによつてトロツコで地下に落とされたガジルは

ガジル「ち・ちくしょう・サラマンダーの野郎。ぜつてえ許さねえ・」

ナツに対して文句を言いながら道なりに歩いていった、すると奥に広い空間が見えてくる

ガジル「な・・・なんだ・・・コリヤ・・・」

ガジルはその広場を見ると驚いた。その広場にあつたものは大量のある生物の骨だつた。それは・・・

ガジル「ドラゴンの・・・墓場？」

また華灯宮メリクリアスでは城の窓からユキノが外を見ていた

ユキノ「そうですか・・・『剣咬の虎』が敗れましたか。ナツ様に・・・」

ユキノはギルドを辞めた後王国兵となつて、とある計画に協力していた

ユキノ「エクリプス計画。私の力でお役に立てるのなら、全力で臨む覚悟です」

また別な場所では『魔女の罪』のジェラールが謎の魔力を持つ者を見つけていた

ジェラール「俺も正体を明かす。お前も正体を明かせ」

ジェラールはそう言つて顔を隠していたマスクを外す。そして相手もジェラールの方を振り返り、顔を見せる

ジェラール「そんな・・・!?」

ジェラールはその人物の正体に驚愕した

## 第36話

大魔闘演舞 四日目 夜

ークロツカスの街

大魔闘演舞もあとは最終日のみとなりクロツカスの町の人達はどのギルドが優勝するのか騒いでいた

『妖精の尻尾』すげえな〜

『それに比べて『剣咬の虎』は ぶくく』

『双竜を倒したナツの他にラクサスやエルザもいるんだもんなあ』

「くつそ〜 なんてそのメンバーにツナヨシが選ばれなかったんだよ アイツのバトルまた見たかったのに！」

「こりゃあ 『剣咬の虎』は駄目かな」

「いや 『剣咬の虎』がこのまま終わるとは思えん」

「それを言うなら 『人魚の踵』や 『蛇姫の鱗』だって可能性あるぜ」

どこが優勝するか どんな戦いをしてくれるのか このまま『妖精の尻尾』が優勝するのかそれとも一波乱あるのか 街の人達は期待に胸を膨らませ話しをしていた

ークロツカスガーデン

此処は『剣咬の虎』のクロツカスガーデン 今クロツカスガーデンではステイングとローグがマスターであるジエンマにより制裁を受けギルドの紋章を消せと怒鳴られていた

レクターが仲裁に入り止めようとするが

ジエンマ「誰だ うぬは」

ジエンマの言葉にレクターは驚きつつも自身もギルドの一員であると紋章を見せる  
しかし

ジエンマ「何故 猫風情が我がギルドの紋章を入れている」

ジエンマはそう言うのと魔力弾を放ち、レクターを消し飛ばした あまりに突然のことに皆固まってしまった

フロツシュ「あ・・・ああ・・・レクターが消えちゃった・・・」

ローグ「フロツシュ!!」

フロツシュ「ローグう」

泣き出してしまったフロツシュを庇うようにローグは抱きしめる

ステイング「レ・・・レクター・・・あ・・・ああ・・・あああああ!!」

ステイングの叫びが部屋中に響く

ジエンマ「喧しいぞ ステイング」

ステイング「マスターなんて事を・・あんたはなんて事を！」

ジエンマ「黙れい！たかが猫一匹・・」

怒りと悲しみからステイングはジエンマに攻撃し、その拳から光弾が放たれジエンマの腹部を貫いた

ステイングの行動にメンバー達は声も出せず、動けなかった。しかしその中でただ一人 ミネルバだけは不敵に笑っていた

ミネルバ「それで良い」

ークロツカスの街

『剣咬の虎』で事件が起きている頃、綱吉はフードを被って路に端に立っていた。何故そんなことをしていたかと言うと、時を少々遡る

ー回想

綱吉（やつぱりこのまま放置する訳にはいかない。何か手がかりだけでも）

綱吉はミラを暴行した犯人をなんとか見つけ捕まえたかった。しかし自分が離れている間再び襲ってくる可能性がある。そこで綱吉はミラを連れてラクサスの部屋に行

く ちなみにラクサスはフリード達と同じ部屋だ

綱吉「すまない ラクサス 少しの間だけミラ達と一緒にいてくれないか」

ラクサス「なんだ急に 理由を言え」

綱吉「いや 俺用事があるから 少しミラ達の頼めないかなあとって・・・」

なんだそんなこと 子供じゃあるまいしと言おうしたが、綱吉の目を見てふざけて言っているんじゃないと察する

ラクサス「・・・いいぜ 時間は？」

綱吉「ありがとう ラクサス！ そうだな（あまり長時間は出来ない）大体1時間くらいかな」

ラクサスは少しの沈黙の後

ラクサス「1人でいいのか？」

綱吉「・・・ああ ラクサスには」

綱吉はそう言ってミラのことチラッと見る それを見たラクサスは綱吉の意図を理解して

ラクサス「分かった 任せろ」

ラクサスの言葉に綱吉は安心して、ミラの方を向き

綱吉「ミラ 俺用事があつて出掛けなきゃいけない だからその間ラクサス達と一緒に

いてくれ」

ミラ「えっ でも・・・」

綱吉が出掛ける ミラはこの前襲われた時の犯人を探しにいくのだと気づき不安になった

綱吉「大丈夫！ すぐに戻ってくるし それに一人で待つてるより皆んなといった方が安心するだろ」

ミラ「でも・・・いえ分かったわ かわりに早く帰ってきてね」

ミラは行つてほしくなかったが、止めても行くことを思い不安ながらもなんとか納得した

綱吉「ああ それじゃあ」

綱吉は視線をラクサスに向ける ラクサスはそれに答えるように頷く

綱吉「行つてくるよ」

そう言つて綱吉は出て行つた

ミラ「あつ・・・」

ミラは出て行つた綱吉の背中を寂しそうに見つめていた いつまでも外を見ていた  
ミラにラクサスは

ラクサス「何捨てられたワン公みてえな面してやがる」



ミラ「なっ だっ 誰が捨てられた犬ですって！」

ラクサス「お前だよ 全くいつまでも寂しそうな面しやがって さっさと部屋ん中入れ」

ラクサスの言葉にミラは怒りながら部屋に入っていった

ビッグスロー「しっかし相変わらずブラブだなあ」

エバーグリーン「でもちよつと過保護な気もするけどね」

フリード「いや 見方を変えればそれだけミラのこと愛しているのだろう」

ミラ「もうフリードったら」

雷神衆の三人も綱吉とミラのやり取りを見て何時もことだと思っていたが綱吉がいつもより心配し過ぎのような気もしていた

エバーグリーン「今でこれなら子供が生まれたら相当親バカになっちゃうんじゃないの？アイツ」

ミラ「こっ子供って」

エバの言葉にミラは頭の中で、自分が我が子を抱き抱え隣りで優しく微笑んでくれる綱吉の顔を想像して、顔を赤くしていた

ー回想終了ー

綱吉は街の人達に見つかって騒ぎにならぬようフードを被り、目視出来ないよう魔力を超音波のように球体状に飛ばした

実はミラが襲われた時痕跡は残されていないと思われたが、ほんの僅かな魔力の残留があつた普通ならば見落としてしまうほどの小さな残留 しかし綱吉は見落とさず頭に 体に 記憶した 自分の大切な人を傷つけた人物の魔力を

自分を中心に30m、50m、80mと索敵範囲を伸ばしていく 綱吉が蝙蝠のエコーレーションから考えた技である もし犯人が超音波に触れば即分かる仕組みになつていた

しかしこの技にも弱点はある索敵をしている間ソレに意識を集中するため無防備になること 蝙蝠のように移動しながらエコーレーションを出来ないこと 本来ならば1人自分の守りに必要なのだが、綱吉は自分よりもミラを優先した

そして索敵範囲限界の100mに達した

綱吉（この範囲にもいなかったか・・・やはり街の端の方か？ だが・・・）

そう綱吉の索敵は宿からそう遠くない場所で行われていた 仮に宿で何かあつたとしてもすぐに対応できる距離、それが今索敵をしている距離だったのだ

そして綱吉が索敵に難義しているのを遙か遠方から見ている人物が1人

白蘭「何突っ立ってんのかなあとと思ったら なるほど索敵してたのか」

白蘭は両目に魔力を集中して綱吉が魔力を超音波のように飛ばしているのを確認する

白蘭「まるで蝙蝠のエコーロケーション 中々面白いことやるね でも（その索敵範囲の距離は約100m そして索敵している間は君は何もできず無防備状態）」

白蘭は瞬時に綱吉の索敵技の弱点を見抜いたのだった

白蘭（その距離じゃここまで届かない こつちから会いに行ってもいいし、ミラちゃんの方に行ってもいいんだけど あの娘と約束しちゃったしね 手を出さないって だからこのお祭りの間は隠れておくよ 君の戦うのはその後 それに何か裏で企んでる人達もいるみたいだしね）

白蘭は妖しく笑みを浮かべながら、暗闇の中へ消えていった

綱吉はあちこち索敵したが見つからず、約束の時間まであと少しとなった

綱吉「クソツ 1時間近く使って何も成果なしなんて最悪だ だけどこれ以上時間を伸ばすこともできない 宿に戻ろう」

綱吉は意気消沈して宿に戻るのだった

綱吉「ただいまー」

部屋に入るとラクサスが出て来た

ラクサス「おう　でうだつたよ　何か成果はあつたか？」

綱吉はラクサスの問いに答えず、代わりに落ち込んだ表情で首を左右に振った

ラクサス「・・・そうか　だがいつまでも落ち込んでんなよ　アイツの前でもそんな

顔する訳にはいかねえんだからよ」

綱吉「ああ　そうだな　ありがとう　ラクサス」

そう言つて綱吉の顔に笑みが戻り、ミラの方へ行つた　すると何故かミラの顔が赤くなつており、頬に手を当てていた

綱吉「ん？　どうしたんだ　ミラ　顔が赤いけど」

ミラ「えつ　ツツツナ!?　いつ帰つて来たの!?」

綱吉に声を掛けられたミラは慌てていた

綱吉「いつつて今帰つて来たんだけど」

ミラ「帰つて来たんならちゃんと言つてよ！」

綱吉「いや、ちゃんと説つたんだけど」

ミラ「わつ私に聞こえるように言わなきゃ駄目じゃない！」

綱吉「ええ〜（う〜ん　俺が悪いのかなあ）」

ミラが何故怒っているのか分からずフリード達を見たが、ビッグスローはニヤニヤ笑っており、エバーグリーンとフリードは呆れ顔をしていた。綱吉は困り果てていた。その時部屋の扉を開けてレビイが入ってきた。

レビイ「皆、今すぐ広間に集まって！」

綱吉「レビイ どうしたんだ そんなに慌てて？」

レビイ「あつ ツナとミラもいたんだ 良かった 部屋に居ないからどうしようかと思つて」

フリード「それで何があつたんだ？」

レビイ「私も詳しくは聞いてないんだけど、マスターがメンバー全員を集めるようにつて言つてて」

ミラ「何か慌ててる感じね」

フリード「とにかく向かうとしよう」

綱吉達は広間へと向かった。広間にはマスターやメンバー達がすでにいた。そして何故かナツがロープでぐるぐる巻きにされていた。

綱吉（また何かやらしたのか？ ナツは）

マカロフ「全員、揃つたようじゃの」

綱吉は辺りを見てルーシイがいないことに気づく

綱吉「マスター ルーシイがまだ来てませんが」

マカロフ「ルーシイは来ん いや来られんと言った方が正しいか」

ミラ「どういうことですか！ マスター！」

ラクサス「何があつたんだ ジジイ」

マカロフの言葉に皆が驚き慌てる中、暗い表情を浮かべているメンバーが数人いた

綱吉「ナツ、いやグレイでもガジルでもいい 何か知ってるんじゃないのか？ ルー

シイが来られないと言われて慌てる様子もなく、暗い表情を浮かべナツに至つては：

ナツの方を見ると怒りの表情を浮かべていた

グレイ「分かった 俺から話す」

グレイは説明を始めた

まずナツ、ガジル、ウエンデイ、ルーシイ、グレイにハッピー、シャルル、リリーの  
8人でガジルの落ちた場所に向かった

その場所は竜の骨がたくさんあり “竜の墓場” と言つても過言ではなかった そこ  
でウエンデイの奥義『ミルキーウエイ』を使い、魂となつた竜の声を聞くことにした  
『ミルキーウエイ』によつて呼ばれた竜 “ジルコニス”

その竜が言うには此処にいる骨となつた竜達は、たつた一人の滅竜魔道士に殺された

らしい

その竜の名は「アクノロギア」 男は竜の血を浴び続け、皮膚は鱗へ変わり 歯は牙へ変わり 人の身から竜の姿へと変わってしまった

人間でありながら「竜の王」になった 竜の王が誕生した戦い それが「竜王祭」となった

しかしジルコニスとは、話の途中で魂が昇天してしまい消えてしまった そこへフィオーレ王国騎士団長の『アルカディオス』と王国兵となったユキノが現れる

アルカディオスらに連れられ城に行く アルカディオスが言うにはアクノロギアとゼレフは密接な関係にあり、「黒魔導士」ゼレフが1人の滅竜魔道士をアクノロギアにしたと推察したらしい

そして城の中に入りある場所へ案内される そこには巨大な扉があった その扉の名は「エクリプス」

その扉を建造するのに膨大な魔力が必要で、毎年大魔闘演舞に出ている魔道士から魔力を接収していた

そしてその扉の最大の力は「時」を移動できること つまりこの扉の力を使い40年前に行き、不死になる前のゼレフを討ち取る それがこの『エクリプス計画』

それは日蝕が起きる7月7日に決行する 計画を完璧にする為には精霊魔道士と鍵が必要、なので強力してほしいと頼まれるが、そこへ王国大臣の『ダートン』が兵を率いてやってくる

ダートンは計画の反対派で、アルカディオスに対し外部に情報を漏らした罪で拘束され 更にユキノとルーシイも拘束されてしまう

ナツは王国兵に攻撃しようとするが、扉に魔力を吸われ気を失ってしまう 魔法を使えないグレイ達はそのまま城の外へと追い出されてしまった

ダートンが言うには大魔闘演舞で優勝すればルーシイ達を返してくれると言つて立ち去って行つた

グレイ「これが事の顛末だ・・・」

グレイの説明が終わると皆ざわめき出していた それもそのはず “黒魔導士”ゼレフ “竜王”アクノロギア “時”を移動できる扉エクリプス あまりにもスケールがデカ過ぎた

ラクサス「ようは何か大魔闘演舞で優勝しなきゃルーシイを取り返せねえのか？」  
グレイ「まあ その話も信用できるか分からねーがな」



皆がざわめいている中ナツが痺れを切らしロープを引きちぎる

ナツ「だあーっ！　いつまでもじつとしてられっか！　ルーシイを助けに行くぞーっ  
!!」

ロープを引きちぎったナツはドアを目指し走る

マカロフ「待てっ！　ナツ！」

その時ドアとナツの間に綱吉がはいる

ナツ「退けーっ！　ツナーっ！」

綱吉「ん」

綱吉は返事一つで横へずれる

ナツ以外のメンバー（（いや　退げるかいっ!?!））

皆が綱吉のまさかの行動に驚き、心の中でつつこんでいた　ナツが綱吉の隣を通り過ぎようとした時、綱吉はナツの足を引つ掛けて転ばせる　そして倒れたナツの背に馬乗りになって左手でナツの頭を抑えて、右手でナツの右手首を掴み捻り上げる

ナツ「ぐおっ　ツナ・・・テメエ・・・」

綱吉「退けることは了承したけど、止めないとは言っていないだろ」

一瞬の出来事に皆固まってくる中、綱吉は淡々とやっていく

綱吉「落ち着けて　ナツ」

ナツ「五月蠅え！ いいから退けよ！ ルーシイを助けに行くんだ！」  
抑えられて尚暴れるナツに綱吉はふうと息をついて

綱吉「少し 黙れ」

全員「!!?!」

綱吉の怒気を込めた言葉に部屋にいる全員が一瞬硬直する

綱吉「ルーシイを助けない その気持ちは俺も此処にいる皆同じだ だがな敵は王国だ、皆が今まで倒してきた闇ギルドじゃないんだぞ 今のお前のやろうしていること、悪手だぞ」

ナツ「どうということだよ」

綱吉の怒気を感じ冷静になったナツが聞き返す 綱吉はナツの拘束を解いて立ち上がり、ナツも立ち上がる

綱吉「もしこのまま攻め込んだとしよう 俺たち『妖精の尻尾』は王国に戦争を仕掛けた『犯罪者集団』の烙印を押されるぞ」

グレイ「は・・・？」

ジュビア「えっ・・・」

綱吉「王国に仕掛けたんだ 当然だろう」

レビイ「でつでもルーちゃんやユキノさんが拐われたんだよ 悪いのは」

綱吉の言葉にレビイが言うが

綱吉「揉み消し、情報操作なんて国に掛かれば簡単な事だ　でもこの中に己の身可愛さに仲間を助けられない者なんていないことぐらい分かっている　だが子を持つ親ならば　どうだ」

ミラ「えっ・・・」

綱吉「マカオ、アルザック、ビスカはどうだ　自分の子が一生日陰で生きていかなきゃいけない　耐えられるか」

マカオ「ぐっ・・・」

ビスカ「そっそれは・・・」

アルザック「ツナ・・・」

マカオ達は顔を伏せ口を噤んでしまう

ロメオ「父ちゃん・・・」

アスカ「パパ　ママ　どうしたの？」

ビスカ「なんでもないわ　大丈夫よ」

ビスカとアルザックの不安そうな顔を見て声を掛けるアスカ　ビスカは笑顔を作りアスカを抱き抱える

グレイ「じゃあどうすんだよ ルーシイを見捨てんのか」

綱吉「誰も見捨ててるなんて言ってるないだろ ただナツの様に正面から突っ込んで戦って救出するのが悪手だと言ってるんだ」

マカオ「では お主はどう考える？」

これまで黙っていたマカロフが口を開き、綱吉に問う

綱吉「秘密裏に救出します 密かに城に忍び込み極力戦闘は避け、救出を第一と考えます」

マカロフ「・・・して救出メンバーは？」

綱吉「最終日の戦いもありますので、ナツ達は除外します 辞退することも出来ませんし、仮に出来たとしても主催者側と観客が許さないでしょう 観客が騒いで暴動になるやもしれません」

マカロフ「ふむ 二面作戦か・・・」

グレイ「クソツ」

エルザ「仕方ないか・・・」

ナツ「・・・」

綱吉の言葉にグレイ達は悔しがる

綱吉「なので残りメンバーから俺とミラ、ウエンデイで行こうかと」

エルフマン「おいつ 待ってくれ！ 俺も行くぜ！」

レヴィ「私もルーちゃんを助けに行くよ！」

アルザツク「僕たちもいくよ」

ビスカ「ええ」

綱吉の提案に他のメンバーは自分達も行くと言を上げる

綱吉「気持ちには分かる だが駄目だ 今回はあくまで救出しに行くんだ、戦争をしに行くんじゃない 人数が多ければそれだけ小回りがきかず動きにくい 3人がベストだ 少数精鋭で行く それに俺やミラ、ウエンディと同等に戦える者が他にいるか」

厳しい言い方になってしまいがここは譲れないと強く言った 綱吉の言葉に皆黙ってしまふ

ウエンディ「あつあのツナさん メンバーに選ばれたのは嬉しいんですけど 私、ツナさんやミラさんのように強くありません 役に立つか……」

綱吉「ウエンディ 君は自分が思ってる以上に強いんだ 決して足手纏いなんかじゃない それにウエンディには俺たちには無い傷を治すを癒しの力があるだろう 誰かが傷を負った時必ずウエンディの力が必要になる 自信を持つんだ」

ウエンディ「ツナさん はい！ 頑張ります！」

不安そうに見せるウエンディだったが綱吉の言葉で目に力を宿しやる気が戻る そ

こへミラがやって来て

ミラ「ツナ 私には何も無いのかしら？」

綱吉「ごめん 一緒に来てくれるか ミラ？」

ミラ「ええ もちろん ルーシイを助けにいきましょう だけど……」

ミラは言葉を詰まらせる 綱吉の身体や心を心配していたのだ

綱吉「ミラの心配してくれるのは嬉しいけど それよりも仲間が危ない目に遭っているのが大事なんだ それに王国側も救出することは読んでいるだろうから罨や伏兵がいるだろう 俺の直感が必要になる」

ミラ「ツナ……」

綱吉「大丈夫 ミラの心配してるようなことにはならないよ 直感で罨や伏兵を回避してルーシイ達を助けるんだ それにもし危なくなったら助けてくれるんだろ」

ミラ「当たり前でしょ」

ウエンデイ（ツナさんの鬼のことでしょうか？）

綱吉の言葉にミラは微笑みながら答え、綱吉の心臓が悪くなっていることを知らないウエンデイは首を傾げていた

綱吉「ウエンデイも何かあったら頼むな」

ウエンデイ「はいっ 任せて下さい！」

懂れている綱吉の問いにウエンデイは力強く答えた

そこにナツが近づいてきた

ナツ「ツナ さっきは勝手な事をして悪かった・・・」

綱吉「いや 俺の方こそ止めるためとはいえ、お前を拘束したんだ すまなかつた」  
互いに謝ると、ナツは意を決したように

ナツ「ツナ メンバーだけど俺と代わってくれねえか！ 頼む！」

頭を下げた頼み込んだ

グレイ「おいっ お前何言ってるんだ！」

エルザ「ナツ 急に何を」

ナツの突然の頼みにエルザ達が詰め寄ろうとするが、綱吉が手で制す

綱吉「どういうことなんだ？ 此処にいる者達全員がルーシイ達を助けたい その気持ち留めてまで俺達に任せてくれてる なのお前と代わっては他の人達に申し訳ない ただ助けたいって理由なら代わる気はないぞ」

ナツ「お前の直感が凄えのは分かってる でもルーシイは俺が助けてえんだ！ 俺はあの場にながら仲間を連れ去られちまった！ 魔力奪われて気を失ってる間に！ 情けねえ！ もうそんな真似はしねえ！ 頼む！」

ラクサス「お前・・・」

グレイ「ナツ」

ウエンデイ「ナツさん」

ミラ「ナツ・・・(ツナ 貴方はなんて答えるの)」

エルザ「ナツ(ツナ どうする)」

ナツの必死の懇願に皆息を呑み、綱吉の答えを待つ

綱吉「・・・(気持ちには分かるが、救出には俺が行くべき・・・だがナツが良いと俺の直感が言っている 俺よりもナツの方が良いと それにナツのここまでの覚悟を見せられたんだ 無碍には出来ない) 分かった 代わるよ」

ナツ「！」

綱吉の言葉にナツは顔を上げて驚いた表情を見せる

ナツ「いいいのか？」

綱吉「なんだ 嫌なのか？」

ナツ「そんなことねえ！ ありがとな！ ツナ!!」

ナツは笑顔を見せた

綱吉「但し勝手な行動はするなよ」

ナツ「ああ 分かった！」

綱吉はミラとウエンデイの方へ向き直し



綱吉「すまない という訳で俺とナツが代わる形となった」

ミラ「仕方ないわ ナツのあの姿を見せられたんだから（・・・でも）」

ウエンデイ「はい 大丈夫です（ミラさん？）

ミラもウエンデイも了承してくれた

綱吉「ミラ メンバーが代わったからミラが指揮をとってくれ それからナツは色々

突っ走る傾向がある 良く見といてくれ」

ミラ「ええ 分かったわ」

綱吉「ウエンデイもサポート宜しくな」

ウエンデイ「はい！」

そこへラクサス達バトルメンバーがやって来る

エルザ「ツナ ナツの気持ちを汲みとってくれたのは嬉しいが」

グレイ「大丈夫なのか？」

ガジル「直感があるお前の方が良いと思うがな」

ナツ「おいっ！」

エルザ達は綱吉の行動に感謝しているが、同時に交代して大丈夫なのかという不安も

あった

綱吉「大丈夫 その直感でナツの方がいいって言ってるんだ」

ラクサス「そうか お前がそう言うなら大丈夫なんだだろう、．．．だがお前の方は大丈夫なのか？」

ラクサスの含みのある言い方 ミラも懸念はあつた 救出の時は極力戦闘は避けていき、自分もいる、傷を負つたとしてもウエンデイがいる だからこそ了承したのだ  
だがバトルメンバーとなれば違ってくる 当然戦闘はしなければならず、1対他や息つく暇なく連戦、乱戦などあり得るだろう 戦いで鬼になるかもしれない ダメージの影響でまた心臓に負担がかかり血を吐くかもしれない そんな不安がミラにあつた  
そんなミラに綱吉は優しく微笑み

綱吉「大丈夫 俺には皆がいる それにミラがいつも側にいて護つてくれる」  
そう言つて右手に着けている腕飾りを見せ、撫でる

ミラ「それ．．．」

綱吉「ああ ミラが作つてくれた腕飾り しつかり思いが込められてる だから俺を護つてくれているんだ」

ミラ「ツナ」

綱吉「そしてミラの側にも俺はいる そうだろう」

綱吉はそう言つてミラが架けているネックレスの宝石部分を指先で軽く当てた

ミラ「ええ そうね」

ミラは宝石部分に手の平を当てて、綱吉と見つめ合う

エルザ「ああゝ オホンツ 2人共」

グレイ「そういうのは2人だけの時にしちやくれねーか」

声を掛けられ2人は顔を赤くし少し離れる

ミラ「ごつごめんなさい」

綱吉「ごつごめん・・・」

ラクサス「アホが」

カナ「すぐ2人の世界に入るんだから 全く」

ジュビア（ミラさん 皆の前であんなに見せつけて・・・なんて羨ましい！）

ラクサス等呆れていたが、ジュビアは綱吉とミラの両思いな関係を羨ましいそうに見つめていた

エルザ「まあ とにかくこれでメンバーが決まったな」

マカロフ「何丸く収まっとるんじや 馬鹿タレ共 勝手にポンポン決めおつて」

綱吉「マツマスター すみませんっ 本来ならマスターに決めてもらうところを俺の

独断でやってしまい」

マカロフ「まあ良い　ワシも似たようなことは考えておったからの」

ナツ「なんだよ　なら文句言うなよな　じっちゃん」

エルザ「黙ってる！」

ガンツ！

ナツ「ぐおっ」

ナツはエルザに拳骨を喰らいたんこぶが出来ていた

マカロフ「さてツナよ　改めて聞くがナツとの交代でいいんじゃない？」

綱吉「はい！　俺はバトルの方で」

綱吉の返事と目を見たマカロフは納得し

マカロフ「分かった　ではバトルメンバー並びに救出メンバーはしかと頼んだぞ　そ

してメンバーに選ばれなかった者達も声の限り、心の限り応援を頼んだぞ」

マカロフは部屋にいる『妖精の尻尾』のメンバー達の顔を見ていく

マカロフ「勝負は明後日！　励めよお！　ガキ共っ!!」

全員「「オオッ!!!」」

バトルメンバー　ラクサス

グレイ  
エルザ  
ガジル  
綱吉

救出メンバー  
ミラ

ウエンディ

ナツ

ハッピー

シャルル

リリー

大魔闘演舞最終日、ルーシイ達を救出する為二面作戦を決行　そしてバトルパートに  
ナツの代わりに綱吉が参戦することが決まった!!

## 第37話

大魔闘演舞 5日目

最終戦前日、各ギルドのメンバー達はそれぞれ、最後までトレーニングに励む者、落ち着いて明日を待つ者、座して瞑想する者、様々だった

そして綱吉もまた 綱吉とミラの泊まっている部屋で

ミラ「ねえ ツナ? ツナはトレーニングはいいの?」

綱吉「ああ 前日だしね 軽く動かしたり、柔軟や瞑想をメインにしていいのかなって思ってるんだ」

ミラ「ふーん そのくらいでいいの?」

綱吉「根を詰め過ぎて、明日に疲れが残っちゃったら大変だしね このくらいが丁度いいよ」

綱吉はそう言うのと柔軟をしてみた ミラも綱吉の真似をして柔軟をしていく  
柔軟が終わると2人は床に禅を組んで瞑想に入る

もちろん呼吸法も忘れず、ミラの呼吸が間違えていれば指摘していた

そして夜になりメンバー達は集まり初代を交えて、ミーティングをする。初代の作戦を聞かされた綱吉はその智略、知識の多さに驚かされた。綱吉はボードに書かれた各ギルドのメンバーの名を見て明日自分と戦うであろう人達を直感で予想する。

綱吉（戦うのは・・・この人達かな）

ミーティングを終えると各々部屋に戻って行く。綱吉とミラも部屋に戻り明日に備え早めに寝ることにした。灯りを消して2人はベッドに入るとミラが話し掛けてきた。

ミラ「ねえ ツナ」

綱吉「ん？」

ミラ「明日、気をつけてね」

ミラは心配そうな顔をしていて、綱吉はそれに優しく微笑みながら

綱吉「分かってるよ」

ミラ「大怪我したら許さないんだからね」

綱吉「えっ」

ミラの言葉に綱吉の表情は固まってしまふ

ミラ「当たり前でしょ 恋人の怪我した姿なんて誰が望むのよ」

綱吉「ミラ 心配してくれるのは嬉しいよ でも強い人達が大勢出ているんだ 負傷

するのはしょうがないよ　それにミラが俺のことを心配してくれてるように俺もミラのことを心配なんだよ　本当は戦って欲しくないっていうのが本音なんだけどねでも・・・」

綱吉は悲しそうな表情を見せる

ミラ「分かっているわ　仲間の危機に黙っていられないもの　私達はルーシイ達を助け」

綱吉「俺達の方で優勝する　それで全部終わりだ」

ミラ「ええ」

2人は話しを終え、目を瞑った

綱吉（明日の戦い、一筋縄ではいかないだろう・・・そしてそれはミラ達の方も・・・）  
綱吉は寝ているミラを見る

綱吉（無事にルーシイ達を助けて帰ってきてくれよ　ミラ）

綱吉は恋人の身を案じて、眠りについた

そして朝がやってきた

大魔闘演舞　最終日



綱吉は目を覚ますとベッドから起き、カーテンを開ける。朝日が眩しく目を細めるが、これならば晴天になるだろうと気分は良いものだった

ミラ「おはよう ツナ」

カーテンを開け朝日が入ってきたことでミラも目を覚ましたようだ

綱吉「おはよう ミラ」

ミラ「具合はどうかしら 問題ない？」

綱吉「ああ 大丈夫 これなら思うように戦えるよ」

綱吉はミラの問いに笑顔で答え、右手を握り拳にして見せた

朝食を済ませた2人は準備を終えると外に出る。途中で他のメンバーに会った。救出メンバーと出場メンバーは先に会場と城へそれぞれ向かわなければならぬ宿を出て、それぞれの組に分かれる

綱吉「それじゃあ そっちは頼むよ」

ナツ「おう！ 任せろ！ 必ずルーシイとユキノを助けてくるぜ！」

グレイ「熱くなりすぎんなよ ナツ」

ナツ「うるせえ グレイ」

エルザ「よさないか グレイ だがミラとウエンデイがいれば大丈夫だろう」

ナツ「おいつ!!」

フオローしてくれるかと思いきやエルザも押搦ってくる

綱吉「ナツ」

ナツ「ん?」

ナツが綱吉を見ると綱吉が右手を拳にして突き出していた 最初は何か分からなかつたが、すぐに察してナツも左手を拳にして突き出す

綱吉「任せたぞ」

ナツ「おう」

2人は軽く拳を小突く そして次にウエンデイへ

綱吉「ウエンデイ 自分に自信を持って 君は強い」

ウエンデイ「はい!」

2人も拳を小突く 綱吉はしゃがみハッピー達の方へ

綱吉「3人もサポート宜しくな」

リリー「ああ 任せろ」

ハッピー「あい!」

シャルル「任せなさい」

3人は自信満々に答え、先にやった2人のように拳を小突いていった

そして最後にミラへ向き

綱吉「ミラ 皆を頼むな」

ミラ「ええ」

2人は拳で拳で小突くが、ミラがまだ物欲しそうな目をしており、綱吉がそれに気づくと

綱吉「えくと 皆の前だし今はこれで我慢して」

ミラは綱吉の言葉に不満そうだったが

綱吉「あとは帰ってきてから なっ？」

ミラ「分かったわ 約束だからね」

綱吉とミラは笑顔で約束をした

両メンバーは互いに背を向けて歩き出し、綱吉達は会場へ ナツ達は城へ向かった  
綱吉（ルーシー達のことにはナツ達に任せろ 俺は俺のできることをやるんだ）  
綱吉の表情は先程までの優しい顔ではなく、引き締めて強い目をしていた

闘技場 ドムス・フラウ

闘技場の客席はもう観客で一杯になっており、観客は開始が今か今かと興奮していた  
チャパティ『いよいよやって参りました！ 大魔闘演舞 最終日!! 泣いても笑って  
も今日：優勝するギルドが決まります!!』

実際にはチャパティ、解説には元評議員のヤジマ、ゲストにはマスコットキャラクタ  
ターのマトー君となっていた

出場チームの入場がやって来た 入場は最下位である『四つ首の仔犬』続いて『青い  
天馬』『蛇姫の鱗』『人魚の踵』とどんどん入場してくる そして

チャパティ『そして現在第2位 このまま王座陥落してしまうのか 再び最強の名を  
手にするのか?!』 『剣咬の虎』!!!』

『剣咬の虎』が入場してくると会場がざわめいていた それは『剣咬の虎』の入場が初  
日と違い余裕や陽気な感じでの入場ではなく静かに登場して来たからである

チャパティ『おや？何か雰囲気が変わりましたね』

ヤジマ『気合いを入れ直したのかね』

マトー君『かつこいいカボー!!?』

チャパティ『そして現在第1位!!?』 7年前最強と言われたギルドの完全復活となる

か!? 『妖精の尻尾』の入場だーッ!!』

しかし『妖精の尻尾』の入場でもまた会場がざわつく。それもそのはず

チャパテイ『なんと!??』『妖精の尻尾』メンバーを入れ替えてきたーっ!!』

ナツではなく綱吉がメンバー入りしていたのだから

チャパテイ『タツグバトルであれだけ活躍していたナツ・ドラグニルがいらないとは一体!??』

ヤジマ『ウム 何かあったのかねえ?』

観客席

「なんでいねえんだ」

「アイツ見たかったのに」

「でもツナヨシの戦いがまた見られるのか」

「あの子ことまた見たかったのよね」

ナツと綱吉の交代に観客の反応は期待と残念が半々といったところだった。しかしこれから戦う敵チームは

『蛇姫の鱗』

ジユラ「ナツ殿に代わりにツナヨシが出てきたか」

リオン「アイツが出て来るとはな」

シエリア「ジユラさんと互角の戦いをした人だよな」

リオン「ああ アイツが出るならまだナツの方がましだった ナツの方は強いが馬鹿だったが、アイツの恐ろしさは炎魔法でも武術でもなく柔軟さにある」

シエリア「柔軟さ？」

リオンの言葉に理解出来ずシエリアは首を傾げる

リオン「アイツに造形魔法を教える時、模擬戦を何度かやったから分かる アイツは相手や状況、地形に応じて戦闘スタイルを変えていく厄介な戦い方をする奴だ アイツほど戦い難い奴はいない」

ジユラ「うむ わしも戦ったからこそ分かる ツナヨシは一つの戦い方に拘らない対応力のある男だ」

リオン、ジユラの説明にシエリア、ユウカ、トビーは生唾を飲む

ジユラ「皆、ツナヨシと戦うことになったら気を引き締めてかかれよ」

リオン・シエリア・ユウカ・トビー「……はい！……」

『人魚の踵』

カグラ「あの少年か……（要注意なのはMPFを破壊したあの拳の技だな　だが技の弱点はもう分かった　十分勝機はある）」

『四つ首の仔犬』

ロツカー「バツカスさん　アイツつすよ！」

バツカス「ああ　ようやく来やがったかあ　あの野郎、勿体つけやがって　おうオ  
メエら　アイツは俺の獲物だ手エ出すんじゃねえぞ」

ロツカー・イエーガー・ノバーリ・セムス「おっ押忍！」

『青い天馬』

一夜「ナツ君代わりに彼が来たか」

イヴ「ナツはどうしたんでしょうか？」

レン「さあな　どっちにしろ厄介なことに変わりねえよ」

ヒビキ「一夜さん　どうします？」

一夜「案ずることはない　私に任せたまえ」

『剣咬の虎』

ローグ「ナツ・ドラグニルがない？」  
 スティング「いいよローグ いないのならいないで構わない それにアイツだって厄  
 介な奴だ 切り替えよう」

綱吉がメンバーに入ったことに「疑念」より「警戒心」の方が強かった

『妖精の尻尾』 応援席

ドロイ・ジエツト「エルザーツ!!」

マカオ・ワカバ「ガジルー ぶちのめしてやれー!!」

ジュビア「グレイ様ー! 頑張つて下さーい!」

フリード「ラクサス!!? その勇姿を見せてくれ!!?」

カナ「ツナー! ナツの代わりに出たんだから、しっかり頑張んなさいよー」

エルフマン「そうだぞ! ツナー!! 漢を見せてやれえ!」

『妖精の尻尾』の応援席からは5人に向けて声援が送られていた 皆が声援を送つて  
 いる中マカロフとメイビスが真剣な顔をして話し合っていた

メイビス「二面作戦とは考えましたね 六代目」

マカロフ「考えたのはツナです 俺はその案を許可しただけ」



メイビス「ツナが そうでしたか・・・」

マカロフ「大魔闘演舞に優勝すれば合法的にルーシイを返してもらえろ それならそれで構わん しかしすべてを信じきる事は出来ん だが正面から力づくでルーシイを取り返せばツナの言うようにそれこそ儂らは王国に牙剥いた犯罪者集団になつてしまふ 故に」

メイビス「密かに潜入し救出すると」

マカロフ「ええ 皆が大会に夢中になつて今が好機 されど向こうも救出しに来ることは読んでおきましょう あとはアイツらを信じて待つのみです」

マカロフは空を見上げてナツ達のことを思い浮かべた

### 闘技場

グレイ「なんだツナ 交代早々注目されてんじゃねーか」

綱吉「うーん 喜んでいいのか、どうか」

綱吉は敵チームから注目されていることに對し、複雑な気持ちだった

エルザ「警戒するということはそれだけお前のことを強敵として認めていると言える 喜んでいいんだぞ」

綱吉「・・・分かった ありがとうエルザ」

エルザの励ましに綱吉は笑顔で答えた

「ガジル「しっつかしあのバツカスって野郎 随分お前のことギラついた目で見て来やがるな」

ガジルに言われ見てみると、たしかにギラついた目で綱吉のことを見ていた

エルザ「やはりバツカスはお前に狙いを定めたみたいだな」

グレイ「大丈夫か？エルザと同等なんだろ」

綱吉「大丈夫！ 負けるつもりは更々ないよ」

心配するように声を掛けてきたグレイに綱吉は力強く答えた

ラクサス「ならあの拳法野郎はお前に任せる 勝って来いよ」

綱吉「ああ！ 任せといて」

皆で話しているとチャパティから各チームは移動するようアナウンスが言い渡される

チャパティの説明によるとバトルフィールドはクロツカスの街全域、各チームは街に分散して待機している 各々街中を駆け巡り、敵と出会ったら戦闘となる

勝敗は相手を気絶、戦闘不能又は降参させるとそのギルドに直接1pt加算される

各チームにはリーダーが1人いて、リーダーを倒すと5pt加算される

ちなみに今現在の各ギルドのptを確認しておく

- 1位 『妖精の尻尾』 45 pt
- 2位 『剣咬の虎』 44 pt
- 3位 『人魚の踵』 40 pt
- 4位 『蛇姫の鱗』 35 pt
- 5位 『青い天馬』 30 pt
- 6位 『四つ首の仔犬』 15 pt

こんな感じである

どのチームにも優勝する可能性がある

クロツカス 『妖精の尻尾』の待機場所

エルザ 「よいか 私達は優勝するしかないんだ ルーシイ達を助ける為に」

綱吉 「ナツ達が無事救出してくれれば」

ガジル 「それに越したことはねえが」

グレイ 「だとしても優勝にはもう一つの目的もある」

ラクサス「7年間、苦い思いをしたギルドの奴等のためにもな」  
綱吉達は気合いを入れるのか、円陣を組む

そして試合開始の銅鑼が鳴る

チャパティ『栄光なる魔の頂は誰の手に!!?』

大魔闘演舞!!?』

開始です!!』

エルザ「行くぞ!!!」

綱吉達「!!!オオッ!!!」

試合が始まるとやはり分散して各個撃破に動くチームが多い。戦闘能力の高い『剣咬の虎』は1人で動くようだ。他にも『青い天馬』のレン、ヒビキ、イヴの3人1組、『蛇姫の鱗』のユウカ、トビーの2人の1組がある。

しかし何故か『妖精の尻尾』は目を瞑り動かない。観客や感知能力に長けた者がそれに疑問を覚える。

そんな中もうすでに敵同士で接触し戦闘しているところが

ユウカ「俺が封じている間に」

トビー「おおーん!!」

ノバリー「ぐはあつ!!?」

『四つ首の仔犬』ノバリー戦闘不能 『蛇姫の鱗』+1pt↓36pt

レン「女子と当たるなんてついてない」

ヒビキ「いや、全くだよ」

イヴ「2人ともっ」

『人魚の踵』アラニーヤ・ベス「きゃあああ」

『人魚の踵』アラニーヤ、ベス共に戦闘不能 『青い天馬』+2pt 32pt

『四つ首の仔犬』のセムス、ロツカーもリオンとジユラに倒される

『蛇姫の鱗』+2pt 38pt

次々とポイントが変動していくがそれでも『妖精の尻尾』のメンバーは誰一人として動いていない。そのことに応援席にいた『妖精の尻尾』の皆は何故動かないのか?と怒っていた

『蛇姫の鱗』 応援席

オーバ「このゲーム！ ジュラがいる限りワシ等に負けなんてないじゃないかっ！  
アツハツハツハ！」

『蛇姫の鱗』 マスター・オーバの発言に観客も納得してしまう

クロツカス

ユウカ「そうさ リオンとジュラがいれば俺たちは無敵！」

トビー「シエリアも強えしな」

2人が話しながら歩いているとバツカスが現れた

バツカス「さあて そいつアはどうかねエ」

ユウカ「バツカス!?!？」

戦闘になるかと思われたが、上空から誰か降りてくるのをバツカスが気づく

バツカス「おおっとお！」

ステイング「!？」

バツカスは自分に向かって来るのに気づくと横っ飛びして躲す 上空から攻撃してきたのはステイングだった

チャパティ『ステイングが来たーッ!! しかしバツカス直前で避けた!』  
ステイングの登場に観客は盛り上がる

バツカス「危ねえ危ねえ いきなりやられるところだったぜ」

トビー「ステイング!」

ユウカ「バツカスにステイング 面倒な」

ステイングの乱入に三つ巴の戦いになりそうユウカとトビーが悩んでいると

ユウカ「なっ!」

トビー「おわっ!」

カグラが背後から2人に斬りかかり、倒した

『蛇姫の鱗』ユウカ、トビー 戦闘不能 『人魚の踵』+2pt 42pt

バツカス「おおっ!」

ステイング「!」

カグラはすかさずバツカス、ステイングに狙いを定めようとするが

カグラ「いない・・・逃がしたか」

もうすでに2人の姿はなく、その場から互いに別方向に離脱していた

バツカス（アイツ等とやってもいいが、俺が1番やりてえのはアイツだからなア それまでは温存しとくぜ）

ステイング「・・・」

ステイングがカグラの前から消えたことを放送で聞いたミネルバは

ミネルバ「それで良い カグラとジユラは避けよ 消耗するだけと知れ（バツカスはツナヨシを狙っておったな 丁度いい潰し合わせれば良いか あと厄介なのはラクサスとエルザか・・・）

ミリアーナ「みやーっ!!」

ロツカー「この女、中々やりやがる」

ミリアーナとロツカーが戦っていると、ロツカーに向かって黒い電撃が放たれてきた  
ロツカー「ぎゃあああ」

ミリアーナ「みやつ!!? こ、これって」

ミリアーナが黒雷が来た方向を見ると

オルガ「さて これでポイント貰えんだよな」



『四つ首の仔犬』 ロツカー戦闘不能 『剣咬の虎』 +1 p t 45 p t

チャパティ『並んだーッ！ オルガによつて『剣咬の虎』、『妖精の尻尾』と並んだーッ  
!!』

オルガ「お次は」

オルガは次に近くにいたミリアーナに狙おうとしたが

ミリアーナ「みやつ!!? こ、ここは退散つ!!」

ミリアーナは一目散に屋根に上がり逃げて行つた

オルガ「逃げ足の速えこつた まっ別にいいがな」

チャパティ『『剣咬の虎』が『妖精の尻尾』と並び、『人魚の踵』と『蛇姫の鱗』もど  
んどん追い上げていきます！ 目紛しく動く点数！ しかしそれでも『妖精の尻尾』動  
かない!!』

『妖精の尻尾』 応援席

マカロフ「何をしている！ルーシイを助けるために勝たなきゃならんのだぞ！」

メイビス「だからこそ だからこそ冷静にならねばなりません」

マカロフ「!？」

メイビス「私はこの四日間で敵の戦闘力、魔法、行動パターン、全てを頭に入れました。それ等を計算し何億通りもの戦術をシミュレーションしました」

レヴィ「しよ、初代？」

ロメオ「一体・・・何を言ってる・・・」

メイビスの言っている意味がわからない皆はただ疑問を投げかけることしか出来なかった

メイビス「敵の動き、予測と結果、位置情報　ここまで全て私の計算通りです　作戦は既に伝えてあります」

メイビスの言葉と同時に今まで目を瞑っていたメンバーたちが目を開く

メイビス「仲間を勝利へと導く　それが私の“戦”です」

メイビスの顔つきが今までのような優しい顔ではなく、戦いの顔に変わる

メイビス「妖精の星作戦発動!!!」

クロツカス

綱吉たち「!!!了解!!!」

メイビスの言葉に応え、5人は駆け出した

## 第38話

綱吉たちがクロツカスで駆け出した時、華灯宮メルクリアスでは  
華灯宮メルクリアス

メルクリアス門前にナツとウエンデイを連れた兵士がやって来た

兵士A「おい 何だそいつ等は？」

兵士C『妖精の尻尾』の魔道士のようです 侵入しようとしてたみたいでして あの

妖精の娘を助けに来たのでしょうか」

兵士B「わざわざ来るとは どうする？」

兵士A「陛下も国防大臣もないしな 牢に入れるしかないだろ」

兵士C「了解」

兵士B「ん？おいつ」

兵C「っ！ な、何でしょう」

兵Cはナツ、ウエンデイを連れて行こうとするが兵Bに止められ、顔が強張る

兵B「牢はこつちだ」

兵Bは牢のある方を指差す

兵士C「あつそつちでしたか すみません 此処に最近配属されたばかりで」  
兵士Cは言われた方へ歩いていき、城内に入っていく

城内に入ると兵士の顔がどんどん変わっていき、兵士の顔がミラに変わった

そして人気がない所に行くとナツとウエンディも閉じていた目を開いてニヤリと笑う

ナツたちは無事城内へ侵入したのだった

クロツカス

チャパティ『妖精の尻尾が動いたー!!』

綱吉たちは一斉に各地に散らばる しかしそこへ感知能力の優れたルーファスの索敵に引つかかる

ルーファス「見つけた 私の索敵能力を侮ってもらっては困るね まとめて片付けて差し上げよう」

ルーファスは魔力を高める

ルーファス「記憶造形 星降ル夜二!!」

ルーファスから放たれた光弾七発は正確にメンバーに向かって落ちていく

妖精の尻尾 応援席

レヴィ「あの魔法は！」

カナ「初日に敵全員を倒した魔法だよ！」

ルーファスの出した魔法に皆慌てているが

メイビス「上空に光を目視してから2秒以内に躲せます  
そしてこの魔法の属性は  
雷” ラクサスだけはこれをガードを”

皆「えっ・・・」

メイビスだけは慌てず、次に何をすべきか説明していく

クロツカス

エルザ「！」

ガジル「はっ」

グレイ「2度も同じ手喰らうかよ！」

綱吉「おっと」

ラクサス「こんなモン避けるまでもねえ」

綱吉たちはメイビスの言うようにルーファスの魔法を躲し、ラクサスだけは受け止めた

ルーファス「何っ!? 受け止めた!？」

ラクサスの行動にルーファスは動揺する その間にも各自それぞれの場所へ向かい

エルザ「初代の言った通りだな 恐ろしいお方だ」

ジェニー「げーっ! エルザ!？」

エルザは刀を振るいジェニーを倒す

ジェニー「いやーん!」

『青い天馬』ジェニー 戦闘不能 『妖精の尻尾』+1

46pt

ガジルはヒビキ、レン、イヴの3人と接触し

ガジル「悪リイな 兄ちゃん!」

イヴ「うあっ」

レン「ぐっ」

咆哮でイヴとヒビキを倒す

『青い天馬』イヴ、レン 戦闘不能 『妖精の尻尾』+2 48pt

レン「くそつ ヒビキ！お前だけでも逃げろ！」

ヒビキ「すまないっ！」

ヒビキはなんとかその場から離脱するが、逃げ込んだ所にグレイが待ち構えており、やられてしまう

ヒビキ「一夜さん 申し訳ありません」

『青い天馬』ヒビキ 戦闘不能 『妖精の尻尾』+1 49pt

一夜「うむ 任せたまえ！」

力強く答えた一夜は、ジュラと対峙していた

一夜「さあ ジュラさん 遂に我々の雌雄を決する時がぼぎやつ!!」

ジュラ「む」

2人が戦うかに思われたが、そこへ地面から蛇のように影が近づき、影からローグが出て来て一夜に一撃を見舞った

チャパティ『あくつと』剣咬の虎』ローグ！ 『青い天馬』リーダー一夜を倒し5pt

獲得だーッ!」

『青い天馬』リーダー 一夜 戦闘不能 『剣咬の虎』+5 50 pt

そしてローグは一夜を倒すと再び影となつて、ジユラと戦わず離脱したジユラ「一度も交えずに退くとは・・・」  
ジユラもまた戦う敵を探すべくその場を後にした

また別の場所では、シエリアがリズリーを倒していた  
シエリア「ごめんね」

リズリー「人魚なめちやいけないよ!」

『人魚の踵』リズリー 戦闘不能 『蛇姫の鱗』+1 39 pt

実況席

チャパティ『『剣咬の虎』が再び一位になりましたね〜』

ヤジマ『これで『青い天馬』は全滅か』

カボー君『盛り上がって来たカボー!』

『剣咬の虎』が一位になったことで観客も実況席も盛り上がっていた、とくにカボー君が盛り上がっていた



華灯宮メルクリアス

その頃ナツ達は無事にルーシイ達のいる牢にたどり着いていた

ルーシイ「ナツ！ みんな！」

ナツは熱で檻をこじ開け、ルーシイ達を牢から出した

シャルル「あとはどうやって脱出するかね」

リリー「出来ることなら誰にも見つかからず城を出たいな　ツナの言ったように戦闘はなるべく避けるべきだろう」

ミラ「でも潜入した時のように兵士に変装する方法は使えないし、どうしようかしら・・・」

ルーシイ「待って　私達の鍵が盗られたままで」

皆が考えているとハッピーが何か閃いたように

ハッピー「あつ　荷馬車ってどう？　ミラに兵士に変装してもらってオイラたちは積荷の中に隠れるっていうのは？」

ナツ「おおつ　ハッピー　ナイスアイデア！」

ハッピー「でしよう　えへへ」

ナツに褒められハッピーは嬉しそうに頭をかいていた

リリー「積荷を調べられたら？」

ハッピー「え？」

リリー「城の連中にとって大事なこの時、態々何処かへ届けに行くとは考え難い 不審に思うのが当然だ 積荷を調べられ見つかつたらアウトだぞ」

ナツ「そうなたら戦うしかねーだろうが」

ナツのやる気満々の発言にシャルルが

シャルル「忘れたの？ 王国に手を出せば私たちは逆賊、つまり闇ギルドになる恐れがあるのよ 戦闘は本当に最後の最後の手段にしろとツナに言われたでしょう」

ナツ「ぐつ ならどうすんだよ！ 此処にいつまでもいるわけにはいかねーだろ！」

ウエンディ「ナツさん 落ち着いて（私も荷馬車の案考えてたけど、言わなくて良かった・・・）」

リリー「どうするか それを考えるとところだろうが」

ルーシイ「いやだから まず鍵を取り返しに」  
皆でどう城から脱出するか考えていると突然

ガコンツ

床が開いたのだった

ナツ「はあっ!？」

ウエンデイ「えっ!」

ミラ「地面が・・・」

皆「「「うわああああ」」」

そのまま真つ逆さまに落ちていき、地面にぶつかつた

ルーシイ「痛い」

ナツ「いてて くそつ 何処だここ?」

?「ようこそ 奈落宮へ」

ナツ「ア?」

リリー「誰だ?」

落ちて来たナツ達に声が聞こえてきた 更に目の前の岩壁に女性が映し出された

?「見事に罨に掛かりましたね」

ハッピー「えっ」

シャルル「罨?」

女性の罨という言葉に皆戸惑つてしまう

?「此処は奈落宮 罪人の行き着く最後の場所 そしてここから出られた者は誰一人

としていない」

ナツ「なんだアイツ」

ユキノ「ヒスイ姫です この王国の」

ユキノの言葉でようやくこの女性が姫だと知る一同

ヒスイ姫「そこで朽ちていくが良い 賊よ」

そしてその言葉を最後に映像は消えていった

ハッピー「ど、どうする・・・」

ウエンデイ「罨だったなんて・・・」

ミラ（そうだった ツナにあれほど言われてたのに）

救出組のメンバーは綱吉に言われたことを思い出していた

―回想―

綱吉「皆、王国は俺たちが救出しに行くことを読んでいるって言つよね？」

ミラ「ええ 言つてたわ」

綱吉「なら警備も厳重にし、罨も仕掛けているはずだ」

ナツ「大丈夫だつて！ 心配すんなよ ツナ」

綱吉「ならナツお前が仮に敵の立場だったとして、お前なら何処に罨を仕掛ける？」

ナツ「おっおお？ ん〜？」

綱吉の思い掛けない質問にナツは悩んでしまう

綱吉「難しいか？ ならもつとも油断、気を緩めてしまう場所は何処だ？」

ナツ「えっ」

リリー「牢か」

綱吉の言いたいことが分かったのかりリリーが答える

綱吉「そうだ 仲間を助けた時どうしても気を緩めてしまう それに例え城に入りバラバラに行動したとしても、最終的に牢に来ることは分かっているからな 全員揃ったところで一網打尽にすれば良い」

ミラ「ツナはどんな罠が仕掛けられていると思う？」

綱吉「そうだな ルーシイ達がいるフロアの大きさにもよるが大軍で待ち構えている場合、これが一つだな あとはガスもあり得る」

ウエンディ「ガスですか？」

綱吉「ああ 扉に封をしてしまえば、そのフロアは完全に密閉されてしまう そしたら毒ガスを散布すればお終いだ ただこれは人質であるルーシイ達も巻き込んでしまうからな ルーシイ達にまだ何かやってもらふ必要があるなら同じガスでも毒ではなく睡眠ガスを使うだろう これなら問題ないからな あとは眠ってる間に・・・」

綱吉はそう言つて自分の首に手を当ててトントンと叩いた  
ウエンデイ「ひえ」

ミラ「ツナ 怖がらせちや駄目でしょっ」

綱吉の説明にウエンデイは怖がつてしまい、ミラに綱吉は怒られてしまった

綱吉「悪かったよ ごめんよウエンデイ」

ウエンデイ「い、いいえ だ、大丈夫です」

シャルル「しかしアンタよくそんなえげつない方法思いつくわね」

綱吉「ん？ まあ・・・色々あつたからね」

シャルルの問いに綱吉は寂しそうな顔をして答えた

綱吉「あと可能性があるとすれば・・・これだな」

綱吉はそう言つて靴で床を軽く叩く

ハッピー「床？」

綱吉「ああ 落とし穴だ 一見単純に見えるかもしれないが、引つ掛かりやすいだぞ

目の前に仲間がいればどうしても目は前を向いて足元を見ないからな あとは穴の

底に槍を仕掛けてグサリと・・・」

ウエンデイ「ヒイツ」

ミラ「だから怖がらせちや駄目でしょ！」

綱吉「はい すいません・・・」

ミラに怒られ、綱吉はしょんぼりする

綱吉「まあ 今のは一つの案として、落ちた先が地下施設っていう可能性もある」

ウエンデイ「地下施設、ですか？」

綱吉「大抵大きい組織の建造物には地下施設があるものなんだよ ただそこがどんな

ところで何があるかまでは分からないけど」

ミラ「何言ってるの これだけ助言を貰えれば十分よ」

ナツ「そうだけ ツナ！ 任せとけ！」

綱吉「・・・なら最後に 皆が行く場所は敵地で初めて行く場所だ 地の利は敵にある だから絶対に警戒心を解くな 壁、床、天井、扉に何か仕掛けられているんじゃないか？と常に疑え そしてそれはルーシイ達のいるフロアに着いた時こそ最大しろ分かったな？」

救出組メンバー「「「おおっ！（えええ！はい！）」」」

綱吉の説明にナツ達は自信持って答えた

ー回想終了ー

そして現在に至る

リリー「くそお！ あれだけツナに注意されながら・・・元軍人として情け無い！」

リリーは悔しさから両膝を着いて地面を殴っていた

シャルル「大体アンタが警戒心もなく牢に行つたのが悪いのよ」

ナツ「俺のせいだつて言うのかよ?!? 皆だつて入つて来ただろうが！」

ウエンデイ「ちよ、ちよつと皆さん落ち着いてくださいっ」

罠に掛かり皆が言い争いになり、ウエンデイが止めに入る

ルーシイ「ねえ ハツピー達に持つてもらつて飛んでもらうのはどう？ 開閉式の床

ならミラさんやナツの攻撃で壊せるんじゃない？」

ミラ「無理ね」

ルーシイ「えっ？」

ルーシイは提案にミラは即答し、床があつた場所を指差す

ミラ「見て床は防護壁を張られてる 恐らく魔法による攻撃は無効化されるでしょう

となると壁の厚みによるけど単純な素の力であの壁を壊さなきゃいけないわ」

ルーシイ「そんな」

ナツ「くつそーっ!! 出口は何処だーっ!!」



ナツ達は地下施設の奈落宮で暫し時間を費やしてしまうことになるのだった

クロツカス

グレイは王立図書館の前に来ていた。そして図書館へ入って行く。すると図書館の中央で誰かが椅子に座って読書していた。

グレイ「此処に来ればアンタに会えると聞いたが、流石初代」

？「これはこれは。記憶は君のことを忘れかけていた。思い出させてくれるかな？」

グレイ「無理に思い出す必要はねえや。お前はここで終わりだから」

その人物はルーファスであった

チャパティ『図書館エリアで『妖精の尻尾』グレイと『剣咬の虎』ルーファスが激突だーっ！』

『妖精の尻尾』 応援席

ロメオ「これも初代の読み通りなのか？」

メイビス「はい」

カナ「ならこの勝負、グレイが勝つんだね！」

メイビス「それは分かりません」

エルフマン「何!？」

メイビス「しかし勝たねばなりません ルーフアスという者は『剣咬の虎』攻略の鍵なのです」

メイビスは作戦会議のことを思い出していた

―回想―

ガジル「じゃ何か? そのルーフアスつてのが俺たちの位置を把握してるっていうのか?」

メイビス「その通りです」

エルザ「ならば先にルーフアスを倒すべきだな」

綱吉「ならルーフアスの相手は俺がしようか まだ見せてないのもあるし」

ラクサス「お前 まだ見せてないのがあんのか?」

綱吉「ああ 俺は用心深いから まだこの大会いや・皆に見せてないのも幾つかあるよ それに手札が多ければそれだけ戦略も練られるし」

ガジル「オメエ どんだけ持ってんだよ」

メイビス「ならばツナにルーフアスを」

グレイ「ちよつと待ってくれ」

ルーフアスを倒す役に綱吉が任されようとしたその時、グレイが立ち上がり待ったを

かける

グレイ「その役目俺にやらせてもらえねえか」

メイビス「貴方とルーファスの相性はいいとは言えませんが 勝てる可能性は・・・」

グレイ「相性がどうか関係ねえんだよ ルーシィを助ける そしてやられたカンを返す 『妖精の尻尾』の魔道士として戦わせてくれ」

エルザ「グレイ・・・」

グレイの言葉に綱吉は笑みを浮かべ

綱吉「(リベンジ、果たしたいもんな・・・) 初代 俺からも頼みます」

グレイ「ツナ」

綱吉「そこまで言うのならルーファスの相手は譲るよ でも負けたら許さないよ グレイ」

グレイ「はっ 負けねえよ それに相手が同じ造形魔道士ならなおさらだ」

メイビスはそんな二人のやり取りを見て微笑んでいた

ー回想終了ー

メイビス「時に思いは計算を超える 見せてください 貴方の想いを」

メイビスは対面しているグレイとルーファスを見ていた

クロツカス・図書館

「グレイ「行くぞ 仮面野郎！」

グレイは戦闘態勢に入り、構えをとる ルーフアスも読んでいた本を閉じ攻撃に備える

グレイ「アイス・メイク：『氷創騎兵』！」

ルーフアス「記憶」

グレイ「逃がすかよ！ 『氷撃の鎚』!!」

ルーフアス「記憶」

グレイは氷の槍を何本も撃ち込むがルーフアスは跳んで躲し、グレイは更に追撃で巨大な氷の鎚を振り下ろすが躲されてしまう

グレイ「何をもちもごとく言ってやがる」

ルーフアス「記憶は武器になる “私は見たことのある魔法を” を記憶し、その記憶を元に新たな魔法を造形できる」

グレイ「なんだそりゃ」

ルーフアス「君の記憶『氷』の魔法 オルガの記憶『雷』の魔法 覚えている 記憶造形 凍エル黒雷ノ剣!!」

グレイ「ぐはっ」

ルーファスは上空より黒雷を落とし、更に雷が地面に触れると氷剣山が生まれた。グレイは躲し切れず攻撃を食らってしまう。

ルーファス「荒ブル風牙ノ社」

グレイ「くっ・・・『盾』！」

ルーファス「盾…記憶　そして　忘却」

グレイ「何っ?!　盾が消え・・・ぐあああああ！」

ルーファスは複数の竜巻を造りグレイに放たれるが、グレイはすかさず盾を造り防御する。しかしルーファスによって盾が消されてしまい、もろに攻撃を食らってしまった。

『妖精の尻尾』 応援席

リサーナ「ルーファスは新たな魔法をいくらでも造形できる」

カナ「だけどグレイは一度使った魔法は使えないって言うの?」

エルフマン「何だよそれ!　不利過ぎんだろ?」

ジュビア「グレイ様・・・」

皆ルーファスの魔法に驚き、ジュビアはグレイのことを心配そうに見つめていた。

クロツカス・図書館

グレイは吹き飛ばされながらもなんとか耐える  
ルーファス「この戦いは私が君に詩う 鎮魂歌 記憶しておきたまえ 君は私に勝

てない」

グレイ「そいつア どうかな・・・」

グレイはボロボロになった服を放り投げた それによつて女性観客は顔を赤くし、そして当然ジュビアも赤くし、鼻血まで流れていたとか

グレイ「『妖精の尻尾』の紋章を刻んでいるからには同じ相手に2度はやられねえ」

グレイは綱吉の言葉を思い出す

ー負けたら許さないよ グレイー

グレイ（当たり前前だ それは俺自身も同じなんだよ）

ルーファス「ほう 何か策でもあると言うのかね」

グレイ「アイス・メイク・・・」

ルーファス「記憶」

グレイ「限界突破!!!」

ルーファス「!?」

グレイは自分の周りに次々と高速で氷の剣を造形していく ルーファスはその造形の数とスピードに驚愕していた

ルーファス「これは……」

グレイ「覚えてかい」

ルーファス「記憶が……追いつかない……」

数の多さに加え剣一本一本違う為、ルーファスの記憶が追いつかず、グレイの造形が勝る結果となった

グレイ「一勢乱舞!!!」

ルーファス「ぬあああああ!」

造形した大量の剣が一勢にルーファスへ襲い掛かり、ルーファスは躲しきれず氷漬けになってしまう

ルーファス「しかし! 氷属性だけなのが惜しい! 私はその氷を滅する炎を憶えている 記憶造形 燃ユル大地ノ業!!」

グレイ「!」

ルーファスは氷漬けにされながらも造形魔法で橙色の炎の波を造り、氷を溶かしそのままグレイへ突っ込ませた

ルーファス「仲間の炎で倒されるのなら本望だろう!」

グレイは炎に呑み込まれ、ルーファスは勝利を確信するが

ルーファス「!?」

グレイ「アイツの炎はなア　こんな温い炎じゃあねえんだよ!!」  
 ルーフアスは炎の中から現れたグレイに驚き、反応が遅れてしまう　グレイは既に攻撃の態勢に入っていた　グレイの脳裏には綱吉の炎が浮かんでいた

ルーフアス（し・しまつた・間に合わ・）

グレイ『『氷魔剣』!!』

ルーフアス「ぐあああああ!!」

グレイはルーフアスを2本の氷の剣でX字状に切り裂いた　斬られたルーフアスはそのまま倒れ気を失った　グレイは宙に舞ったルーフアスの帽子を手に取り頭に被った

グレイ「覚えてんだよ　アイツの炎は心にくる熱さがあるのをよ」

グレイはそう言うのと帽子を倒れているルーフアスへ向けて投げて、背を向けて歩いていった

グレイ vs ルーフアス　勝者グレイ

『剣咬の虎』ルーフアス　戦闘不能　『妖精の尻尾』+1　50pt

途中経過



一位	『妖精の尻尾』	50pt	残り…5名
一位	『剣咬の虎』	50pt	残り…4名
二位	『人魚の踵』	42pt	残り…2名
三位	『蛇姫の鱗』	39pt	残り…3名
四位	『四つ首の仔犬』	15pt	残り…1名
??	『青い天馬』	敗退	

## 第39話

実況席

チャパティ『あのルーファスが倒れたー!!? 勝ったのはグレイ! 妖精の尻尾のグレイだー!!』

ヤジマ『これで5人とも健在なのは妖精の尻尾だけになったね』

カボー君『うわーん! 無敗のルーファスが』

『剣咬の虎』を応援していたカボー君はルーファスの敗退にショックを受けていた

『妖精の尻尾』応援席

カナ「よっしやーっ!!」

エルフマン「さすがだぜ!」

ジュビア「グレイ様、最高です!」

マカロフ「よくやった、グレイ!」

メイビス「見事でした」

グレイの勝利に『妖精の尻尾』の皆は大盛り上がりで、メイビスは感嘆していた

クロツカス

ルーファスの敗北はチャパティのアナウンスによつて街中に知れ渡る

ミネルバ「崩れていくのか この『剣咬の虎が・・それともステイング・・・」

ミネルバはルーファスが敗れても動揺も怒りもなく、余裕そうに笑っていた

そして其処から離れた場所にステイングがいた ステイングはマスター・ジエンマによつてレクターが消された時のことを思い出していた

―回想―

レクターが消された怒りからマスターのジエンマに拳を叩き込んだ時のことだった

ミネルバ「それで良い 父上の恐怖統制は今ここで終わりを告げよう 父上の力をも超えるステイングこそ新たなマスター候補に相応しい」

ジエンマ「ミツミネルバ・貴様・・何を言つて・・」

ミネルバ「黙るがよい 負け犬などいらんのだろう 自論に従うなれば」

ジエンマ「むぐつ・・・」

ミネルバの言葉に反論しようとするが論破され言い返せなくなつてしまう そして

ミネルバはステイングの方を向き

ミネルバ「ステイング そなたに無くナツという者にあるもの それこそが 想いの力だ」

ステイング「想いの力・・・」

ミネルバ「知らず知らずのうちに父上に感化されていたようだな 仲間など要らぬ 力こそ全て」と だがそなたの本質は違う レクターを想う気持ち力がなる そなたはその力を手に入れたのだ そなたはナツをも超える」

ステイング「お嬢・・・俺はもう・・・」

ミネルバ「案ずるな レクターは生きている」

ミネルバはレクターが消される直前に空間魔法で逃がしておいたと言う レクターが生きていると知ったステイングは号泣しながらミネルバに礼を言う

ステイング「ありがとう!!? ありがとうお嬢!!? 早くレクターを元に戻して・・・」

ミネルバはステイングに近づき、冷たい目をしながら

ミネルバ「甘えるな」

ステイング「!?!」

ミネルバは大魔闘演舞で優勝するまでレクターを返す気はないと言う ステイングは今すぐ返してくれと懇願するが、頼みを聞いてもらえず

ミネルバ「妾は父上とは違う しかし『剣咬の虎』のあるべき姿が天下一のギルドで

あることに変わりはない。そなたは手に入れた力を証明せねばならん。勝つことで民に力を誇示せねばならん」

ミネルバは忠告として最後に

ミネルバ「愚かな考えなど起こすでないぞ。レクターの命は妾が握っているものとして知れ」

負けることはもちろん、秘密裏に助けること、誰かに助力を求めることも許されない。ステイングに残されたのは勝つことのみであつた。

―回想終了―

ステイング「レクター……大丈夫だ。俺は必ず優勝する」

また別の場所では綱吉が住宅街を走っていた。

綱吉「勝ったか、グレイ。さて俺もそろそろか……」

綱吉は走るのやめ、辺りを警戒しながら歩いて行く。綱吉はメイビスからルーファスの次にシエリアを倒すよう言われ、その相手にかつて出たのが綱吉だった。

綱吉「(回復役でもある彼女は早めに倒しておきたいからな。何よりジュラさんを回復させたら厄介だ)……!」

綱吉は何か来るのを察したのか左前方にある建物の屋根の上を見る　するとシエリアが屋根の上よりやって来た

シエリア「あつ　貴方はツナヨシ！」

綱吉（来たか）

綱吉は戦闘態勢に入り、額に炎と両手にグローブを纏わせる　しかし構えはボクシングなどの武の構えではなかった　シエリアは右手に魔力を集中し黒い風を纏わせ

シエリア「いっくよ　天神の舞!!」

シエリアの黒い風は綱吉へと放たれたが、綱吉は難なく躲し、両手のグローブに炎を纏わせる

綱吉（さて　やるか）

『妖精の尻尾』 応援席

エルフマン「次はツナか！」

マックス「相手は滅神魔道士のシエリアか」

カナ「この対戦も初代の読み通りなの？」

メイビス「はい　シエリアの治癒能力は厄介です　戦いが後半になればその能力は脅威になります　なので早めに退場してもらいます」

メイビスの説明に納得が行くメンバーの面々

ビッグスロー「だけだよ 相手のシエリアはガキで女だぜ ツナには厳しいんじゃないか」

フリード「たしかにツナは女性や子どもには特に優しく接しているからな 心配もある」

フリードやビッグスローがシエリアの相手に綱吉をぶつけたことに心配するが  
リサーナ「いや・・・大丈夫だと思うよ・・・」

レヴィ「えっ？」

エルフマン「ああ そんな心配要らねえ」

カナ「アイツ 普段は優しいけど戦いになると途端に厳しくなるから（アイツの信条に戦いの中に男女差別は無いからいいからね）」

カナとリサーナは修行の時に綱吉にボロボロにされてまで鍛えられたことを思い出して、若干引いていた

クロツカス

チャパティ『ああ〜つと 今度はツナヨシとシエリアさんが戦うようだ！ 個人的にはシエリアさんに頑張ってもらいたいところですよ！』

綱吉「(シエリアたんつて・・・まずは様子見) フレアメイク・大蛇」

シエリア「!」

綱吉は炎の大蛇を造形してシエリアに突っ込ませる

シエリア「天神の鎌鼬!」

綱吉(ほお)

鎌鼬によつて大蛇の首を斬り落として、跳び上がり

シエリア「天神の北風!!」

綱吉「フレアメイク・盾!!」

シエリアは両手から黒い風を巻き起こしたが、綱吉の炎の盾に防がれてしまう

シエリア「ならっ」

シエリアは綱吉へと近づき接近戦に持ち込もうとする

シエリアは拳や蹴を連撃するが綱吉はそれを受け流していく

チャパテイ『シエリアたん! 怒涛の攻撃をしていくが、ツナヨシ見事に全て受け流しているーっ!』



『妖精の尻尾』 応援席

ビッグスロー「おいおいっ ツナの奴なんで攻撃しねえんだよ!？」

レヴィ「やっぱり女の子だから攻撃出来ないのかな？」

リサーナ・カナ「いやいや それはないから」

メイビス「ツナの今の状態は言うなれば“見”の状態です」

ロメオ「ケン？」

メイビスの言葉にロメオは首を傾げた

メイビス「見とは言葉通り見ると言う事 ツナは今シエリアの戦い方を見てそれに対する戦い方を練っているのでしょうか ツナの戦法は相手の全てを見て分析し、それに見合った戦い方をするというものでしょう」

レヴィ「たしかにツナって序盤はあんまり自分から攻めたりしないで、守りに徹して  
た」

フリード「年齢の割に賢いからな アイツ」

カナ「ゴリ押しのアンタとは違うね〜」

エルフマン「うるせえよっ！」

クロツカス

綱吉（そろそろいいかな）

ガシッ

シエリア「っ!？」

綱吉はシエリアの拳の連打を見切り、両手で両手首を掴んだ。ここで二人は僅かな膠着状態になる。

綱吉「言っておくけど、俺は相手が女の子だからって手加減しないよ」

シエリア「うん　良いよ！　私も男女差別嫌いだし！だから私のことも呼び捨てでいいよー！」

綱吉「あ、ああ・・・（中々フレンドリーな子だな・・・）」

シエリアは振り払おうとするが、振り払えず離れることが出来ずにいた。並の魔道士なら苛立ちや苦しい表情を見せるはずだがシエリアは笑みを浮かべた。それは強敵に出会えた喜びであつたから。

シエリア「ねえねえツナヨシ　アレはやらないの？」

綱吉「アレ？」

シエリア「ジュラさんの時やMPFの時にやったアレだよ！」

綱吉「（ああ、ボクシングとムエタイね）ああいうのはここぞって時に使ってこそ意味があるからね」

シエリア「ふくん　じゃあまだ本気じゃないんだ」

綱吉「・・・まあ　そうなるね（それは君もだろう）」

シエリア「ならっ　絶対に本気にさせてあげる！」

シエリアはやる気に満ちた顔を見せる　そして膠着状態は終わりを告げ動き出す

シエリアは空気を吸い

シエリア「天神の・・・」

綱吉「！」

シエリア「怒ご・・・」

パン！

シエリア「えっ!？」

シエリアは超至近距離からブレスをやろうとしたが、気づいたら地面に倒されていた  
綱吉「こんな至近距離でしかも相手の体勢も崩してないのに撃たせるはずがないだろ  
う」

綱吉はブレスが放たれる直前にシエリアの右足首を払ってそのまま地面に倒したの  
だ　そうこれは柔道の出足払　投げ技の一つである

綱吉はボクシングとムエタイを鍛えて、ある答えに辿り着いた　それはこのままいつ  
てもいざれ勝てなくなると言うものだった　体格に恵まれていない自分が“打”だけ

で勝つのはほぼ無理だろう　ならばどうするか　“複合”で勝てば良い　“打”も“極”も“絞”も“投”も全部覚える　それが考え抜いた答えだった

綱吉は“打”だけの天才にあらず、“武”の天才なのである　ただ拳や蹴りをする者としつかりと格闘技をマスターした者とは雲泥の差がある　その格闘技に加え炎魔法も昇華させた綱吉は魔道武人と言うべきか

倒れたシエリアに右足で蹴りを叩き込もうとするが、シエリアは咄嗟に両腕でガードする

シエリア「ぐっ！　天神の鎌鼬！」

シエリアはガードごと吹き飛ばされてしまうが、吹き飛ばされながらも技を放った綱吉「フレア・カノン！」

二人の技は中央でぶつかり合い、四方八方へと爆散して、シエリアの腕や肩に炎が当たり火傷を負い、風の刃が綱吉の身体に複数あたり血が滲む　しかしシエリアは治癒能力で火傷を治してしまう　綱吉はそれを黙って見ていた

シエリアは両手両足に黒い風を纏わせ、綱吉に接近して

シエリア「天空乙矢！」

黒い風を纏わせた蹴りを打つが躲かされてしまう

シエリア「天空星矢！」

今度は拳を打ち込もうとするが

綱吉（ここだ！）

シエリア「えっ・・・あゝあゝっ！」

綱吉はシエリアの左拳を躲して、アームロック（腕絡み）した

アームロックとは片手で相手の片手首を掴み、もう片方の手を相手の肘の下を通す形で自分の前腕を掴み捻り上げ、肘や肩を極める関節技の一種である

シエリア「ああああ!! いたあいいいい!!」

シエリアはあまりの痛みに悲鳴をあげてしまう

チャパティ『これは!? ツナヨシがシエリアさんの左腕の関節を極めているのか!!?』

あまりの痛みにシエリアさんが悲鳴をあげているー!!』

『妖精の尻尾』 応援席

容赦ない綱吉の攻めに皆若干引いていた

皆（（うわあゝ））

レビイ「女の子でも容赦ないね・・・ツナ」

リサーナ「あんなのまだ序の口だよ」

カナ「修行の時なんてありとあらゆる絞め技、極め技やられたからね・・・」

クロツカス

綱吉「ギブアップするかい？」

シエリア「だっ誰が・・・」

シエリアは綱吉から降参するよう言われるが断り、どうにか脱出しよう考える。そして足元に向かってブレスを放った

シエリア「天神の怒号！」

綱吉「おっと」

バランスを崩してかけ綱吉は技を解き、一旦距離を取る。技を解かれたシエリアは左腕を押さえる。本来ならここで一気に畳み掛けるところ綱吉はシエリアが呼吸、体勢を整えるの待っていた

『妖精の尻尾』 応援席

マカオ「なんで追撃しない!!? チャンスだろ！」

ワカバ「ツナの奴何してやがる？」

メイビス（恐らくこれは・・・）

マカロフ（ツナめ 負けられぬ戦いだと言うのに 全く）

『蛇姫の鱗』 応援席

シエリー「シエリア！ 落ち着いて！ 距離をとって戦うのよ！」

オーバ「・・・」

追撃しない綱吉に皆不思議がっていたがメイビス、マカロフ、オーバは綱吉の意図に気づいていた

クロツカス

綱吉「シエリア 君は強い だからこそ勿体ないと思う」

シエリア「勿体ない・・・？」

綱吉「君は回復出来るという理由からガードが疎かになっている 怪我をしてもすぐ治せるとそう思うから不用意に相手の間合いに入り返り討ちに遭ってしまう 今は問題無くてもこの先も大丈夫だと言う保証はどこにもない」

シエリア「・・・説教のつもり？」

綱吉の指摘にシエリアは歯を噛み締め、怒りが湧いてくる

綱吉「説教なんていうつもりはない どう受け止めるかはシエリア自身だ それに……いずれぶつかったであろう壁を俺は教えたただけだ」

シエリア「……」

シエリアの怒りは爆発寸前であった 戦いの最中だと言うのに、敵に忠告されたのだ それは明らかに敵を下に見ていなければ出来ない言動であった 綱吉にその気はなくともシエリアはそう受けとった

綱吉（さて 先程の火傷、そしてさっきの腕絡み 本当に一瞬で回復出来るようだがあくまで回復出来るのは傷、ダメージだけ 体力までは回復出来ない）そして攻略法も幾つか思いついた）

綱吉はシエリアとは対照的に冷静に分析し策を練っていた

綱吉（まず①長期戦に持ち込む 体力、魔力が回復出来ないのなら長期戦に持ち込めば充分勝てる見込みはある……がこれはバトルロワイヤルである以上シエリア一人に時間も体力も魔力もそこまで費やす訳にはいかない これは没

②熱で倒す 周りの温度を急激に上昇させ熱中症を起こさせる……だがウエンディが状態異常を治せる以上シエリアも治せるだろう これも没

③闘気をぶつける 闘気をぶつけて萎縮させ戦意喪失させる……これも同じギルドにジユラさんがいるからあまり効果は薄い可能性がある 没



となると やはり④で行くか・・・)

綱吉のシエリアの倒す算段がつくと同時シエリアも動いた

シエリア「だっだったら！これならどう!!」

シエリアは一気に魔力を放出する

綱吉(大技が来る あの花か・・・)

シエリア「滅神奥義!! 天ノ叢雲!!!」

シエリアはウエンディとの戦いで見せた奥義を出した 黒い羽が何層にも重なって

渦を巻きながら綱吉へと迫る しかしシエリアの奥義を前にしても落ち着いていた

綱吉「怒りで力の焦点があつていない・・・これじゃあ本来の半分程度の威力しか出

せないよ」

綱吉はそう言うのと右腕を上げ魔力を込める

綱吉「フレアメイク・琰龍!!」

綱吉は造形魔法で東洋の龍を作り、天ノ叢雲に突っ込ませた

両者の技がぶつかり大爆発を起こし、巨大な火柱が出る

チャパティ『なんとという威力!? 2人の技がぶつかり大爆発が起きるーっ!!』

その火柱は当然他の魔道士の目にも入った

ラクサス「アイツも暴れてやがるな」

ジユラ「派手にやりおる」

カグラ「炎・・・ツナヨシ・サワダか」

ミネルバ「あれほどの炎　ツナヨシしか出せまい」

そしてこの男の視界にも

？「おおおお　随分と派手にやり合ってんじやねえか　俺が行くまでやられんじや  
ねえぞ！　ツナヨシイイ！！」

その男はそう叫びながら火柱が出たところを目指し駆けていった

シエリア「そっそんな・・・私の奥義が・・・」

シエリアは唾然としていた 自分が出した奥義が防がれるとは思って見なかったのである シエリアが固まっている中、綱吉は駆け出し炎の中突っ込んでいった

チャパティ『なっなんと!? ツナヨシ炎の中に突っ込んだ! これは一体何を狙っているのか!』

綱吉「シエリア 君は全力の本気を見せてくれた なら俺も本気を見せよう でも一つでも選択を間違えると一気に負けるからね」

シエリア「!」

シエリアは炎の中に影が見えて、綱吉が炎の中にいるのを理解した 炎に飛び込んだことに驚くべきだが、今はそれどころではないと迎撃の構えをとる そして炎の中から何か飛び出して来た シエリアは撃ち落とそうとするが

シエリア「えっ!」

炎の中から飛び出したのは人型をした炎だったのだ 更にそれに続いて次々と人型の炎が飛び出してくる

綱吉「フレアメイク・兵士」

炎の兵士たちは壁や地面を使って跳ね回り、綱吉自身も全身に炎を纏い高速で移動し

ている　そのためシエリアにはどれが本体か全く見分けがつかないでいた  
シエリア「なっ何これ！　狙いが・・定まらない・・」

綱吉「フレアメイク・・」

綱吉は手を翳す　すると炎の兵士たちが別のものへと変わっていく

綱吉「蝙蝠！」

炎の兵士たちは蝙蝠の大群に変わり一面を覆い尽くすほどの数となった

視界を覆い尽くすほどの蝙蝠の大群にシエリアは驚き、なんとか前方だけでもと

シエリア「天神の怒号!!」

ブレスによって前方にいた蝙蝠たちは消し飛ばされたその時背後から

綱吉「その手は悪手だったね」

シエリア「!?」

背後から聞こえた綱吉の声に、振り向こうとしたが

綱吉「遅い」

シエリア「かつ・・・は・・」

綱吉は素早く右手でシエリアの左腕を掴みそのまま持ち上げ、シエリアの上腕を利用して首を締め上げ、そして左手でシエリアの右腕を掴み背中側へ持ってきて抑えつけた  
首を締め上げられ、両腕を使えず、抑えつけられ両膝もつき移動も出来ない　綱吉の

勝利は確定だった

シエリア（なっなんで 何を間違えた!? 苦しいっ……いっ息が…）

綱吉「あの蝙蝠の大群はただ目眩しき あの蝙蝠自体に大した魔力は使っていない外見だけですぐ消えるからね 君は警戒すべきだった 死角から突いてくるのではないか？」と

綱吉が説明をしてくれたがシエリアの心境はそれどころじゃなかった そしてある感情が生まれる

綱吉「今俺はかろうじて息ができるか出来ないかの状態を維持している もう君に戦うすべはない 降参するんだ」

シエリア「ぐっ……ぎ……」

ある感情 それは恐怖だった このまま締め上げられれば自分は死ぬんじゃないか という恐怖にシエリアはかられていた そして

シエリア「ギ……ギブ……アツ……プ……」

チャパテイ『ああっつと！ シエリアたんギブアツプを宣言!! この勝負 ツナヨシの勝利だーっ!!』

勝敗が付き綱吉は両手を離す 解放されたシエリアは咳き込みながら呼吸をする

シエリア「げほっ・・・げほっ・・・ぜえーぜえー」

シエリアは今涙を流していた。その涙が助かったという安堵の涙なのか。自分の弱さに対する悔しさの涙なのかは分からない。綱吉にも後ろ姿しか見えないため分からないはずだが綱吉には泣いていると理解できた。

綱吉（この戦い君にとつて悔しいものだったことだろう。だがこの負けは君強くするこの悔しさを糧に強くなるんだ）

綱吉はこの場を去ろうと歩き始める。その時

シエリア「つつ次はっ・・・」

綱吉「？」

シエリアが声を掛けてきたため綱吉は歩を止め、シエリアの方を向く

シエリア「次は 私が勝つ！ 絶対負けないんだから!!」

シエリアの目は涙が出ていても力強く、しっかりと綱吉を捉えていた

そんなシエリアのライバル宣言に綱吉は笑みを浮かべ

綱吉「ああ 俺も負けるつもりはない いい戦いをしような」

綱吉はそう言つて去つて行つた。シエリアはそんな綱吉を黙つて見つめ、そして両拳で地面を叩いた

シエリア「うっ・・・うわああああん!!」

シエリアにとって始めて本当の意味での敗北だった

綱吉 v s シエリア 勝者 綱吉

『蛇姫の鱗』シエリア 戦闘不能 『妖精の尻尾』 + 1 5 1 p t

『蛇姫の鱗』 応援席

シエリー「シエリア・・・」

オーバ「これでいいんだよ」

シエリー「オババ？」

オーバ「これは本来私らがやらなきゃいけないことだったんだよ（全く マカロフのところ借りをつくっちゃったね）」

『妖精の尻尾』 応援席

レビイ「凄かったね！ 圧勝だったよ！」

マカオ「極め技、絞め技まで使うとはな」

ワカバ「容赦なく攻めたのにはビビったがな」

フリード「勝負の世界に男も女も関係ないからな。そこはツナが正しいのかもしれない。ただ追撃せず相手が来るのを待っていたのが腑に落ちんがな」

メイビス「それは、恐らく稽古していたのでしよう」

エバーグリーン「稽古？」

メイビスの言葉に皆疑問を覚える

メイビス「ええ、シエリアの弱点を指摘し克服するよう促す。恐らく自分と年齢が近く潜在能力が凄かったから、その力を引き出してもらいたかったんでしよう」

マカロフ「うむ、間違いなからう」

マカオ「おおい、勝てたからいいもの、危なかったんじゃねえか」

マカロフ「じゃが、それがツナの良いところでもあり悪いところでもある」

リサーナ「うん、修行の時も的確に良いところは褒めてくれるし、悪いところは治してくれるし」

カナ「なんていうか、戦いながら成長するって感じ？」

エルフマン「漢なれるな!!」

実際に綱吉と修行して来たリサーナたちの話しを聞いてロメオは綱吉に更に憧れを抱き、画面に映る綱吉を尊敬の眼差しで見ている

ロメオ（俺も早くあの場に立ちたい、そしてツナ兄と戦ってみたい!）



クロツカス

綱吉「(心配は杞憂だったな)あの娘は強くなる・・・ッ!」

綱吉が走りながらシエリアのことを考えていると、上から誰かやってきて綱吉の前に降り立つ

バツカス「見つけたぜ〜 ツナヨシイ! さあ存分にやろうぜエ!!」

バツカスは綱吉に向かって駆け出した

綱吉「フウ(もう少し休みたかったんだけどな)しょうがない!」

綱吉もまたバツカスに向かって駆け出し

バツカス「ハアッ!」

綱吉「ラアッ!」

2人は互いに右腕を振りかぶり、掌と拳がぶつかり合った

┆途中経過┆

一位 『妖精の尻尾』 51 pt 残り: 5名

二位 『剣咬の虎』 50 pt 残り: 4名

三位	『人魚の踵』	4 2 p t	残り：2名
四位	『蛇姫の鱗』	3 9 p t	残り：2名
五位	『四つ首の仔犬』	1 5 p t	残り：1名
??	『青い天馬』	敗退	

## 第40話

### 奈落宮

奈落宮へ落とされたナツ達は出口はないかと探して、岩壁の裂け目に通路があることを見つける

ルーシイ「狭い」

ナツ「ただどこかを抜けりゃあ」

狭い通路を何とか通り抜け広場に出ると、そこにはアルカディオスがあり、更にナツ達を待ち伏せしていた部隊と遭遇する

アルカディオス「影から王国を支える・独立部隊・王国最強の処刑人 餓狼騎士団……」

カマ「餓狼騎士団 一五〇〇 任務開始」

ナツ「処刑人だア？ 出口が向こうからやって来たぞ！」

ミラ「そうね 出口を教えてもらうのに丁度良いわ」

ナツの言葉を合図にミラ、ウエンデイ、リリーも前に出る

カマ「餓狼騎士団に臆さぬとは・・・無知なる罪人め」

ここでナツ達と餓狼騎士団の戦闘が始まる　そして

カミカ「紙吹雪　紫の舞!!？」

カミカの放った紫色の紙吹雪がナツ達の身体に貼り付き、身体の動きを封じた

ナツ「何だ!？」

ミラ「動けない!」

身動きのとれないナツの上空へコスモスが召喚魔法で巨大な食虫植物を出す

ナツ「でかーっ!!」

リリー「すっ吸い込まれる!?!？」

ハッピー「うわああああ」

ナツ達は岩にしがみつき何とか耐える　その間にウエンデイが身体の拘束を解除し

た

ウエンデイ「身体の不自由解除!　状態異常回復魔法　レーゼ!!？」

ナツ「よっしゃ!」

ルーシイ「だけどアレ　どうすんの!？」

ナツ「ぶっ壊す!!」

ミラ「OK!」

リリー「任せろ！」

ナツ「オオオオオオ！」

食虫植物を破壊することに成功したが、爆発の影響で皆バラバラに飛ばされ、分断されてしまったのだった

カマ「どうやら先程の衝撃で方々へと散ってしまったようだ　だが誰一人として生かして帰さん」

クロツカス

シエリアを倒して休む間もなく、バツカスと対峙した綱吉　両者打撃のぶつかり合いで数メートル後退する

チャパティ『バツカスが来たーッ！　ツナヨシ　休む間もなく連戦になってしまおうが大丈夫か!?』

バツカス「待ってたぜえ　この時をよお」

綱吉「俺は別に待ってませんけど（エルフマンの時のように油断や慢心は消えてるだらうな　その方がやり易かったんだが）・・・ふう」

綱吉はこの戦いが激戦になることを予感し、小さく溜め息をついた

『妖精の尻尾』 応援席

ジュビア 「ツナさんの次の相手はバツカスさんですか」

マカオ 「ここで勝ちやあ一気に5 ptだぜ！」

メイビス 「いえ そう簡単にいかないでしょう」

リサーナ 「でも あのツナが苦戦するとは思えないけど・・・」

ワカバ 「エルフマンが二撃で倒した奴だぜ！」

メイビスの言葉に皆疑問に思う

メイビス 「エルフマンには悪いですが、あの時バツカスは過信、油断があつたため実力の半分程度しか出せていませんでした 本来のバツカスの実力はあんなものではないでしょう この勝負どちらが勝つてもただではすまないでしょう・・・」

皆 「・・・」

メイビスの言葉に不安を覚える皆だった

マカロフ 「ロメオ この戦いしかと良く見ておけ」

ロメオ 「えっ」

マカロフ 「シエリアの時のように最後の時に本気を出すのではない バツカスもS級魔道士 ツナも始めから本気で行くじゃろ お前がツナに憧れておるのは知つとる

ならばしかとその目に焼き付けておけ 自分の憧れる漢の戦いをな」

ロメオ「……」

マカロフの言葉を聞いてロメオは真剣な顔付きて画面に映るツナを見た

クロツカス

綱吉「戦う前に 一つ謝っていただきたいです！」

バツカス「ああ？」

綱吉「エルフマンと戦う時、貴方は勝つたらミラとリサーナを一晩貸せと言った！そんな破廉恥なこと許さないし 何よりミラは俺の“恋人”だ！そしてリサーナは家族も同然！ そんなことが俺が絶対させない！！」

ビシツと指差して文句を言う綱吉 それを聞いていた会場の観客や魔道士は一瞬の静寂の後、悲鳴が広がる

チャパティ『なつなななんと！ ミラジエーンとツナヨシが恋人関係にあることが宣言されました!! 会場はあまりのことに阿鼻叫喚です!!』

ヤジマ『悲鳴を上げてるのは男性陣だけどね』

『妖精の尻尾』 応援席

カナ「あの馬鹿・・・何もこんなところで言わなくても」

リサーナ「ミラ姉がこの場に居なくて良かったって思ってる・・・」

エルフマン「うおおおおお!! 良く言ったあツナアアア! それでこそ姉ちゃんの漢だああ!!」

ジュビア「ツナさん あそこまではつきり言えるなんて素敵です!」

クロツカス

バツカス「何だよお前っ あの綺麗な姉ちゃんの男なのか!?!」

綱吉「・・・そうですけど それより謝罪を」

バツカス「ああ 悪かったよ」

綱吉「もつと誠意を込めて」

バツカスにもつと気持ちを含めての謝罪を求めるも、バツカスは面倒くさそうに頭を掻き

バツカス「そうしてもらいたいなら 俺を負かして見るんだな」

綱吉「・・・分かりました 是非そうさせてもらいます(ボコボコにしてやる)」

バツカスは腰に下げてた酒を飲み干し、瓢箪を投げ捨てる

バツカス「ういゝ さあ 行くぜ」



綱吉「……」

バツカスは構えを取り、綱吉も両手に魔力を集中させる。そして

綱吉「フレア…」

バツカス「遅ええ!!」

綱吉「！（速っ）」

綱吉が炎魔法をしようとした時、バツカスは一瞬で綱吉の懐に入り魔法の発動を封じ、右肩に強烈な一撃を叩き込んだ。

ボゴッ!!

綱吉「ッ！」

攻撃を喰らった綱吉は右腕がだらりと下がってしまう。その強烈な一撃は肩関節を外し脱臼させたのだ。

バツカスは更に第二撃目を叩き込もうとするが、綱吉はバツカスの左の掌底をしゃがみ込みながら前進で躲し、懐に入り込み左手で左腕を掴み、立ち上がりと同時に左手で引っ張るようにして地面に叩きつけた。

綱吉（舐めるな!!）

バツカス「うおあ!？」

綱吉のやったこれは変形型の柔道の投げ技。肩車である。

バツカスを地面に叩きつけた綱吉は追撃せず数歩下がって、左手で右肩付近を掴み外された関節をはめ直した

ゴキンツ！

綱吉「くっ！（ああああ やっぱり痛い!!）」

無理矢理はめ直したことで苦痛で顔を歪ませる綱吉

綱吉「痛ッ！（痛みはある：が戦闘に支障は無い くそっ やつてくれる!）」

綱吉は右腕を動かしたり右手を開いたり閉じたりしてバツカスを睨んでいた

倒れていたバツカスゆっくりと起き上がり、不敵に笑っていた

バツカス「へへへ いいねえ」

綱吉（魔法を使いたいところだが、あまりの速さに魔法の発動が追いつかないな 格闘でやるしかないか）

綱吉はボクシングの構えを取り、一気に近づく 両者は互いに拳と掌の打ち合いとなる

バツカス「ハアアア！」

綱吉「オオオオオ！」

手数では綱吉が勝っている しかし一発一発の重みではバツカスが勝る

バツカス「ハアアツ！」

バツカスの攻撃が綱吉の右頬に当たる。この時バツカスはある違和感を感じた。バツカス「？（何だ コイツまさか・・・）」

綱吉は打ち合いの中間合いを詰める

バツカス「何だ また組みつこうってか！ 無駄・ツ！」

組みつこうとした綱吉は寸前でアツパーに切り替えて顎を打つ。更に追撃で左フックで右頬を打つ。だがここで綱吉もバツカスに違和感を感じる。

綱吉（これは・・・）

両者は互いに右頬を打ち、その違和感は正体に気づく。

バツカス「ぬう・・・」

綱吉「ぐっ・・・」

2人は後退し、口元から血を流す

綱吉「・・・べっ」

綱吉は口の中の血を吐き出し、バツカスは手の甲で口元の血を拭う。

綱吉・バツカス（間違いない アレは 化頸（流水）だ）

化頸（かけい）それは中国拳法の一つで相手の攻撃を緩和させる。ないし接触時に接触面を逸らすことで相手の攻撃の軌道を変化させ、敵の技を無効化させる技である。

綱吉は風から中国拳法を教わったので使えるが、バツカスはこれを独自で編み出し、  
流水”と名付けた

バツカス（さっきの投げ技と良い まあアイツなら使えてもおかしくねえか）

綱吉（化頸が使われると打撃でのダメージは期待出来ないな となると打撃以外でやるしかない、か あるいは化頸でも緩和出来ないほどの打をするか、か 全くなんで大  
魔闘” 演舞で格闘戦をしなきゃいけないだよつ）

綱吉は心の中で悪態をつきながら策を練った

綱吉（ふつ しかし久しぶりだな 縛りのある戦いは リボーンの特訓で色んな格闘家と戦った時以来か… でもこの感じ、悪くないんだよな）

バツカス（コイツ 笑ってやがる まあ俺もだがな）

綱吉とバツカスは不敵に笑った

綱吉は本来戦いを楽しむという事はしない だが格闘家としての綱吉なら少なからずその感情を持っている 格闘技を血の滲むような特訓の末習得し、成長している自分を感じ、強敵と戦いそして勝つ喜びを知った

今前に見えるバツカスもまた自分と同じ魔道士であり、格闘家でもある だからこそ勝ちたいと思ったのだ

綱吉（さて 魔法を使わない俺の戦い方を見せてやる）

綱吉はボクシングの構えを取り、バツカスの構える

バツカス（来るか・・・）

両者は先程のように打のぶつけ合いとなる、壮絶な打ち合いに思われるがバツカスがある違和感を覚える

バツカス（コイツ、何で右で当てにこねえ…？）

遠目からは打ち合っているように見えるが、相手であるバツカスもギリギリ気づくレベルで綱吉は右拳を当てずに空振りさせていた

そして 左脚を踏み出し、右腕を振りかぶる

バツカス「！」

綱吉『神の拳』!!』

バツカス「うおっ!？」

綱吉はバツカスの顔面目掛けて必殺の『神の拳』を放つが、バツカスは額の左側を掠らせながらも躲し、額から血が流れる。バツカスの後方にあつた建物は拳圧によつて倒壊する

バツカス「つぶね〜（コイツ打ち合いながら溜めやがるとは）チャージしてる最中は動けねえと思つてたんだがな」

綱吉「別に動けないと言った覚えはありません」  
バツカス「そりやそうだ（強かなやろうだぜ 全く）」

『妖精の尻尾』 応援席

レビイ「ああ ツナの必殺技が躲されちゃった」

カナ「それに動きが早いから造形魔法も使えないし」

綱吉の必殺技が躲されたことで皆が心配するが

ロメオ「大丈夫だ 皆！ ツナ兄なら勝てる！」

ロメオが皆の不安を吹き飛ばすように声を上げる

メイビス「ロメオの言う通りです ツナのあの技は躲されることを見越して打ちまし

た アレは勝つ為の布石です」

リサーナ「勝つ為の布石？」

メイビス「ええ もうすでにツナの頭の中では戦略が練られていることでしょう」

クロツカス

バツカス（ちっ これで常に奴の右：いや両手を注視してなきやいけねえ）やりにく  
いぜ」

綱吉「それはこっちの台詞 ですよ」

バツカスは右の掌底を顔面に叩き込もうとするが、綱吉は紙一重で躲し、バツカスの右腕を左手で上着を右手で掴み、背負い投げをした

バツカス「がっ!!」

更にそのままバツカスの右腕を掴み、腕ひしぎ十字固めをした

バツカス「ぐううっ!!」

チャパテイ『ツナヨシ 今度はバツカスの右腕を捕り これは極めていいのか!?

バツカス苦しそうだ!!」

普通腕ひしぎを極められた場合外すのはほぼ不可能である 無理矢理外そうとすれば靱帯を切る、最悪骨を折る可能性がある しかし

綱吉（嘘だろっ この人・力づくで外しにかかっている・・・!?)

無理矢理外そうとするバツカスに綱吉も外されまいと両腕に力を込めるが、徐々にバツカスの右腕が上がっていく

バツカス「おおおおおおお ーあああっ!!」

綱吉「!?!」

バツカスは遂に綱吉の両腕から右腕を脱出させ、高々と上げた右手を今度は綱吉の腹

部目掛けて裏拳するように振り下ろす

バツカス「はあっ!!」

綱吉「!」

綱吉はすんでのところで横に転がって回避する、多少離れた綱吉を見てバツカスは右腕をぐるぐると回す　これを見るに靱帯や骨は痛めていないようだ

チャパティ『技は外されてしまいました、なんとという多才な技の持ち主でしょう！  
打、極、締、投、四種四用の複合の攻めをするツナヨシ！　それに対して打撃一筋で  
迎え打つバツカス！　これほどの戦いを誰が予想出来たでしょうっ!!』

バツカス「ああく痛ってえ　しっかしお前色んな技出して来んな　戦ってて面白い  
ぜ」

綱吉（外しに来るのは予想してたが、力づくとは・・・　しかもアレを見るに痛みはあるが靱帯や骨はヤッてないな　シエリアと違って腕をへし折るつもりだったのに  
エルザと互角だったっていうのは伊達じゃないな　半端に技を掛けても外されてしまう  
虚をつくししかないな）

僅かな間に両者は呼吸を整え、再び動く　先に動いたのはバツカスだった



バツカスは怒涛の連打を浴びせ、綱吉は両腕でガードに徹する

バツカス「オラオラっ！どうしたツナヨシイ！ 甲羅に籠った亀みてえにガード決め込んでねえでかかってこいやっ！」

綱吉「・・・」

バツカス「そおらっ!!」

バツカスは右腕を振りかぶり綱吉の顔面目掛けて掌底を繰り出す が

バツカス「!?!」

綱吉（ここだッ！）

綱吉は掌底を前へ滑り込むように躲し、両手で右腕を掴み、両脚で首を絞める 三角絞めをやった

チャパティ『おおっとお！ ツナヨシ今度はシエリアたんの時とは違う絞め技だあ！

いや、その前にバツカスの攻撃がツナヨシをすり抜けたように見えたのですが・・・目の錯覚でしょうか!?!?』

チャパティの言うすり抜けたように見えたというものは綱吉が中国拳法のある技からヒントへて簡易的編み出した技である 全身を炎で覆い陽炎を起こさせ相手に誤認させ、攻撃をずらさせる 或いは拳、蹴、手刀などの攻撃に使用し相手の躲すタイミング、防御を抜くというものである 綱吉はこの技を『ゴースト』と名づけた

バツカス（くっ！ どうなってやがるっ!? 確かなタイミングだったはず つ…あの炎か!? アレで僅かに狙いがズレたのか!?）

バツカスが綱吉の技に掛かりパニックになっている時、実は綱吉にも驚きがあった綱吉（まさかつ 完全に虚を付いたはずなのにっ！ なんて反射神経!?!）

そう技は完全に決まっていなかった 両脚で首を絞める直前、バツカスは左手を首の横に持っていき右脚が掛かるのを防いだ

バツカス「ぐっ…こんなもん…」

綱吉「させ…るかつ！」

左手で強引に外しにいくバツカス 左手もろとも首を絞めようとする綱吉

チャパティ『こつこれは！ 動きは少ないがなんとも激しい力の応酬でしょう！ 攻

める綱吉！ 守るバツカス！ 果たしてこの攻防を制するのはどちらなのか!?!』

バツカス「ぬっ…おとおおお」

バツカスは吠えながら左腕でこじ開けていく

綱吉（チツ このままじゃ外される！ ならば!）

バツカス「!?!」

綱吉は技を解き、即座にバツカスの背後に回り、両腕でバツカスの首を絞める『裸締

め、『メジャーないい方をすれば』『スリーパーホールド』をやり更に両脚でバツカスの両腕の肘付近を抑えつけ、完全に上半身をとった形である

『裸締め』『スリーパーホールド』は気管や喉仏を圧迫されれば苦しむことになるが、綺麗に頸動脈を絞めることが出来れば数秒から十数秒で失神、いわゆる“落ちる”状態になる　しかし

バツカス（コイツ：どんだけ技を持ってやがんだッ！　おまけに両腕までロックしやがって！　だが…）あめえっ!!」

バツカスは後ろへ飛び綱吉を建物の壁に叩きつけた

綱吉「がはっ！」

バツカス（チツ　まだ離さねえか）

綱吉「ぐっ・・・がっ・・・うぐ・・・」

何度も壁に叩きつけられる綱吉だが、何とか絞めている　だが何度目か　遂に綱吉の手が緩んでしまう　それをバツカスは見逃さなかった

バツカスは両手で綱吉の両腕を掴み、絞め技を外して、掴んだまま背負い投げのように地面に叩きつけた　更に追い討ちをかけるように綱吉の顔面目掛けて脚で踏みつけようとしてくるが、すんでのところで綱吉は躲す

壁に何度も叩きつけられたせいかわ背中、後頭部から出血をしていた

綱吉「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

バツカス「ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・」

両者息を整えて次の攻防に備える

チャパテイ『何という攻防だあ!! これほどの格闘戦見たことがありません!!』

次々と色んな技を出してくる綱吉にあくまで打だけで攻めるバツカス まさに柔と剛の戦い そんな戦いに観客も大盛り上がりであった

『妖精の尻尾』 応援席

ロメオ「す・・・すげえ」

リサーナ「これが格闘戦トップクラスの戦い・・・」

マカロフ「ロメオ これがお前の憧れる漢の本気の戦いじゃ」

ロメオ「すげえ! すげえよツナ兄! こんな戦い初めて見た!」

メイビス（しかしあの背中からの出血・・・出血量から見て長期戦になればツナの負けは必至この戦い 決着までそうかからないでしょう）

『蛇姫の鱗』 応援席

シエリー「すごい……」

ユウカ「アイツがすげえのはジュラさんとの戦いで分かったが、魔法だけでなく格闘もここまでやるとは」

トビー「凄過ぎだろっアイツ！」

ユウカ「キレんなよ」

シエリア「……（いつか私だって ツナとあんな戦いをして、勝ってみせる）」

クロツカス

バツカス「いやあ 効いた効いた 今の決めに来たよな？ 今のが奥の手かい？」

綱吉「……さあ どうでしょうね？」

バツカス「(答えねえ 当然か) なら俺もそろそろ技を見せようかね」

バツカスは左半身を前にして左手の掌で狙いを定め、右手を後方に水平を保つ あと  
は綱吉に打ち込みに行くタイミングを待つだけ

僅かな静寂 そしてバツカスが動いた

綱吉「?!？」

綱吉にはバツカスが一瞬で間合いを詰められたと思った もちろんバツカスの脚力

も凄い　だがこれにはもう一つカラクリがあった　それは「瞬き」　相手が目を瞑る瞬き　その瞬間に一気に間合いを詰める　相手はまるで瞬間的に移動したと錯覚する

綱吉（くつゝ：ガードを）

綱吉は両腕で一番狙ってくるであろうボディをガードする　しかし左の下から突き上げる掌底でガードを上げる　そしてガラ空きとなったボディへ

バツカス「劈掛掌　奥義!!　　羅刹旋!!」

綱吉「!!」

バツカスの一撃を食らった綱吉はそのまま後方の建物まで吹き飛び激突して、倒壊した建物の下敷きになった

バツカス（・・あのガキ）

バツカスは建物の下敷きになっている綱吉を見ながら、今打ち込んだ奥義の違和感を考えていた

バツカスの奥義それは、腕の捻りにある　水平にした時に腕を限界ギリギリまで捻り、打ち込む時の接触時にその捻りを解放する　すると衝撃は通常より回転も加わり威力は上がり、内部を突き抜けていく

しかし綱吉はガードを上げられた瞬間、魔力で体表ではなく骨と臓器を魔力を覆い、更に化頸によって威力を緩和させた

瓦礫を退けて出て来る綱吉　しかし口元には血を吐いた後が残っていた

綱吉「(ああ　ホントに嫌になる　こつちはあれこれ策を弄してやんなきゃいけないのに、体格に恵まれたパワータイプはその一撃で戦局をひっくり返せるんだから)・・・  
奥義だけあつて結構ダメもらいましたよ」

バツカス「嘘つけ　ピンピンしてやがるくせに」

綱吉「これは痩せ我慢ですよ　コフツ」

綱吉は服の袖口で口元の血を拭き取る

バツカス(しかし痩せ我慢にしても倒れないのは驚きだ　アレでやれないとなる  
と・・・もうアレを使うしかねえ)

バツカスは右手の五本指を立てて胸の中央辺りに持つていく

『四つ首の仔犬』 応援席

ゴールドマイン「アイツ！　アレは対ジュラ用にとつておけと言ったのに！」

マスターであるゴールドマインはバツカスがこれからすることを理解して焦つてい  
た

クロツカス

バツカス（悪いいなマスター 優勝は諦めてくれや）全くお前は最高だぜツナヨシ！  
まさかお前にコイツを使うことになるとはなあ 行くぜ 『狂戦』

バツカスが五本指で胸を叩くとバツカスの纏っている雰囲気が変わった 顔つきが  
変わり、目に隈取が出来、より筋肉質になった

“酔いの鷹”は“暴の鷹”へと変貌を遂げる

綱吉（これは、憑神…）

綱吉の言う『憑神』それはある武術におけるリミッター外しである 意識的に心拍  
数を高めることで血流を加速させ、発生した熱量を運動能力に変換しパワーとスピード  
を上げる技である また『憑神』以外にも中国にいる一族では『鬼魂』（ぐいふん）、日  
本でもある一族で『外し』と呼ばれている 綱吉は様々な武術の本を読み、その歴史を  
知り、それらの名前を知ったのだった

またこれらはスポーツ界では『ゾーン』と呼ばれている 極限まで高められた集中し  
ている時脳のリミッターが外され、100%力を発揮できると言われている  
バツカスはこれを自己流でやって退けたのだ



綱吉（化頸だけでなく、憑神までとは…）

バツカス「誇っていいぜ コイツはエルザにもまだ見せたことがねえからよ」

綱吉「それは、嬉しいですね」

バツカス「行くぜ」

バツカスが綱吉に突っ込み、綱吉も迎え打つ構えをとるが

ドクンッ

綱吉（うっ!?!）

突如綱吉の胸が苦しくなる そのせいで初動が遅れ、*“拳”*を左頬に喰らってしまふ  
続けて二撃目をやろうとしたが、綱吉は『ゴースト』で躲し懐に入りこみ、バツカス  
の腹部に両手を合わせ

綱吉（少し止まってろ！ 死ぬ気の零地点突破・ファーストエディション!!）

バツカス「!?!」

バツカスは数瞬で氷に閉じ込められ、綱吉は後方へ跳び片膝について呼吸を整える

綱吉「ゼエ…ヒュー…ゼエ…ヒュー…（もう少し もう少し頑張ってくれ 俺の身体  
ここで倒れたらせつかくの仕掛けが無駄になる）

ピシッ…ピシッ…バキヤアアン!!

バツカスは氷を砕き、出て来た

バツカス「休憩は終わりだぜ ツナヨシ そろそろ終わりにしようや」

綱吉「ですね」

両者は互いに突っ込む

先手は綱吉のボディブロー

バツカス「ぐっ」

綱吉「！」

腹に重い一撃を喰らい苦悶の表情を浮かべるが、バツカスは大きく右腕を上げて、綱吉の頭目掛け振り下ろした

その一撃は綱吉の頭を地面にめり込ませ、陥没させた バツカスは倒れ込んでる綱吉の頭を鷲掴みにして持ち上げる

綱吉「がっ……」

バツカスはそのまま綱吉の顔面を建物の壁に叩きつけ、そして壁に押し付けながら疾走する

ガリガリガリガリガリッ！

バツカス「オラアッ！」

バツカスは前に見える建物に綱吉を思いつきり投げ飛ばし、激突させた 倒れる綱吉

だが立ち上がり、右顔面と額から血を流しながらも顔だけ後ろを向き、バツカスを鋭い眼光で睨みつける

バツカス「ツ・・・」

綱吉「ハア：ハア：」

綱吉の眼光に一瞬萎縮したバツカスだったが、切り替えてトドメの一撃を打ちにいく  
バツカス（これで：終わりだアツ!!）

綱吉「ツ!!」

ドパアアン!!

バツカス「かつ・・・はっ・・・」

決まり手はバツカス渾身の一撃・・・ではなくこの戦いでまだ一度も使っていないなかったムエタイの「蹴り」脚の筋力は腕力の倍以上 必殺の『神の拳』や極め技、絞め技で注意を引きつけ、超至近距離から右脚の蹴りを打ち込んだ

勝敗を分けたのは戦術の差だった

ふらふらとするバツカスに綱吉はトドメの左脚の蹴りを打ち込み、バツカスは倒れた。倒れたバツカスを見ながら綱吉は先程見せたバツカスの『狂戦』に気が付いていた。それはバツカスはまだこの技を使いこなせていないと言うことに。この技はパワーやスピードが上がる分、精細さが如何しても低下してしまう。だから『憑神』や『外し』を使う者たちも長い時間をかけて技も扱えるよう特訓する。

バツカスの最初の一撃で綱吉は気づいた。掌ではなく拳で打ってきたことに。精細な動きが使えないなら付け入る隙は充分ある。

綱吉も書物から『憑神』や『鬼魂』などのリミッター外しのことを知り、自分も会得したいと。リボンや風に相談したが、身体の出来上がっていない今のお前がやれば間違いないと身体を破壊し、最悪死ぬ恐れがあるとこっ酷く説教された。

地に倒れたバツカスはそのままだ動かず、勝敗がついた。

チャパティ『決まったアアアッ！ 武道対決 激闘を制したのはツナヨシイイ!!』  
チャパティのアナウンスで会場は大いに盛り上がる。

綱吉は倒れたバツカスへ近づいていき

バツカス「負けたぜ まさか『狂戦』まで使つて負けちまうとはな」

綱吉「いえ 貴方も凄く強かった」

バツカス「へっ 勝ち逃げなんてゆるさねえ また挑んでやるからな」

綱吉「望むところです」

綱吉はバツカスへ手を出すと、バツカスは驚くがバツカスも綱吉の手をとる

チャパテイ『おお これは互いの健闘を讃えて握手しています!! 戦いが終われば敵も味方もない! これが友情というモノか! 私感動して涙が出てきましたッ!』

バツカス（コイツが友情つてモンなのかねえ）

バツカスが干渉に浸っている中 綱吉は握手していないもう片方の手で大きく上げる

バツカス「ん？」

ゴンツ!!

綱吉「ミラトリサーナにやろうとした件はコレでチャラにしてあげますよ」

バツカス「んがッ トドメ…刺す、の…か、よ…」

綱吉「ちゃんと反省して下さいよ」

バツカスは頭に大きなたんこぶを作り、今度こそ失神した 綱吉はそんなバツカスを尻目に手を振りながら去っていく

皆んな（（えええええ〜）（））

『妖精の尻尾』 応援席

レビイ「ツナ：せっかくなにかよかったのに」

フリード「最後のは余計だったな」

リサーナ「でっでも 何はともあれ勝てたんだしっ 良かったじゃない！」

カナ「そうそう バツカスはリーダーだったから5ptも入ったし」

綱吉のトドメの拳骨に皆引いていたが、リサーナやカナがフォローを入れていた

エルフマン「あの勝負はまさに漢と漢の真剣勝負 それに勝ったツナこそ真の漢だア  
アアッ!!」

ロメオ（魔法に格闘技まで ツナ兄かけええ 強え）

ロメオが画面に映る綱吉に強い眼差しで見ているのに気づいたカナは

カナ「ロメオ アンタそんなにツナに憧れてんなら弟子入りしてみたら？」

ロメオ「えっ でも いいのかな？ ツナ兄の迷惑になるんじゃない？」

リサーナ「大丈夫 ツナは迷惑だなんて思わないよ」

カナ「ただし覚悟しときなよ ツナは厳しいからね」

ロメオ「ああ！」

エルフマン「うむ！ それでこそ漢になるべき男だ！」

マカオ「いや 訳わかんねえよ」

ロメオ（ツナ兄に修行をつけてもらえる そしたら俺もツナ兄みたいにな）

皆が綱吉の勝利に盛り上がっている中、メイビスは綱吉を心配そうに見ていた

メイビス（バツカスの実力がここまでとは想定外でした そしてそれはツナも同じはず 想定していたより魔力、体力を使い 傷を負ってしまった 病のことも考えると全力で戦えてあと1人…しかしツナの進む先で当たる人物は…）

『蛇姫の鱗』 応援席

シエリア「オババ…私 強くなるね」

オーバ「当たり前だよ まったく」

シエリア「今はまだ無理だけど 必ずツナに…ううんううん ジュラさんも超える凄

い魔道士になつて見せる！」

シエリー「シエリア」

オーバ「ほお 大きく出たね 楽しみが一つ増えたよ だけどなれんのかい？」

シエリア「なるんだよ オーバ」

オーバ「フツ いい答えだ」

クロツカス

綱吉「(バッカスさん めちゃくちゃ強かったな) 痛ッ！・・・ミラにこんなボロボロな姿見られなくてよかったな うっ・・・ゴフツ」

綱吉VSバッカス 勝者 綱吉

『四つ首の仔犬』 バッカス 戦闘不能 『妖精の尻尾』 +1 56pt

└途中経過┐

一位 『妖精の尻尾』 56pt 残り・・・5名

二位 『剣咬の虎』 50t 残り・・・4名

三位 『人魚の踵』 42pt 残り・・・2名



四位	『蛇姫の鱗』	39pt	残り・・・2名
??	『四つ首の仔犬』		敗退
??	『青い天馬』		敗退